

昭和57年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

1983.3

三重県教育委員会



上：劃花文青磁碗（服部遺跡出土）
下：辻垣内遺跡

序

各種開発事業にかかる埋蔵文化財の保護措置の問題は、近年、その中に内在する矛盾の性格を変えながらも依然として増加の傾向にあります。

中でも、県営圃場整備事業はその開発対象が広大な水田、畑地という面的なものであるため、必然的にかかる諸問題は量的にも多く三重県における文化財保護行政のあり方そのものにも大きな影響を与えていると言えます。

さて、ここに報告する14遺跡の発掘調査報告は、遺跡の現状保存という文化財保護の基本理念に立って、再々その保存協議がなされた結果、終局的にやむをえず調査を実施することになった各遺跡の調査の概要をまとめたものです。調査後、遺跡のほとんどはすでに消滅の道をたどったわけではありますが、調査記録をこうして世に公表することは我々の責務であり、その成果を広く利用されることを望むものです。

とりもなおさず、調査に際して終始、協力の労を惜しまれなかった農林水産部の各関係機関、また、現地にあっては、各土地改良区をはじめ、地元住民の多くの方々のご援助を得ましたことは誠に感謝に堪えないものであります。

昭和58年3月

三重県教育委員会

教育長 佐々木 昇

例 言

1. 本書は、昭和57年度農業基盤整備事業地域内にかかる埋蔵文化財の発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他は県農林水産部の負担による。
3. 調査の体制は下記によった。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県教育委員会 文化課
文化財係員（主事・技師）、及び、昭和57年度文化課埋蔵文化財発掘技術者研修生

調査協力 三重県農林水産部耕地第一課、第二課
各耕地事務所
各土地改良区
各市町村教育委員会

4. 各遺跡の報告書作成は各調査担当者があたり、下記の表のとおりであり、文末にも記した。

項 目	執 筆 者	項 目	執 筆 者
前 言	技師 新田 洋	塚の上 A 遺跡	主事 高見 宜雄
起 A 遺跡	主事 山下 雅春 技師 山田 猛	田 中 遺 跡	主事 森前 稔
中井藤ヶ森遺跡	主事 福村 直人	辻垣内・上東野遺跡	主事 森前 稔 主事 駒田 利治
宮間戸遺跡	主事 中村 信裕		主事 中村 信裕
岩脇 C 遺跡	主事 本堂 弘之	樋ノ谷遺跡	主事 高見 宜雄
服部遺跡	主事 福村 直人	前田遺跡	技師 山田 猛
西村・愛場遺跡	主事 高見 宜雄	歌野遺跡	主任主事 中森 英夫

5. 本書で用いた遺構表示略記号は下記により、図面における方位はすべて磁北を用いた。また、各遺跡の遺跡表示略記号は目次(カッコ書き)に示した。

S B; 竪穴住居・掘立柱建物・礎石建物	S D; 溝	
S E; 井戸	S A; 塀・柵	S K; 土坑

6. 本書に使用した航空写真、各事業計画図面は農林水産部の提供による。

7. スキャニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目 次

前 言	1
-----------	---

<県営圃場整備事業>

I 鈴鹿市安塚町 起 A 遺跡(3EOS).....	9
II 安芸郡安濃町 中井藤ヶ森遺跡(8FFM).....	19
III 津市雲出長常町 宮間戸遺跡(8FMD).....	29
IV 一志郡白山町 岩脇 C 遺跡(9FIK).....	45
V 松阪市出間町 服部遺跡(6GHT).....	51
VI 多気郡明和町 西村遺跡(9GNM)・愛場遺跡(8GAB)	59
VII 伊勢市円座町 塚の上 A 遺跡(8GTU).....	69
VIII 阿山郡大山田村 田中遺跡(7JTK).....	73
IX 名張市赤目町 辻垣内遺跡(2JTG)・上東野遺跡(4JKH)	85

<畜産環境整備事業>

I 度会郡大宮町 樋ノ谷遺跡(2GHT).....	131
---------------------------	-----

<農道整備事業>

I 安芸郡安濃町 前田遺跡(4LMD).....	141
II 阿山郡大山田村 歌野遺跡(8JUN).....	149

図版目次

卷首図版	劃花文青磁碗(服部遺跡出土)・辻垣内遺跡	服部遺跡	調査前風景
PL1	起 A 遺跡 調査風景	PL24	調査区全景
	〃 SK15		調査区全景
PL2	〃 SB5	PL25	SB4
PL3	〃 SB5		SB6
	〃 SB8・SB9・SB10	PL26	SB7
PL4	〃 SB7		SD1
	〃 SB13	PL27	SX9
PL5	〃 SX16		SX10
	〃 SX19	PL28	出土土器
PL6	〃 出土土器	PL29	西村・愛場遺跡 航空写真
PL7	〃 出土土器		調査前風景
PL8	中井藤ヶ森遺跡 航空写真	PL30	調査区近景
	〃 調査風景		弥生土器出土状況
PL9	〃 中井地区 SA1	PL31	調査前風景
	〃 藤ヶ森地区全景		SE3 井筒出土状況
PL10	〃 藤ヶ森地区北半	PL32	SB4
	〃 SX3		SD2
PL11	〃 SD4	PL33	SE3・SD2 出土土器
	〃 SD4	PL34	塚の上 A 遺跡 東西排水路
PL12	〃 SD4 出土土器		南北排水路
PL13	〃 出土土器	PL35	田中遺跡 航空写真
PL14	宮間戸遺跡 航空写真		発掘前全景
	〃 調査前風景	PL36	発掘風景
PL15	〃 A地区		発掘後全景
	〃 A地区土壇群	PL37	横穴式石室
PL16	〃 B地区		礫床除去後
	〃 B地区土壇群	PL38	古墳全景
PL17	〃 C地区・D地区		中世墓
PL18	〃 出土土器	PL39	SB11
PL19	岩脇 C 遺跡 航空写真		SE7
	〃 調査風景	PL40	出土土器他
PL20	〃 発掘区全景	PL41	出土土器
	〃 発掘区北半	PL42	辻垣内遺跡 辻垣内遺跡全景
PL21	〃 発掘区中央部		辻垣内遺跡 C 区東端部
	〃 SD2・SK3	PL43	SB12
PL22	〃 SX4		SB14
	〃 出土土器	PL44	辻垣内 1 号墳全景
PL23	服部遺跡 航空写真		辻垣内 1 号墳石室

P L 45	辻垣内遺跡	辻垣内1号墳全景	P L 60	上東野遺跡	S B 7
	"	辻垣内1号墳周溝		"	S B 11
P L 46	"	調査区遠景	P L 61	樋ノ谷遺跡	調査風景
	"	調査区全景		"	調査区近景
P L 47	"	S B 12	P L 62	"	S B 1
	"	S B 12		"	S K 20
P L 48	"	S K 6・7・10・11	P L 63	"	縄文時代早期の土器
	"	S D 3・4	P L 64	"	縄文時代前・中期の土器
P L 49	"	調査区全景	P L 65	前田遺跡	航空写真
	"	S B 4・S B 6		"	遺跡遠景
P L 50	"	S B 4 土器出土状況	P L 66	"	S X 1
	"	S B 1・S B 2・S B 3		"	S X 2
P L 51	"	出土土器	P L 67	"	遺物出土状況
P L 52	"	辻垣内遺跡N地区全景	P L 68	"	山頂区尾根部他
	"	辻垣内遺跡N地区竪穴住居群		"	S X 1 西区画溝他
P L 53	"	辻垣内5号墳全景	P L 69	"	山頂区出土弥生土器
	"	辻垣内5号墳石室全景	P L 70	"	山頂区出土土器
P L 54	"	S B 18		"	出土土器他
	"	S B 18	P L 71	歌野遺跡	調査前近景
P L 55	"	S B 23・S B 24・S B 25		"	遺跡全景
	"	S B 23	P L 72	"	S B 16
P L 56	"	S B 28		"	S B 16カマド
	"	S B 13	P L 73	"	S B 11・S B 12
P L 57	"	S X 1		"	S B 19・20・21・22
	"	S X 2	P L 74	"	S B 21カマドと煙道
P L 58	上東野遺跡	調査区遠景	P L 75	"	S B 2・3・7・8・29他
	"	調査区全景		"	土馬出土状況
P L 59	"	S B 1・S X 2	P L 76	"	土馬
	"	S X 2	P L 77	"	出土土器
			P L 78	"	出土土器

挿図目次

第1図	調査遺跡位置図	4	第10図	中井藤ヶ森遺跡 遺跡位置図	19
第2図	起A遺跡 遺跡位置図	9	第11図	" 遺跡地形図	20
第3図	" 遺跡地形図	10	第12図	" 発掘区平面図	21
第4図	" 発掘区平面図	11	第13図	" Aトレンチ遺構平面図	22
第5図	" 遺構平面図	12・13	第14図	" Bトレンチ遺構平面図	22
第6図	" 遺構配置図	14	第15図	" Cトレンチ遺構平面図	23
第7図	" 縄文土器拓影図	15	第16図	" S X 3実測図	23
第8図	" 弥生土器実測図	16	第17図	" 出土遺物実測図1	25
第9図	" 古墳時代土器実測図	17	第18図	" 出土遺物実測図2	27

第19図	宮間戸遺跡	遺跡位置図	29	第60図	田中古墳	礎床実測図	77
第20図	"	遺跡地形図	30	第61図	"	周溝断面図	78
第21図	"	発掘区平面図	31	第62図	"	S X 1 実測図	78
第22図	"	遺構平面図	32・33	第63図	"	S X 8 実測図	79
第23図	"	土器実測図	37	第64図	"	出土遺物実測図	81
第24図	"	S K 15 土器実測図	37	第65図	辻垣内・上東野遺跡	遺跡位置図	85
第25図	"	和鏡実測図	38	第66図	"	遺跡地形図	86
第26図	"	S K 19 出土土器実測図	39	第67図	"	発掘区平面図	88
第27図	"	S K 78 出土土器実測図	40	第68図	"	A 地区遺構平面図	89
第28図	"	包含層出土土器	40	第69図	"	S X 1 実測図	90
第29図	"	墨書土器実測図	41	第70図	"	C 地区遺構平面図	91
第30図	岩脇 C 遺跡	遺跡位置図	45	第71図	"	辻垣内 1 号墳石室実測図	92
第31図	"	遺跡地形図	46	第72図	"	遺構平面図	93
第32図	"	発掘区平面図	47	第73図	"	S B 12 実測図	94
第33図	"	遺構平面図	48	第74図	"	S B 12 遺物実測図	95
第34図	"	出土遺物実測図	49	第75図	"	S K 10・S K 11 遺物実測 図	96
第35図	服部遺跡	遺跡位置図	51	第76図	"	遺構平面図	99
第36図	"	遺跡地形図	52	第77図	"	S B 4・S B 6 実測図	100
第37図	"	発掘区平面図	52	第78図	"	S B 2・S B 4 遺物実測 図	101
第38図	"	遺構平面図	53	第79図	"	N 地区全体図・3 号墳ト レンチ断面図	103
第39図	"	S X 10 実測図	54	第80図	"	N 地区遺構平面図	104
第40図	"	出土遺物実測図	56	第81図	"	辻垣内 4 号・5 号墳調査 後実測図	105
第41図	西村・愛場遺跡	遺跡位置図	59	第82図	"	辻垣内 5 号墳石室実測図	106
第42図	"	遺跡地形図	60	第83図	"	小石室(S X 1) 実測図	107
第43図	"	発掘区平面図	61	第84図	"	S B 23・24 実測図	108
第44図	西村遺跡	遺構平面図	62	第85図	"	中世墓(S X 2) 実測図	110
第45図	"	弥生土器出土状況	63	第86図	"	古墳出土の遺物	112
第46図	"	出土遺物実測図	63	第87図	"	竪穴住居・包含層の遺物	114
第47図	愛場遺跡	遺構平面図	64	第88図	"	S X 2 出土遺物	116
第48図	"	S E 3 実測図	65	第89図	上東野遺跡	遺跡地形図	119
第49図	"	S D 2 出土土器実測図	66	第90図	"	発掘区平面図	120
第50図	"	S E 3 出土土器実測図	66	第91図	"	遺構平面図	121
第51図	塚の上 A 遺跡	遺跡位置図	69	第92図	"	S B 11 実測図	122
第52図	"	遺跡地形図	70	第93図	"	S X 2 (小石室) 実測図	123
第53図	"	発掘区平面図	71	第94図	"	S B 7・S B 9・S B 10 遺物実測図	125
第54図	"	遺構平面図	72	第95図	"	S B 11・S X 2 実測図	127
第55図	田中遺跡	遺跡位置図	73				
第56図	"	遺跡地形図	74				
第57図	"	発掘区平面図	74				
第58図	"	遺構平面図	75				
第59図	田中古墳	石室実測図	76				

第 96 図	樋ノ谷遺跡	遺跡位置図……………	131	第 107 図	前田遺跡	山頂区調査前測量図…	143
第 97 図	〃	遺跡地形図……………	132	第 108 図	〃	山頂区調査前測量図・ 土層図……………	144
第 98 図	〃	発掘区平面図……………	133	第 109 図	〃	山頂区調査後測量図…	144
第 99 図	〃	遺構平面図……………	134	第 110 図	〃	山頂区土器出土状況…	145
第 100 図	〃	S B 1 実測図……………	135	第 111 図	〃	山裾区土層図……………	146
第 101 図	〃	S K 20 実測図……………	135	第 112 図	〃	山頂区出土土器…………	147
第 102 図	〃	縄文時代早期の土器拓 影図……………	136	第 113 図	歌野遺跡	遺跡位置図……………	149
第 103 図	〃	縄文時代前・中期の土 器拓影図……………	138	第 114 図	〃	遺跡地形図……………	150
第 104 図	〃	石器実測図……………	139	第 115 図	〃	発掘区平面図……………	150
第 105 図	前田遺跡	遺跡位置図……………	142	第 116 図	〃	遺構平面図……………	151
第 106 図	〃	遺跡地形図……………	143	第 117 図	〃	土馬実測図……………	154
				第 118 図	〃	S B 16 出土の土器……	155

表 目 次

第 1 表	昭和57年度農業基盤整備事業地域内 埋蔵文化財一覧表……………	4	第 8 表	E 地区土壇群……………	36
第 2 表	昭和57年度発掘調査遺跡一覧表……………	7	第 9 表	辻垣内遺跡試掘調査結果一覧表……………	87
第 3 表	現地説明会開催一覧表……………	8	第 10 表	竪穴住居の規模……………	101
第 4 表	A 地区土壇群……………	34	第 11 表	竪穴住居一覧表……………	109
第 5 表	B 地区土壇群……………	34	第 12 表	竪穴住居の規模……………	124
第 6 表	C 地区土壇群……………	35	第 13 表	三重県下における小石室一覧表……………	129
第 7 表	D 地区土壇群……………	36	第 14 表	竪穴住居の概況……………	152
			第 15 表	三重県土馬出土遺跡地名表……………	156

前 言

県教育委員会文化課では、毎年、年度当初に、県庁内の各開発関係課に対し、その年度に計画されている公共事業について照会を行っている。

そして、回答のあった事業については遺跡地図との照合、分布調査を実施することにより埋蔵文化財の有無を確認し、その結果を各担当課に通知するとともに、事業地内に含まれる埋蔵文化財の現状保存を要請している。

県農林水産部では、特に耕地第一課、耕地第二課が実施する農業基盤整備事業が、その性格上、埋蔵文化財にかかる可能性が非常に高い。事業の種類としては、耕地第一課の各種農免道路整備事業、耕地第二課の圃場整備事業等がそのほとんどと言ってよい。前者においては、すでに用地買収済にあつては

遺跡にかかる路線変更が不可能である点、また、後者にあつては、事業そのものが面的であるがゆえに工事対応の可能な場合も多い反面、排水路部、幹線道路での路線変更の困難さ、加えて、田畑の作付時期とのからみで、調査に至っても様々な制約を受けやすい等々、多くの文化財保護、及び調査上の難問が山積みされている。

しかるに、こうした問題は、開発事業計画そのものの早期把握と調整の円滑化によって、徐々にではあるが、その解決の糸口をつかみつつあるものの、今後ともなお一層、関係者への埋蔵文化財の理解と認識を深めていくという地道な努力こそ必要になってくようと思われる。

1. 分 布 調 査

昭和57年度の農業基盤整備事業については、昭和57年3月に農林水産部あてに事業照会を行ない、昭和57年4月にその回答を得た。そこで、事業計画図面をもとに遺跡地図との照合をし、昭和57年4月にすべての事業地域について現地分布調査を実施した。その結果、県営圃場整備事業については、事業面積639haのうちで55遺跡、総面積828,200㎡の遺物包含地、古墳等を確認した。その他、県営畜産経営環境整備事業の度会地区で2遺跡、県営農村基盤総合整備パイロット事業の中南勢地区で2遺跡の取り扱いが問題になった。また、耕地第一課関係の農免道路についても圃場整備事業内分布調査に併行して現地踏査を実施した結果、前年度より協議続行中の前田遺跡の他に新たに4工区内で4ヶ所の遺跡の所在が明

らかになった。そして、これらの埋蔵文化財の保護について農林水産部との協議、調整を開始した。

協議は遺跡の所在する所轄各耕地事務所との現地での遺跡の所在確認に立脚した図面上での具体的な田畑の切り盛り調整による保存協議として始まったが（第一次協議）、そうしたなか、現状保存、盛土保存、地区除外化といった方向で、大安町丹生川A遺跡他19遺跡が現状のまま、あるいは盛土して、保存という形で事業が進められることになった。しかし、残る25遺跡については試掘をすることによって遺跡の実態、範囲を確かめた上で再度、工事対応を考えるとということで、試掘調査を早急に実施することとなった。

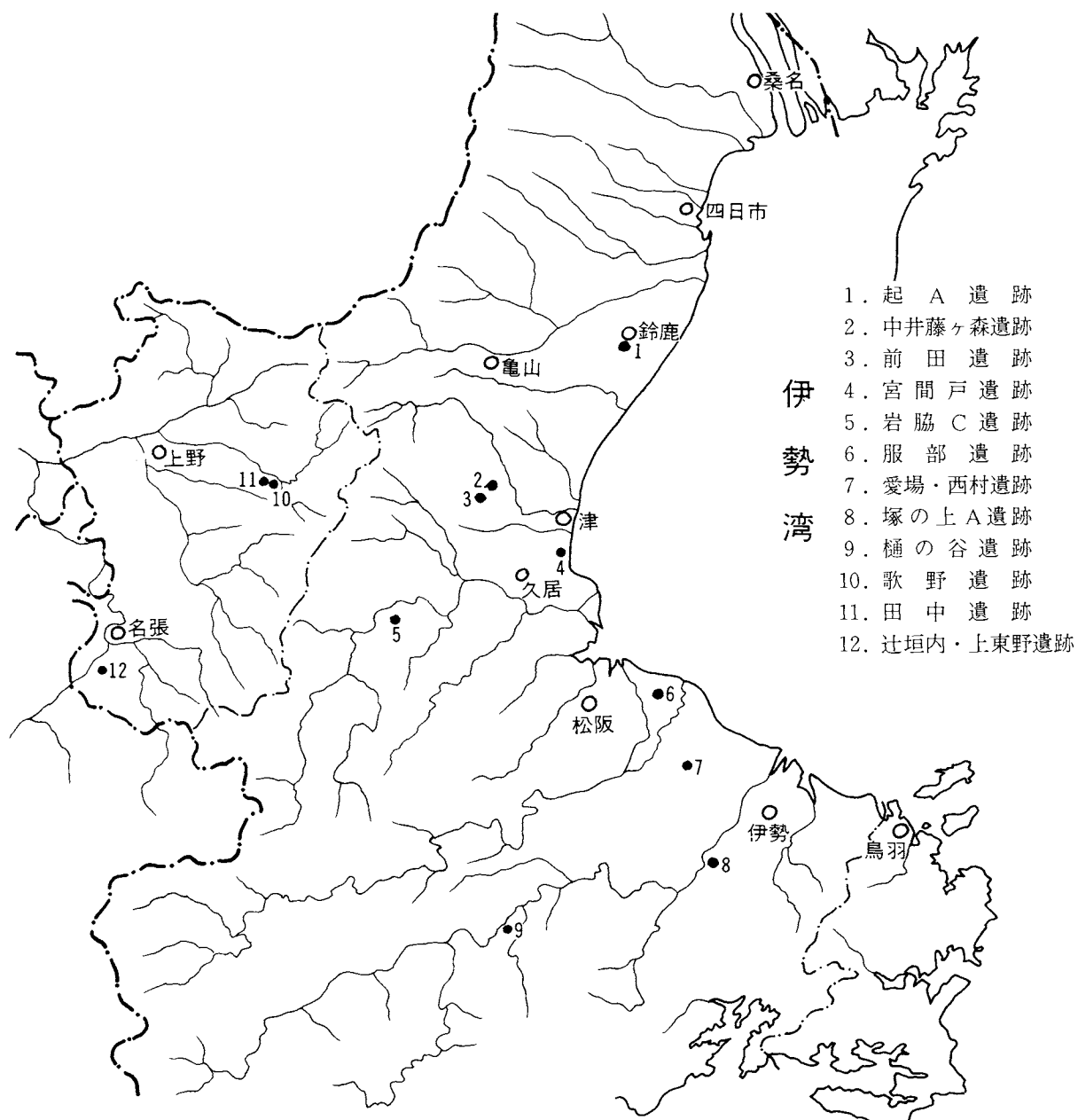
事業名	耕地事務所	事業地区	事業面積 (ha)	遺跡名	所在地	遺跡面積 (㎡)	保存方法	
県営圃場整備事業	桑名耕地事務所	大安東部	31	八幡神社東方遺跡	員弁郡大安町梅戸	12,000	試掘	
		大安西部	44	野田丸城跡	〃 〃 丹生川久下	9,000	試掘	
					丹生川A遺跡	〃 〃 〃	20,000	盛土保存
					丹生川B遺跡	〃 〃 〃	170,000	試掘
		北勢	7	中山A遺跡	〃 北勢町中山	450	試掘	

事業名	耕地事務所	事業地区	事業面積 (ha)	遺跡名	所在地	事業面積 (ha)	保存方法	
県営圃場整備事業	桑名耕地事務所	員弁東員	23	中山 B 遺跡	〃 〃 〃	650	試掘	
			34	吉登神社南方遺跡	員弁郡東員町北大社	1,000	地区除外	
	四日市耕地事務所	八風鈴鹿第二深溝安塚	30	—	—	—	—	—
			34	—	—	—	—	—
			19	—	—	—	—	—
			15	起 A 遺跡	鈴鹿市安塚町	66,000	試掘・記録保存 4,500㎡	
				起 B 遺跡	〃 〃	16,000	試掘	
				起 C 遺跡	〃 〃	1,200	試掘	
	津耕地事務所	安濃川右岸	津西部	34	浄土寺西遺跡 (中井藤ヶ森遺跡)	安芸郡安濃町浄土寺	23,000	試掘・記録保存 430㎡
				25	村主小東遺跡	〃 〃 川西	30,000	試掘
		津南部	白山	24	井戸 A 遺跡	津市片田井戸町	9,000	試掘
				24	井戸 B 遺跡	〃 〃	600	地区除外
		白山	豊地	24	宮間戸遺跡	〃 雲出伊倉津町	45,000	試掘・記録保存 2,500㎡
					墓原遺跡	〃 〃	16,000	試掘
					長常遺跡	〃 〃	33,000	試掘
				28	岩脇 A 遺跡	一志郡白山町岩脇	600	現状保存
					岩脇 B 遺跡	〃 〃 〃	600	試掘
					岩脇 C 遺跡	〃 〃 〃	3,000	現状保存 2,400㎡ 記録保存 600㎡
		白山西部	豊地		市場 A 遺跡	〃 〃 市場	800	現状保存
					市場 B 遺跡	〃 〃 〃	600	試掘
				市場 C 遺跡	〃 〃 〃	1,200	現状保存	
松阪耕地事務所		東黒部上御糸	30	南山遺跡	松阪市土古路町	120,000	盛土保存	
	出間 A 遺跡			〃 出間町	2,400	工事立会い		
	出間 B 遺跡			〃 〃	3,500	現状保存		
	出間 C 遺跡 (服部遺跡)			〃 〃	10,000	現状保存 8,500㎡ 記録保存 1,500㎡		
	20			麻績神社西方遺跡	多気郡明和町中海	12,000	試掘	
				須田遺跡	〃 〃 須田	900	地区除外	
				愛場遺跡	〃 〃 西池村	3,000	記録保存 220㎡	
				丸山遺跡	〃 〃 〃	1,700	地区除外	
				西村遺跡	〃 〃 〃	3,600	記録保存 1,080㎡	

事業名	耕地事務所	事業区	事業面積 (ha)	遺跡名	所在地	遺跡面積 (㎡)	保存方法
県営圃場整備事業	松阪耕地事務所	明星	17	西池村遺跡	〃 〃 〃	1,600	現状保存
				平尾南遺跡	〃 〃 明星	33,000	地区除外
				平尾南古墳群	〃 〃 〃	600	〃
	伊勢耕地事務所	伊勢南部	30	塚の上 A 遺跡	伊勢市円座町	7,000	地区除外 6,600㎡ 記録保存 400㎡
				塚の上 B 遺跡	〃 〃	1,250	地区除外
				塚の上 C 遺跡	〃 〃	2,250	〃
				日向遺跡	〃 上野町	2,000	〃
				土畑遺跡	〃 佐八町	2,400	〃
	上野耕地事務所	上野東部	14	蓮池代 B 遺跡	上野市蓮池字蓮池代	2,800	試掘
				横山 A 遺跡	〃 〃 字横山	2,600	試掘・工事立会
横山 B 遺跡				〃 〃 〃	200	〃 〃	
上野南部		5	和田遺跡	〃 喰代字和田	3,500	現状保存	
			栢川北遺跡	〃 栢川	18,000	試掘・工事立会	
大山田二第		23	栢川南遺跡	〃 〃	21,000	〃 〃	
			歌野遺跡	阿山郡大山田村広瀬	800	試掘	
			田中遺跡	〃 〃 田中	12,000	〃	
			天神 A 遺跡	〃 〃 下阿波	2,500	〃	
			天神 B 遺跡	〃 〃 〃	1,900	〃	
赤目	17	馬場遺跡	〃 〃 〃	2,400	盛土保存		
		広瀬遺跡 (田中遺跡)	〃 〃 広瀬	600	記録保存 600㎡		
		辻垣内遺跡	名張市赤目町	65,000	} 試掘・工事立会 } 記録保存 7,500㎡		
向岩倉遺跡 (上東野遺跡)	〃 〃	25,000					
友田第二	8	—	—	—	—	—	
熊野耕地事務所	相野谷	15	広畑遺跡	南牟婁郡紀宝町相野谷	2,000	工事立会	
計			639	55遺跡		828,200	
県営畜産経営環境整備事業	伊勢耕地事務所	度会	5.1	樋ノ谷遺跡	度会郡大宮町神原	9,000	試掘・本調査 1,450㎡
				樋ノ下遺跡	〃 〃 〃	48,000	試掘
県営農村基盤総合整備パイロット事業	松阪耕地事務所	中南勢	40	下山見 A・B 遺跡 他	松阪市小阿坂町	385,400	試掘・工事立合 盛土保存 2,000㎡
県営一般農道整備事業	津耕地事務所	草生村主地区	—	前田遺跡	安濃郡安濃町中川	1,500	記録保存 900㎡

事業名	耕地事務所	事業区	事業面積 (ha)	遺跡名	所在地	遺跡面積 (m ²)	保存方法
県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業	上野耕地事務所	大山田南部	—	歌野遺跡	阿山郡大山田村広瀬	3,500	記録保存 1,100m ²
	松阪耕地事務所	勢和勢和第二	—	下田遺跡	多気郡勢和村下出江	40,000	} 試掘
				馬場遺跡	〃 〃 〃		
上野耕地事務所	小杉二期	—	松山氏堡	阿山郡伊賀町小杉	700	試掘	

第1表 昭和57年度農業基盤整備事業地域内埋蔵文化財一覧表



第1図 調査遺跡位置図

2. 試掘調査

県営圃場整備事業では、分布調査の結果で判明した55遺跡のうち、大山田村広瀬遺跡については、前年度からの協議取り決めにより、600㎡について今年度本調査をすることになっていたが、他についてはすべて、遺跡の実態、範囲を明確化するため、4月から5月にかけて試掘調査を実施した。

しかし、特に遺跡の立地、遺物の散布状況等から地下遺構の保存状況が良いと判断され、且つ、当初から排水路、舗装道路計画地とされていた鈴鹿市起A遺跡、安濃町浄土寺西遺跡、津市宮間戸遺跡、伊勢市塚の上A遺跡については試掘を要することなく本調査の対象として扱われた。

全地区内の試掘調査終了後、再び細部について各耕地事務所との協議〈第二次協議〉がもたれたが、

ここでは、遺構・遺物の埋没深度等、より明確化した各遺跡について、工事設計変更による遺跡の現状保存、もしくは、本調査面積の縮小化を再度、事務所に要請するとともに、その集約結果を耕地第二課に報告し、文化課の本年度予算、年間スケジュール及び、調査対応面積の限界ともからめて、具体的な調整がなされた。

特に、名張市辻垣内遺跡については試掘の結果、その範囲が膨大な面積（約10万㎡）に及ぶことが判明し、その調整は困難を極めたが、最大限、盛土等によって遺跡の破壊を防ぐ工法の変更を要請する中、最終的にやむをえず削平される部分（7,500㎡）について発掘調査を実施することとなった。

3. 第一次発掘調査

梅雨の候、県圃関係では6月7日から大山田村田中遺跡、安濃町浄土寺西遺跡、明和町西村、愛場遺跡、10日には鈴鹿市起A遺跡の調査を開始した。また農免道路関係では昨年度より取り決めのあった安濃町前田遺跡の調査を同時期に開始した。

田中遺跡では当初、中世を中心とする遺跡と考えられていたが、古墳（横穴式石室）が検出され、関係者を驚かせた。例年になく多雨の中、浄土寺西遺跡では幅2.5mという狭い排水路部の発掘のため、たびたびの壁面の崩れ、冠水に四苦八苦する調査となった。

起A遺跡の調査は南北に長くのびる2本の排水路

部について実施した。そして、この調査に併行して排水路以外の面部分についても遺跡の実態を明らかにするため、特に切り盛りの大きい畑を中心に試掘坑を設定して調査を行なった。先の排水路部の調査では柱穴、土壇、溝等がみられたものの、遺物量は極めて少なく、集落跡の縁辺部という感もたれた。しかし、面部分の試掘では多量の土器とともに各所で竪穴住居（弥生時代と奈良時代）を検出、住居群が排水路に囲まれた面全体（畑地）に広がるが予想された。且つ、遺構面までの深度が非常に浅いことが判明し、ここで新たに面部分（約2万㎡）についての取り扱いが問題となった。

4. 第二次発掘調査

第一次調査は例年以上に多かった雨と作業員数の流動という条件下でその進行が遅れていたが、起A遺跡では排水路部の発掘終了と同時に周囲の部分についての保護調整の協議がもたれた。試掘結果では

遺構が濃密に広がる部分の面積は約1万㎡と判断された。遺構面までが非常に浅いということもあって工事対応については難局を示したものの、結局、その約半分については、現状のままで盛土して保存し、

工事を進めることとなったが、残り約5,000㎡については、11月末調査完了という時間設定の中で調査続行を余儀なくされた。

7月には津市宮間戸遺跡、そして、8月には面積的にも今年度最も広い調査対象である名張市辻垣内遺跡の調査を開始した。また農免道路関係では大山田村歌野遺跡の調査もほぼ同時期に始まり、酷暑の夏の時期に県下で5～6件の調査が同時並行している過酷な状況となった。

宮間戸遺跡では雨もさることながら、地形立地的に海岸に程近い低標高下のもと、湧水に悩まされる日々も続いたが、各種遺構とともに、多量の中世(鎌倉時代)の土器を検出し、これまで考古資料的に空白であった当地域の歴史を考える上で貴重な資料を提供した。

一方、歌野遺跡では、当初、試掘後の耕地第一課との協議の上、農免道路予定地内にかかる約600㎡が調査対象となっていたが、調査が進むにつれて、遺構(竪穴住居等)の東への拡がり予想され、調査途中での調査面積の拡大化、予算の追加要求について問題となった。この件については、再度遺跡の拡がりを確認した上で、継続して追加調査を実施する

こととなり、調査期間の延長とも加えて、500㎡の調査面積の拡大が決定した。

県下各地に及んだ第一次調査は8月の段階ではほぼ終了の状況となり、9月には宮間戸遺跡の調査も最後の追い込みに入っていた。しかしすでにこの時期に当初よりその調査時期を遅らせていた4遺跡の調査の準備が必要となった。10月には白山町岩脇C遺跡、伊勢市塚の上A遺跡、及び松阪市服部遺跡、11月には畜産経営環境整備事業にかかる大宮町樋ノ谷遺跡の調査を開始した。この段階において、なお広大な面積をかかえる起A遺跡、辻垣内遺跡の2遺跡は調査続行中にあり、再び、秋風を感じる間もなく現場争鳴の様相を呈していた。

服部遺跡の調査は、立地的に櫛田川の複雑な沖積地にあり、土層の観察、遺構の検出に四苦八苦したもの、多量の奈良～鎌倉時代の土器と共に、完全な形で舶来青磁碗の検出は特筆されるべき発見と言えよう。

また、樋ノ谷遺跡では県下初の発見である縄文時代早期の竪穴住居が検出され、その驚きと重要性を説く中で、地元の人々の中に次第に遺跡保護に対する熱い眼差が芽生えたのもこの頃であった。

5. 第三次発掘調査

第二次の塚の上A遺跡は当初の工事設計変更によりその調査面積が大幅に減少し、短期間のうちに発掘調査を終了した。他の3遺跡のうち樋ノ谷遺跡を除いてほぼ本年内に調査終了の目度がついた。しかし、調査地区が4地区に分れ、広大な発掘面積をもつ名張市辻垣内遺跡は、なお調査続行中であり、また、調査過程において実施した工事立ち会い、再試掘等によって新たに2基の古墳の他、更に各所で遺跡の実面積が拡がること明確になってきた。このことは5月段階で実施した試掘調査そのものが作物によって制約されたものであったことにも起因していたが、当初の線引き以上に遺跡面積が増大したことは圃場整備事業の工期をも含め、当課の調査対応

能力、予算等のからみで大きな問題となった。とりもなおさず、当初の予定面積を消化する中で、個々、耕地事務所と再々、協議する事態となった。

2基の古墳の内、石室が地上に露出していた方については、周溝等の規模、深度を確認した上で、保存上必要な最少限の削平に工法変更することとなったが、残る一基については、土地所有者の強い要望もあって、更に追加の調査をせざるを得ない状態となった。

そのため当課では文化庁、耕地第二課に対し、新たな予算措置を講ずるよう要望すると共に、当初の予定面積を完全に遂行した後に古墳の調査に入る準備をすすめ、翌年の2月に調査を開始した。

6. 遺跡の保存と文化財啓蒙

昭和57年度の農業基盤整備事業域にかかる緊急発掘調査は計14件となった。農林水産部との遺跡をめぐる再々の協議の末、最終的にやむをえず削平され、工法的にも保存策が不可能な個所がその調査対象となったわけである。記録という美名のもとで実施される発掘調査は、確かにその行為なく破壊されること以上に積極的行為ではあるが、巨視的にみればやはり一種の破壊であることも認識しておきたい。

本年度の発掘調査においても多くの学問的に価値高いものが検出された。大宮町樋ノ谷遺跡では県下初例の縄文時代早期の竪穴住居跡、名張市辻垣内遺跡では予想だにできなかった畑の下から外護列石に囲まれた巨大な横穴式石室をもつ方形の古墳が検出され、関係者、専門家はもとより地域の多くの人々の強い関心が集まった。その他、松阪市服部遺跡の完全な姿での舶来青磁椀、鈴鹿市起A遺跡での弥生中期の壺とその中に眠っていた炭化した米粒等々、これら

のもつ重要性を説けば枚挙にいとまない。

発掘調査された遺跡については、おのずと事後、工事実施によって破壊されるということが前提になる場合が多いが、調査によってその重要度がより明確になった遺構等については将来を期して保存し後世に伝えてゆく必要がある。

幸にも、樋ノ谷遺跡、辻垣内遺跡の住居跡、古墳等は、地元の厚い理解と協力を得て保存することができた。

また、調査中、あるいは、終了後にはできるだけ多くの人々に各遺跡の発掘、埋蔵文化財を理解していただけるよう現地説明会を開催し、多くの参加者を得た。

分布調査にはじまり、調査終了の全過程の中、各耕地事務所、各土地改良区はもとより、各地区の多くの人々には格別のご理解と協力をいただいた。文末ながら記して感謝の意を表したい。

(新田 洋)

遺 跡 名	所 在 地	調 査 面 積 (㎡)	調 査 期 間
起 A 遺 跡	鈴鹿市安塚町字起	4,500	昭和57年6月～11月
中井藤ヶ森遺跡	安芸郡安濃町浄土寺	430	昭和57年6月～8月
宮間戸遺跡	津市雲出長常町	2,500	(昭和57年7月～9月 昭和57年12月～昭和58年1月)
岩脇C遺跡	一志郡白山町岩脇	650	昭和57年10月～11月
服部遺跡	松阪市出間町	1,500	昭和57年10月～12月
西村遺跡・愛場遺跡	多気郡明和町西池村	1,300	昭和57年6月～8月
塚の上A遺跡	伊勢市円座町	400	昭和57年10月
田中遺跡	阿山郡大山田村広瀬	600	昭和57年6月～7月
辻垣内遺跡・上東野遺跡	名張市赤目町	7,500	(昭和57年8月～昭和58年1月 昭和58年2月～昭和58年3月)
樋ノ谷遺跡	度会郡大宮町神原	1,450	昭和57年11月～昭和58年1月
前田遺跡	安芸郡安濃町中川	900	昭和57年6月～8月
歌野遺跡	阿山郡大山田村広瀬	1,100	昭和57年8月～10月

第2表 昭和57年度発掘調査遺跡一覧表

遺 跡 名	実 施 期 日	備 考 (参加人数等)
起 A 遺 跡	昭和57年11月27日	40人
西村遺跡・愛場遺跡	昭和57年 9 月23日	40人 (西池村公民館にて地区住民を中心にスライド会を実施)
田 中 遺 跡	昭和57年 7 月25日	30人
辻垣内遺跡・上東野遺跡	(第1回 昭和57年12月11日) (第2回 昭和57年12月25日) (第3回 昭和58年 1 月29日) (第4回 昭和58年 3 月19日)	150人 80人 (赤目公民館にてスライド報告、遺物展) 50人 (示会を実施) 50人
樋 ノ 谷 遺 跡	昭和57年12月26日	60人
前 田 遺 跡	昭和57年 8 月 2 日	30人
歌 野 遺 跡	昭和57年10月11日	40人

第3表 現地説明会開催一覧表

I 鈴鹿市安塚町 ^{おこし}起A遺跡

1、位置と環境

鈴鹿市内は八野町から神戸町、須賀町、玉垣町にかけて、旧鈴鹿川の扇状地である中低位段丘を形成している。この段丘は第四紀洪積層に属し、表層から腐植質耕作土、黄褐色粘質土、礫層という層位を示す。周囲の沖積地との比高差は10～0mであり、それぞれの段丘端は沖積層下に没する。^①

起A遺跡（1）は鈴鹿市安塚町起にあり、標高10～12m、沖積地との比高は2～3m、上記低位段丘端に位置する。遺跡面積66,000㎡のうち排水路部分及び工事により地下遺構に影響を及ぼすと考えられる箇所を含め4,500㎡を発掘調査した。本遺跡はもともと安塚遺跡（中世の遺物散布地）とされていたが、調査により弥生時代中期を中心とする集落跡である

ことが確認された。

鈴鹿市内の縄文遺跡は現在12か所が知られているが、本遺跡周辺の低位段丘上あるいは沖積地では確認されておらず、鈴鹿川北の上位段丘上、南では国府町周辺、岸岡町、郡山町付近に集中する。弥生時代に入ると津市納所遺跡とならび伊勢湾西岸を代表する上箕田遺跡（2）、上箕田北遺跡（3）がある。これらの遺跡は鈴鹿川の自然堤防上を生活の場とし、その後背地を水田としたものらしく、納所遺跡を始め他の前期弥生遺跡と共通した占地を示している。上箕田遺跡は昭和39、43、45年度の三次にわたって調査され、弥生時代全期の多量の土器、木製農耕具類、植物遺物が出土した。なかでも後期の線刻土器、



第2図 遺跡位置図（国土地理院 1：50000 鈴鹿）

袈裟襷文を施された銅鐸形土製品は著名であり、後者は東京国立博物館保管となっている。鈴鹿市の弥生遺跡はこの上箕田遺跡を中心としてひろがっている。起A遺跡の周辺でも須賀遺跡（4）萱町遺跡（5）神戸中学校遺跡（6）本多町遺跡（7）双ツ塚

遺跡（8）など後期の集落が増加する。

本遺跡周辺の古墳は岸岡山古墳群を除くと、極端に少なく、起地区では墓地拡張のおり石室状のものがあったと伝えられているにすぎない。

2. 遺 構

基本的な層序は耕作土、茶褐色土、地山である黄褐色粘質土となり、表土から地山面までは20～50cmと浅い。遺物包含層は確認されない。遺構内の埋土は、中世以降の遺構では茶褐色土、奈良時代以前は黒褐色土である。

1. 縄文時代の遺構

SK15 調査区南西端で検出された。直径約2.4m深さ約30cmを残す土坑である。縄文土器片が一括廃棄された状態で数個体分が充満していた。

2. 弥生時代の遺構

① 竪穴住居

SB2 東西3.8m以上、南北3.7m深さ約20cmで隅丸方形を示す。周溝はなく、主柱穴についても確認できなかった。床面近くから中期中葉の細頸壺（9）甕、鉢等が出土した。とりわけ完形の細頸壺内には炭化米約50粒が入っており注目される。

SB4 東西4.2m、南北4.1mで隅丸方形を呈する。周溝は全体をめくり、検出面と周溝底差は約30cm、床面と周溝底差は5～10cmである。主柱穴は4か所検出され、その距離は東西1.7m、南北2.4m、深さは20～40cmある。出土遺物には受口状口縁の甕・高杯脚、軽石等がある。



第3図 遺跡地形図（1：5000）

S B 5 東西4 m、南北4.3 m、深さ20～30cmで方形の住居である。S B 2同様周溝はない。主柱穴間の距離は東西南北とも約2 m、大きさは径約30 cm深さ約30cmである。床面近くから中期の甕4 個体(11～14) 壺3～4 個体(10) 台付鉢等が一括出土した。いずれも同時期の遺物と考えられる。なお中央の土域は奈良時代のものであり、炉跡がこの土域に切られたらしく、部分的に焼土が残っていた。

S B 6 東西2.9 m、南北4.5 m、長方形プランの住居で、深さは約20cmある。出土遺物は甕、壺の細片である。

S B 7 東西3.4 m、南北3.9 m、深さ約20cmの長方形の住居である。周溝、主柱穴は確認されなかった。埋土から壺、甕、高杯脚部が出土した。

S B 8 東西3.9 m、南北3.5 m、深さ約10cmでS B 9を切っている。周溝はなく主柱穴間は東西2.2 m南北2.1 m、深さ約20cmである。埋土中より受口状口縁の甕、台付甕、高杯脚が出土した。

S B 9 東西4.8 m、南北4.6 mの隅丸方形で周溝がめぐる。S B 10を切っており、S B 10の床面と

周溝底との差は20～25cmある。遺物は甕の破片が少量出土しただけである。

S B 10 東西6.1 m、南北7.4 m、本遺跡中最大の住居である。南北壁中央部を除いて周溝がめぐる。検出面と周溝底とは15～20cmの差があるが、床面までの深さは10cm弱である。甕、鉢が出土している。S B 8、9に先行する住居である。

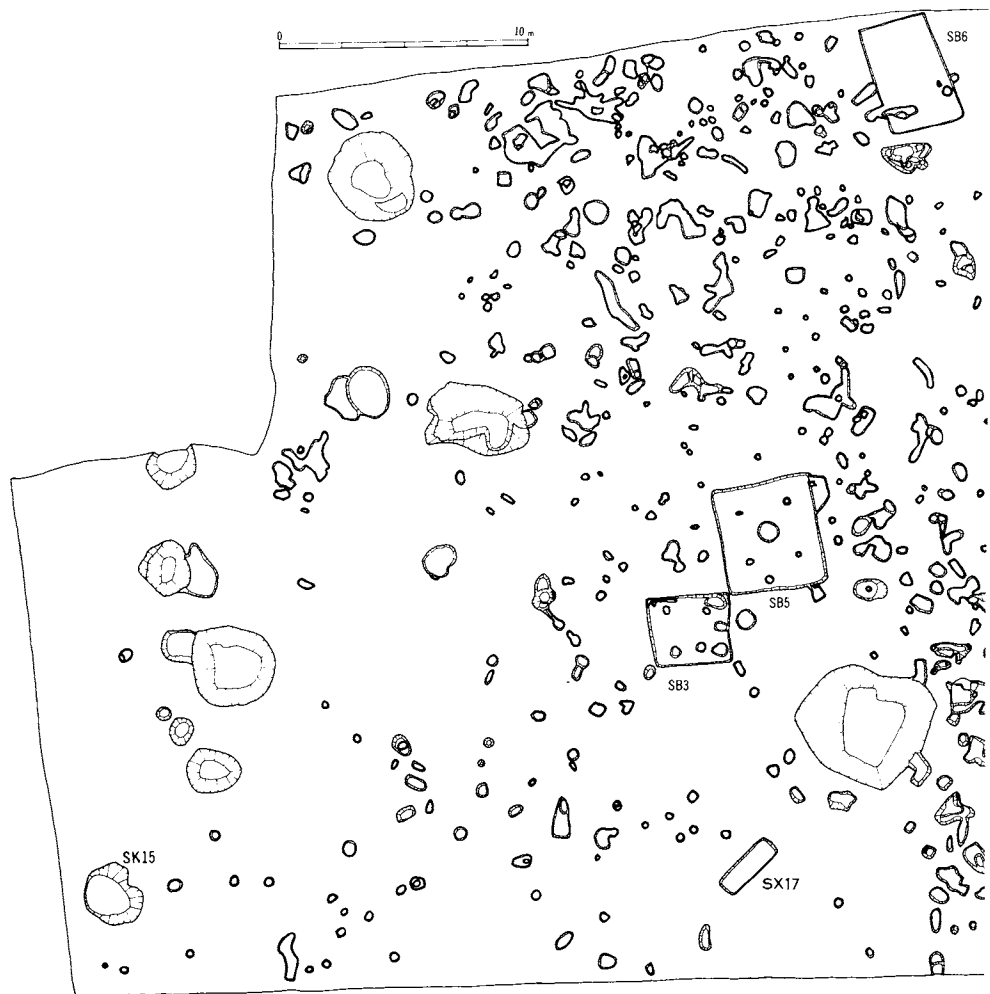
S B 11 東西3.2 m、南北2.6 m、深さ約10cmで東西に長い長方形プランをもつ小形の住居である。周溝、主柱穴は検出されなかった。

S B 12 東西4 m、南北3.1 m、深さ約10cmで周溝はない。主柱穴は3ヵ所で検出され、その距離は東西1.8 m、南北1.4 mである。住居中央部に焼土が確認された。埋土より中期の受口状口縁をもつ甕、大型壺が出土している。

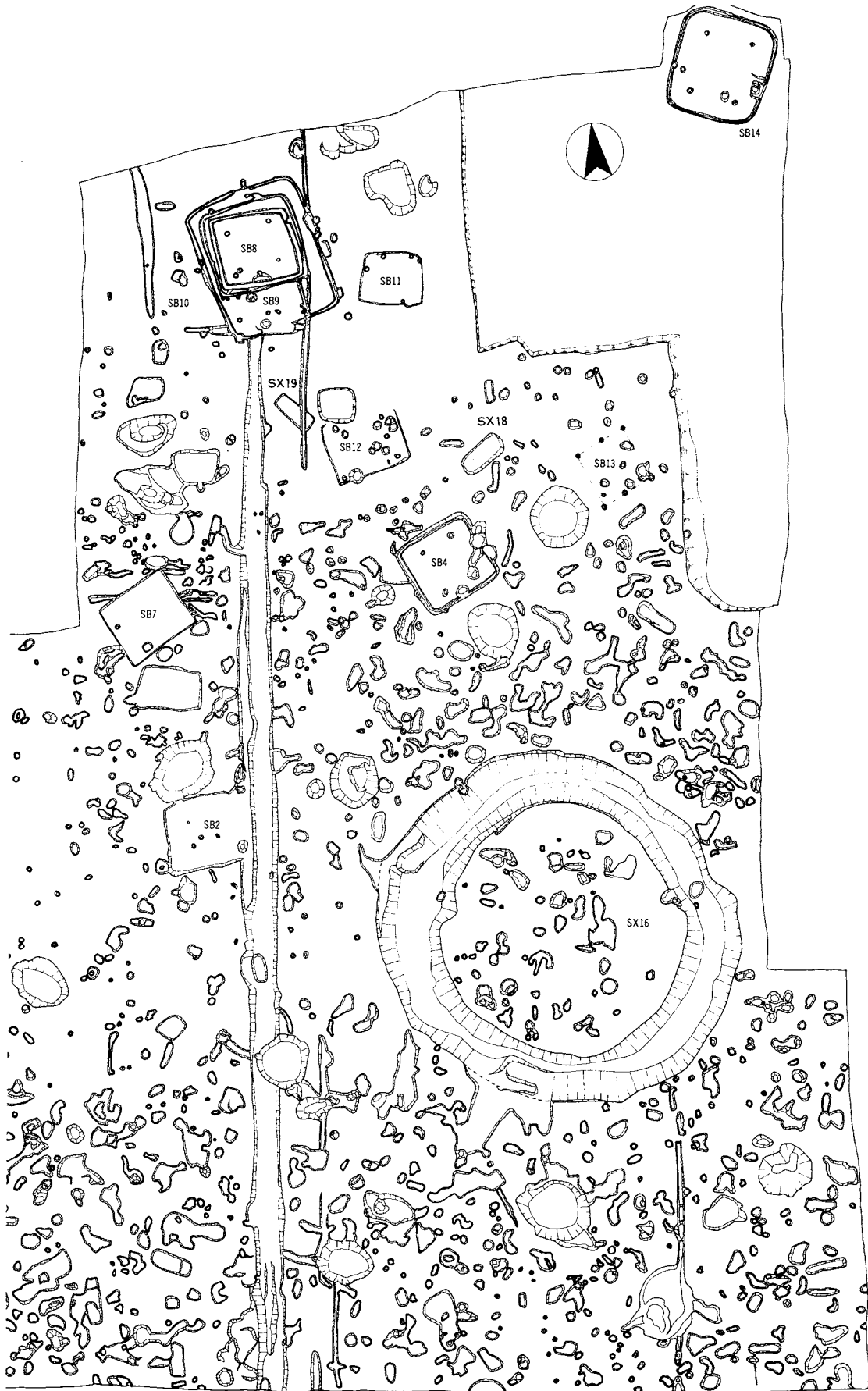
S B 14 発掘区北端の一段下がったところで検出された。東西5 m、南北5.4 mで周溝がめぐる。検出面から周溝底までの深さは約25cm、主柱穴間の距離は東西2.4 m、南北3.1 m、深さは10～20cmである。住居内の中央南寄り部分に焼土がわずかに確



第4図 発掘区平面図(1:2000)



第5図 遺構平面図 (1 : 300)



認められた。埋土より後期の高杯脚、甕が出土した。

② 掘立柱建物

SB13 東西2間×南北1間であるが、2.7m四方の正方形プランをもつことから倉庫と考える。東西の柱穴間は中央部からそれぞれずれる。柱穴の深さは約30cmである。SB4と同一方向であることからこの時期のものと考えたい。

3. 古墳時代初頭の遺構

SB1 東側トレンチ拡張部で検出された。東西3.4m、南北3.8mの竪穴住居である。一部に周溝がある。埋土よりS字状口縁甕、小形壺、高杯、器台等を出土した。

4. 古墳時代後期の遺構

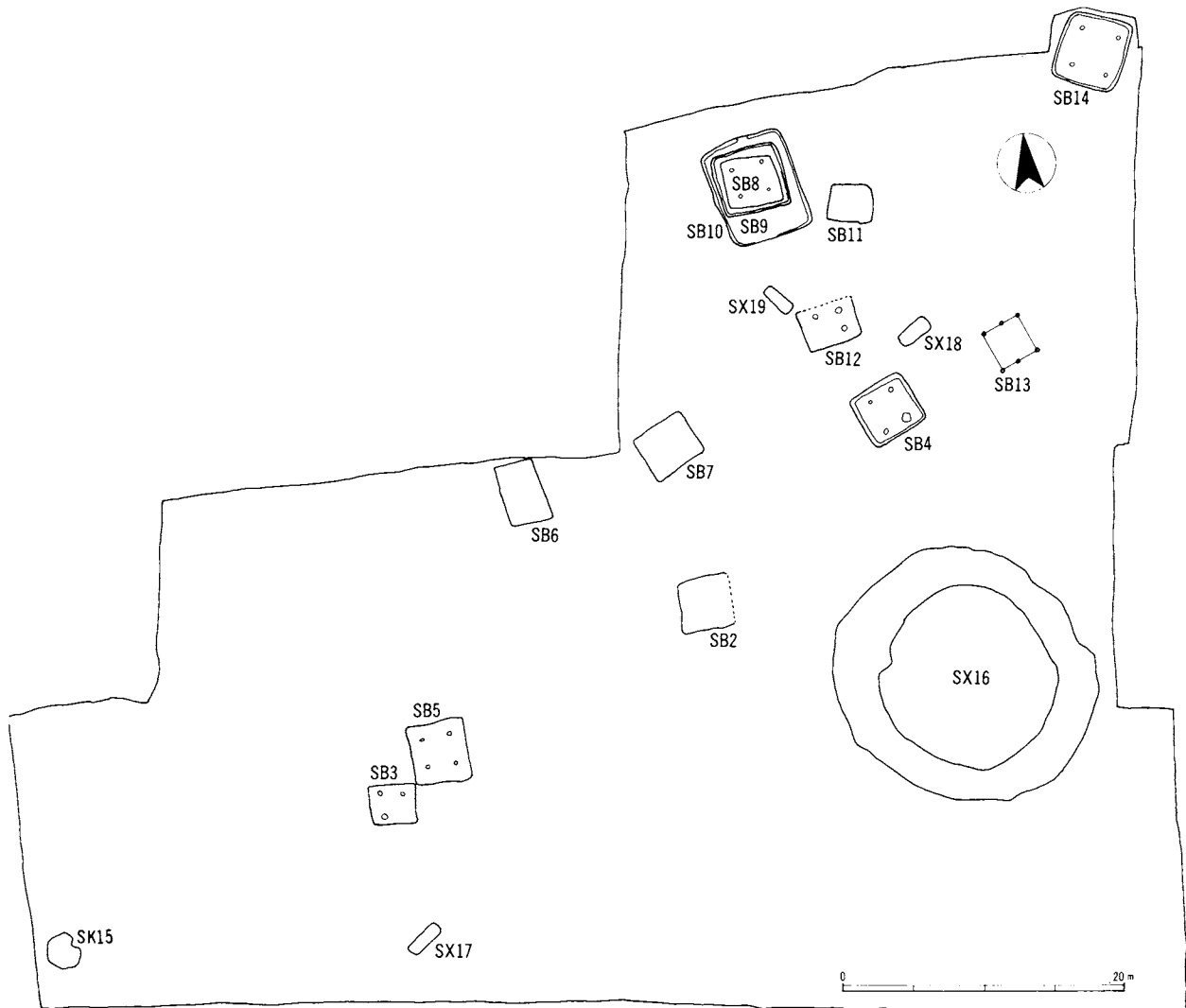
SX16 墳丘径12.5m～13m、周溝幅2～3mの

円墳で、盛土部分は開墾により削平されており主体部は不明である。出土遺物には須恵器杯、短頸壺、提瓶、土師器小形壺等がある。すべて周溝内からの出土である。なお古墳北縁の周溝肩部から土師器長胴甕が横転した状態で2個体出土した。

SX17～19 6世紀後半の土壇墓である。いずれも長方形プランをしており、SX17は2.5m×1m、SX18は2.5m×1.2m、SX19は2.2m×0.8m、深さは20～30cmである。副葬品は極端に乏しく、SX17で須恵器杯身、SX18で杯2個体、SX19では土師器杯のみであった。

5. 奈良時代の遺構

SB3 東西3.2m、南北2.8m、深さ約20cmの竪穴住居である。カマドは確認されなかった。ピット内より土師器皿、甕が出土した。



第6図 遺構配置図 (1:500)

3. 遺物

それぞれの遺構から出土しているが、今回はSK 15、SB2、SB5、及びSX16、SX17、18、19の遺物を紹介するにとどめ、今後稿を改めて報告することにした。

1. 縄文土器 (1~8)

SK15出土一括資料の一部を示した(第7図)。数個体に及ぶが、完形に復元できる例はない。

1は水平口縁であり、縄文地に山形に、この下位には縦位の長円形に、太い沈線を配す。2~3は波状口縁であり、円または渦巻の間に長円形、これらの下に波状の、太い沈線を配す。4~5は山形口縁であり、縄文地に太い沈線を配すが、5は口縁端面にも縄文を施す。6も波状口縁であり、頂部に円孔を持つ。表面は無文であるが、口縁端面には沈線と刺突文を配す。7は水平口縁であり、三ヶ月形の区画内に斜線列や刺突文を施す。8は刻目を施した断面半円形の低い突帯を持ち、これより上部には縄文、下部には縦位の沈線を配す。

出土土器は、全て同様な胎土であり、文様から同一型式に属すと考えられる。三重県下では、東庄内B遺跡出土品と共通する要素が多い。関東の加曽利

E3式並行期の良好な一括資料である。

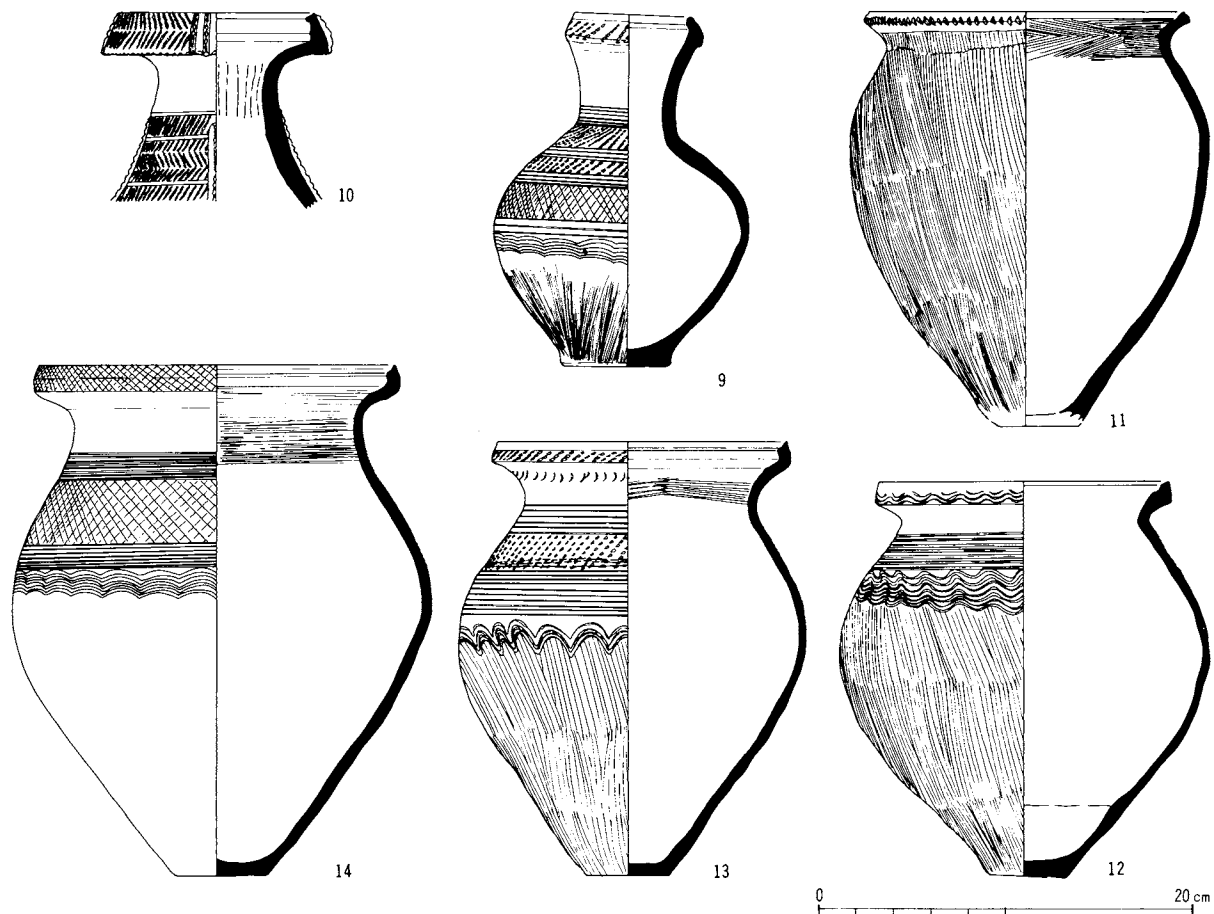
2. 弥生土器 (9~14)

A. SB2出土の土器 (9)

口径6.4cm、器高18.7cmの細頸壺形土器である。頸部はやや外方へ開き、口縁部で「く」の字に折れて受口状口縁となる。口縁端部は丸味を帯び、わずかに内傾する面をもつ。胴部は強く張る。口縁部及び肩から胴部にかけて、回転を利用した文様帯で飾られる。肩から胴部は4段にわたり櫛描直線文をめぐる。櫛描原体本数は4条を基本としているが、かなり波うっており、特に上から2段目の直線文では原体を器面から離さず数回静止している。口縁部及び3段目までの文様帯には刺突文、3段目と4段目の間には斜格子文、その下は波長の大きい波状文を施す。直線文が波打っているため同一文様帯でも幅がちがうが、その中へは無理にでも刺突文で埋めつくそうとしている。斜格子文はヘラによりまず左下りを全周し、その後右下りを施す。この順序はSB5出土の甕、SB12出土の壺にもあてはまる。胴部下半の細かいハケ目は胴部最大幅部分にも残る。なおこの壺からは炭化米約50粒が検出された。



第7図 縄文土器拓影図 (1:3)



第8図 弥生土器実測図（1：4）

B. S B 5 出土の土器（10～14）

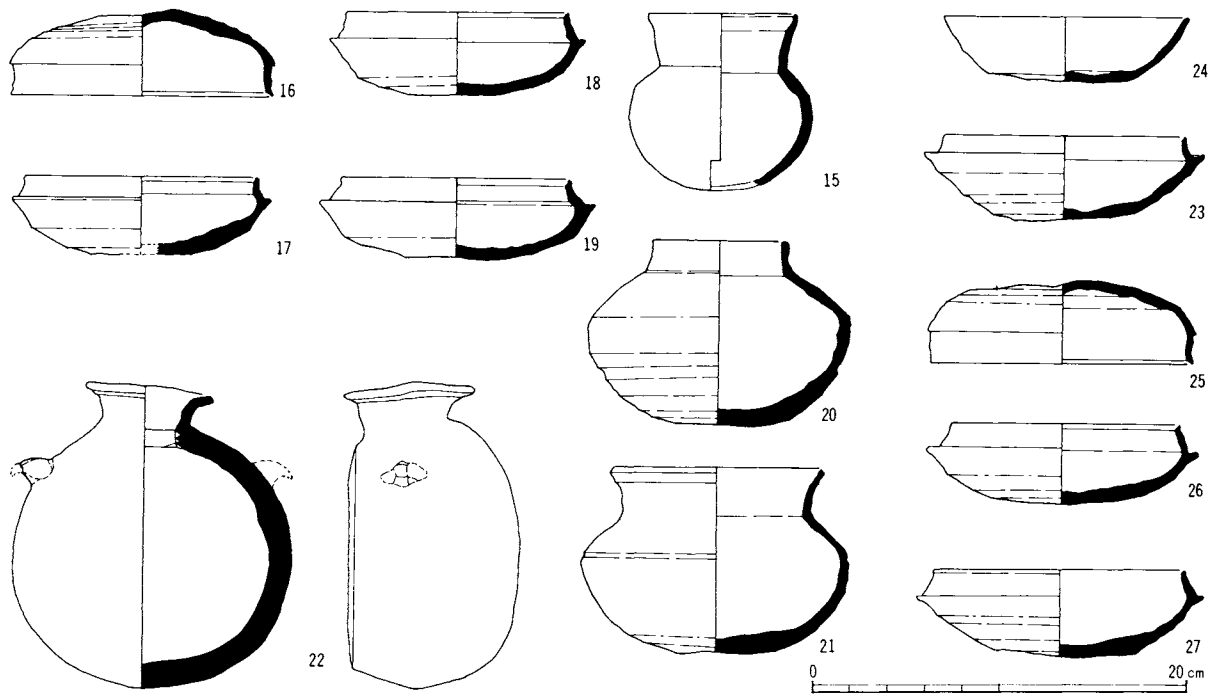
壺（10）内傾しながら立ちあがる幅広い口縁部に刺突文を羽状に配す。その後4本1組の棒状突起を4ヵ所に貼りつけている。頸部下半は2本1組の櫛描直線文で3段以上に区画し、その間はやはり刺突文を施し、口縁部同様棒状突起を1本ずつ貼りつける。突起部及び口縁下端には刻み目をつけている。頸部上半はていねいになでつけられており、口縁上端は内傾する面をもち、内側は強くなでられている。胎土中には砂粒及び金雲母を含みざらつく。明るい褐色である。

甕（11～14）

A類（11）器面をほとんど飾らない土器で、口縁部が強く外反する。口縁端部に刻み目を施す。器表全体に斜方向のハケ目を、口縁部内側には横位のハケ目を施す。ハケ目は口縁部、胴部、底部付近の順である。ハケ目原体は13本までは数えることができる。内面はなであげて平滑にしあげている。口径18.9cm 推定器高21.9cm、胴部最大幅は器高の $\frac{2}{3}$ の位置にあ

り口径をわずかに上回る。

B類（12～14）受口状口縁の甕で胴部から上を飾る。櫛描直線文により区画し、その間に刺突文、斜格子文等を描く。胴部下半から底部にかけてハケ目を施す。内面はナデにより平滑にしあげる。器壁は一様に薄い。12は肩部を7本の直線文で区画し、口縁部と直線文直下に波状文を施す。口縁の波状文は上半分がなで消される。口径14.5cm、器高21cm。13肩と胴部を直線文で区画し刺突文で飾るが、文様は不規則でひきずった個所が目立つ。口縁部の下に爪形文を施す。口径15.5cm、器高23cm。14口径19cm前後、器高27cmで胎土はざらつくが極めてていねいにつくられている。肩と胴を8～10本の直線文で区画し、口縁部と文様帯を斜格子文で埋める。斜格子の施文は前述したとおりである。13、14は口縁端がとがり、口縁端内側は凹んで稜をもつ。



第9図 古墳時代土器実測図(1:4)

3. 古墳時代の土器 (15~26)

A. S X 15出土の土器 (15~21)

土師器壺 (15) 口径7.8cm、器高9.4cmの小形壺である。頸部は外反しながら立ち上がり、口縁部で弱く内湾する。口縁部内側は強くヨコナデされる。体部はや、肩を張るが球形に近い。体部下半はヘラケズリ、頸部下半から体部上半にかけては横方向に細かくヘラミガキされる。内面はヨコナデ及びナデによりていねいに調整される。なお焼成の前後は不明であるが底部に3.3cm×2.5cmの穿孔がある。

(須恵器)

蓋 (16) 口径14cmの大ぶりの蓋である。凹凸をもちながらほぼ垂直に立ち上がり、天井端部に稜をもつ。天井部は丸く、ヘラケズリは天井下部までである。口縁端部内側に段がつく。ロクロ方向は逆時計回りである。

杯 (17~19) 口縁部が内傾する。端部内側に段を有するもの(17)と内傾した面になるもの(18、19)がある。受け部は丸くしあげられる。ロクロ方向は逆時計回りである。

壺 (20、21) 20は頸部がや、内傾し、口縁端部を丸くおさめた短頸壺である。肩部以下はヘラケズリ、内面には水挽き痕が残る。口径7cm、器高9.8cmでや、肩を張る。21は口縁部が開き段をつける。頸部

から胴部にかけては大きく張る。ヘラケズリは底部付近に限られる。

提瓶 (22) 口径7cm、器高16cm、胴部は半径7.5cmの円形を呈す。側面からみると腹部が大きく張り出し、背面は直線である。カキ目はみられない。

B. S X 17出土の土器 (23)

口径12.8cm、器高4.5cm。口縁部は内傾し、端部は丸くなり面をもたない。ヘラケズリも底部付近に限られる。ロクロ方向は時計回りである。

C. S X 18出土の土器 (25~27)

25、26はセットをなす。蓋は16とほぼ同じ形態である。26についても外形、口縁端部など18に似る。S X 16に近い年代を示すと考えられる。27は口縁端部が丸味を帯び、底部ヘラケズリも粗い。

D. S X 19出土の土器 (24)

口径13.1cm、器高3.5cmの土師器杯。未調整平底の底部から大きく開き口縁に至る。口縁端は丸い。底部外面以外はヨコナデされる。

4. 小 結

調査の結果竪穴住居12棟、掘立柱建物1棟、縄文時代の土埴1基、円墳1基及び古墳時代の土埴墓3基を検出した。本遺跡は弥生時代中期を中心にして、縄文時代中期から室町時代にかけて断続的に営まれた遺跡である。以下簡単な考察をくわえて結びとしたい。

1. 遺構について

円形あるいは楕円形プランの縄文時代の土埴は、鈴鹿市東庄内A遺跡^⑤、明和町金剛坂遺跡^⑥、亀山市地藏僧遺跡^⑦で検出されており、内部からは土器が倒立して出土することが多く、「恐らく人為的なものであろう^⑧」とされている。本遺跡の土埴SK15はこれらの遺跡での人為的な事柄とはちがひ、土器の投棄場所と考える。また、遺物の出土量、残存状態から竪穴住居跡の存在も十分考えられる。

弥生時代の竪穴住居の時期的な差異については、くわしい検討を経ていないためここでは差し控えたが、調査面積の割に住居跡が少なく、保存部分についても同様のことが予想されるため、おそらく同時存在した住居はかなり限られると思われる。

古墳時代後期の土埴墓については、名張市奥出遺跡^⑨、多気町河田古墳群^⑩など、県下でも近年類例が増えている。遺構プラン、規模から考えておそらく木棺直葬であろう。また時期については、須恵器杯の形態、手法から6世紀中葉～後半と考える。

2. 遺物について

出土した縄文土器は、すべて加曾利EⅢ式に併行するもので、鈴鹿市東庄内B遺跡^⑪、西川遺跡^⑫と相前後し、中期土器の良好な資料となるものである。

SB5出土の甕B類は近江タイプの受口状口縁の甕であり、中西常雄氏の甕Aに属する。県下では、鈴鹿市上箕田遺跡^⑬、深田遺跡^⑭、津市亀井遺跡^⑮、納所遺跡^⑯にその類例がある。本遺跡出土の甕は伴出した甕A、壺から中期中葉を下らないと考えられ、上記遺跡出土遺物より先行する。

中期の壺に特徴的な文様の構成は、この種の甕に

もあてはめられる。本遺跡では、①櫛描直線文による区画、②区画内初段の文様は口縁部の文様と対応する。③最下部の直線文下には波状文を施すというパターンがみられる。

SB2出土の壺は口縁部が「く」の字状に折れまがり受口状となるもので、すでに近江・伊賀、北勢地方に多いとされてきた。本遺跡からの出土でそのことが再確認されたものであるが、形態としては、東庄内B遺跡方形周溝墓出土、地藏僧遺跡出土と酷似している。この壺もSB5出土遺物と同時期と考えられる。SB2埋土からは、口縁部に細い2条の凹線文をもつ壺が出土している。

古墳周溝出土の遺物のうち、杯については大ぶり、口縁端面に段または面が残り、天井部に端部をもつ。またロクロ方向はすべて逆時計回りである。陶邑古窯址群^⑰のMT15直後に位置づけたい。

(山下雅春)

(註)

- ① 『鈴鹿市史 第一巻』鈴鹿市教育委員会 1980
- ② 伊藤久嗣『納所遺跡』三重県教育委員会 1980
- ③ 仲見秀雄・真田幸成・大場範久『上箕田』1961
同上 『上箕田一弥生式遺跡第二次調査報告』1970
- ④ 回転がとまることはこれ以外に止まった個所で籬状文風に線が入ることでもわかる。
- ⑤ 谷本鋭次「東庄内A遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会 1970
- ⑥ 下村登良男・山沢義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会 1971
- ⑦ 倉田直純『地藏僧遺跡発掘調査報告』亀山市教育委員会 1978
- ⑧ 註⑤に同じ
- ⑨ 『三重県埋蔵文化財年報 13』三重県教育委員会 1983
- ⑩ 同上
- ⑪ 小玉道明・谷本鋭次「東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会 1970
- ⑫ 註⑨に同じ
- ⑬ 中西常雄「北大津の変貌」1979
- ⑭ 註③に同じ
- ⑮ 早川裕己『鈴鹿市東玉垣町・深田遺跡』1979
- ⑯ 註②に同じ
- ⑰ 註②に同じ
- ⑱ 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ 1966

Ⅱ 安芸郡安濃町 なかいふじがもり 中井藤ヶ森遺跡

1. 位置と環境

鈴鹿山脈の南端、標高 820m の経ヶ峰山麓および錫杖ヶ岳の山狭にその源を発する二級河川安濃川は、芸濃町の南部、安濃町の中央部を縦断した後、津市域を経て伊勢湾に注いでいる。その中流に位置する安濃町では、両岸に幅約 2km の沖積平野を形成している。

中井藤ヶ森遺跡(1)は、安濃川右岸の水田が営まれている沖積地上に位置し、標高は約15m前後である。行政上は安芸郡安濃町大字浄土寺字中井、藤ヶ森に属している。遺跡の範囲は村主小学校の東北側の水田で、東西約250m、南北約400mで、標高は15m前後である。

さて、当遺跡をとりまく周辺の歴史的環境についてであるが、安濃川流域は早くから拓かれた地域の一つで、遺跡の分布密度も高く、縄文時代から中世にかけての種々の遺跡が分布しており、また近年、開発に伴う発掘調査も多く行われており、不明な点の一つ一つが解明されつつある。以下、時代順に周辺に分布する遺跡について概述したい。

縄文時代では、辻の内遺跡(2)、納所遺跡(3)で若干の晩期の粗製深鉢等の土器が出土するのみであり、遺跡は少ない。

弥生時代では、雲出川流域に中ノ庄遺跡、安濃川流域に納所遺跡が形成され、母村の役割をもつよう



第10図 遺跡位置図(1 : 50000)



第11図 遺跡地形図(1:5000)

になる。中期には亀井遺跡(4)、北端遺跡(5)などが美濃屋川流域の自然堤防上に形成される。その他小規模な集落遺跡に、養老遺跡、森山B遺跡(6)、桐山遺跡(7)、竹川遺跡(8)、柳谷遺跡などがある。

古墳時代では、弥生時代から継続して営まれる集落がほとんどである。古墳の築造も始まり、長谷山東麓には4世紀末頃の築造と考えられる坂本山古墳群が形成される。5世紀には、国史跡に指定されている大型方墳である明合古墳(9)が築造され、さらにその後、メクサ古墳群、日余1号墳(10)、大塚古墳群(11)などが築造されていく。6世紀後半から7世紀前半にかけては長谷山周辺に数百基にもものぼる小円墳群が集まった長谷山古墳群(12)が造られる。

奈良時代以降の調査例は少なく、実態は不明の点

が多かったが、昭和53年度には当遺跡の北北西約1kmに北浦遺跡(13)が発掘調査され、奈良時代方形竪穴住居6棟、掘立柱建物7棟、中世火葬墓3基等が検出されており、また昭和55年度には南東約1.3kmに浄土寺南遺跡(14)も発掘調査され、奈良時代の竪穴住居28棟、平安時代の掘立柱建物11棟、井戸2基などが検出されている。さらに昭和56年度には約0.5km北で多倉田遺跡(15)が発掘調査され中世の掘立柱建物1棟、井戸2基、土壇3基が検出されている。また、当遺跡の周辺には中世城館も多く、藤ヶ森城(16)、浄土寺城(17)、連部城(18)が所在し少し離れて雲林院城、安濃城(19)等、丘陵頂部を中心に形成されている。

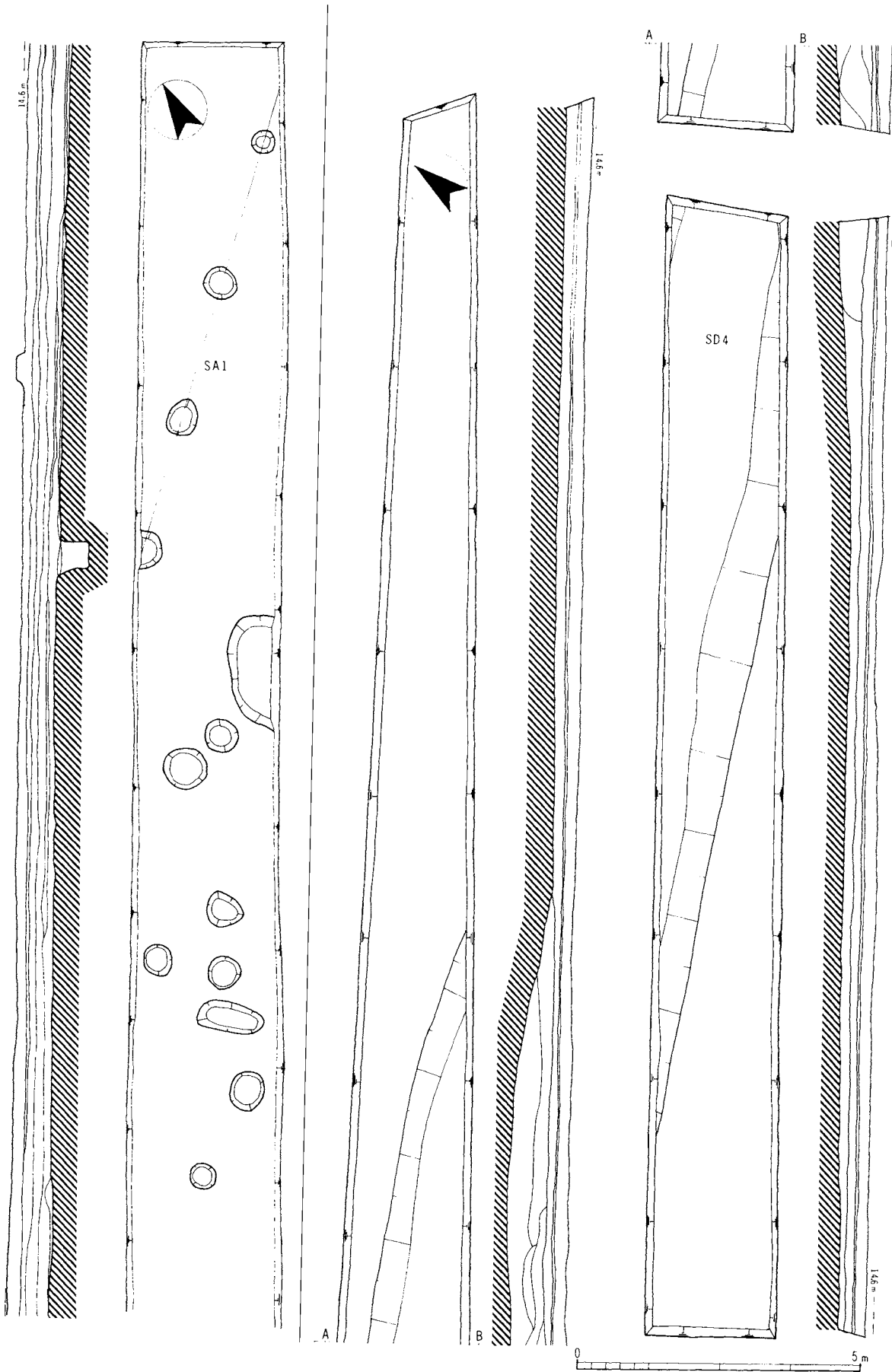
2. 遺 構

発掘調査は遺跡の両端部分の、排水路によって破壊される場所を実施した。中井地区では幅 2.5m、長さ約100mのAトレンチを、藤ヶ森地区では幅2.5m、長さ 110m のBトレンチと65m のCトレンチ、合わせて3本のトレンチを設けた。中井地区Aトレンチの層位をみると、上より第Ⅰ層；耕作土、第Ⅱ層；灰褐色土(床土)、第Ⅲ層；褐灰色粘質土、第

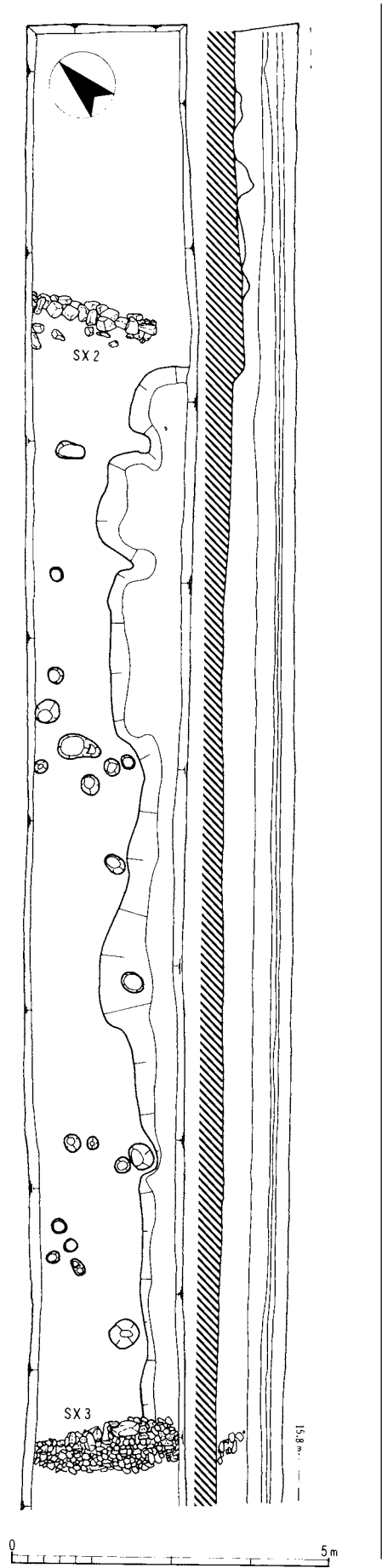
Ⅳ層；淡茶褐色砂質土、第Ⅴ層；黄褐色細砂(地山)となる。第Ⅵ層がいわゆる遺物包含層であり、表土より地山までは90cm前後と深い。一方、藤ヶ森地区ではB、Cトレンチ共第Ⅰ層；耕作土、第Ⅱ層；灰褐色土(床土)、第Ⅲ層；暗茶褐色土、第Ⅳ層；茶褐色土、第Ⅴ層；灰茶砂土(地山)となり、第Ⅲ、第Ⅳ層が遺物包含層で50cm前後と厚く、表土から地山面までは



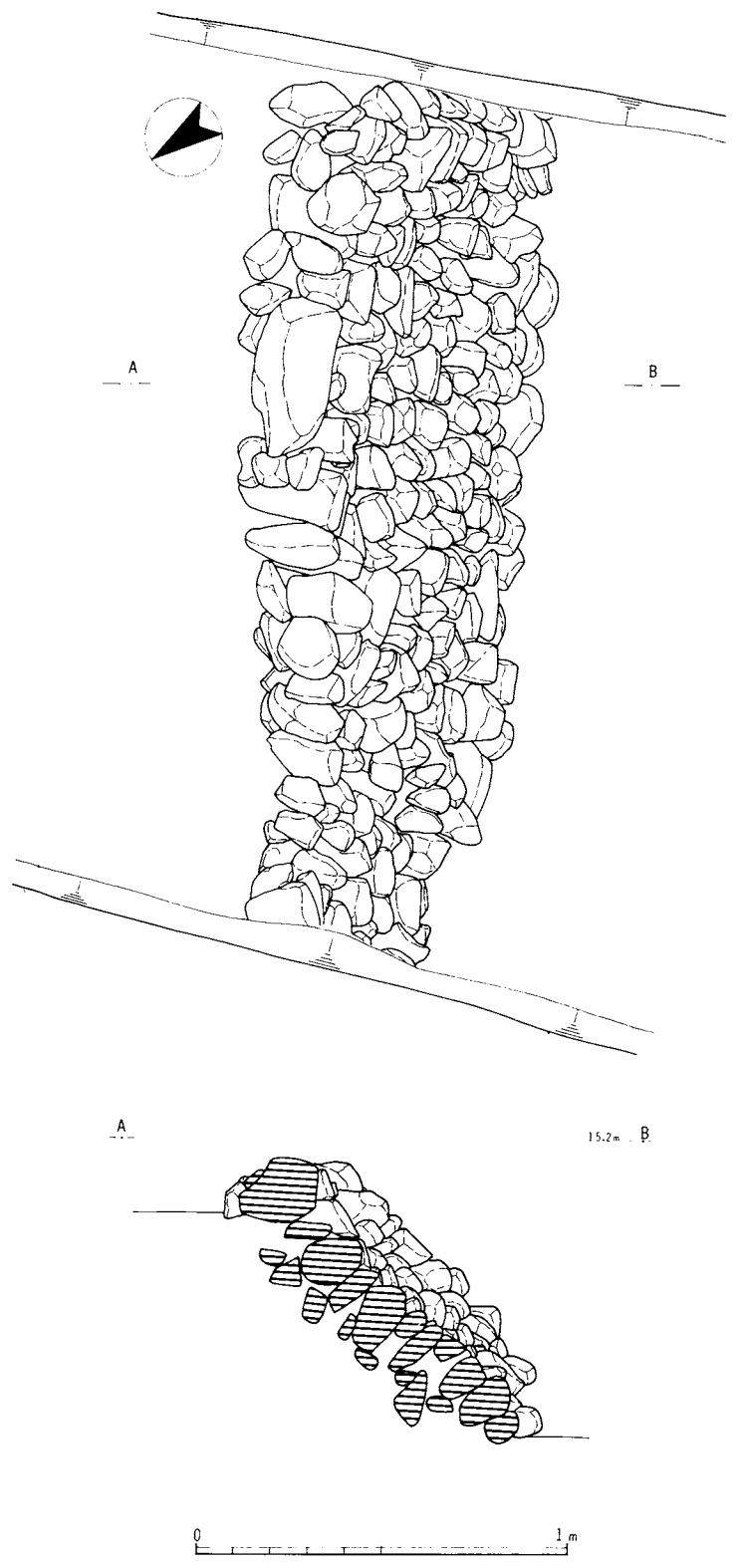
第12図 発掘区平面図(1:2000)



第13図 Aトレンチ遺構平面図(1:100) 第14図 Bトレンチ遺構平面図(1:100)



第15図 Cトレンチ遺構平面図(1 : 100)



第16図 SX 3 実測図(1 : 20)

1 m 前後とかなり深い。検出した遺構は、柵 1、溝 1、石積状遺構 1、石垣状遺構 1 であり、いずれも地山面で検出した。

1. 中井地区

検出した遺構として柵 1 がある。他に径 50 cm 前後の円形のピットと、長径 2 m 近くの土壇状のピットも検出したが、建物とか土壇とか断定できるものではなかった。

SA1 A トレンチ中央部で検出したもので、柱間 2.5 m の柱穴が北東方向から南西方向に向って一直線上に並ぶ。いずれも 30 cm 前後の深さで、幅は 30 cm のものと 60 cm のものがある。発掘区の幅が 2.5 m と狭いため、不明な点も多く、掘立柱建物とも考えられるが、ここでは一応柵と判断した。ピットからは何も出土せず、時期は不明である。

2. 藤ヶ森地区

検出した遺構として石積状遺構 1、石垣状遺構 1、溝 1 がある。この他、北側トレンチで大小の柱穴状のものが多数検出されたが、建物としてはまとまらず、東側には深さ 30 cm 前後の落ち込みが長さ 16 m にわたって検出されているが、発掘区が狭いため、何の遺構かは解明できなかった。

SX2 C トレンチ北端で検出したもので、直径 25 cm 前後の川原石を一重にあるいは場所によって二

重に並べたものである。何らかの形で破壊されたとしく、付近に同じ石積みに使ったと思われる石が散乱しており、面(ツラ)もどちらに合わせたかは不明である。

SX3 C トレンチ中央部で検出したもので、川原石を、高さ約 60 cm に積み上げたものである。石の大きさには、15 cm 前後のものから 40 cm 前後のものなど様々の大きさのものがあ一定しないが、比較的小さいものが多い。下部にいくほど安定した大きい石を用いることもせず、一応面(ツラ)を南側に合わせて傾斜もつけているものの、それほど整然とは積まれていない。石積みの最上部で地表下約 60 cm、最下部で約 1 m である。構築の際、裏込めは、掘形の土をそのまま使用している。遺構に伴う遺物はほとんど出土せず。発掘区が狭く、この遺構と SX2 の関係およびこの遺構の意味するものは何かなど、解明できない点が多い。

SD4 B トレンチ南端から中央部にかけて検出されたもので、幅は 2 ~ 3 m、深さ 1 m 前後と比較的大きな溝である。埋土は、直径 1 ~ 5 mm 程の粗い砂が大半を占めており、深くなるほど赤褐色を呈するようになる。出土遺物は多く、古墳時代の土師器中心であり、壺・甕・高杯が主なものである。

3. 遺物

整理箱 30 箱ほどの遺物が出土している。SD4 出土のものおよび包含層出土のものに大別できる。土器中心であり、種類としては土師器(甕・杯・皿・壺・鍋・羽釜)・須恵器(杯身)・山茶碗・山皿がある。

1. 中井地区の遺物(1 ~ 8)

土師器小皿(1・2) 口径 7 cm 前後のものであるが、口縁部および内面はヨコナデ、外面底部は指オサエによる調整がなされ、胎土は緻密である。1 は淡茶褐色、2 は淡黄褐色を呈する。

土師器鍋(8) 口径 26 cm、やや厚手の器壁をもち、口縁端部は内に折り返し、ナデて面をつくる。口縁部は内外面ともヨコナデされている。胎土は砂粒を

多く含み粗い。色調はくすんだ茶褐色を呈する。外面には煤が付着している。

山茶碗(6) 断面逆三角形の高台をもつ底部の破片である。ロクロ水挽き成形によって作られるが、底部は糸切り痕を残し、高台には靱殻圧痕がみられる。淡灰色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、表面に砂粒が浮き出てざらざらしている。

灰釉碗(3・4) いずれも底部だけの破片である。白灰色を呈し、胎土にはわずかに砂粒を含むが、比較的緻密である。全体にロクロ調整が施されている。

2. 藤ヶ森地区の遺物

(1) SD4 出土の土器(9 ~ 21)

5 世紀後半から 6 世紀にかけての土師器が中心で

あり、壺・甕・高杯がある。

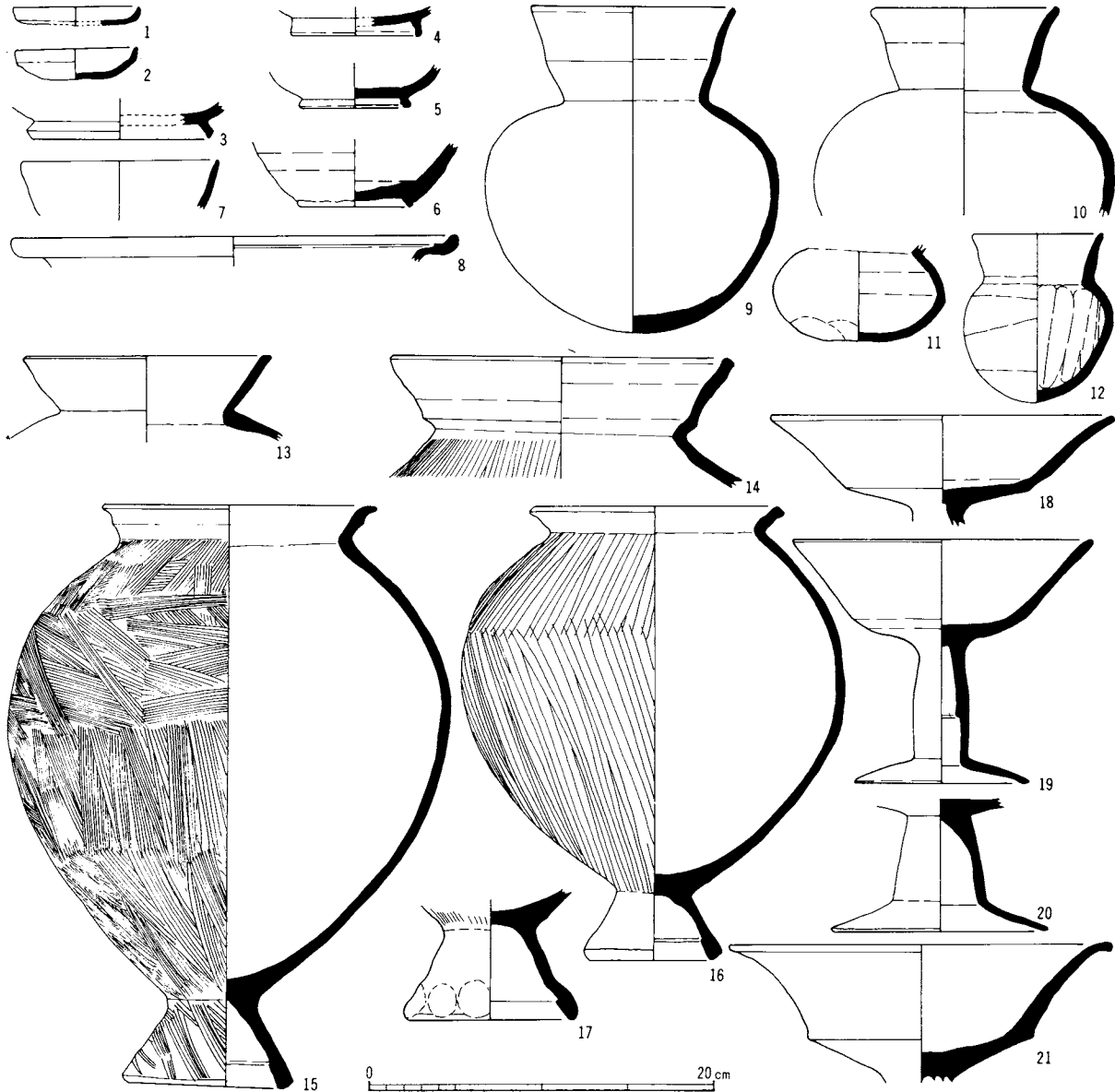
壺 (9・10) 口径11cm前後、器高19cm前後の壺で、偏平な球形の体部に外へ真直ぐに開く口縁部が付くもので、口縁端部はやや丸味をおびる。共に茶褐色を呈し、胎土に細砂を僅かに含む。口縁部はヨコナデであるが、9の体部外面はハケメの後かるくなでて仕上げられ、内面はヘラ削りがなされているのに対して、10の体部は内外面とも丁寧にナデられる。なお、10の外面下部に煤が付着する。

小型丸底壺 (11・12) 12は「く」の字形に外反する比較的長い口縁部に球形の体部が付くもので、口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラ削り後ナデられ、外面はナデる。暗茶褐色を呈する。11は偏平な体部に10と同じ口縁が付くものである。体部は内外面

ともナデ、底部はヘラ削りするものである。茶褐色を呈する。

広口壺 (13・14) 13は口縁部が僅かに内弯ぎみに外方へ開くもので、口縁部内面および口縁端部はヨコナデされるが、外面は磨耗が著しく調整方法は不明である。口径14.4cm、淡茶褐色を呈する。14は口縁部が二段に外反するもので、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面はナデられ、外面はハケメが施される。口径20cmで、淡茶褐色を呈する。

土師器甕 (15~17) いわゆるS字状口縁甕の退化した厚手の短い口縁部と張りのある体部に脚の付く台付甕である。脚部は「ハ」の字に開き、脚端部は内側に折り返され、ヨコナデによる凹面をつくる。口縁部内外面ともヨコナデ調整、体部外面は粗いハ



第17図 出土遺物実測図(1:4)

ケメが施される。内面は指オサエによる指頭圧痕がみられ、15はその後ナデツケられている。16は茶褐色を呈し、胎土に細砂を含む。15・17は暗褐色を呈する。

土師器高杯(18~21) 杯部の形は、杯底部と口縁部に弱い稜線が認められるもの(18)、なだらかにつながるもの(19)、鋭い稜線をもつもの(21)に分けられ、口縁部はヨコナデ、底部はナデによるもの(18)とオサエによるもの(19・21)の二種の調整法を用いる。脚部は内湾ぎみに除々に広がる中空の柱状部から鋭く屈折して広がる裾部へとつながるもので、杯底部外面をヘラで削るもの(19)もある。いずれも淡茶褐色を呈する。

(2) 包含層出土の土器 (22~66)

古墳時代および中世にかけて土器が出土しており、中でも土師器が大半を占め、他に須恵器、山茶椀、青磁椀片等が出土している。

A. 土師器

小型台付壺(22) 口径8cm、器高13.6cmで、口縁部が二段に外反する広口の小型壺に、「ハ」の字形に開く脚部の付いたものである。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はオサエによる調整がなされる。また、体部下半部から脚部内外面にかけてはナデ、上半部には粗いハケメの後、櫛描横線文と刺突文が施される。茶褐色を呈し、胎土には細砂を含む。

壺(23・24) 口縁部が二段に外反する広口壺で、二段目の口縁が大きく外反するもの(23)と、あまり外反せず、直立ぎみに外反するものがある。口縁部内外面はヨコナデされ、24の胴部外面には粗いハケメが、またこのハケメと同じ工具を用いての櫛描横線文も施される。いずれも淡茶褐色を呈する。

小型丸底壺(25~27) 口径7~8cm、器高9cm前後の小型の壺である。球形の胴部に直線状の比較的長い、外傾する口縁部が付く。口縁端部は丸いもの(25)と、やや尖りぎみのもの(26)とがある。口縁部はヨコナデ、体部内面は指頭によって調整されており、凹凸が目立つ。体部外面はヘラケズリするもの(25)オサエとナデによるもの(26)、上部をナデ、下部をオサエによるもの(27)に分けられるが、器面は全体に粗雑で、凹凸が著しい。淡茶褐色を呈し、胎土に細砂を含む。

甕(28・29) 28は口径17.2cm、いわゆるS字状口縁甕の退化した厚手の短い口縁部をもつ甕である。口縁部内外面はヨコナデ、外面には粗いハケメが施される。胴部内面はオサエと、部分的なヘラケズリがみられる。茶褐色を呈する。29は、口縁部が直線的に外傾する。口縁部外面はナデ、内面はハケメが施される。体部外面はハケメ、内面はナデで仕上げられており、体部外面には煤が付着している。茶褐色を呈し、胎土に細砂を含む。

高杯脚部(30・31) 完形のものではなく、脚部だけである。内面にしぼり目を残し、外面は継にヘラ研磨されて面をなす。口縁部はヨコナデしている。

皿(34~41) 口径13cm前後、器高2~3cmのもので、器厚は5mm前後と比較的厚手である。内面と口縁部はヨコナデされるが、外面底部は指による押えで、指頭圧痕を残し、凹凸がはげしい。色調は淡茶褐色あるいは淡黄褐色のいずれかを示し、胎土は全体に緻密である。

小皿(42~48) 口径8~9cm前後、器高1~2cm前後で、比較的厚手の皿である。口縁端部はヨコナデ、内面はすべてナデられており、底部は指による押えで、凹凸がはげしい。形も不整形でつくりの雑なものである。淡茶褐色または淡黄褐色を呈し、胎土は全体に緻密である。

羽釜(49) 口径は23.1cm、淡茶褐色を呈し、器壁は薄い。胎土に3mm前後の白色砂粒を含む。口縁部内外面はヨコナデされるが、磨耗が著しく、ハケメ調整等は不明である。鏝下面より下部は煤の付着がみられる。

鍋(50) 口径26cm。口縁部が内側に折り曲げられ、ナデツケによって折り曲げられた先端が尖り気味に立ちあがっている。頸部はゆるく折れ、胴部は口径より一廻り大きく張り出す。口縁部内外面はヨコナデ、外面頸部以下はハケメ調整される。内面はヨコナデで、器壁は薄い。胎土は細砂を多く含み、外面は口縁部にかけて煤が付着している。

B. 山茶椀系鉢・山茶椀・山皿

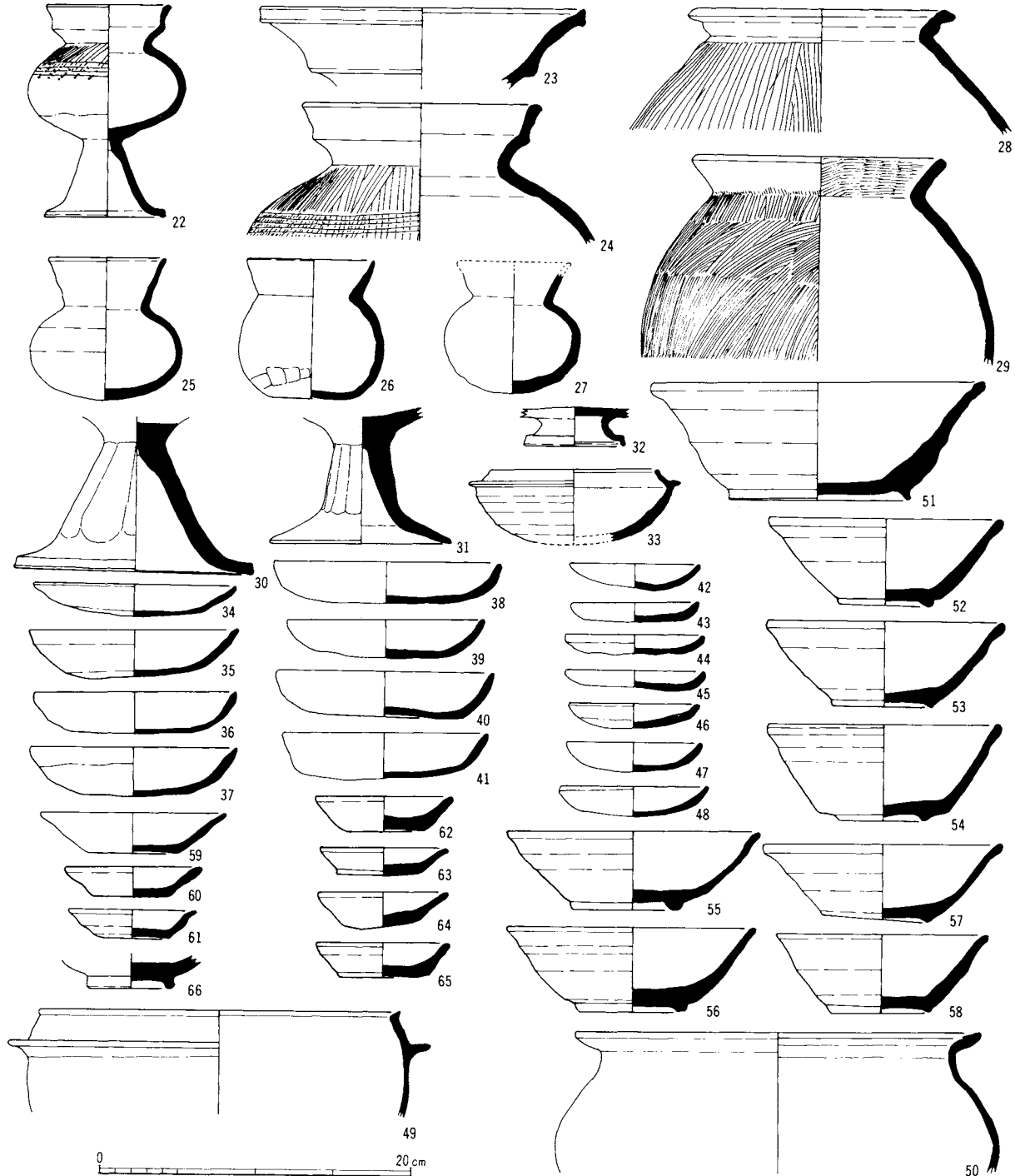
鉢(51) 口径21.2cm、器厚8mm前後である。逆三角形の高台から直線的に外反して立つ鉢で、口縁部は丸く仕上げられる。内面および口縁部、体部外面にかけてはヨコナデ、下半部はヘラケズリされてい

る。口縁部内面には灰釉がみられる。

山茶碗(52~58) 口径は58が最小で13.6cm、最大は55で16.4cm。15cm前後のものが多い。器高は54が最大で6.1cmを計るが、他はほとんど5cm前後である。口縁部が底部よりまっすぐ外方に立ちあがるもの(52、54、56)もあるが、他はわずかに逆「ハ」字形に開き、中ほどが内湾ぎみである。いずれも口縁端部は丸くおさまって、外へ反る形となる。底部

は糸切りのままで、その後に高台を貼り付けている。器壁も比較的厚い。高台は低く、取り付けも雑であって、靱痕のみられるものとそうでないものがある。

山皿(59~65) (59)は口径12cm、器高2.6cmと大きい。他は口径8cm前後、器高2cm前後の小形の皿である。いずれもロクロ水挽き成形で、底部に糸切り痕を残す。胎土は細砂を含み、白灰色を呈する。



第18図 出土遺物実測図(1:4)

C. 須恵器

台付壺 (32) 底部だけの破片で、底径 6.5cm。全体にロクロ水挽き成形され、脚部は「ハ」の字に開いているが、端部で強く屈折して直立ぎみになる。淡灰色を呈し、胎土は非常に緻密である。

杯身(33) 蓋受けの立ちあがりには内傾して短く、口縁部および内面は回転ナデ調整、体部外面は回転

ヘラ削り調整を施すもので、口径10.8cm、器高 4.7cm前後である。胎土は緻密で淡青灰色を呈する。

D. 青磁

椀(66) 底部の破片である。くすんだ淡灰緑色を呈し、釉がかけられる。体部はロクロナデ、底部はヘラケズリがなされる。

4. 小 結

中井藤ヶ森遺跡は安濃川右岸の標高15m前後の沖積地に所在する。今回の調査は、県営圃場整備事業の排水路予定部分 700㎡に対して行なった。掘立柱建物等の住居跡の検出はみられなかったが、柵1、石積状遺構1、石垣状遺構1、溝1、ピット数個、不明の落ち込み等を検出した。Aトレンチで検出した整然と並んだ4つのピットはさらに周辺に拡がることも予想されるが、発掘区の幅が2.5mと狭いため、解明することはできなかった。ここでは一応柵と判断したが、掘立柱の一部をなすものではないかとも考えている。包含層には中世の土器片が若干出土しているが、柵のピットからの出土は何もなく、時期は不明である。次に、Bトレンチ検出の溝は、SA1と同じく検出幅がわずか 2.5mと狭いため、方向は明確でないが、ほぼ東西方向に走り、埋土に礫、褐色の粗い砂、あるいは細砂等いろいろ含んでいることから考えて、恐らく、東約 0.8kmを流れる安濃川に流入する当時の溝の一つであったものと思われる。あるいは溝内より出土する遺物はすべて古墳時代の壺・甕・高杯等の土師器であり、磨耗も比較的少ないところから考えて、その時代に何らかの形で一度に流れ込んで

砂中に埋もれたかもしれない。この近辺に古墳時代の集落が営まれていたことが想定される。CトレンチのSX2、SX3は共に発掘区をわずかに横切るだけである為に、この二つの遺構の関係およびその間にある幾つかのピットの意味するもの、またこれら二つの遺構にはさまれた東側に横たわる溝状の落ち込みは何なのかなど不明な点が多い。ピットおよび遺構に伴う埋土中からの出土遺物もほとんどなく、いつの時期のものなのかという点も解明しがたいが、同トレンチの南側の包含層からは山茶碗・土師器皿などが出土していることから考えて、中世の遺構とも考えられる。なお、近辺に江戸時代に積まれたというSX3に酷似した石垣が現存するが、この遺構と関連するとも考えられる。

以上のように、中井藤ヶ森遺跡は、僅か 2.5m幅の排水路部分を中心とした小規模なトレンチ調査であったため、この調査によって当遺跡の性格を判断することはできない。しかし、この周辺には古墳時代から集落が営まれていたであろうということについての一つの資料がこの調査によって得られたことと思う。

(福村直人)

Ⅲ 津市雲出長常町 ^{みやまど}宮間戸遺跡

1. 位置と環境

宮間戸遺跡（1）は、行政区画上、津市雲出長常町字宮間戸に所在する。遺物散布状況等によりみて、その規模は、200 m×300 mにも及ぶ広大な遺跡面積である。雲出長常町の集落から南に約 250 m離れており、雲出本郷町の集落の南はずれにあたり、畑地と水田が混在するところである。南へ 700～ 800 mには、遠く美杉村の谷の水を集めて、伊勢平野のほぼ中央部を東流する雲出川が流れるが、地形的に見れば、三角州にあたり、おそらく、雲出川による河川の沖積によってできたと考えられ、現標高 2 m前後の起伏のほとんどない微高地である。

この雲出川の形成する河岸段丘、及び、中流から下流にかけて広がる沖積平野一帯は、各時代、多種

多様な遺跡が密集していることは、よく知られているところである。ところで、当遺跡の周辺の遺跡をみると、山茶椀、土師器の散布している、長常遺跡（2）・高峯遺跡（3）、少しはなれるが西南約1.5 kmには弥生時代から中世までの土器の散布する雲出島貫遺跡（4）が見られる。島貫（島抜）という地名は、文献上にみられ、古くは、「正倉院文書」にみられたり、古代末から中世にかけての神宮領荘園としての島抜御厨が設置されていたこと、一志十郷の①一つに島抜郷があったことが知られていることからして、御厨や郷の所在は定かでないが、島貫という地区は、古くからこの地方の中心的集落をなしていたことが予想される。



第19図 遺跡位置図 (1 : 50000)

こうしてみると、当遺跡のある雲出地区は、遺跡の数が少なく、特に、国道23号線より西では、中世の遺跡しか発見されていない。これは、古代の海岸線は、現在の雲出島貫町あたりまでで、その後、海岸線が後退し、宮間戸遺跡周辺は鎌倉、室町時代に入り中世村落が形成されてきたのではないかと考え

られる。しかし、湿地が多く、草が生え居住は困難であったかもしれない。

以上、遺跡周辺は数少ないが中世を中心とする遺跡が存在するが、雲出地区では発掘調査例がかつて無いことなど、当地区の歴史には不明の点が多いため、簡単な記述にとどめておきたい。

2. 遺 構

地区設定として、調査区をA、B、C、D、Eの地区に分けて、調査を行った。

遺跡全体の土層の基本的層序は、A、B、C、D、Eの各地区とも大差はなく、上より第Ⅰ層；耕作土、第Ⅱ層；黄褐色砂質土、第Ⅲ層；茶褐色砂質土となり、地山は、黄褐色の純砂層となる。土質は、上から下まで、砂地といった感が強く軟質である。遺物は、地山を除くすべての層に多く包含する。各地区とも湧水が激しく、また、降雨の為の冠水がひどく完掘できなかったため、全容が不明の遺構もある。

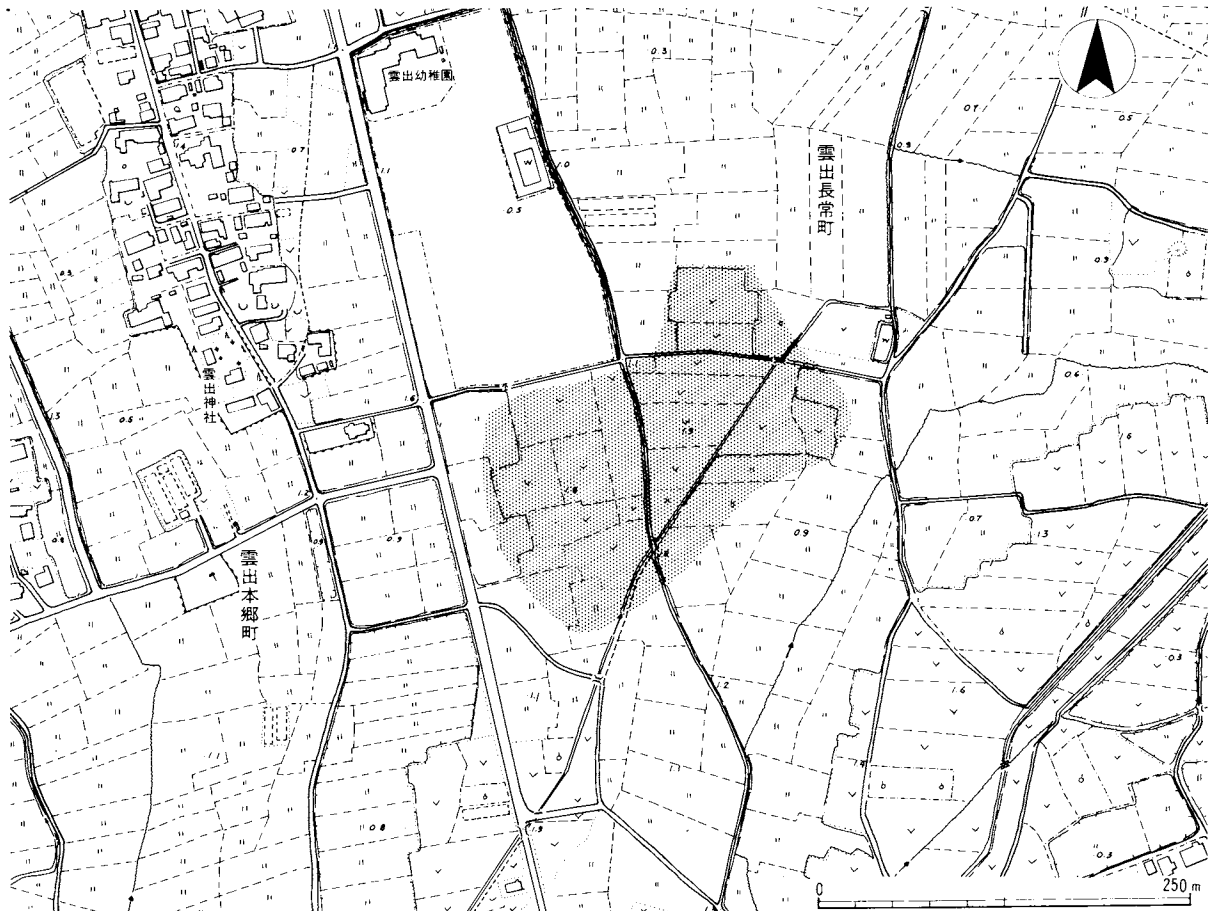
以下、A地区から順にそれぞれの検出遺構について時期決定も含めて概述してゆきたい。尚、時期については、一括資料として伴出遺物を取り扱った、SK19（鎌倉初期）、SK15（鎌倉中期）、SK78（鎌倉後期～）を基準にして行った。

1. A地区の遺構

A地区で検出した遺構、溝4条、土壇10基である。

1. 溝

SD1 発掘区西端から中央部にかけて幅2m～



第20図 遺跡地形図（1：5000）

5 m、深さ10～30cmの溝であり、発掘区中央部付近でSD2に切られているが、北東へ続いて発掘区にぶつかる。溝埋土には、山茶碗、山皿が多く出土しており、墨書土器、土錘、青磁片も少量だが出土している。

SD2 SD1を切るように幅約8 m、深さ約30 cmの南北に走る大溝である。溝埋土には山茶碗、山皿、土師器（鍋、皿）、常滑甕片が出土しているが、SD1との时期的な差はあまりない。

SD1とSD2の遺物は鎌倉前期～後期にわたっている。

SD3 幅0.7m～1 m、深さ10～25 cmの南北に走る浅い溝で、並行して走るSD4とともにSK5へつづく。溝埋土には山茶碗、山皿の小片が含まれていた。

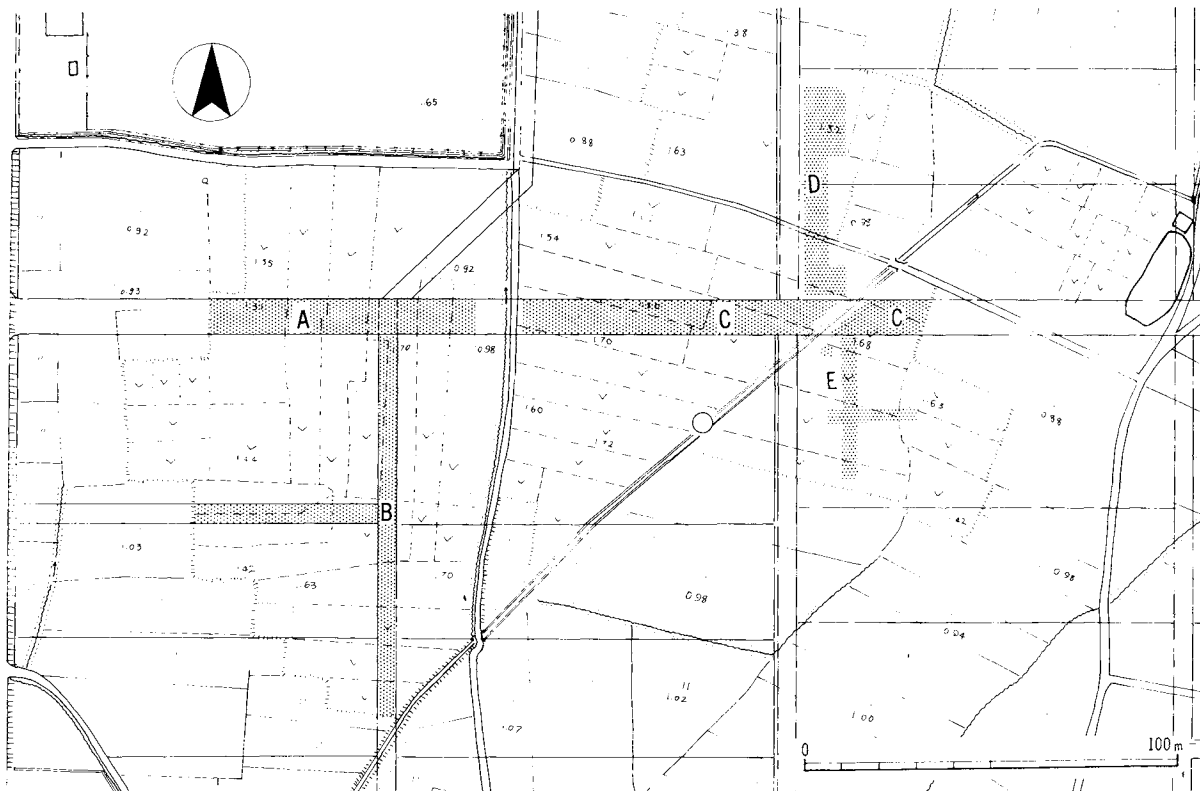
SD4 幅約1 m、深さ15～30 cmとSD3に平行に走る溝で、2段に下がる。SD3と同様にSK5へつづく。溝埋土には、山茶碗、土師器の小片が含まれていた。SD3、SD4とも遺物量が少なく時期決定はできない。

2. 土 塚 群

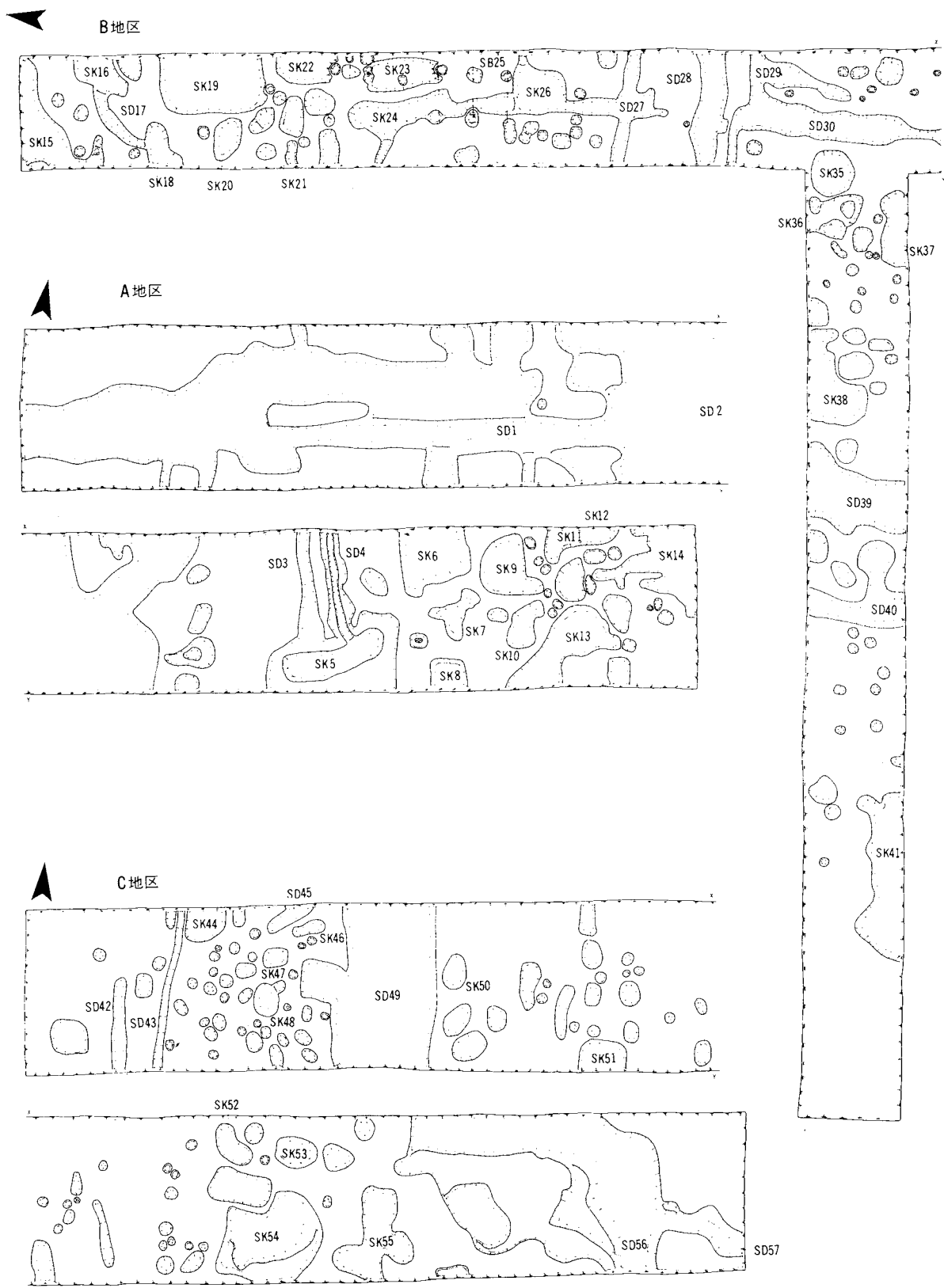
発掘区西寄り、大小、形態様々の10の土塚群を

検出した。各土塚とも、湧水が激しく底まで完掘できなかった土塚があった。形態的に分類、グルーピングをすることはできない。各土塚について、下記のとおり一覧表とした。なお、時期については、SK19（鎌倉初期）、SK15（鎌倉中期）、SK78（鎌倉後期～）を基準として備考欄に記入した。

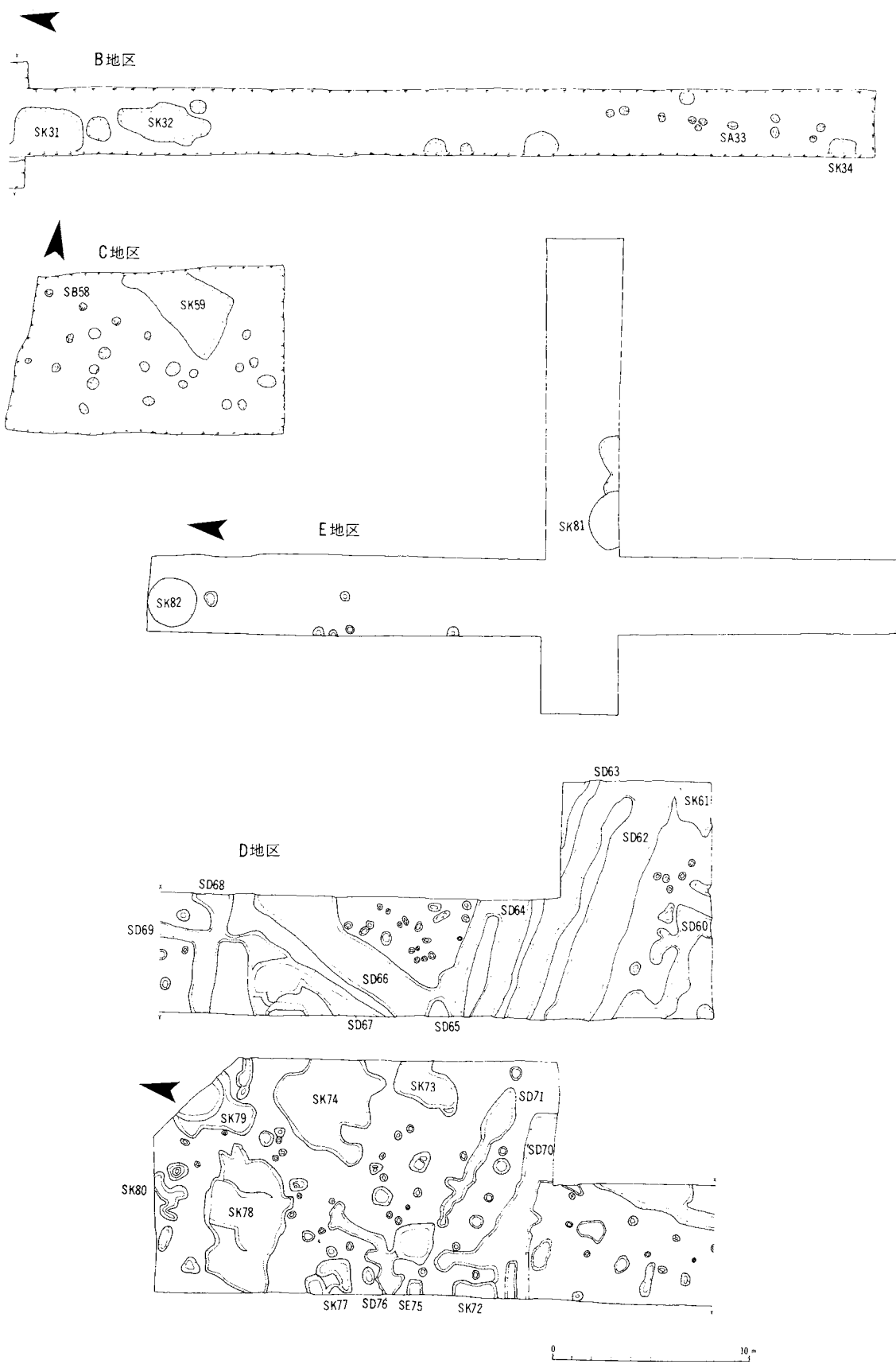
遺構番号	形状	規模 (m)		深さ (cm)	遺物	備考
		短径	長径			
SK5	長方形	4 m	6.5 m	45	土師器(鍋・皿) 山茶碗・山皿	未完掘 SK78
SK6	正方形	3 m	3 m	40	土師器・山皿 山茶碗・鉢	未完掘 SK78
SK7	不定形			40	少量	遺物少量のため不明
SK8	正方形	1.7 m	1.7 m	30	少量	〃
SK9	不定形			60	山茶碗 土師器・鍋・皿片	SK15
SK10	長方形	1 m	2 m	35	山茶碗 土師器皿	SK15～SK78
SK11	長方形	2 m	3.5 m	15	山茶碗・山皿	SK78



第21図 発掘区平面図 (1:2000)



第22図 遺構平面図 (1 : 300)



S K 12	円形	1.3m	2 m	40	山皿 土師器(鍋・皿)片	S K 78
S K 13	不定形			60	山皿・山茶碗 土師器(鍋・皿)	S K 15
S K 14	不定形				少量	遺物少量のため 時期不明

(※不定形土壇については規模を略す)

第4表 A地区土壇群

2. B地区の遺構

B地区で検出した遺構は、掘立柱建物1棟、溝8条、土壇17基、柵1列である。

1. 掘立柱建物

S B 25 桁行2間以上、梁行2間、総柱の東西棟の掘立柱建物と考えられ、棟方向は、N3°Eである。住居というより小さな倉庫風な建物と考えられる。柱間は桁行8尺、梁間6尺である。柱穴埋土に伴う遺物として、山茶碗、土師器が少量出土している。柱掘形は径0.5~0.8mと不揃いである。

2. 溝

S D 17 ほぼ北東から東西に走る溝で、両端はS K 16、S K 18によって切られている。幅70cm、深さ約20cm、断面U字形の浅い溝である。溝埋土内の遺物は全くない。

S D 24 発掘区中央を南北に走る溝で、幅約1m、深さ約30cm、断面U字形である。S B 25、S K 26、S D 27を切っているが、時期差はあまりないと考えられる。溝埋土に、山茶碗、山皿、土師器(鍋、小皿)が出土している。S K 19と同時期の遺物が多く見られる。

S D 27 S D 24にほぼ直行しており、幅約80cm、深さ約10cm、断面U字形の浅い溝である。遺物として、山茶碗、山皿が出土している。これらの遺物はS K 15と同時期と考えられる。

S D 28 幅1.4m、深さ25cm前後、断面U字形で、東西に流れる溝である。溝埋土の遺物として、山茶碗、土師器(鍋、皿)が出土している以外に貝殻(シジミ、アサリ)と獣骨(ニホンシカ)が出土している。時期としては、S K 19~S K 15にかけての遺物が多くみられる。

S D 29 幅0.5~1m、深さ20cm前後で出土遺物として、山茶碗、山皿、土師器片、常滑甕片がある。

これらの遺物は、S K 78と同時期と考えられる。

S D 30 幅0.5m~2m、深さ25cm前後で南北に流れる溝で、南端でS K 31につづく。溝埋土から、山茶碗・山皿・土師器(鍋、皿)片が出土している。S K 15と同時期と考えられている。

S D 39 幅約2.5m、深さ10~20cmで南北に走る浅い溝である。溝埋土に遺物は少なく山茶碗片、土師器(鍋、小皿)等の小片が少量含まれていた。

3. 塚状遺構

S A 33 柱間6尺の柱穴がほぼ南北方向に一直線状に並んでいる。一応、柵と考えられるが、発掘区域が狭いので、詳細は不明である。柱穴内には土師器の細片が若干含まれていた。

4. 土壇

	形状	規模(m)		深さ (cm)	遺物	備考
		短径	長径			
S K 15	不定形			20~30	山茶碗(8~12、20)、山皿(5~7)、土師器皿(13~19)、鍋(21~25)	和鏡出土、貝殻出土
S K 16	不定形			20~25	少量、山茶碗、山皿、土師器(鍋、皿)	S K 15
S K 18	不定形			15~20	少量、山茶碗土師器片	少量のため時期不明
S K 19	正方形	5.2	-		山茶碗(26~33)山皿(34~37)土師器鍋(42~45)皿(38~41)	多量の貝殻出土 未完掘
S K 20	長方形	1.2	2.0	15~20	少量	不明
S K 21	長方形	1.0	2.0	25~30	山茶碗、小皿、土師器(鍋・皿)青磁片	S K 15~S K 78
S K 22	長方形	3.0	-	30	山茶碗、土師器山皿、常滑甕片	S K 19~S K 15
S K 23	長方形	1.5	4.0	15~20	少ない、山茶碗土師器片	不明
S K 26	不定形			30~40	山茶碗、山皿、常滑土師器(鍋・皿)カメ片	古墳時代の土師器(高杯)混入 S K 15
S K 31	長方形	2.0	3.0	15~20	山茶碗多し、山皿多量、土師器(鍋・皿)	川原石(10~15cm)混入 S K 15~S K 78と同時期
S K 32	長方形	2.2	4.5	15~20	少量、山茶碗片	少量のため不明
S K 34	方形	1.3	-	15	山茶碗・山皿土師器(鍋・皿)	S K 78
S K 35	円形	2.2		15~20	山茶碗、小皿多量、土師器(鍋・皿)常滑甕片青磁片	川原石(10cm前後)混入 S K 15~S K 78
S K 36	不定形			10	少量、山茶碗片土師器片	少量のため不明
S K 37	長方形	3.8	-	15~30	山茶碗多い土師器(鍋・皿)	未完掘、S 15
S K 38	不定形			15~20		少量のため不明
S K 41	不定形			20	山茶碗、土師器山皿、土師器	S K 19

第5表 B地区土壇群

3. C地区の遺構

1. 堀立柱建物

S B58 桁行2間以上、梁行2間の東西棟の建物と考えられ、棟方向はN14°Eである。柱間は、桁方向で7尺、梁方向は6尺である。柱掘り方は径30～70cmと大きさが不揃いである。柱穴内から、山茶碗、土師器皿（完形）、常滑甕片など、S K15～S K78の時期に属する遺物が出土した。

2. 溝

S D42 幅約60cm、深さ15cm前後で、南北に走る浅い溝である。溝埋土の遺物は少なく、山茶碗片、土師器鍋片が少量出土している。

S D43 幅30cm前後、深さ15cm前後で、南北に走る浅い溝である。溝埋土からは、山茶碗、土師器の細片が少量出土している。

S D45 幅0.7m、深さ20cm、断面U字形の浅い溝である。南西へ2.5m確認されただけなので、溝と断定しにくく、土坑の可能性もある。出土遺物として、土師器小皿が多く出土し、山茶碗、山皿、土師器鍋もある。S K19～S K78の時期に属する遺物である。

S D49 幅4.5m、深さ25cm前後の南北に走る大溝である。発掘区が狭いため、詳細は不明だが、S D43との間には多くのピット群があることからして、何か意味をもつ溝かもしれない。溝埋土には多くの遺物が含まれており、山茶碗が一番多く、他に、山皿・鉢・常滑甕片・土師器（鍋、皿）青磁片・白磁片がある。

S D56 東西より南北方向に折れて走る溝である。何度も流路をかえているようであり、また、溝西側は段が付き広いテラス状になっており、このテラス状地から土器と共に貝殻がまとまって出土している。深さは30～50cmである。埋土には山茶碗・山皿・土師器（鍋、小皿）・常滑甕・鉢をはじめ、青磁片等、遺物は多量である。S K15～S K78にかけての時期に属する遺物と考えられる。

S D57 S D56から分かれ、東流する幅1～1.5m、深さ約20cmの浅い溝である。埋土に山茶碗、土師器片が少量出土している。

3. 土 坑

	形 状	規 模 (m)		深 さ	遺 物	備 考
		最 短	最 長			
S K44		2.0	—	10	山茶碗 土師器、小皿	S K15
S K46	長方形	0.5	1.7	20	山茶碗、小皿、鉢 土師器（鍋、小皿）	S K18
S K47	長方形	1.0	1.2	30	極少量 山茶碗片	不明
S K48	円 形	1.3	1.6	20	〃	〃
S K50	だ円形	1.1	1.8	20	山茶碗、小皿 土師器、鍋 少し	S K78
S K51		2.4	—	20	山茶碗、鍋 小皿 青磁片	S K78
S K52	不定形			20	極少量 山茶碗	〃
S K53	楕円形	1.5	2.0	25	極少量土師器片	〃
S K54	方 形	4.3	4.7	30	山茶碗、土師器 （鍋、小皿） 山皿、鉢、土鉢	湧水激しく未完掘 S K19～S K15
S K55	不定形			20	山茶碗、山皿 常滑甕片、土師器 （鍋、小皿）	
S K59		—	6.0	25～30	山茶碗多し、山皿、土師器鍋、常滑甕片	湧水激しく未完掘 S K78

第6表 C地区土坑群

4. D地区の遺構

1. 溝

S D60 発掘区南端中央から北東に走り、発掘区西端で南へ曲折する溝である。幅0.6m～1m、深さ20cm前後で、埋土からは、山茶碗と土師器皿片が少量出土している。

S D62 幅2m前後、深さ30～40cm、断面V字形の大溝である。S D63と平行して走り、西端で合流する。溝埋土から遺物は出土しているが、規模の割に少なく、山茶碗、土師器片がある。

S D63 幅1m前後、深さ30～35cmで、S D62と並行して走る東西溝である。溝埋土には山茶碗、土師器の小片がみられた。

S D64、S D65 S D62、S D63と並行して走る溝であり、西端で合流する。幅0.8～1.2m、深さ20～30cmの溝である。溝埋土の遺物として山茶碗、山皿、土師器（鍋、小皿）、常滑甕片が出土している。特に、溝が二股に分かれる地点からは、遺物が集中して出土しており、土師器鍋が多かった。また、S

D65の埋土から貝殻（シジミ、アサリ、巻貝）が出土している。S K78の時期に属すると考えられる。

S D66 S D62～S D65と直交する様に走る溝で、幅2 m前後、深さ30～35cmである。発掘区が狭いため特に言えないが、溝で囲まれた南側の空間は居住空間かもしれない。溝埋土から山茶碗、山皿、常滑甕片があるが、その他、古墳時代の土師器壺片が出土しているが、流れ込みによるものと考えられる。S K78の時期に属すると考えられる。

S D67 S D66に平行して走る幅で、幅1 m前後、深さ35～50cmである。溝埋土から多くの遺物が出土しており、山茶碗が多く、山皿、土師器（鍋、小皿）も含まれている。S K78の時期に属すると考えられる。

S D68 幅0.9～1.3m、深さ15～20cmの東西に走る浅い溝である。溝埋土から山茶碗、山皿が少量出土している。

S D69 S D68に直交する様に南北に走る溝で、南端で拡幅する。幅0.6～1 m、深さ20cmである。S D69は南端で発掘区で切られているが、後述するS D70の西端とつづく可能性がある溝埋土から山茶碗、土師器鍋が出土している。S K78の時期に属すると考えられる。

S D70 幅1～2 m、深さ10～15cmで東西に走る浅い溝である。溝埋土からの遺物は少なく土師器皿の小片と弥生時代後期の高杯片が出土している。

S D71 S D70に並行して走り、幅0.4～1.4m、深さ15cmの溝である。東西端で途切れており、つづいていない。溝埋土から極少量の山茶碗片が出土している。

S D76 幅0.5～1 m、深さ15cm前後で南北方向か

ら途中で北東に折れる溝である。溝埋土から少量の山茶碗、土師器片を出土している。

S D70、S D71、S D76は遺物少量のため時期決定は難しいが、恐らくS K78の時期に相当すると思われる。

2. 土 塚 群

遺 構 番 号	形 状	規 模 (m)		深 さ (cm)	遺 場 場	備 考
		短 径	長 径			
S K61	不正形		30	30	山茶碗、山皿 土師器(鍋小皿)	
S K72	長力形	—	2.2	30～35	山茶碗、土師器、 小皿、須恵器杯片	
S K73	不定形			30～35		S K78
S K74	不定形			30～40	山茶碗少し	不明
S K75	正方形	2.0	2.0	50	山茶碗、灰釉碗 片、土師器鍋	井戸 S K78
S K77	不定形			35	山茶碗 土師少し	貝殻出土 不明
S K78	不定形			15～30	山茶碗、山皿 土師器(鍋、小 皿) 多い	
S K79	不定形			40～45	多量 山茶碗 山皿、土師器鍋 多い	S K78
S K80	不定形			20	極少量	

第7表 D地区土塚群

5. E地区の遺構

1. 土 塚

遺 構 番 号	形 状	規 模 (m)		深 さ	遺 物	備 考
		短 径	長 径			
S K81	円形?	—	—		山茶碗、土師器 皿、鍋、山皿、 鉢 多い	湧水のため未掘 だが井戸の可能 性あり
S K82	円形	2.4	—		〃	〃

第8表 E地区土塚

3. 出 土 遺 物

出土遺物は、時代的には、弥生時代後期を上限としてみられ、古墳、平安時代のものを含む量的には非常に少ない。中世（鎌倉～室町時代）に属するものが量的に多く、中でも鎌倉時代前半から後半頃までのものが大半を占めている。

以下、時代別、形態別に、図示し得た遺物について、個々に概述してゆく。

1. 弥生時代の土器（1、2）

広口壺（1） 口縁部の外反は弱く、端部は細くつままれて終わる。口縁部上面をわずかにヨコナデされており、以下は刷毛目らしいが不明瞭である。外面に一部粗いハケ目が残っているが他は不明瞭である。口縁端部に斜めに刻目を施している。胎土は

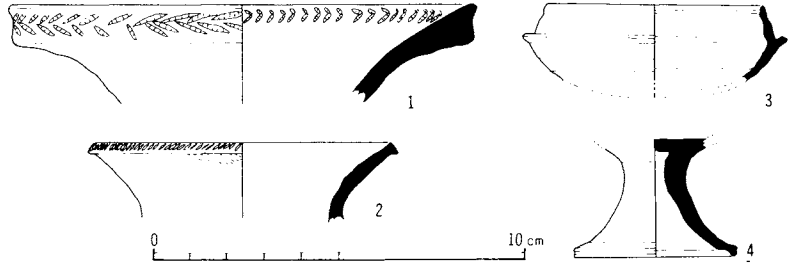
緻密で金雲母片、長石を含む。色調は、うすい赤褐色である。

広口壺 (2) 口縁端部が肥厚しており、内外面に、羽状の櫛歯刺突文を施している。胎土は小石や金雲母片を含みやや粗く、色調は赤褐色を呈す。

2. 古墳時代の土器 (3、4)

須恵器

杯 (3) 推定口径11.4cm、器高5cmとやや深目である。立ち上りはやや内傾気味に、口縁端部内面に段がつく。底部は篋削り、他はヨコナ



第23図 土器実測図 (1:4)

3. 鎌倉時代の土器

① S K 15出土遺物

山茶碗 (8~12、20) いずれも完形品はなく、底部近くの残存破片であり、20は墨書土器である。

高台はしっかりし、貼り付けも丁寧におこなわれている。底部の糸切り痕はナデ消されている。ただし、12だけは、高台がやや内傾し靱殻痕が付着し、底部内面と体部の境が明瞭になっている。色調は灰白色を呈し、胎土に細砂粒含んでいるが、わりと密なもの (9、11、12、20) と、やや粗いもの (8、10) がある。20の底部に「+」とその上方に墨書の

デして調整している。胎土は小石、金雲母片を含みやや粗い。

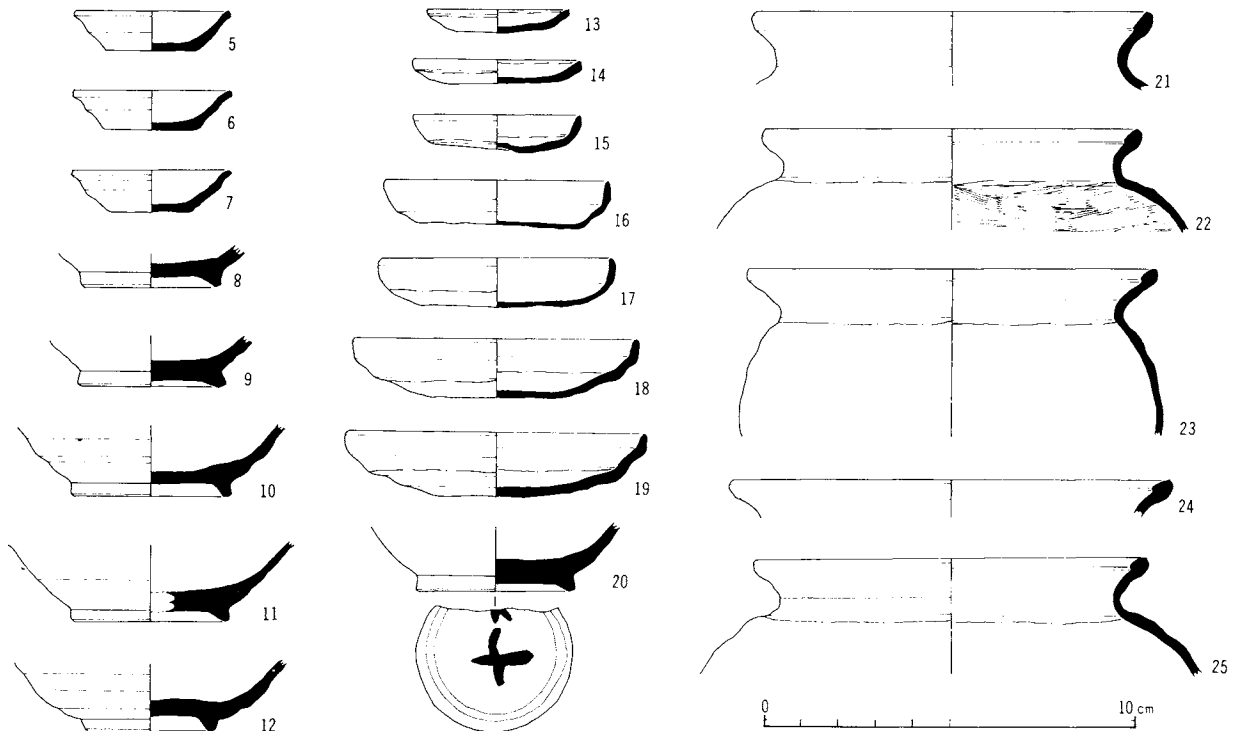
高杯 (4) 杯部を欠損するもので、細い筒部と外開きした裾部からなる。裾部内面に稜がつき、端部外面に一条沈線が入る。

一部がみられるが欠損しているため判読できない。

山皿 (5~7) いずれも高台の退化、消滅した山皿である。ロクロ水挽きによる成形で、底部に明瞭な糸切り痕をのこす。色調は灰白色を呈し、胎土は細砂粒含むやや粗である。口径 8.2~ 8.6cm、高さ 2.1~ 2.2 cm である。

土師器

皿 A (13、14) 口径 8~ 9 cm 内外の薄手の皿である。内面はすべてナデ調整されており、外面のうち口縁端部のみヨコナデ調整され、以下、底部までは不調整で、凸凹が目立つ。胎土は、細砂粒を含むが比較的密 (14)、金雲母片を含みやや粗い (13)。色調は



第24図 S K 15土器実測図 (1:4)

は淡赤褐色である。

皿B (15) 口径9 cm、器高2 cmの薄手の皿で技法的には皿Aによく似ているが口縁部全体をヨコナデ調整しており、器高も2 cmと深い。口縁部以外の調整は、内面をナデ調整、底部までユビオサエであるが、内外面とも不調整のためか凹凸が目立つ。胎土は比較的密で、色調は黄色味をおびた、白褐色を呈する。

皿C (16、17) 口径12 cm前後の薄手の皿で、口縁部は内傾して立ち上り、端部は尖り気味になる。内面はすべてナデられ丁寧に仕上がっているが、外面は不調整で、ユビオサエによる指圧痕も残るところもある。色調は淡白褐色で、胎土は比較的密である。

皿D (18、19) 口径15~16 cmで、底部から口縁部にかけて段を有する形態である。口縁端が尖り気味で立つ。内面はナデ調整され、口縁部をヨコナデ調整しているが、以下、底部までは不調整で、オサエによる凹凸が目立つ。

鍋 (21~25) 体部より強く外反する口縁部は、端部で内側へ折り曲げられ面をつくる。器壁は厚く、胎土は細砂粒多く含みやや粗い。口縁部と体部外面との境は明瞭で、稜をつくる。口縁部内外面はヨコナデされているが、体部外面は不調整のため凸凹がみられる。体部内面はナデつけられているが、(38)だけは、帯状の細かい刷毛目が施されている。色調は、内面は淡黄褐色で、外面茶褐色~褐色を呈している。

和鏡 山茶碗、山皿、土師器(皿、鍋)とともに出土したものである。径11 cm、厚さ1 mm、縁高7 mmのものである。紐は亀紐で高さ2 mm。低い界圈があり、鏡背文様は松の枝を喰んだ鶴を2羽対称的に配置し、「松喰双鶴鏡」と呼称している。

② SK 19出土土器

山茶碗 (26~33) (26)は断面逆三角形の高台をもち、胴部は膨らみをもつ。口縁部は外反し、外面に輪花を有している。高台も高くしっかりした丁寧な作りである。灰白色を呈し、胎土は砂粒を少し含むが緻密である。(29、30、32)は、口径16 cm内外と比較的大ぶりで体部が丸味をもち、口縁部が外反し、高台もしっかりした全体に丁寧な作りをもつ。(29、32)には、口縁から体部内面にかけて灰釉(?)がかかっている。また、(30)の底部には糸切り痕が明瞭に



第25図 和鏡実測図(1:2)

残っている。(27、28、31、32)は、(32)を除いて16~17 cmと大ぶりで、前述の山茶碗と同じタイプであるが、内面において体底部と底部の境が明瞭となり、(28、31、32)は、見込み中央部が凹んでいる。また、(27)は靱殻痕がつく。大きく3つのタイプに分けたが明瞭な新旧の差はないと思われる。色調は、白灰色、灰色の2色、胎土は砂粒を少し含むが緻密である。

山皿 (34~37) 高台をもつタイプ(34、35)、平底であるが台部を意識して若干下方で突出するタイプ(36)、全く皿化してしまうタイプ(37)に分けられる。ロクロ水挽きによる成形で底部に糸切り痕をのこす。高台にわずかの靱殻痕が付着している。色調は、白灰色(35)、灰白色(34、36、37)を呈し、胎土は比較的緻密である。

土師器

皿A (38) 推定口径9 cmの薄手の皿で、内面はナデ調整され、外面は口縁端部のみヨコナデされる他は不調整で凹凸をのこす。

皿B (39、40) 口径9 cm前後で内面はナデ調整され、外面は口縁部のみヨコナデして以下は不調整で凹凸をのこす。器壁は、厚手(39)と口縁やや厚く下方へ薄くなる(40)。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は精良である。

皿E (41) 口径14.8 cmで、内面は丁寧に平滑にナデ調整され、口縁部内外面ともヨコナデされ以下ユビオサエののち不調整で凸凹がのこる。器壁はや

や厚く、淡赤褐色の色調を呈し、胎土は砂粒を含むが緻密である。

鍋 (42~45) 器壁は厚く、くの字形に外反する口縁部の端部は内側に折り込み丸く玉縁状となる。口縁部は内外面ともヨコナデされているが、体部は外面不調整でユビオサエによる凸凹が目立つ。内面はナデつけられる。暗茶褐色を呈し、細砂粒、石粒を含み、胎土はやや粗い。

白磁碗 (46) 口縁部は、下に垂れ下がり、玉縁部をつくる。釉は、白灰色で厚くない。細片のため全容は不明である。

常滑焼甕 (47) 口縁部小片のため、口径、器高は不明である。口縁部先端がつまみあげられる状態となる。口縁部はヨコナデされている。

③ S K 78出土土器

山茶碗 (48~54) いずれも内面において内底部と体部の境が明瞭となり、また高台も低く粗雑なつくりが多くなる。

(52, 54)は、内底部と体部の接点が浅く凹んでいるのは、内面のコテの押圧があまいためおきると考えられる。

糸切り痕を残し、高台に靱殻痕の付着するもの(48 51~54)、糸切り痕をナデ消して高台に靱殻痕の付着

するもの (49)、糸切り痕をナデ消し靱殻痕の付着しないもの (50) に分けられる。

色調は灰白色 (48~52) 白灰色 (53, 54) で、胎土は細砂粒含むが比較的緻密なもの (48, 50, 53, 54) とやや粗いタイプ (49, 51, 52) に分けられる。

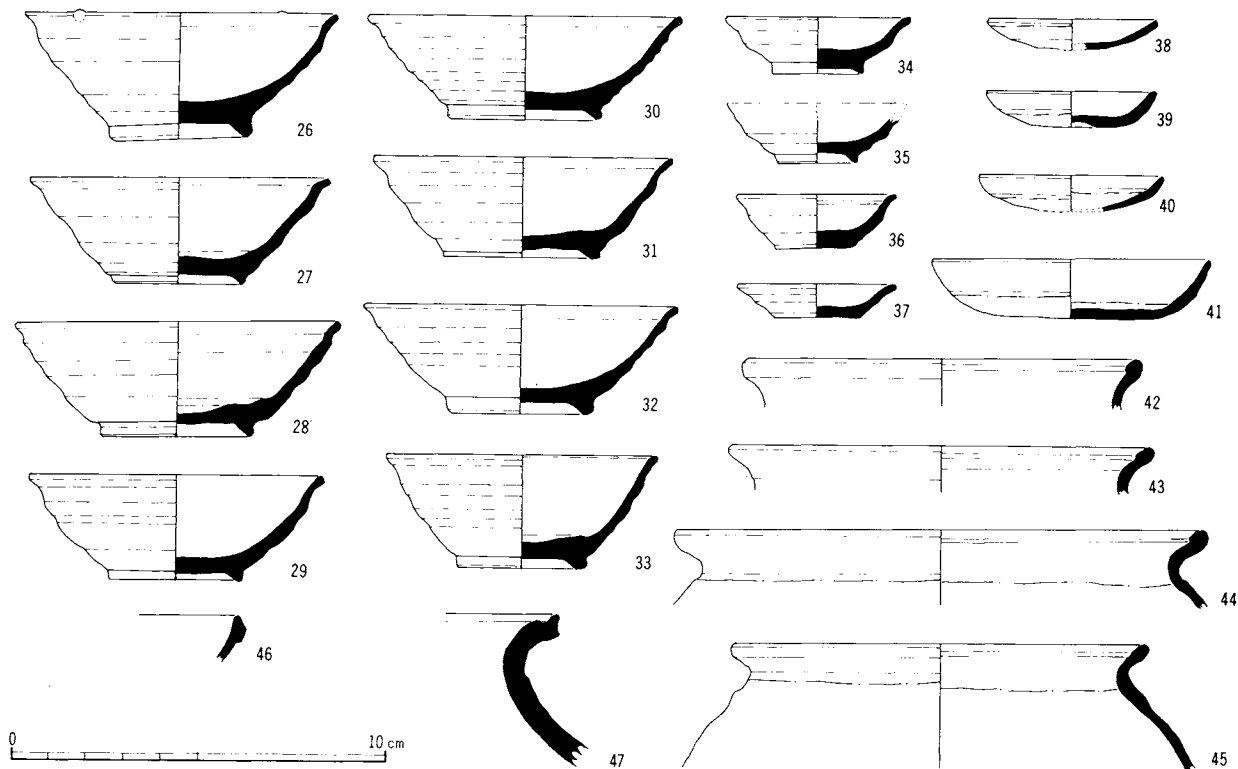
山皿 (55) 高台の消滅した山皿であり、ロクロ水挽きによる成形で底部に明瞭な糸切り痕を残す。口縁部内面に濃緑色の自然釉が一部付着する。色調は灰白色を呈し、胎土は細砂粒含むが緻密である。

土師器

皿A (56, 57) 口径 6.6と 6.7cmの薄手の皿である。内面はナデ調整されており、口縁端部のみヨコナデされ、以下は不調整でオサエによる凹凸が目立つ。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は金雲母片を含みやや粗い (57)、比較的緻密 (56) である。

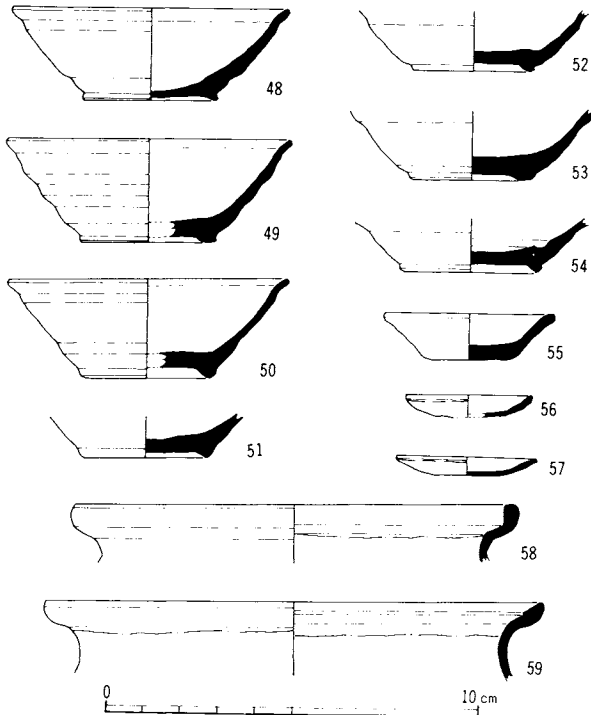
鍋A (59) 外反する口縁部から口縁端部は内へ折り返す鍋の口縁部である。口縁端部内側はヨコナデによって面をつくる。口縁部内外面ともヨコナデ調整されている。淡赤褐色を呈し、胎土は砂粒を含み粗い。

鍋B (58) 口縁部が受口状で、口縁内部が段状となる。口縁部はヨコナデされる。色調は淡褐色を呈し、胎土は砂粒を含み粗い。



第26図 S K 19出土土器実測図 (1 : 4)

鍋C (60~64) 外反する口縁部より端部は内側に折り重ねられ凹状の面をつくる鍋の口縁部である。口径から見ると11~12cm内外と、14~15cm内外の2

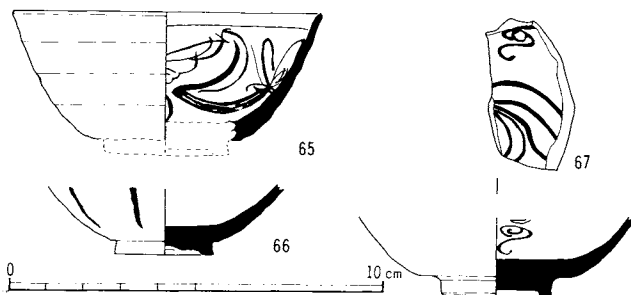


第27図 S K 78出土土器実測図 (1 : 4)

④ 包含層出土土器

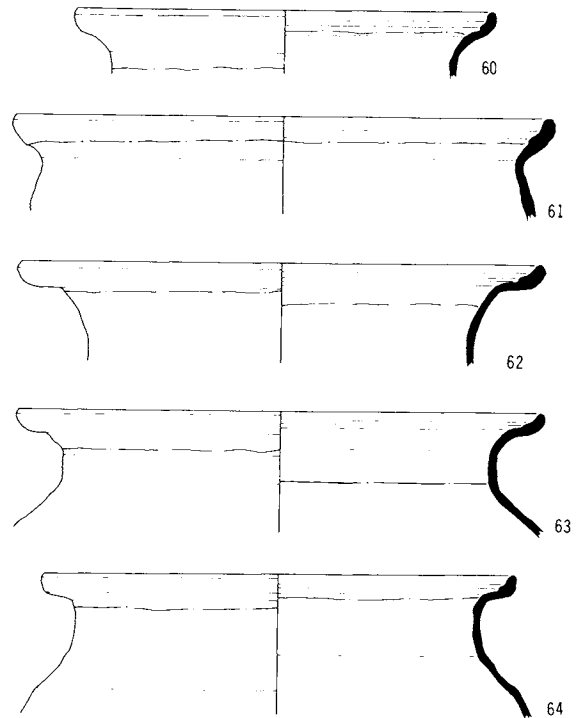
青磁碗 (65~67, 69) 青磁碗 (65) は、体部内面に蓮の葉から主茎がのび、その先に蓮の花が咲くという文様をへら描きしたものである。釉厚は0.5mmとうすく、うぐいす色を呈す。胎土は緻密でやや青味がかかった白色を呈す。

体部外面に蓮弁文様を施したものである (66)。胎土は白灰色で堅緻である。体部内外面とも深緑色の釉をかけている。底部外面は施釉されておらず、釉厚0.3mmとうすい。また、中央部は凹んでいる。(67)は内面に陰刻花文を施している。胎土は白灰色を呈した緻密である。0.5mm前後の釉厚で濃黄緑色を呈す。(69)は、淡青緑色を呈する釉をうすく施しており、胎土は緻密で青灰色を呈す。



第28図 包含層出土土器 (1 : 4)

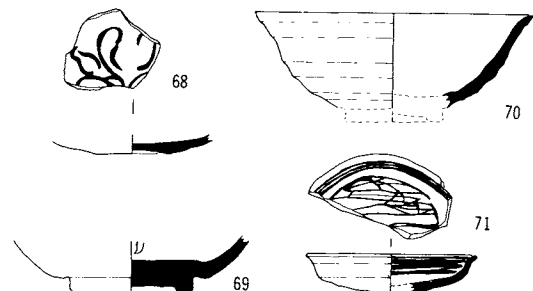
つに大別される。色調は淡褐色を呈するもの (60、61) 暗茶褐色を呈するもの (62、63)、淡赤褐色を呈するもの (64)、胎土は細砂粒を含みやや粗い。



青磁皿 (68) 内面に印刻花文を施したものである。釉厚は0.5mmとうすく、うぐいす色を呈す。底部外面は凹んでおり、施釉されていない。

白磁碗 (70) 底部高台を欠くものであり、復元口径15.0cmを測る。体部の立ち上りはやや外方へ膨みながら、口縁部は外反する。胎土はやや濁った白色を呈し、釉色はやや黄味をおびる白色のものである。(貿易陶器研究によれば、13~14世紀に比定され、A群になり、日本には13C後半に輸入のピークを迎え、14C前半に輸入がとまるとされている)③。

瓦器皿 (71) 口縁から底部にかけて1/4が残存しており、推定口径9.0cmを測る。底部が丸味をもち、口縁が外反気味である。底部内面と口縁内面にジグザグ状のへらミガキが施されている。口縁外面はヨ



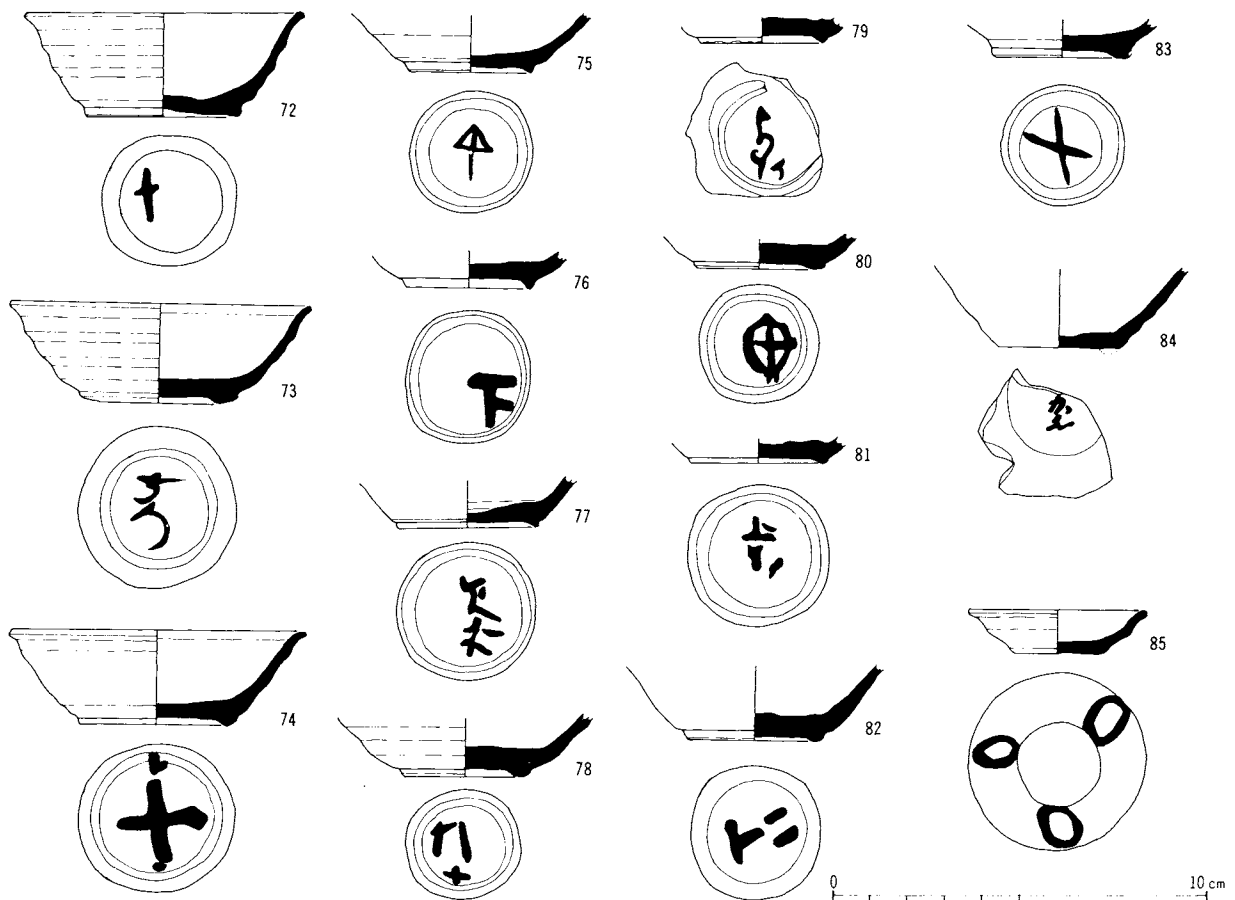
コナデされ、以下はオサエによる凹凸が目立つ。胎土は灰白色を呈し、緻密である。

⑤ 墨書土器 (72~85)

山茶碗 (72~84)、山皿 (85) の底部や体部外面に墨書銘を記したもので、判読不明も含めると総数42点を数える。

山茶碗 (72~84) いずれも内部底面と体部との境が明瞭である。体部の立ち上がりが直線的なものと、やや膨みをもつものの2つに分けられる。全体

として、高台が低く粗雑な作りである。また、底部外面に糸切り痕をのこし、高台に靱殻痕が付着するもの (72・75・77・79・81・82) もある。色調はくすんだ灰白色か白灰色を呈し、胎土は細砂粒を多く含みやや粗い。次に墨書銘について見ると、「×」(72・74・83)「下」(76)、「トニ」(82)、「上□」(81)、「ち□」(73)「か□」(84)、その他については判読できない。



第29図 墨書土器実測図 (1 : 4)

4. 小 結

今回の宮間戸遺跡の発掘調査は、県営ほ場整備に判う緊急発掘調査であった。道路予定部分と排水路の調査の結果、雲出川左岸に位置する、鎌倉時代を中心とする集落跡の一部であることが判明した。しかし調査面積は2,500㎡あるが、道路予定部分(8 m幅)と排水路部分というトレンチ的調査のため、集落跡としての実証、及びその性格を含めて全容を把握することは、困難である。

以下、調査で検出した遺構、遺物について若干の問題点を提起し、小結としたい。

1. 遺構について

(1) 弥生・古墳時代の遺構

弥生時代後期と古墳時代後期に属する弥生土器、須恵器が検出されている。遺構として明らかに弥生時代、古墳時代と断定し得るものは検出できなかった。

当遺跡西南約1kmに所在する雲出島貫遺跡では弥生時代から中世にかけての土器が散布することが知られていることからして、現位置より西方向には、弥生時代から古墳時代の集落跡が予想される。

(2) 鎌倉時代の遺構

A～Eの各地区で掘立柱建物2棟、溝28条、土壇50基、柵1列が検出された。居住空間を示すものとしての建物跡はB地区とC地区で合わせて2棟が検出された。しかし、検出されたといっても一部のため建物跡の構成、集落の変遷等を解明することはできない。

溝は28条と数多く検出できた。そのうち、SD2、SD49、SD56から山茶碗、山皿、土師器（鍋皿）等が多量に出土していることからして何か溝以外の目的をもって、利用された可能性がある。その他の溝については不明である。

土壇は、遺構の項で表にしたように大小、形態様々が検出された。当遺跡と同様に数多くの土壇群を検出した遺跡として、二見町荘遺跡を挙げることができる。荘遺跡^④の報告書によれば、一部、木杭の使用したものについては、水溜め程度の穴と想定しているが、土壇群について大部分を性格不明の遺構としてとらえて、考古学的な状況証拠の中でその性格を決定することは困難であるとしている。

宮間戸遺跡の土壇群をみると、一括して多種の土器等の遺物を含むものと、遺物が少量のものに分けられる。一括して多量の土器等の遺物を含むものとしては、ゴミ捨て穴的な用途が考えられる。これに当てはまる土壇としては、SK15、SK19、SK31、SK35、SK73、SK78、SK79を挙げることができる。今回、一括遺物として、取扱ったSK15、SK19、SK78について取り上げてみたい。このうち今回SK19については、貝殻が厚く堆積しており、その上層から土器が出土していることからしてゴミためとしてよいのではないだろうか。土器の年代がら見て、鎌倉時代初頭から前半にかけて良好な資料が出土していることから、この時期に比定されると思われる。

SK15は、土器、少量の貝殻とともに和鏡が判出している。和鏡については、後述するが、大阪市立博物館主事前田洋子氏の御教示によれば、鎌倉時代

中期から後半に比定されるということと、土器と勘案すれば鎌倉時代中頃として差し支えないと思う。

SK78は、D地区で検出されたものであり、多くの土師器、山茶碗、小皿などからして鎌倉時代後半に比定される。

この3つの土壇を基準にしてみると、A～C地区はSK19～SK15の時期、D、E地区はSK78の時期と大まかに分けることができるとされる。

その他の土壇群について、遺物が少ないことからして、前述したように性格不明としたい。

以上のように、掘立柱建物、溝、土壇等が検出されたが、多量の鎌倉時代の遺物に伴う遺構としては、トレンチ的調査のため、不十分なものと言える。

2. 遺物について

本遺跡出土の弥生土器と須恵器は、雲出川で最も下流の出土である。広口壺（1・2）は、弥生時代後期に属し、伊勢市野垣内遺跡^⑤、中楽山遺跡^⑥、鈴鹿市上箕田遺跡^⑦に出土例がみられ、欠山式に相当する。

須恵器杯身（3）は、陶邑MT15型式に比定でき、高杯（4）は陶邑TK209に比定できるであろう。

次に、鎌倉時代を中心とする遺物についてみると、山茶碗、山皿が出土量の8割以上を占めており、残りは、土師器（鍋、皿）、常滑甕である。このうち山茶碗、土師器は、日常雑器として鎌倉時代大量に生産され、その消耗度も早いことからして、出土量が多いことは当然である。

山茶碗は時期的に分類すれば、行基焼第1型式から第2型式にかけてが多く、第3型式は少ないと思われる。今回3つの土壇の遺物しか図示できなかったが、これら各型式をよく表現していると考えられる。つまり、SK19は第1型式、SK15は第2型式、SK78は第3型式と大別されるのではないかと考える。また、胎土は緻密なものが多く、第3型式と思われるものでもこの手がある。

次に土師器鍋についてみると、大きく3つのタイプがあると思われる。AタイプはSK19に多く見られる口縁端部を内側に折り返して丸くなるもの、Bタイプは、SK15の(37・38)のように丸みがなくなり平坦な面になるもの、Cタイプは、SK78の(76～80)のように、内側の面に凹みをもつものである。Aタイプが一番古く鎌倉時代初頭～前半、BタイプはA

タイプに続くもので鎌倉中頃まで、Cタイプは鎌倉時代中頃～後半になると思われる。

墨書土器は、今日まで県下各地において数多くの出土例が報告されている。例えば、四日市市小判田遺跡^①、鈴鹿市大木ノ輪遺跡^②、伊勢市小御堂前遺跡^③などは、当遺跡と同様に山茶碗、山皿が数多く出土している。一般的に、墨書された文字は、人名であったり、吉祥句であったり、場所をあらわしたりするといわれている。多気町東裏遺跡^④では「中臣」と墨書された土師器杯があり、齋宮跡^⑤や柚井遺跡^⑥からも多数出土している。また、多気町カウジテン遺跡からも「中万」と墨書された土師器杯、灰釉陶器皿、碗が出土している。この「中万」は、場所をあらわす好例である。山茶碗、山皿の出土例として挙げた、四日市市小判田遺跡^⑦の報告書によれば、墨書土器について次のような見解を述べている。墨書は、1つの考え方として須恵器や中世陶器に見られるカマ印と見るとしている。2つ目の考え方として、中世の流通経済のなかで、山茶碗の墨書は何かの物質を商う商業の符号ではないとしている。ここで、当遺跡出土の山茶碗、山皿の出土状況を見ると、他の遺跡と同様に大量の出土のなかから墨書土器が出土しており、特定の地区に片寄ってはいない。次に、墨書された文字をみると、「○」「×」が多く、その他文字と思われるものとして、「上」「下」があるが、意味不明としか言えない。

このようにして墨書土器については、数多くの出土例のわりには不明の点が多いので、簡単な記述にとどめたい。

3. 和鏡について

和鏡は、山茶碗や土師器等と共にSK15から出土したものである。

和鏡は、平安時代以前の鏡とは異なった使用をさ

れている。仏像の胎内に納められたり、中世墳墓や経塚に他の遺物と共に埋められたり、湖、沼、池などへの投入鏡として幅広く使用された。三重県下の仏像胎内納入鏡としては、津市四天王寺の重要文化財木造薬師如来座像の納入品に「瑞花唐草双鳳文鏡」があり、中世墳墓納入鏡として、松阪市南山遺跡^⑧、明和町古里遺跡^⑨、大宮町舟木遺跡^⑩があり、経塚納入鏡として伊勢市朝熊山経塚（金剛証寺）をはじめ各地の経塚から出土している。大阪市立博物館前田洋子氏の御教示によれば、全国的にみると、前述した用途以外の出土別として、大溝から八稜鏡2面が出土した大阪府大園遺跡がある。

大溝の規模は、長90m以上、幅4～5m（上面）3～3.5m（下面）、深さ0.5～0.7mで断面U字形の一直線にのびる。2面のうち1面は、大溝埋土より出土しており、2面ともたたいた跡が見られる。なお、この大溝は平安時代の条里の坪割りに関係あると考えられている^⑪。

当遺跡出土の和鏡は、その文様や形式及び共伴した土器（山茶碗、土師器）などからみて、鎌倉時代中頃と考えられるが、用途については、黄褐色砂質土中から出土したこともあり、今後の検討を待ちたい。

以上のように、掘立柱建物2棟やゴミ穴としての土坑とともに、多量の出土遺物から勘察して、おそらく、これは発掘区が、遺跡の中心部に当たり、道路幅と排水路幅という制約された下での調査のため、全容がつかめないであろう。

雲出地区ではじめての本格的発掘調査であったが、得るところは大きかったと思われる。この地区は遺物は散在するが、試掘をしても遺構が不明のところであった。今回の調査により、鎌倉時代に入り中世の人々の足跡を知るところになった。

(中村 信裕)

(註)

- ① 平松令三監修 『三重県の地名』 平凡社 1983
- ② 弥永貞三 谷岡武雄 『伊勢湾岸の古代条里制』 1979
- ③ 森田勉 「14～16世紀の白磁の分類と編年」 『貿易陶器研究 No.2』 1982
- ④ 新田洋 『莊遺跡発掘調査報告書』 三重県教育委員会 1980
- ⑤ 下村登良男 「伊勢市上地町 野垣内遺跡」 『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 1979

- ⑥ 下村登良男 「伊勢市上地町 中楽山遺跡」 『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 1973
- ⑦ 真田幸成 大場範久 仲見秀雄 『上笠田弥生遺跡第二次調査報告』 鈴鹿市遺跡調査会 1970
- ⑧ 田辺昭三 『陶邑古窯址群 I』 平安学園考古クラブ 1966
- ⑨ 杉崎章 『常滑の窯』 学生社 1970
- ⑩ 『小判田遺跡』 四日市市教育委員会 1977
- ⑪ 早川裕巳 「鈴鹿市箕田 大木ノ輪遺跡」 『昭和54年度県営圃

- 場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1980
- ⑫ 岩中淳之 『小御堂前遺跡発掘調査報告』 伊勢市教育委員会 1980
- ⑬ 斎宮跡調査事務所主査・谷本鋭次氏の御教示による。
- ⑭ 下村登良男 『南山遺跡発掘調査概報』 松阪市教育委員会 1979
- ⑮ 谷本鋭次 『古里遺跡発掘調査報告-D地区-』 三重県教育委員会 1974
- ⑯ 昭和54年11月20日 度会郡大宮町舟木に於いて、町役場職員により偶然発見された。
- ⑰ 大阪市立博物館学芸員 前田洋子氏の御好意により大園遺跡の出土状況の資料提供を得た。

IV 一志郡白山町 ^{いわき} 岩脇C遺跡

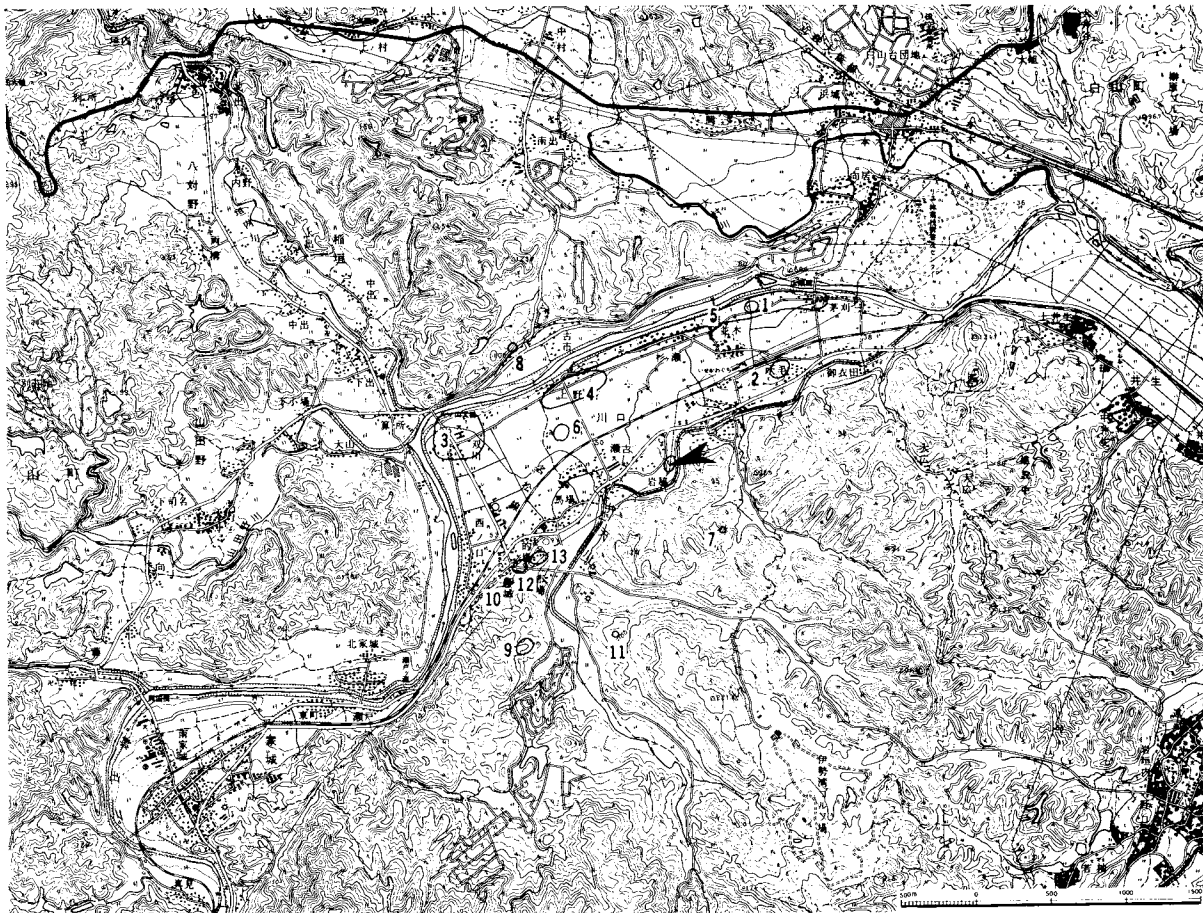
1. 位置と環境

岩脇C遺跡（矢印）は現行政区画上、一志郡白山町川口字岩脇に所在する。地形立地的には三重県のほぼ中央を雄走する一級河川雲出川の支流である弁天川左岸の標高46m前後の河岸段丘上に位置している。

当遺跡の周辺部には各時代にわたる遺跡、遺物散布地等が確認されているが、本格的な調査例が少なく、今なお、当地域の歴史について詳らかにのべることは困難であるが、以下簡単に概述してゆきたい。

縄文時代としては馬乗岩遺跡(1)、吹毛遺跡(2)、大角遺跡(3)等が遺物散布地としてあげられるが、集落の大きさなど、その実体については明らかでは

ない。弥生時代になると、本流雲出川右岸に沿った段丘上に広く遺跡が立地するようになり、下流より、大角遺跡、上野西遺跡(4)、東西に長くのびる川口北方遺跡(5)等があげられる。大角遺跡では同年度に白山町教育委員会主体によって実施された白山中学校武道館建設にかかる緊急発掘調査の際、弥生時代中期の竪穴住居が2棟検出されている。また、昭和46年に調査された野田浦遺跡(6)が知られているが、ここでは少量ながら弥生時代中期の台付無頸壺等の良好な土器が検出されている。この遺跡は隣接する上野西遺跡と同一、あるいは、包括された形で存在するものかも知れない。



第30図 遺跡位置図 (1:50000)

また、当遺跡の南東500mにある下川口風呂谷(7)は銅鐸発見地として伝えられている。

古墳は群集墳としてのブロック単位に集中的に確認されているところはなく、雲出川左岸に位置する古市古墳(8)をはじめ、馬廻古墳群(9)、狭間古墳(10)、コメンド山古墳(11)等、現在のところ1~2基を単位として捉えられている。これらはいずれも横穴式石室をもつ径10~12m程の小規模な円墳と考えられているが、コメンド山古墳はその痕跡をとどめる程度である。

歴史時代以降の遺跡としては、『続日本紀』天平12年の条に記された「河口頓宮」、「関宮」、あるいは、平城宮跡出土の木簡に記された「川口関務所」との

関わりが考えられている河口関跡(12)がよく知られているが、発掘調査もされておらず、また、比定地についても不確定要素をもち、今後、文献的視野からの研究をも加えて、総合的な検討が望まれるところである。

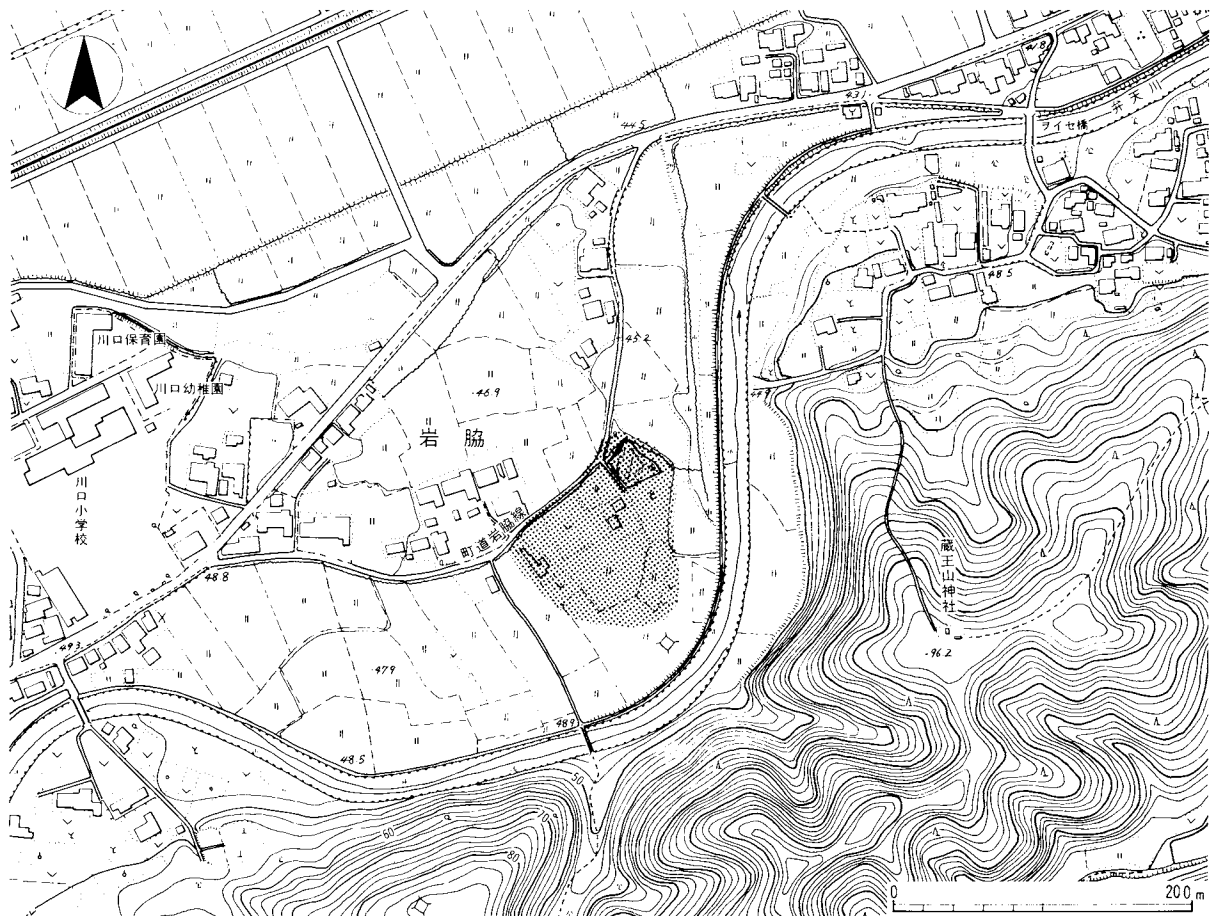
中世に入ると室町時代の築造と考えられる川口城跡(13)があり、各地で中世遺物の散布地は確認されているものの、その実体は不明瞭な点が多い。先の大角遺跡、野田浦遺跡でも土師器(鍋・皿)、山茶碗、陶器等が検出されている。

以上、若干ながら周辺の歴史的な概況を触れるにとどめておきたい。

2. 遺 構

土層の基本的層序は上から第Ⅰ層：耕作土(10~20cm)、第Ⅱ層：黒色土、第Ⅲ層：灰色混りの黄褐色土(地山)となる。遺物は第Ⅱ層、特に下面に少量

含む程度である。地形的に西から東に向って低く傾斜しており、第Ⅱ層はおのずと東に厚く(60cm~1m)堆積している。遺構は地山直上で確認でき、大



第31図 遺跡地形図(1:5000)

小の土坑、溝、柱穴等が検出された。柱穴は多く検出されたものの建物としてはまとまらない。これらの検出遺構は出土遺物よりすべて鎌倉時代後半～末頃に比定されるものである。以下、その主なものについて概述してゆきたい。

1. 溝

SD 1

幅3～4 m内外の南西から北東に走る大溝で、発掘区東壁近くで北折する。深さは50～80cmで底は凹凸が目立つ。埋土は単一の黒色土が深く堆積するが、微量の土師器片を含む程度である。自然地形と考えた方がよいかも知れない。

SD 2

SD 1にほぼ平行して走る幅40～50cm、深さ30cm前後の溝、発掘区南壁では幅が広くなりSK 3にかかる。

2. 土 坑

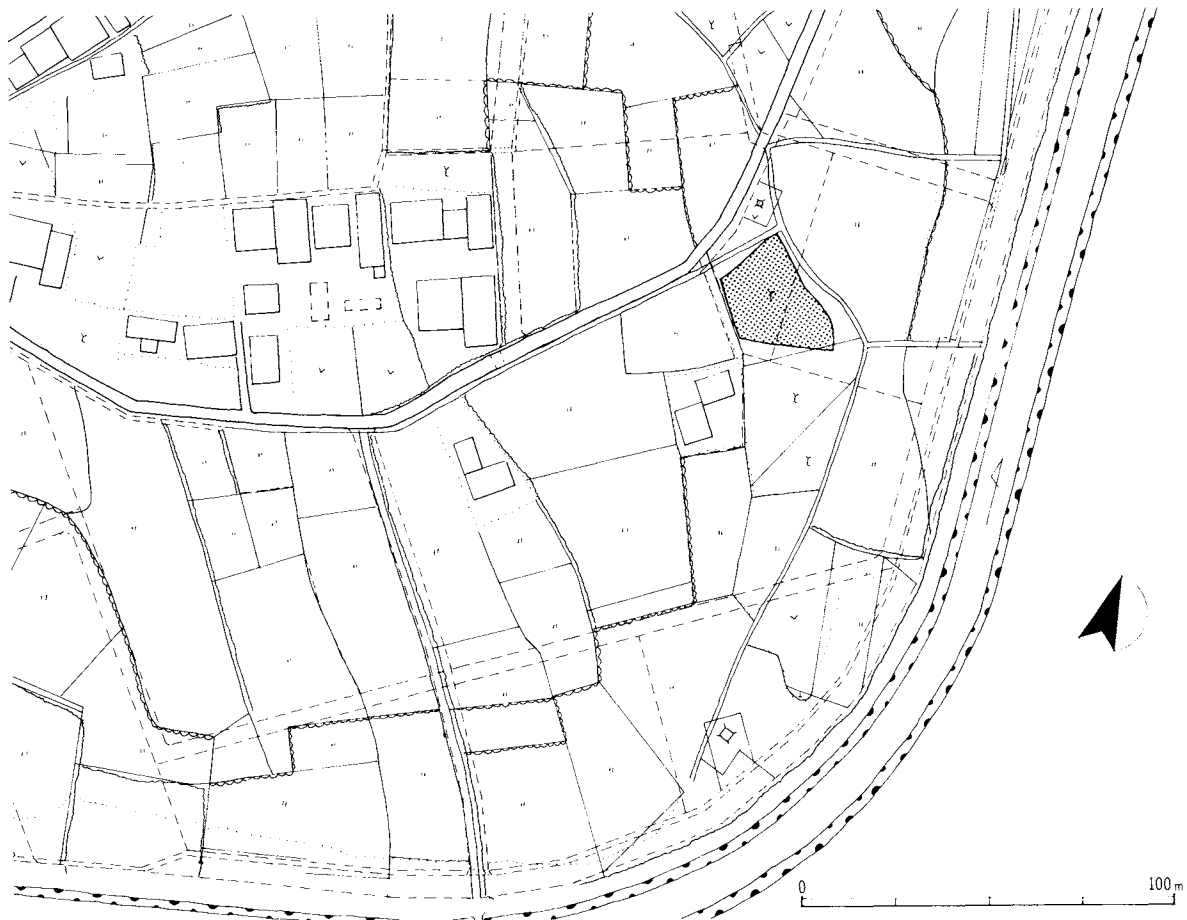
SK 3

径1.5～1.6mの円形土坑で深さ約1.8mである。埋土内には川原石が多量に含まれている。本来は井戸として使用されたもので、廃棄された状態を示すものとも推定される。

3. 中世石組墓

SX 4

一辺3 m、深さ10～20cmの隅丸方形をした掘形の中に東西方向に四角い川原石を並べたもので、本来はコの字形、あるいは、長方形に囲んでいたものかもしれない。また、掘形中央やや南寄りには拳大を含む大小の川原石の集石がみられた。掘形埋土からは土師器鍋、小皿等が出土している。ここでは一応、中世墓の一種としておきたい。



第32図 発掘区平面図 (1:2000)

3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物量は、整理箱5個程度と非常に少ない。遺物の種類としては土器、陶器、磁器（青磁数片）があり、そのほとんどは中世（鎌倉～室町時代）に属するものである。しかし、細片ではあるが、縄文土器片、弥生土器片を各1片ずつ検出している。以下、図示し得たものについて個々、概述してゆきたい。

1. 弥生時代の土器

壺形土器 (12) 復元口径約16cmの広口壺の口縁部片で、口縁端部に櫛描き列点文が施されている。内面はヨコナデされ、外面には縦方向に細いハケメがのこっている。弥生時代後期前半と考えられる。



第33図 遺構平面図 (1:200)

2. 中世（鎌倉～室町時代）の土器

A. SX4出土の土器

土師器小皿A (1) 径7.6cm、高さ1.0cmの薄手の皿で、内面はナデ調整されるが、外面は口縁端部まで全体が無調整で、ユビオサエによる凹凸、指圧痕が各所にのこる。白っぽい淡褐色を呈し、胎土は金雲母片を含む精良なものである。

土師器小皿B (10) 径10cm、高さ2.3cm程度の小皿と推定され、器壁は小皿Aよりさらに薄く1～2mm程度である。器形としてはA、Bかなり異なるが、調整手法は同一である。色調は白っぽい褐色を基調とし、胎土はAに比べやや砂粒が多い。

土師器鍋 (5・7) いずれも扁平球状の体部をもち、口頸部がくの字形に外反し、口縁端部を内側に折り返して凹んだ面をつくるタイプの鍋である。5は推定口径20.8cm、7は25.4cmである。口縁部内外面はヨコナデ調整され、体部外面は無調整でユビオサエによる凹凸をのこすものである。内面はヘラケズリによって器壁を薄く仕上げる努力が認められる。色調は両者ともくすんだ茶褐色を呈し、外面に煤の付着がみられる。胎土は砂粒を多く含み粗い。

B. 包含層出土の土器

土師器小皿B (11) 10と同じ形態をもつ小皿で口径10.6cm、高さ2.3cmと推定される。10よりもなお薄手であるが、調整手法、色調、胎土等、ほぼ同一である。

土師器小皿C (2) 口径9.0cm、高さ1.6cmの浅い小皿で、厚手のつくりである。口縁部外面は強くヨコナデされ、以下底部まで無調整であるが、底部

には再び強いナデが施され、平底を強調している。内面は全体を平滑にナデている。淡褐色を呈し、金雲母片の他、細砂粒を含む。

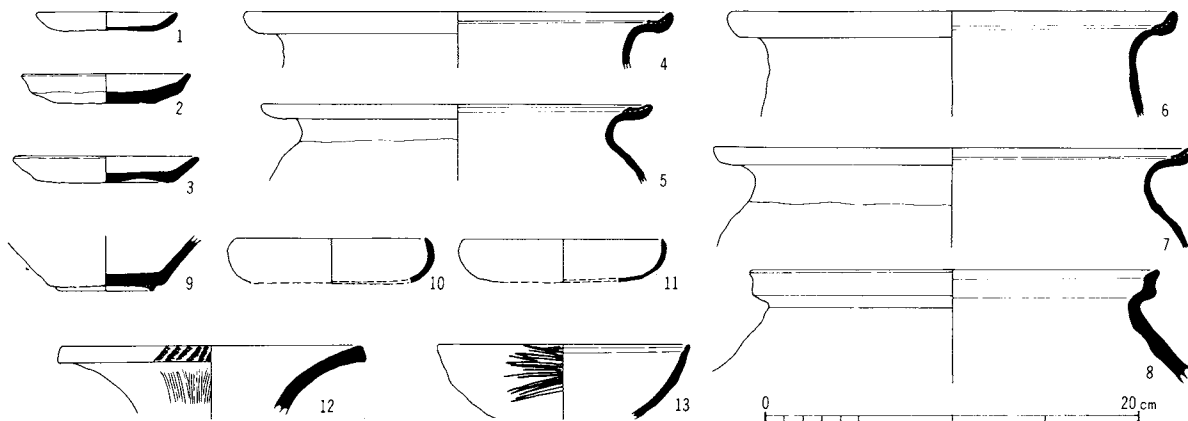
土師器小皿D (3) 口径10cm、高さ1.4cmの小皿で、形態、調整手法としては小皿Cに近いが、口縁部の立ち上り度とヨコナデの幅が異なる。色調はや・赤味の強い褐色を呈し、胎土は緻密である。

土師器鍋 (4・6) SX4出土の鍋と同形態で、折り返し口縁をもつ鍋である。口径は4・6それぞれ23cm、24cm前後と推定される。口縁部内外面ともにヨコナデ調整が施されている。色調は両者ともくすんだ茶褐色を呈し、胎土中には砂粒を多く含む。外面には全体に煤が付着している。

山茶碗 (9) 口縁部を欠くもので、低い小さな貼り付け高台から体部が直線的に立ち上がる山茶碗である。底部の糸切痕は明瞭にのこり、また、高台には靱殻痕が多く付着している。くすんだ淡灰色を呈し、胎土は砂粒が多い。

陶器 (8) 口縁部から肩部を残す破片で、甕形態と考えられる。口縁部は強く短く外反した後、真直ぐに立ち上り、端部はや・外反して丸くおさまる。口縁部内外面はヨコナデされるが、体部内面は不徹底なナデで、オサエによる凹凸をのこしている。胎土は砂粒を多く含む。淡茶褐色を呈し、常滑製品と考えられる。

瓦器碗 (13) 小片であるが、推定口径13.6cmで口縁端部の内面に浅い沈線がみられるタイプの碗と考えられるもので、外面には不定方向のジグザク状のヘラミガキがみられる。内面は磨滅が進み、かつ小片のため磨きの方向、規則性等は確認できない。



第34図 出土遺物実測図 (1:4)

4. 小 結

今回の調査対象は削平部のみに限られたという点もあり、勿論、ここで遺跡全体について言及することは困難である。

遺構としては溝、大小の柱穴、土壇の他、意識的な配石が窺える方形土壇等が検出されたが、数多い柱穴にしても建物としてはまとまらず、全体の遺構配置は不明な点が多い。柱穴の中には底に扁平な丸い川原石を根石として据えられているものもみられる。

出土遺物は、各1片ながら、縄文土器、弥生土器（後期）を出土しており、この遺跡の上限年代を示すものか、また、周辺にこの期の遺跡が所在するこ

とも推定される。他の遺物はすべて中世（鎌倉時代後半～末頃）に比定されるもので、S X 4埋土中からは少量だが、その時期の鍋と小皿がセットとして出土している。この組み合わせは、これまで伊勢（特に中・南勢）地方の中世遺跡発掘における鍋、皿の出土状況に一致するものである。

以上、今回の調査区では集落の中の居住空間としての建物等の配置は不明であり、遺跡の中心というより縁辺部とも考えられるが、当地域のこの時代の集落形態等の解明は今後の調査、研究の積み重ねに待ちたい。

（本堂弘之）

V 松阪市出間町 ^{はっとり}服部遺跡

1. 位置と環境

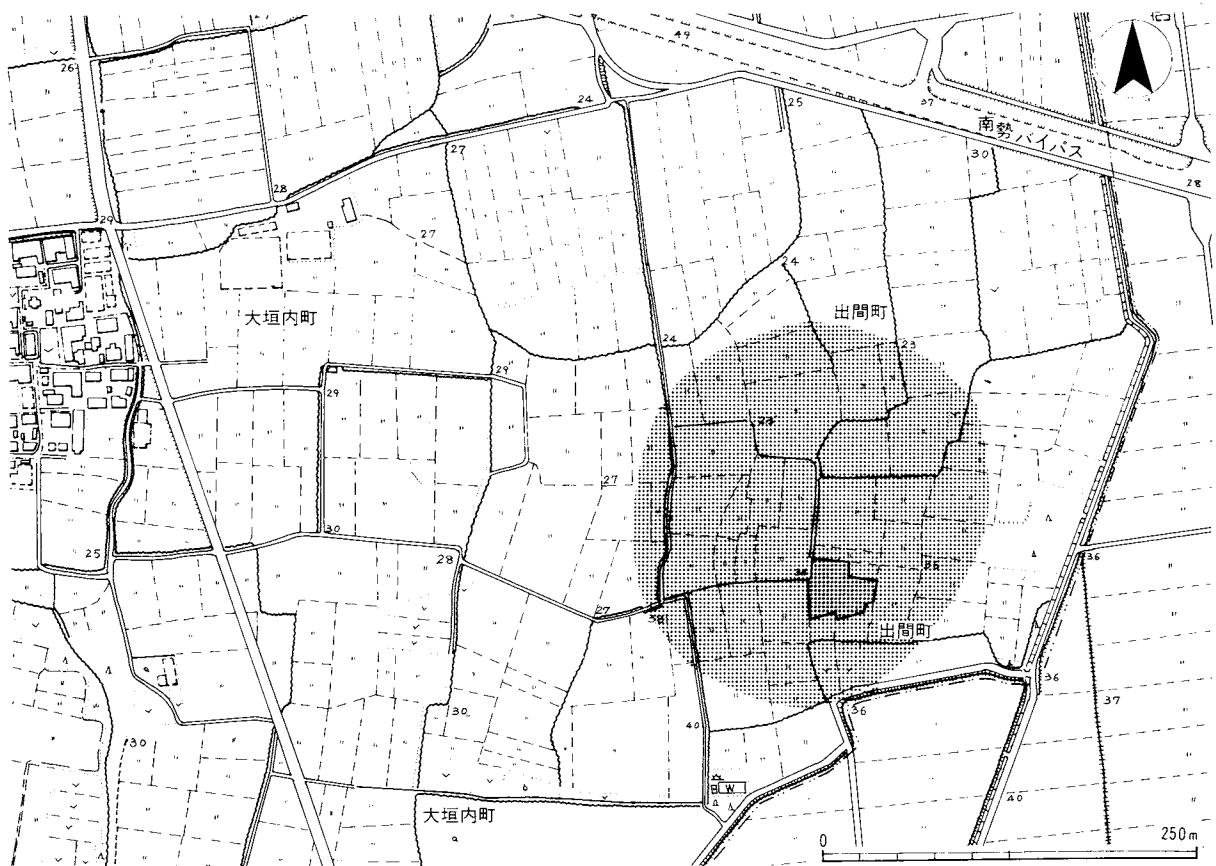
服部遺跡（1）は行政区画上、松阪市出間町字服部に所在する。西約1.5kmには榊田川、東約1.7kmには祓川が流れ、付近一帯は、これら大小河川による沖積低地が形成され、見わたすかぎり水田が広がっている。遺跡面は標高2～3m前後と低く、僅かずつではあるが、北に傾斜して標高が下がっている。遺跡のすぐ北側を東西に国道23号線（南勢バイパス）が走っている。遺跡の範囲は東西約240mと考えられる。

周辺の遺跡として、昭和54年に発掘調査された南山遺跡（2）がある。ここからは遺構として古墳時代（7世紀）の方形竪穴状遺構、奈良・平安

時代の掘立柱建物・大形円形土壇・井戸、中世（14世紀）の井戸などが検出され、遺物は上記各時代の土師器が圧倒的に多く、須恵器、灰釉陶器、山茶碗もある。その他、土錘、皇朝銭（隆平永宝）、銅製五輪塔、石帯等も出土している。また、榊田川右岸に西黒部遺跡（3）、服部遺跡より約1kmほど北に浦山遺跡（4）等がある。さらに南東約2kmの祓川右岸には、昭和53年度に発掘調査され、縄文時代晩期の人面土版および弥生時代から中世にかけての竪穴住居・掘立柱建物等数々の重要な遺物・遺構等を検出している西出遺跡（5）がある。また、その南約1.4kmには天禄2（971）年よりわずか3年の在位で齋宮



第35図 服部遺跡位置図 (1:50000)



第36図 遺跡地形図 (1 : 5000)



第37図 発掘区平面図 (1 : 2000)

寮で薨去された第43代斎王隆子女王墓(6)がある。
服部遺跡のすぐ西には神宮に納める神衣を織った神

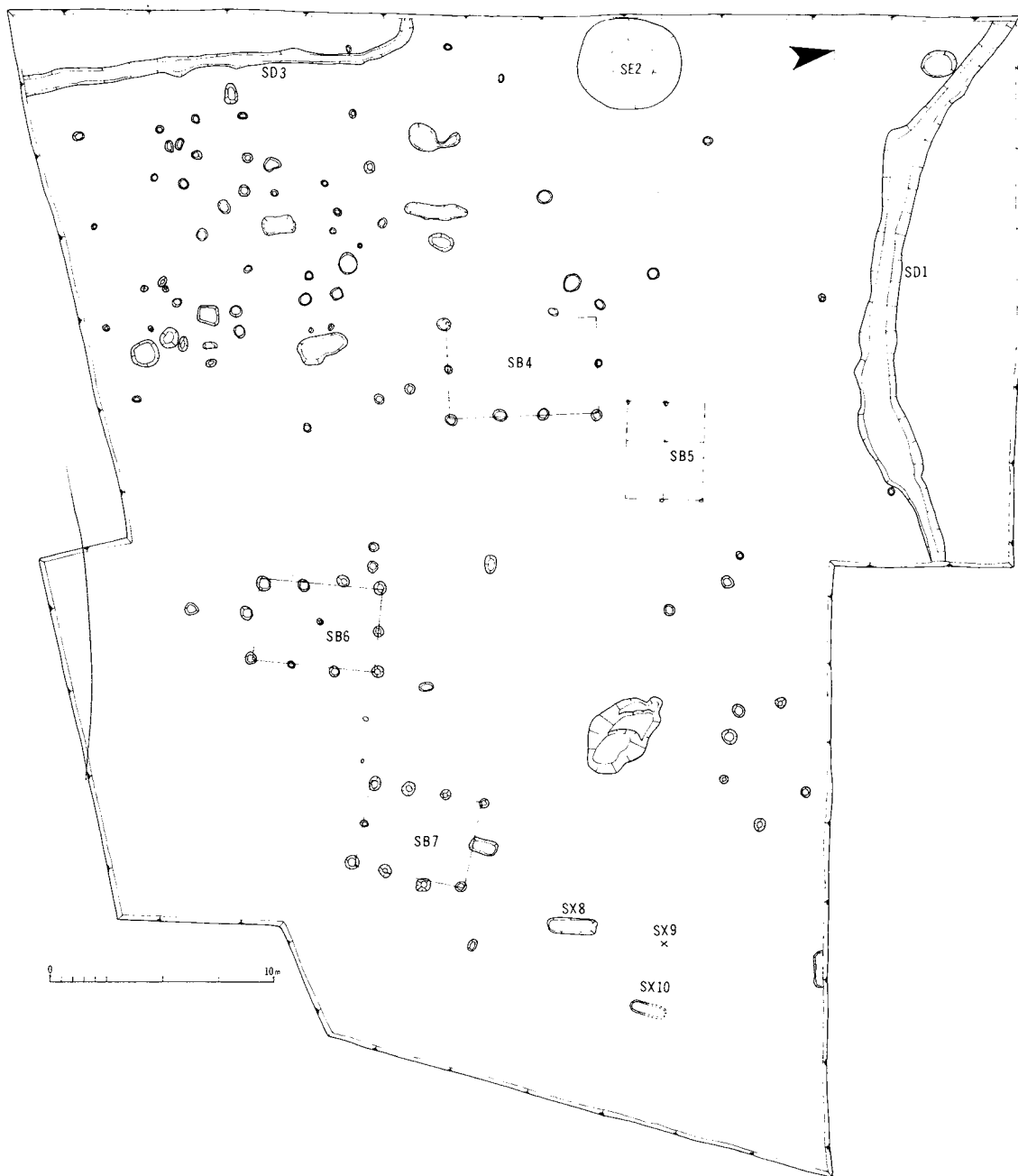
服部機殿神社が鎮座している。

以上、簡単に周囲の環境をのべるにとどめたい。

2. 遺 構

調査区は標高3m前後で、現状は平坦な畑であり、
周囲が水田になっている。層位は基本的に第Ⅰ層—
表土、第Ⅱ層—暗茶褐色砂質土(床土)、第Ⅲ層—茶
褐色粘土質(包含層)、第Ⅳ層—灰褐色細砂(地山)
である。遺構は表土下70~80cmの地山面で検出した。

奈良時代から鎌倉時代に至る掘立柱建物3棟、溝2
条、井戸1基、土壇2基、中世甕棺墓1基、根石の
ある掘立柱建物1棟がある。以上が約1500㎡の発掘
区で検出された遺構で、密度は比較的低い。



第38図 遺構平面図(1:300)

1. 掘立柱建物

S B 4 2間×3間の南北棟である。東側の桁行および梁行中央の柱穴は明瞭であるが、西側の桁行は判然としない。柱間は桁行、梁行ともに2mとほぼ等間隔である。柱掘形は桁行が50cm、梁行中央が30cmとやや小さい。深さは20~30cmである。

S B 6 2間×3間の南北棟である。柱間は2mと等間隔であるが、柱穴の並び方は不揃いである。柱掘形は40~60cmで、円形のものほとんどであり、深さは、深いもので30cm、浅いもので20cm前後である。なお、梁行南側の中央の柱穴だけが約50cm程、外へ張り出している。

S B 7 2間×3間の南北棟である。桁行柱間および梁間は1.7mと等間隔であるが、柱穴の並び方は不揃いであり、またその直径も大きいもので80cm、小さいもので30cmとばらつきがある。深さは30~50cmである。柱穴からはほとんど遺物は出土せず、僅かに土師器の細片が出土しただけである。

S B 5 2間(1.7m)×2間(2m)の正方形に近い。根石をもつ掘立柱建物で、住居というよりは小さな倉庫的な建物であろう。根石に使った石は、厚さ5~7cm、長径8~12cmの小さなものであり、半分の石がすでに消失している。

2. 溝

S D 1 発掘区北端で検出したもので、幅1~2m、深さ20~50cm前後の、東西方向に走る比較的大きな溝で、中央部で深く幅も広がる。溝内は砂礫混りの青灰色土で埋まり、埋土中に土師器(鍋・羽釜・皿)、山茶碗、山皿等の細片を含む。

S D 3 発掘区の西部で検出されたもので、発掘区をほぼ南北に走る。幅40~50cm、深さ20~30cmの浅い溝であり、徐々に北へと深くなる。埋土は青灰色粘質土で土師器の細片が若干量出土したのみである。

3. 井戸

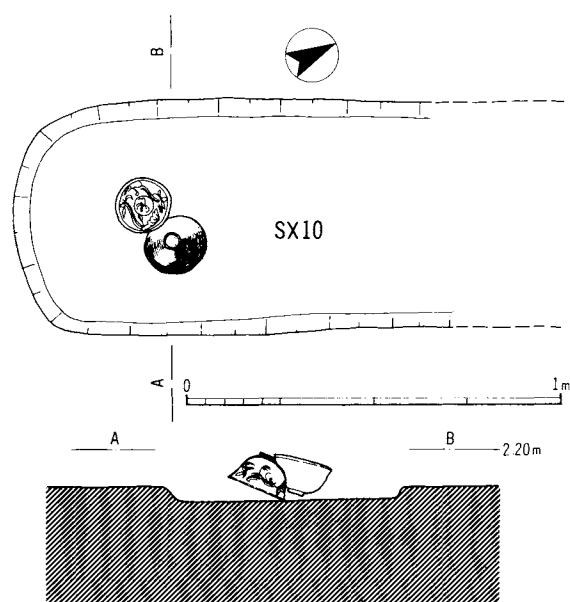
S E 2 径3m前後の素掘りの井戸で、約1.5mまで掘り下げたが湧水が激しく、底まで確認することはできなかった。出土遺物は極めて少なく、土師器細片が少量出土しただけである。

4. その他

S X 8 発掘区の東端でS X 9、S X 10と近接して検出された。2.2m×0.7mの長方形を呈し、深さは30~40cmの土壇で、埋土は茶褐色粘質土で、土師器細片が若干出土している。

S X 9 中世甕棺墓。口径57cm、胴部最大径90cmの常滑大甕を口縁部を下にして倒立した状態で検出した。南北方向に僅かに傾けて立てており、甕口縁内には径10~15cm前後の平たい石が5個きちんと敷並べられていた。なお、副葬品らしきものは見当たらなかったが、甕体内の埋土除去中に、土師器小皿片が数枚割れて出土しているのが検出された。副葬品として葬ったものと思われる。

S X 10 副約0.7mの土壇内に完形の青磁碗2個体が出土した。1つは口縁を下にしてうつ伏せの状態、もう1つは口縁を上にして、2つ並んで置かれていた。土壇墓に伴うものであろうが、一部攪乱された部分もあって、土壇の規模等は明らかにできなかったが、幅0.7mで浅い溝状の土壇状であり、黄褐色粘質土が埋まっていた。青磁碗以外には他に副葬品は検出できなかった。



第39図 S X 10実測図(1:20)

3. 遺物

1. 古墳時代の土器

A. 土師器

杯 (1・2) 口径12cm前後、高さ5cm前後の内湾する半球形のもので、1は端部が小さく外反する。口縁部はヨコナデ、胴部下半部から底部にかけては内外面とも指による調整がみられる。1は赤褐色、2は黄褐色を呈する。

B. 須恵器

高杯 (3) 「ハ」の字に開く脚部の破片で、三方に円形の透かしがある。杯部は不明である。青灰色を呈し、胎土は精良である。

2. 奈良・平安時代の土器

A. 土師器

皿 (4・5・8～11) 口径17cm前後のものが多いが、25cm以上の大ぶりのものが一点ある。いずれも口縁部が僅かに内湾する。やや厚手の(4・5)は斜向暗文が施される。口縁部はヨコナデ、底部は指によるオサエのe手法で仕上げている。

杯 (6・7・12～15) いずれも口縁部はヨコナデ、内面はナデツケで、外面は指によるオサエで仕上げるものである。口径15cm前後のもの(6・7)と、13cm以下のもの(12～15)の二者がある。6には斜行暗文が施されている。また13cm以下のものには、球形を呈するもの(14・15)と、口縁部が外反するもの(12・13)とがある。

蓋 (16) 口径14cmの小型で、大きな宝珠形つまみが付く。全体に磨耗が著しく、調整方法は不明である。黄褐色を呈し、胎土は緻密である。

甕 (17～19) 口径22cm前後のもの(17・18)と、16cm程度の体部の丸い甕(19)の二種がある。いずれも、内外面とも細かいハケメ調整が施される。内面胴下半部は縦方向のヘラ削りが施されるものであろう。

鍋 (20～22) 口径23cm前後で、口縁部は外反し、浅い半球形の底部を有する。甕同様内外面にハケメが施されるが、21の表面には見当たらない。破片のため、把手が付くかどうか不明である。

B. 須恵器

蓋 (23～25) 口径16cm前後と大ぶりなものと、11cm前後のものがある。内外面ともロクロ成形がなされており、口縁部内面にかえりのあるもの(23)とそうでないもの(24・25)とがある。青灰色を呈し、胎土は精良である。

盤 (26) 口縁部は直立し、底は平らで真直ぐの高台もつく。口径12.8cm、器高2.15cm、茶褐色を呈し、胎土は緻密である。

壺 (27・28) 短頸壺と長頸壺とがある。長頸壺(27)は口縁部を欠失する胴部だけの破片である。肩部が強く張り出し、体部下半部はヘラ削りの後、高台を貼り付けている。短頸壺(28)は直立する口縁をもち、胴上半部に淡緑色の釉が施されている。

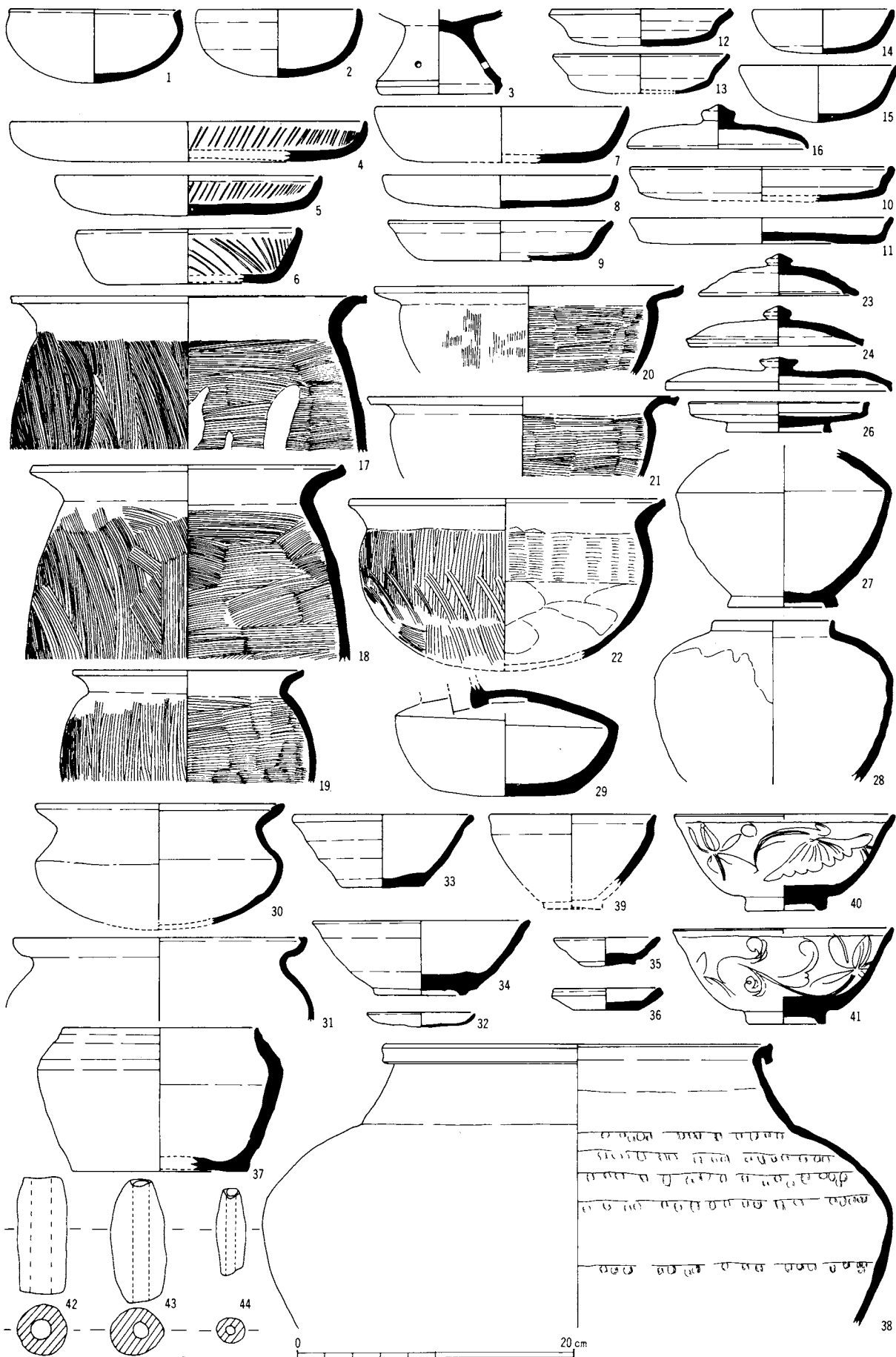
平瓶 (29) 胴部だけの破片であり、口縁部を欠く。青灰色を呈し、胎土は緻密である。

3. 鎌倉時代の土器

土師器鍋 (30・31) 口径17cmのもの(30)と、21cm前後のやや大きいもの(31)とがある。両者とも口縁部は折り返し口縁で、前者は丸く押えつけられているのに対して、後者は僅かに尖り気味になっている。口縁部および頸部は内外面ともにヨコナデされているが、胴下半部は磨耗が著しく、調整等は不明である。外面には煤が付着している。淡茶褐色を呈し、胎土には細砂を多く含む。

小皿 (32) 口径7.8cm、器高1cmの薄手の皿である。口縁部および内面はナデ調整、外面はオサエによる指頭圧痕がみられる。雑な作りで歪みが多い。淡黄褐色を呈し、胎土は精良である。

山茶碗 (33・34) 33は口径12.6cm、器高5.2cmで、底部は糸切り痕を残し、高台をそなえない。口縁部は僅かに外反し、外側に丸味をつくる。脚部の丸味は失われ、直線的になっている。やや厚手の深い山茶碗である。淡灰色を呈する。34は、比較的大ぶりで体部が丸味をもち、口縁部が外反気味で、器壁が薄くなる。口径15.7cm、高さ5.3cm、淡灰色を呈し、胎土は比較的緻密である。糸切り痕を残し、



第40图 出土遺物実測図 (1 : 4)

高台を貼り付けてあり、高台の一部には靱殻痕がつく。

山皿 (35・36) 口径8cm、器高2cm前後で、底に糸切り痕を残す。口縁部は直線的に外へ開く。35の底部外面には墨書が認められる。

常滑鉢 (37) 口径14cm、器高10cm前後で、肩部がゆるやかに張り出し、口縁部は内弯して端部で細くつまみあげられ、直立気味となる。ロクロ製品で底部はヘラ切りがなされている。暗茶褐色を呈する。

常滑甕 (38) 口径56.6cmの大型の甕で、胴下半部を欠失する。頸部から口縁部にかけては内傾し、胴部は上半部で大きく張り出す。胴部最大巾は胴上部にあり90cm、器高は1m前後である。4～8cmの粘土帯を積み上げて成形している。内面の粘土つぎめ部分には指頭圧痕が残り、外面はきれいになら

れている。口縁部は、折り返し口縁状の常滑焼の特徴をよく示している。全面灰褐色を呈する。

天目茶碗 (39) 口径11.8cmで、光沢のある黒褐色を呈し、口縁部は直立しながら、口縁端部で外側にくびれている。

青磁碗 (40・41) 口径16cm前後、器高7cm前後の完形品である。僅かに内弯しながら外方に張り出す口縁部で、低い厚手の高台を有するものであり、青灰色を呈し、内面には劃花文が描かれている龍泉窯系のものであろう。SX9から出土している。

4. その他の遺物

土錘 (42～44) 長さ9cm前後、径4cm前後の長大なもの、長さ6m、径2cm程の小型のものがあり、いずれも胎土は緻密で淡茶褐色を呈する。

4. 小 結

服部遺跡は、櫛田川右岸の標高2～3m前後の沖積地に所在する。発掘調査の結果、当遺跡は沖積地上に営まれた奈良時代から中世にかけての集落跡であることが判明した。今回の調査は、県営圃場整備事業の削平部分1500㎡に対して行なったもので、遺構としては掘立柱建物3棟、土台石建物1棟、溝2条、井戸1基、土坑3基他、多数のピットを検出した。SB4・6・7は柱穴より出土するわずかの土師器細片より奈良時代頃の掘立柱建物と思われ、SB5は、小角礫を土台石として用いているところから中世の建物と考えられる。発掘区の東側の部分には墓跡と思われるものが三ヶ所近接して検出された。SX9は常滑の大甕を用いた中世の墓であるが、口縁部を下にして埋納しているのは興味深い。同じように大甕を倒立させて墓として用いているものに広島県の草戸千軒遺跡、「尾道」^①の例があげられるが、他にはあまり例をみないものである。胴下半部から底部にかけては破壊されていたが、後世の削平によってなったものか、あるいは人為的に壊されたものかは解明できなかった。なお、直立でなくやや南西に傾いて置かれているのも何か意味があるのだろうか。当遺跡より約1.3km北にある南山遺跡^②でも同じく常滑の大甕を用いた甕棺墓が2基検出され

ているが、これらは共に底部を下にして埋められていた。SX9のすぐ東で検出されたのが龍泉窯系の完形の青磁碗二個体である。土坑北半分は攪乱のためかはっきりしないが、このような土坑についてまず考えられるのが中世墳墓である。碗自体が副葬品として考えられるが、他に何も出土していないことが気になる。二個体のうち一つが口縁部を上にして、一つが下にして出土したのは、偶然そうだったのか、あるいは人為的に置いたものか、これまた理解に苦しむところである。すぐ西にある甕棺墓とは土器型式からみておそらく時代を同じくするものであろうが、わずか3mしか離れていない。この二つがお互いに関連するものなのか、あるいは全く偶然に接近した場所に造築されたのかも解明し難いが、両者を墓と考えれば被葬者の階層の違いと思われる。

一方、奈良・平安時代の遺構としては掘立柱建物を3棟検出したのみで、その時期の集落全容のあり方を言及することはできない。しかし、出土遺物としてはかなり多量の良質の奈良・平安時代の土師器、須恵器等が検出されており、今回の発掘区外に遺構が広がることは十分に予想される。また、当遺跡に隣接するように西南に神服織機殿神社が鎮座しており、加えて当調査地の小字名「服部」との関連も考

えられるところであるが、これらは今後文献的な見地をも含めて総合的に検討する必要がある。

(福村直人)

(註)

- ① 尾道市文化財協会『尾道 - 市街地発掘調査概要』 1978
- ② 松阪市教育委員会『南山遺跡調査概要』 1980

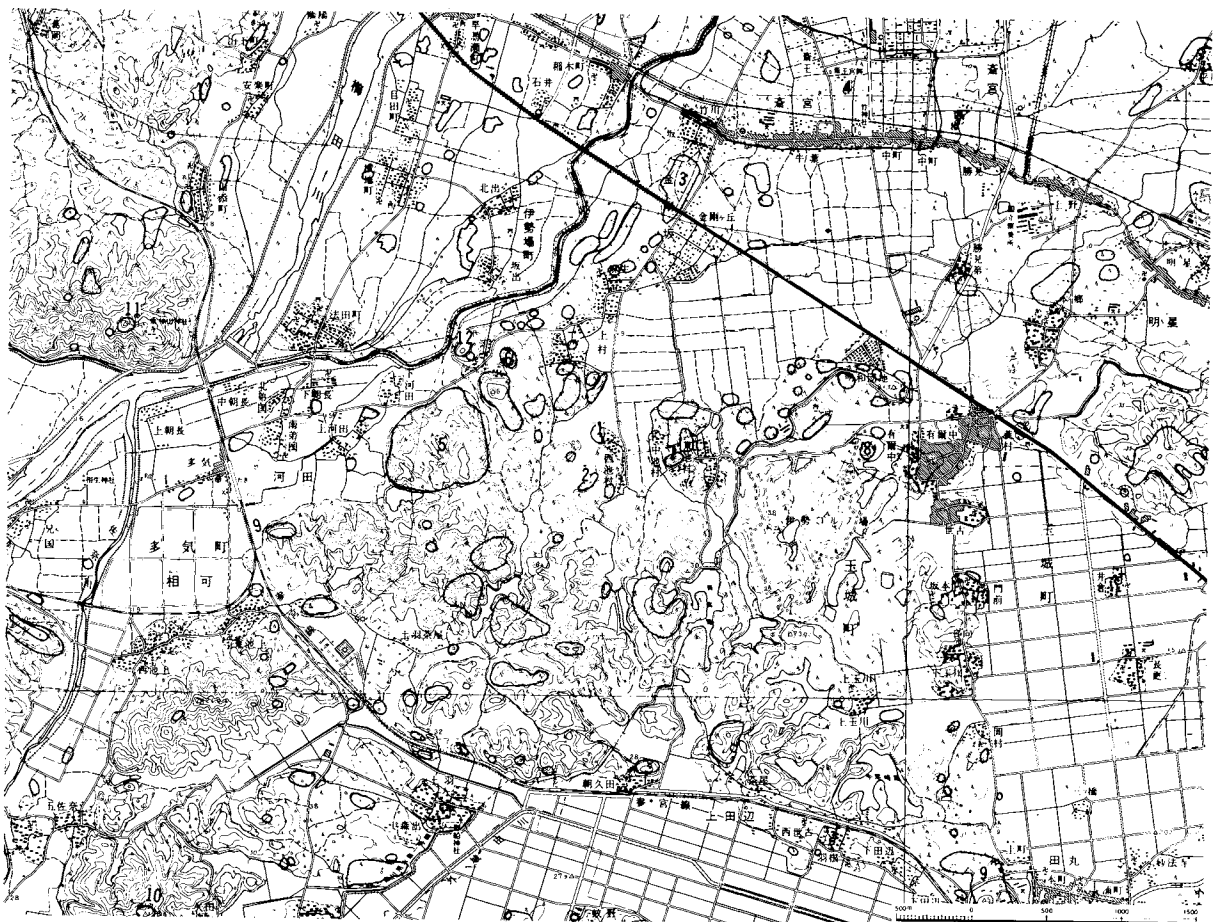
VI 多気郡明和町^{にしむら}西村遺跡・^{あいば}愛場遺跡

1. 位置と環境

西村遺跡(1)と愛場遺跡(2)は県境を南北に走る紀伊山脈中の高見山に源を發し、蛇行をくり返えしながら東流し、三重県を横断して伊勢湾にそそぐ櫛田川の支流である祓川の右岸に發達した玉城丘陵の端部に所在し、北側に開けた平野部を望む標高25m前後に営まれた遺跡である。

周辺には、縄文時代より歴史時代に至る遺跡として有名な金剛坂遺跡(3)や奈良時代～平安時代にかけての齋王の宮跡で、国史跡指定となっている齋宮跡(4)が北東方向約2.5kmに所在する。西方には、南勢地方有数の規模を持つ河田古墳群(5)や神前山古墳(6)など多数の古墳が集中している

ところである。中世の城跡としては、東方に先年明和町教育委員会が主体となって調査された池村城跡(7)や有爾中城跡(8)、田丸城跡(9)、矢田城跡(10)、神山城跡(11)、岩内城跡(12)、上村城跡などがあり、当遺跡との関連を考える上でも興味深い立地を示している。なお、西村遺跡については、調査期間中に近くの民家の改築工事現場の土層断面に遺物包含層を發見したように現在の集落が中世の集落跡の上に連続して営まれており、今回調査した場所は遺跡の縁辺部に当たるものと推定される。



第41図 遺跡位置図(1:50000)

2. 西村遺跡

(1) 遺構

SK 1

調査区最北端に検出された。東西方向に走る溝に一部分切られている。規模は3 m×2.5 mの方形を示し40~50cmの深さである。中には室町時代の後半に位置づけられる土師器の鍋や皿類などが一括廃棄された状態でおり重なって出土した。

SB 2

北西部に当たる場所で確認された2×2間（柱間約2 m）の掘立柱建物である。時期的に同一であるか否かは断定できないが、建物内に方形の掘形を持つ土壇が重なっている。

SB 3

非常に多数のピットがある中で、建物としてまとまったものである。東西方向3間、南北方向3間であるが、梁行と桁行の長さが同一ではない。

SE 4

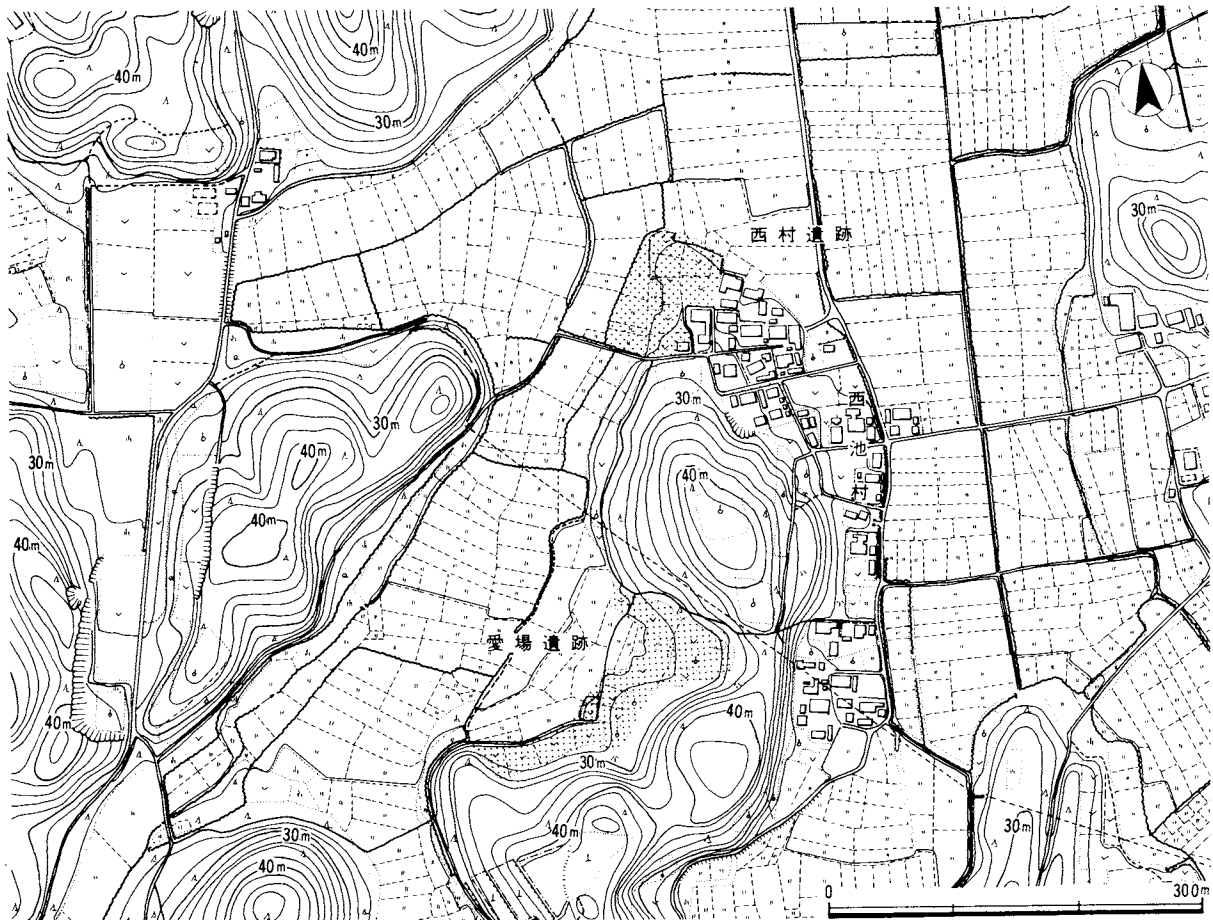
SB 3 に内包される状態で掘られた井戸である。直径2 mほどの円形で素掘りである。2 mほど掘り下げた所に、1節ずつ切った竹が折り重なった状態で出土している。内1本には木釘が打ち込んであった。

SD 5 (第45図)

調査区最南端に検出された。この集落跡が形成される以前に埋没した溝で、中に弥生時代、畿内の第IV様式の壺形土器が、口縁部を西に向け横に倒れた状態で出土した。

SK 6

SD 5 の西側の最南端に検出された。1.2×0.9 mの長方形をしており、掘形の残存状況は16cmと極めて浅いので、上部はすでに削平されていると思われる。底部からは、10cmほどの長さの刀子が出土した。



第42図 遺跡地形図 (1:5000)



第43図 発掘区平面図 (1 : 2000)

SA7

SB3の北側に検出された。SB3とほぼ平行に並んでおり等間隔で3間分ある。柱間は1.8mと揃っており、SB3に付随したものと考えられる。

(2) 出土遺物

弥生土器 (第46図1)

SD5から出土した畿内第IV様式の壺形土器である。口縁には幅4mmの凹線を2条めぐらしている。最大径は胴部中心にあり、28.8cmである。頸部は細くくびれ大きく外反しており、口縁部は直立して立ち上がる。口縁端は丸くおさめられていねいにヨコナデされている。頸部以下体部外面にはハケメの痕跡と思えるものがあるが、風化が著しく方向、原体幅等は不明である。胎土中には砂粒を多く含み暗黄茶褐色をしている。なお、胴部の最大径を示す部分と

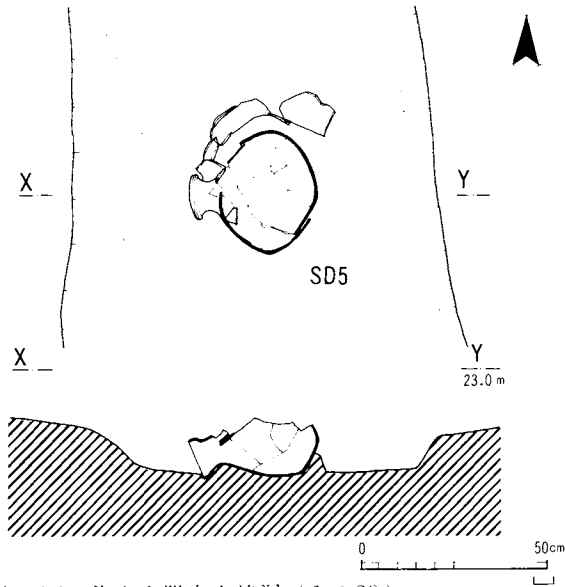
反対側の口縁部分の2箇所には、焼成時についた黒斑がある。

土師器鍋 (第46図2)

SK1から大量に、遺棄された状態で出土した中の1点である。口径は25cmで、体部下半はヘラケズリされている。口縁は大きく外反し、口縁端部を上方につまみ出している。口縁外面には、ヨコナデされた面が凹面を作り出している。頸部も同様にヨコナデされている。体部は一度外へふくらむが、中央部付近でくの字状に内側へ曲り込んでいる。この他にも図示してないが、浅い鉢状をした鍋や、口縁端の形の異なる鍋などがあり、同時期における鍋の多様性を見ることができる。胎土はいずれも精良なものを用いており、極めて薄く緻密である。色は赤褐色をしている。外面にはいずれも厚く煤が付着し

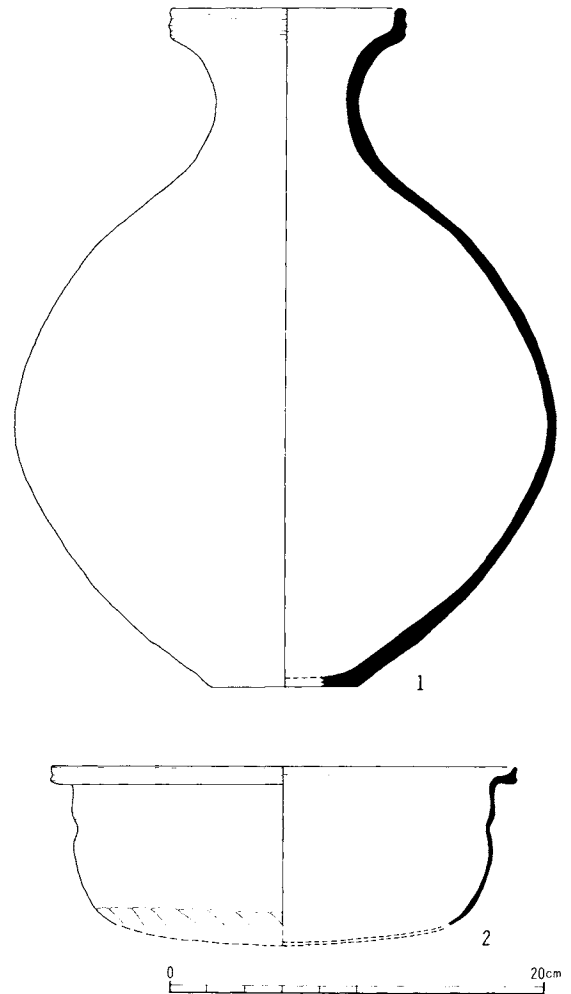


第44図 西村遺跡遺構平面図(1:300)



第45図 弥生土器出土状況 (1:20)

ておりかなり使用されたことがうかがえる。



第46図 出土遺物実測図 (1:4)

3. 愛場遺跡

(1) 遺構

調査した範囲はおよそ220㎡と狭いが、遺構密度はかなり高いと言えよう。

SD2

SE3を切っており、発掘区中央部よりも北へ2条の溝が伸び、途中で大きく西へ折れ一本にまとまる。このSD2の埋土からは多数の土器が出土している。

SE3 (第48図)

長径約4m、短径約3mほどの円形で、深さ1.5mほどの素掘りの井戸である。底部には中心線より北に寄った所に曲物で井筒を組んである。井筒に用いられた曲物は径45cmほどで、3段に組み積ねたも

のであり、崩れないように周囲を3方向から、竹で止めてある。曲物の周囲は青灰色粘土でしっかりと固定している。なお、曲物を埋める際の掘形は、上面が径85cm、底部で25cm、深さが65cmの深いすり鉢状である。

SB4

SE3の西側に検出された。掘立柱建物で規模は2間×3間の総柱建物と考えられるが1個の束柱の柱穴は検出できなかった。柱間は桁方向が2.1mと等間なのに対し、棟方向は長さが異っている。棟の方向は北で7.5度西へ振っている。

(2) 出土遺物

A. S D 2 出土の土器 (第49図)

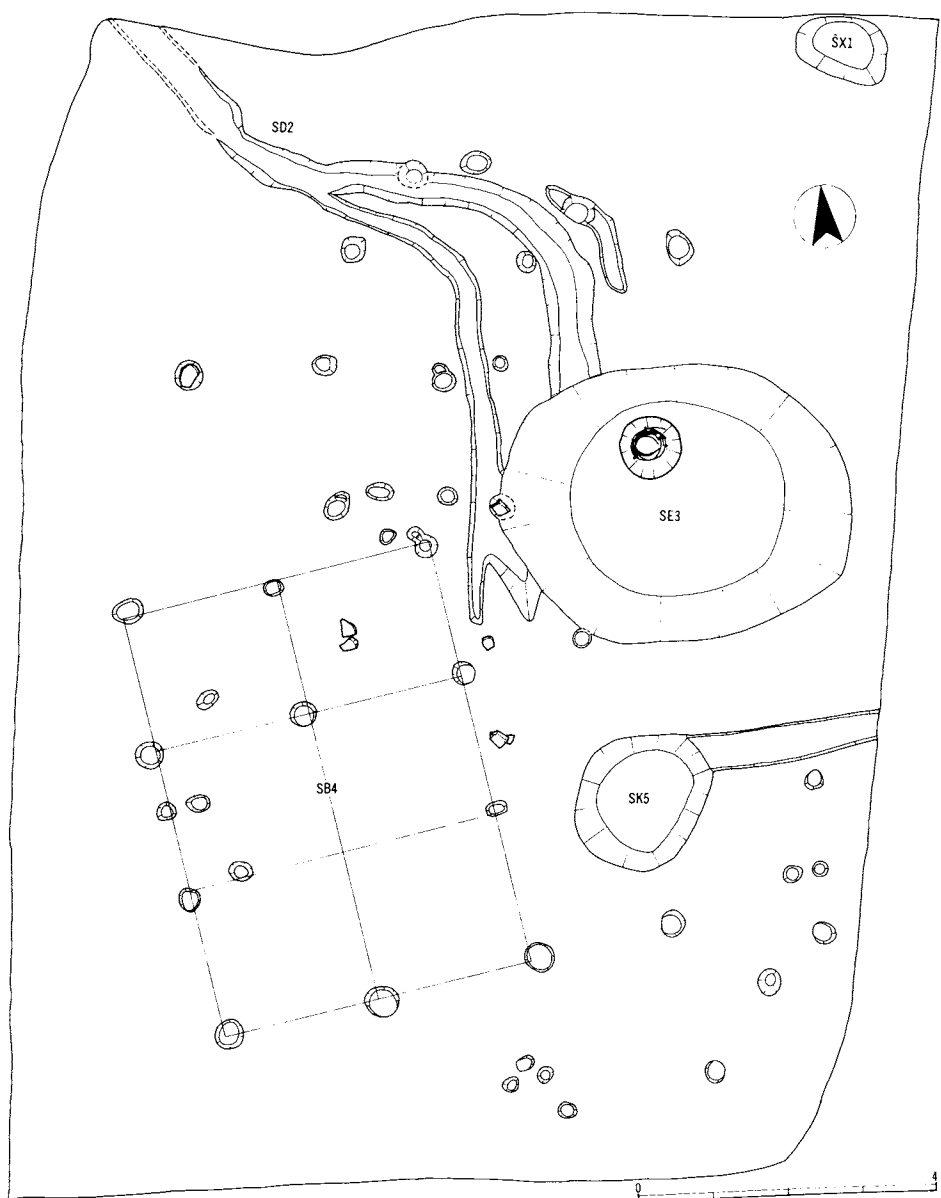
土師器皿 (1～5)

(1) は口径7.6 cmの小皿である。手づくねの皿で歪み大きい。胎土は精良であるが器壁の残存状況は悪い。(2)～(4) はやや大きめの皿で、いずれも体部は丸く外へふくらんでいるが、口縁は内

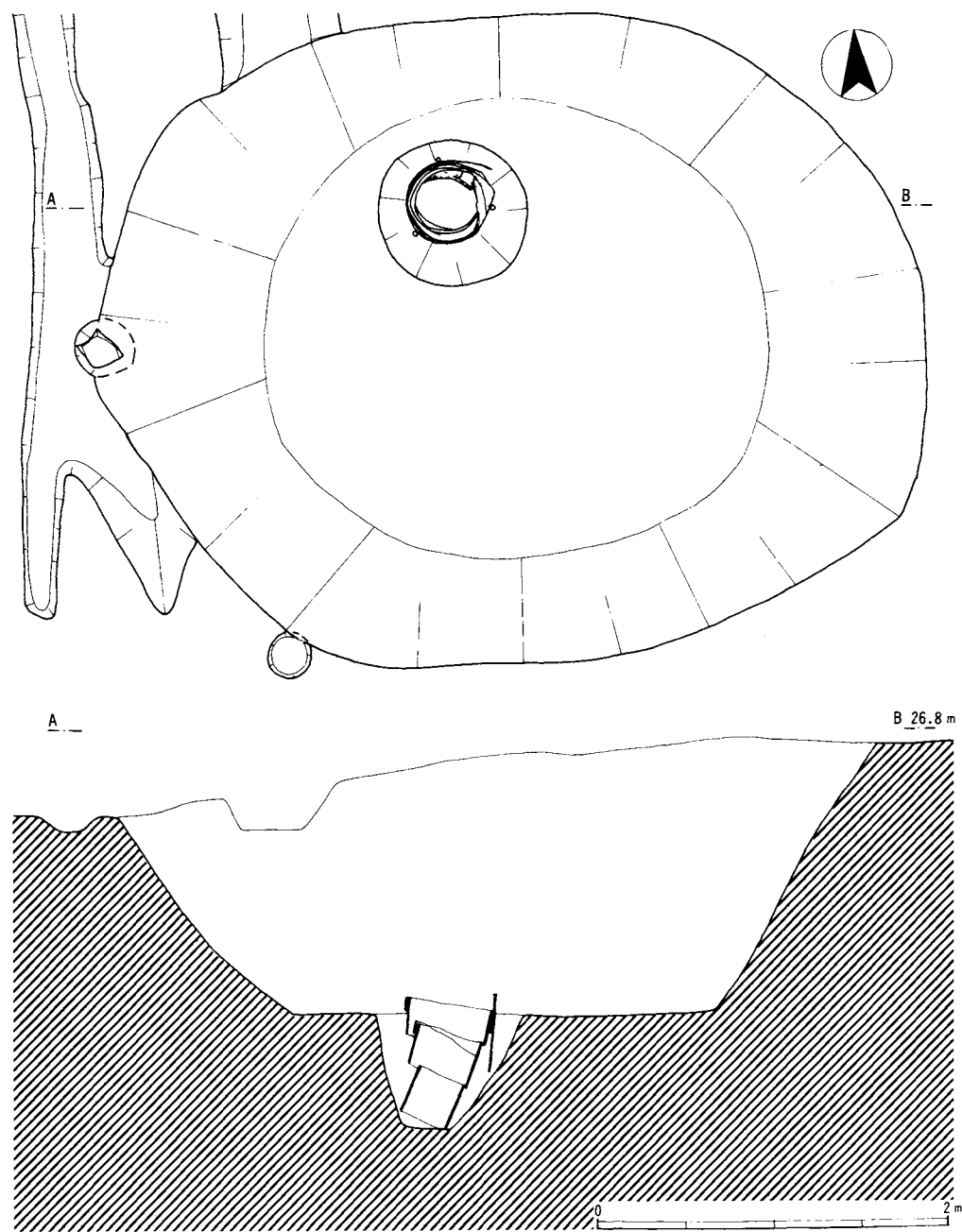
湾ぎみに立ちあがる。(2) は小さく口径10.6cmであり、(5) が大きく13.8cmである。なお、(4) は底部につぶれたワラ状の痕跡がある。

土師器鍋 (6～8)

(6) は頸部から口縁にかけて大きく外反している。口縁端は丸く仕上げられているが、内面に1 mm



第47図 愛場遺跡遺構平面図 (1:100)



第48図 SE3実測図(1:40)

ほどの段を持つ。胎土中には砂粒を多く含んでおり、磨耗が激しく器壁の調整技法等は不明である。(7)は口縁の外反がより大きく進み、くの字状になっている。口縁端部は内側に向かってつまみあげた後、折り曲げるように大きく内傾している。内面の調整にハケを使っているが、損耗が激しくナデの方向は不明である。(8)は口縁の外反がもっと進み口縁端部を折り返して段を作っている。

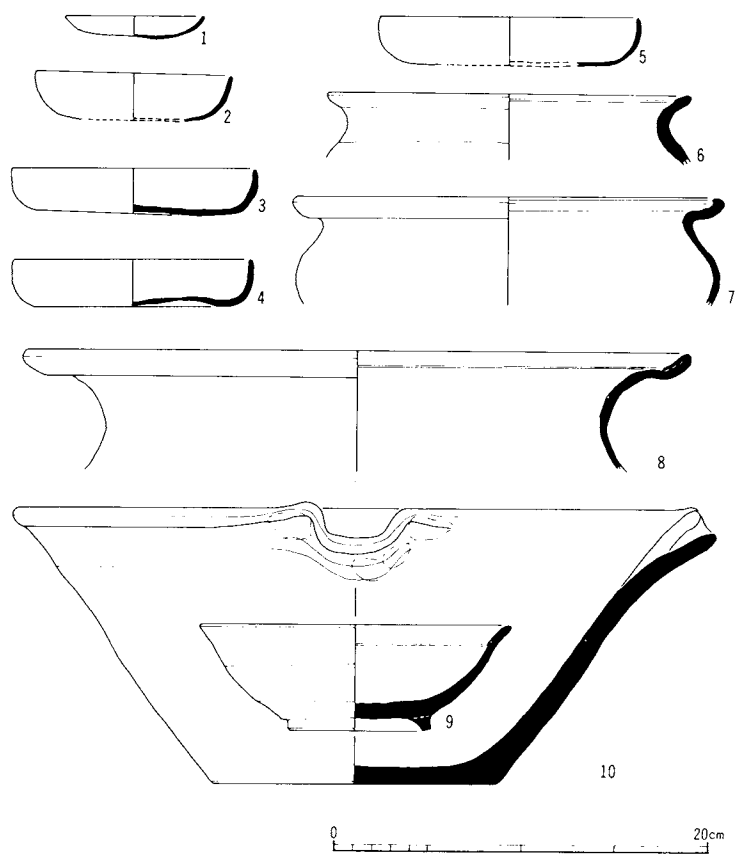
時期的には、鎌倉時代後半に置けるが、(6)～(8)になるにつれて新しくなるものと思われる。

山茶碗(9)

口径16.8cm、高さ5.6cmで、断面台形の高台がつく。高台の貼り付け方は部分的に雑な所もあるが、かなり意識的にていねいにナデつけている。底部には、かすかに糸切り痕が認められる。口縁はやや外反し、内面には口縁を引きあげた時の痕跡らしく、わずかな段差がつく。内面底部には重ね焼の痕跡が残り、自然釉がかぶっている。

練鉢(10)

口径36.4cm、高さ16cmの片口練鉢である。底部か



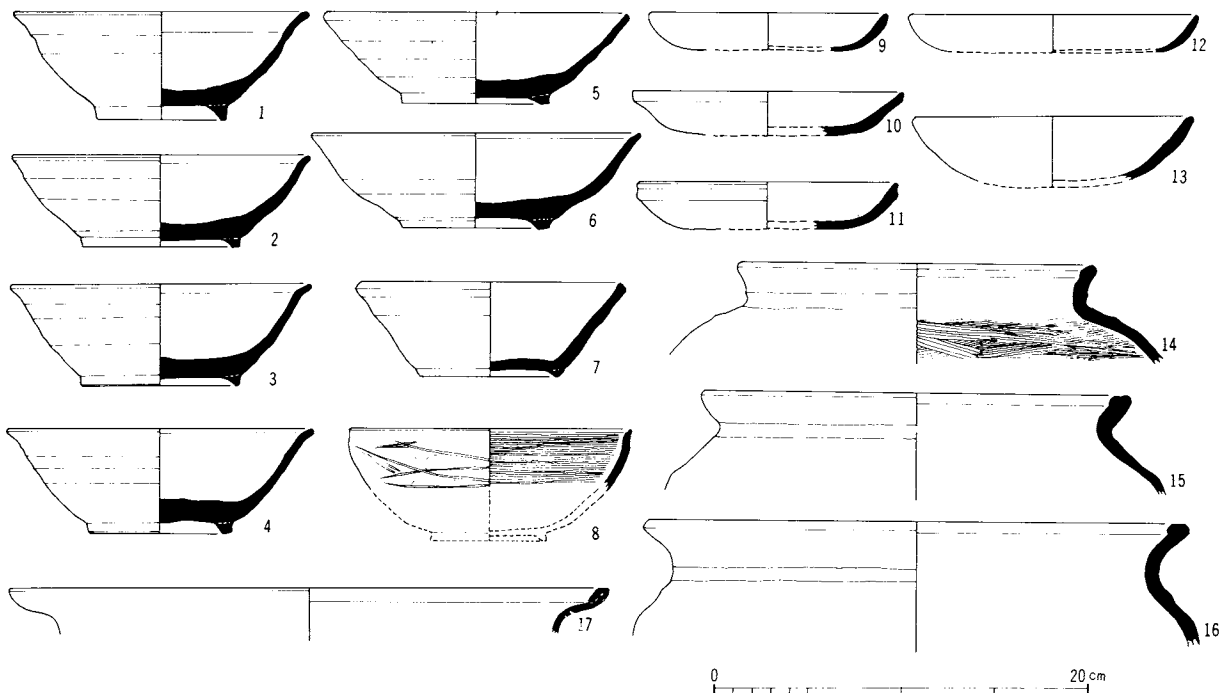
第49図 S D 2 出土土器実測図 (1:4)

らゆるく内湾しながら立ちあがり、体部中央あたりで外反している。口縁は玉縁になっており、一部分には調整段階で混入していた石が動いたことにより、溝状にくぼんでいる部分もある。片口の付け方は、内面を上方から押さえ、両端を外から押しつけている。口の両端には指頭圧痕が残り、内面上端にはナデ痕跡がそのまま残る。内面底部は、非常によく使用された様子で表面が平滑になっている。底はロクロを使用して削られており、小石の移動が見られる。高台は付いていないが、常滑産のものによく類似しており、高台が欠損後、使用に合わせて磨滅した可能性もある。時期的には13世紀後半に位置づけられよう。

B. S E 3 出土の土器 (第50図)

山茶椀 (1~7)

(1) は口縁部の立ち上がりが外反し、口縁端面を丸く仕上げる。高台は断面台形で、よくなでつけられている。底部には靱殻圧痕がある。(2) は口径の割に浅い。体部はゆるやかに内湾



第50図 S E 3 出土土器実測図 (1:4)

し、口縁は外反する。口縁端部は丸く仕上げられており、口縁端内面は面がとってある。高台は断面台形をしており、ていねいにナデられ貼り付けている。底部に穀殻痕がある。(1)(2)共に完形品であるが、(2)はSE3の曲物内より出土した。(3)は体部がわずかに内湾し、口縁が外反する。(2)と同じく口縁内面に面取りが施してある。高台は台形の断面を持つが、巾はやや狭い。高台の貼り付けもていねいにされている。(4)は体部が内湾ぎみに立ち上がるが、口縁の外反も大きくない。高台の仕上げはていねいである。底部には糸切り痕が明瞭に残る。(5)は立ち上がりがかかなり直線的である。口縁端は丸く仕上げているが、外側に丸みが大きい。底部にはわずかに糸切り痕が認められ、高台底部に穀殻圧痕がある。(6)は体部が内湾するが、口縁部はあまり外反しない。高台は低く、高台底部にワラ状の圧痕がある。(7)は直線的に立ち上がり、口縁端は外側に面取りをしたようになっており丸く仕上げられていない。底部は糸切り痕がはっきり残り、高台は丸く低い。なおこの山茶碗の底部に墨書痕があるが、薄くて判読できなかった。

瓦器碗(8)

口縁のみの小片である。口縁端には浅く沈線が入り、器壁はかなりの厚みがある。内面の暗文は、幅約1mmで密に施されている。外面にもかなり粗いが暗文が施されている。他に瓦器の底部が1点SE3から出土している。時期的には12世紀後半に位置づけられる。

4. 小 結

西村遺跡・愛場遺跡はともに鎌倉時代～室町時代に至る集落であることがわかった。特に愛場遺跡については、調査面積が220㎡と狭いにもかかわらず、多くの遺構と遺物が出土した。遺構としては、1棟の掘立柱建物と1基の井戸と1条の溝、それに数基の土壇である。

愛場遺跡の井戸(SE3)からは、曲物を使用した井筒も出土している。この井筒は残存状況が良かったためか、3本の細い竹を使って曲物が崩れないように止めるなどの工夫もされていた。このような

土師器皿(9～13)

3通りのタイプが認められる(9)・(12)は器高が低く、口縁端部を丸く仕上げている。(10)・(11)は口縁端外側に面取りがしてある。調整はあまりていねいでなく、外面に指頭圧痕が残る。(13)は(9)～(12)よりもかなり深めで、椀のようなふくらみをもっている。いずれも磨滅が激しく、調整技法の詳細は不明である。

土師器鍋(14～17)

(14)は口縁端部に丸みを持っており、茶釜形になるものと思われる。内面にはハケメ調整が施されている。(15)は口縁端上面にわずかなくぼみがあり、内面には一段の段がついている。(16)は頸部から口縁にかけて大きく外反しており、口縁端に折り返しが見られる。(17)は口縁端上面にくぼみがあり、内面に(15)より明瞭に段ができていいる。これらの鍋はいずれも外面に煤が付着しており、かなり使用されたと考えられる。

曲 物

SE3の井筒として使われており、3段に組み合わせてあった。最下段に使用されていたものは直径約38cm・高さ約28cmである。二段目は直径約40cm・高さ約27cmで最上段は直径約48cm、高さ約20cmと小さい物を下にしていいる。井戸内の湧水が激しいことと、周囲を粘土で固めてあったため、曲物の残存状況は良好である。内面は木目に直交して細い切り込みが入っている。曲物の板の厚さは、およそ3mmほどであり、桜の樹皮を用いて止められている。

例は県内ではまだ発見されたことがなく、今後の類例をまって検討を加えたい。また曲物内には完形の山茶碗(第50図-2)や土師器片等が入っていた。この山茶碗の形式は、瀬戸市歴史民俗資料館の『研究紀要1』の山茶碗の型式分類によると、第Ⅱ段階の第4型式にあてはめることができる。ただ、上記の編年は窯跡の資料であるため、当遺跡においては若干の時期の下降があるものと考えられる。また、伊勢地方としては、数少ない瓦器碗も出土している。この瓦器碗については、畿内における瓦器についてなき

れている型式編年や、県内でも伊賀地方で多く出土している中での編年に照らし合わせて見ると、12世紀後半に位置づけられる。これらの点から、この井戸（SE3）の埋没時期は12世紀後半をさかのぼらないものと考えられる。以上の山茶碗や瓦器碗の他に、極めて小片ではあるが青磁片も出土しており、当時の物資流通の一端がうかがわれる。また、土師器の鍋や皿類、および山茶碗等の日常雑器類が多数出土しており、この時期における使用の組み合わせを知る上でも貴重な資料が得られたと言えよう。

西村遺跡は出土した土師器鍋等の形式から考えて愛場遺跡よりも若干時期が下る頃に営まれた集落で

あると言えよう。なお、県下においては土師器鍋の形式編年が完全には確立されていないのが現状であるため、確立を待つて時期差等を検討し直さなければならぬと考えている。

この両遺跡は直線距離にして300 mほどしか離れておらず、愛場遺跡から西村遺跡へと集落の移転がなされたものなのか断定は下されないが、何らかの関連性を考えて良いのではなかろうか。また600 mほど東にある池村城や、周辺に点在する中世城館等との関連性を追求することが、今後の課題として残された問題である。

（高見宜雄）

〈参考文献〉

- 新田 洋 「荘遺跡発掘調査報告」三重県教育委員会 1980
百瀬正恒 「長岡京出土の瓦器について」中世土器研究会 1981
川越俊一 「大和の瓦器について」 同上 1981

- 藤澤良祐 「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要1」
瀬戸市歴史民俗資料館 1982

Ⅶ 伊勢市円座町 ^{つか} ^{うえ} 塚の上 A 遺跡

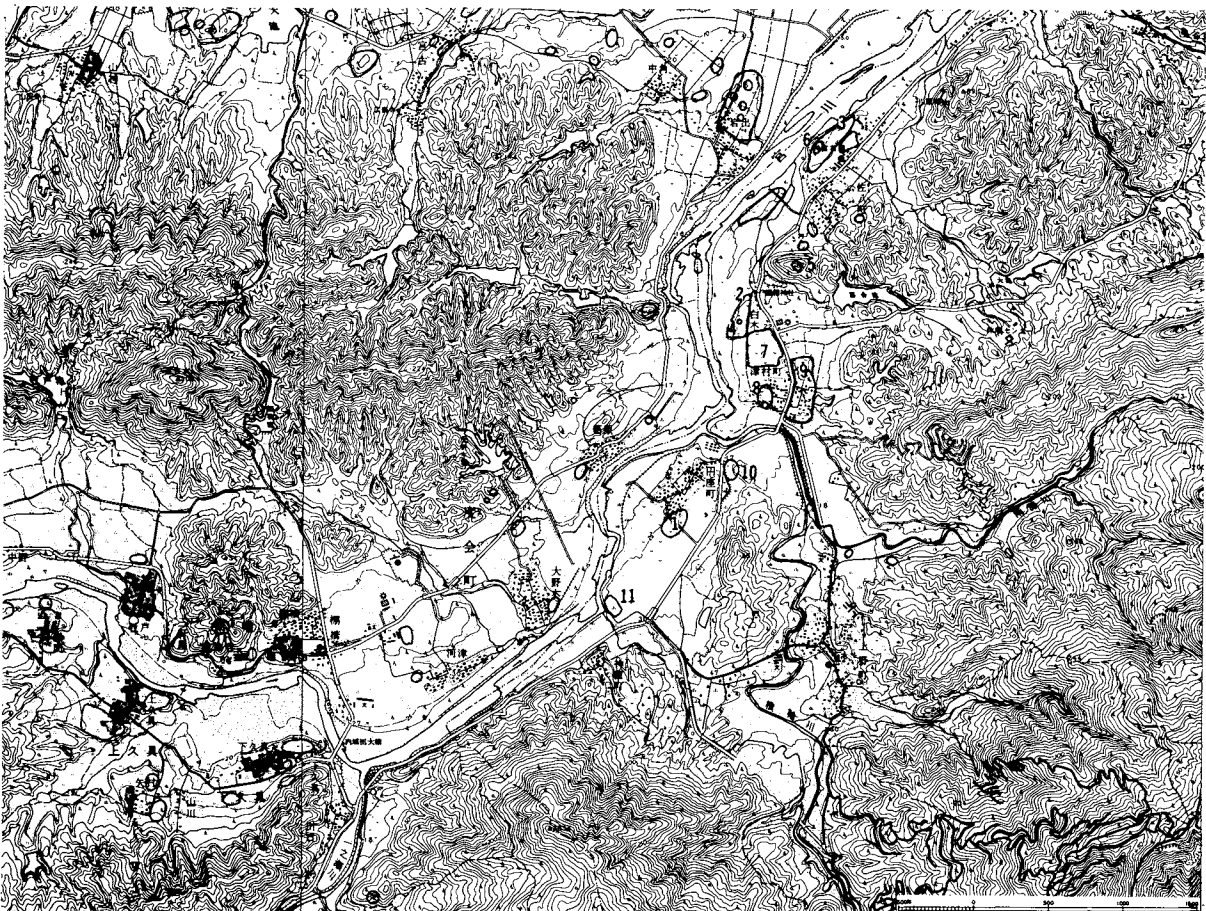
1. 位置と環境

塚の上 A 遺跡（1）は、源流を大台山系に求め蛇行をくり返しながらか東流し伊勢湾に注ぐ宮川下流域の右岸に広がる河岸段丘の中位面に所在し、標高は25m 前後である。周囲には水田と茶畑を含む畑地が広がる。

周辺には古墳時代以降から中世に至る土師器、須恵器等の他、縄文土器、石鏃、弥生土器、さらに約1～2万年前と考えられるナイフ型石器、ブレイド、スクレーパー等も採集されており、伊勢市内では唯一の明確な先土器時代の遺跡として重要度の高い元新田遺跡（2）がある。また、縄文時代の石鏃や岩偶などが採集されている佐八藤波遺跡（3）などの先土

器～縄文時代の遺跡が点在する。一方、古墳時代の遺跡としては、元新田遺跡内に包括されるが元新田古墳（4）、一部石室が露出している玉田山古墳（5）や前述の佐八藤波遺跡に隣接する佐八古墳（6）などがある。さらに中世を中心とする集落跡としては、昭和56年度に県教育委員会によって調査され、その実態が明らかになった中新田遺跡（7）、中新田遺跡の南に隣接する西垣外遺跡（8）、道路を隔てて隣接する北垣外遺跡（9）などがある。また、当遺跡の近くには中道遺跡（10）や乙部遺跡（11）なども所在する。

これら多数の中世の集落跡が集中している地域に



第51図 遺跡位置図（1：50000）

において、当遺跡の調査をすることになり、中世集落の変遷のあり方を解明する上において資料の集成が

できることを期待したい。

2. 遺 構

SD 1

東西排水路の西よりに検出された。南北方向に走る溝で、1.2～1.4 mの幅を持ち、深さは30cmである。埋土は黒色土（所謂黒ぼくと呼ばれる土）で遺物の包含は見られなかった。

SD 2

東西排水路の東側に検出された。SD 1と同じく南北方向に走る溝で、0.9 mの幅を持ち、深さは10 cmと浅い。遺物は何ら包含されていない。

SK 3

東西排水路の最東端に検出された。発掘区のコーナーに一部がかかったのみで全容は明らかではない

が、15cmほどの深さがあり、埋土には、鎌倉時代～室町にかけての土師器皿の細片が出土した。

SD 4

南北排水路の西壁に沿って南北方向に走る大溝である。2.2 mの幅を持ち、50cmの深さである。西側は現在の水田との境界のコンクリートによって、既に破壊されているが同様の幅で続くものと思われる。発掘区中央部に小さな土塚があり、その南側は2条に枝分かれするが、南端ではなだらかな段を呈し、1条の大溝として合流する。埋土には常滑焼の甕の肩部小片や山茶碗の底部小片、それに若干の陶磁器類が包含されていた。



第52図 遺跡地形図（1：5000）

3. 出土遺物

ほとんどが、南北排水路から出土した。

土師器皿

極めて細片であるため、口径、器高等は不明である。器壁の厚さは4mm弱であり、内面にヨコナデの痕跡が認められる。胎土には砂粒を含み暗黄褐色を呈する。東西排水路のSK3から出土した。

土師器鍋

東西排水路の最西端にあるピットより出土した。口縁部の小片である。口縁部は大きく外反するが、端部は内弯しながら折り返してある。口縁端内面は折り返した部分の内面をヨコナデして幅1.1cmの凹面を作る。凹面の境には稜線が1本走り、段をなして折り返しの部分に到達する。胎土には砂粒を多く含み黄褐色をしている。

山茶椀

底部のみの破片が2点出土した。いずれもSD4

の南側よりで出土した。1点は高台の高さが1.1cmで底部が丸みを持った三角形の断面をしている。高台の貼り付けはていねいにナデつけている。また、高台底部には穀殻状の圧痕が1点認められる。底部の糸切り痕はナデつけてあり薄く残る。内面には重ね焼きの痕跡が残り、暗緑色をした自然釉が厚くかかっている。胎土中には砂粒等は含まず、割り合いに精製された粘土を使用している。他の1点は底部が薄く、糸切り痕がそのまま残る。高台は低く丸みを帯びたものである。内面には底部の輪郭に一条の凹線が入る。胎土は砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。

常滑焼の甕

常滑焼の甕の肩部に当たる部分の小片であるため時期等は不明である。外面には方形の格子を持った叩き目を有する。内面は荒くヨコナデされており、胎土に砂粒を含む。



第53図 発掘区平面図（1：2000）

4. 小 結

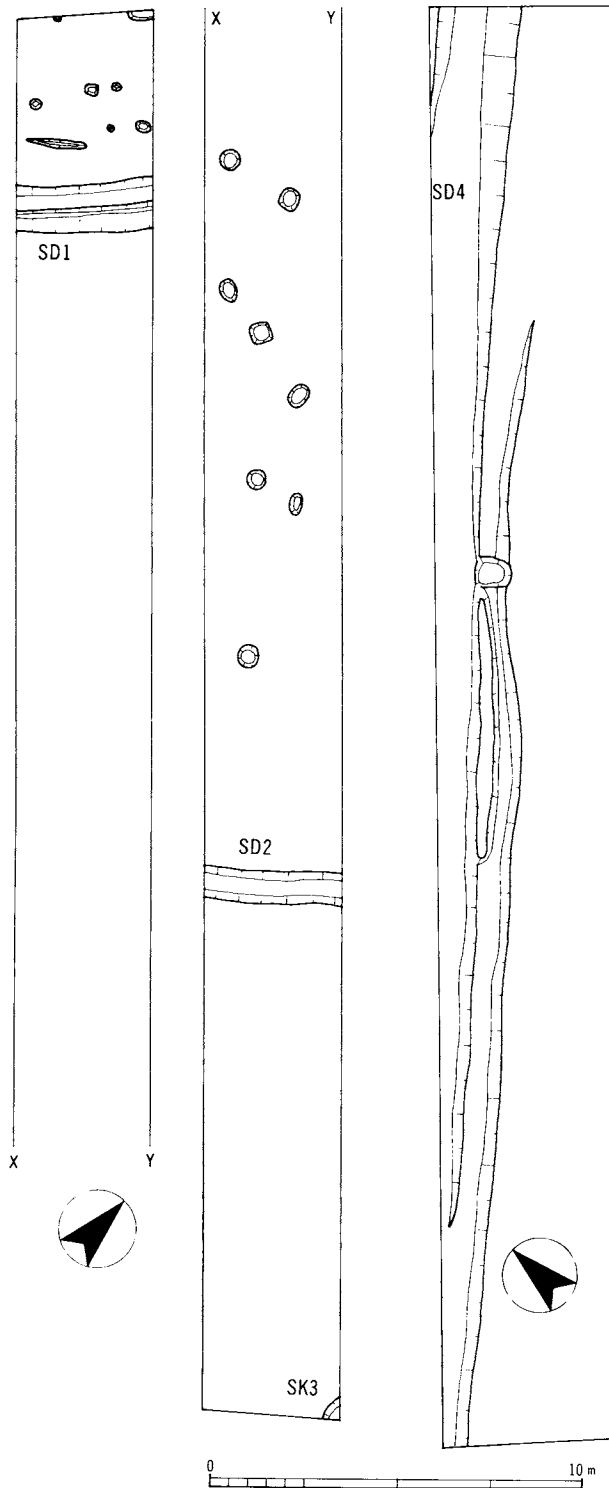
遺構・遺物の出土状況が極めて少なく遺物の遺存状況も極めて悪く図化できなかった。しかし、近辺には多量の土器が採集できることや、南北排水路か

ら検出されたSD4のようにしっかりした溝跡が確認されていることから、近くに集落が存在し、その集落の区画溝とも考えられるため、今回の調査区域は遺跡の縁辺部と考えられる。なお、位置と環境の項でも若干触れておいたが、多数の中世集落跡が存在する。これらの中世における集落跡は、表面に散布する遺物の形態から見ると、宮川の流れに対し下流から上流（北から南）へと漸次移動していく傾向がうかがわれる。このことは、遺物の表面観察によるだけであり、一概に断定することはできないが、中世における集落の広域化、あるいは神宮領荘園や御厨等とのからみによる土地の占有・開墾等とも関連があるかも知れない。

昭和56年度に県教育委員会が主体となって調査を実施した中新田遺跡では、鎌倉時代後期に比定し得る遺物の出土を見ている。遺構としては、掘立柱建物、堀等があるが、掘立柱建物のほとんどの柱穴には底部に根石を持ち、礎石建物への移行が見られるなどの点があげられる。

以上のような中世における集落跡の変遷をたどる中で実施した今回の調査において、いくらかの成果を期待したが、集落の縁辺部と思われる結果のみであったことは非常に残念である。今後の調査によって類例の増加を待ち、中世集落跡の変遷を解明する足がかりができることを期待したい。

(高見宜雄)



第54図 遺構平面図 (1:200)

VIII 大山田村広瀬 たなか 田中遺跡

1. 位置と歴史的環境

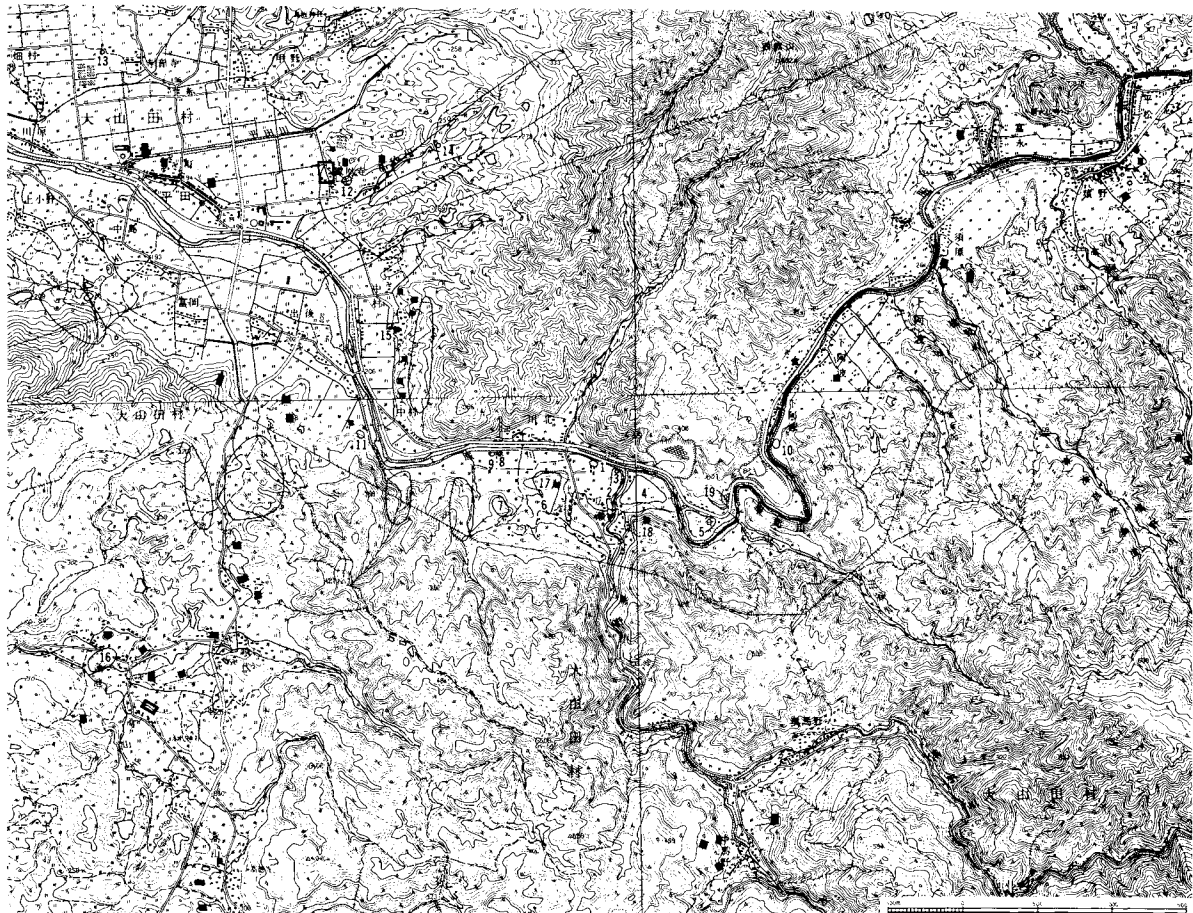
昭和55年度の県営圃場整備事業にともなう発掘調査^①の結果、従来の沢A遺跡を改称した田中遺跡は、行政上、大山田村広瀬字田中689番地他に属する。

東を旧阿波村、西を旧山田村と接し、旧布引村に属していた広瀬は、大山田盆地の中央部を西流する服部川の中流域に位置する。布引山地西麓から端を発する服部川は、旧阿波村を経て、三谷、広瀬までは、浸食作用により、土地を下方に深く刻みつつ流れる。加えて、二度にわたる土地の隆起をうけた広瀬は二段の河岸段丘を形成している。

田中遺跡(1)は服部川左岸の標高227m前後の下位河岸段丘上に位置し、その範囲は発掘区を中心

に数千㎡に及び、現況は畑と水田で、南隣接地は宅地や畑となっている。北は100m余で、現河床標高219mの服部川に至り、東は100m余で、北流して服部川に合流する馬野川に至る。馬野川左岸には、南北に巾80m位の帯状に広がる沢遺跡(2)があり、沢古墳(3)は、その北端に位置する。馬野川右岸は、奈良時代～平安時代の竪穴住居28棟を検出した歌野遺跡^②(4)があり、東方服部川右岸には同時代の竪穴住居11棟、掘立柱建物3棟を検出した三谷遺跡(5)がある。

本遺跡の西の標高243m前後の上位河岸段丘上には、70棟の竪穴住居、10棟の掘立柱建物を検出した



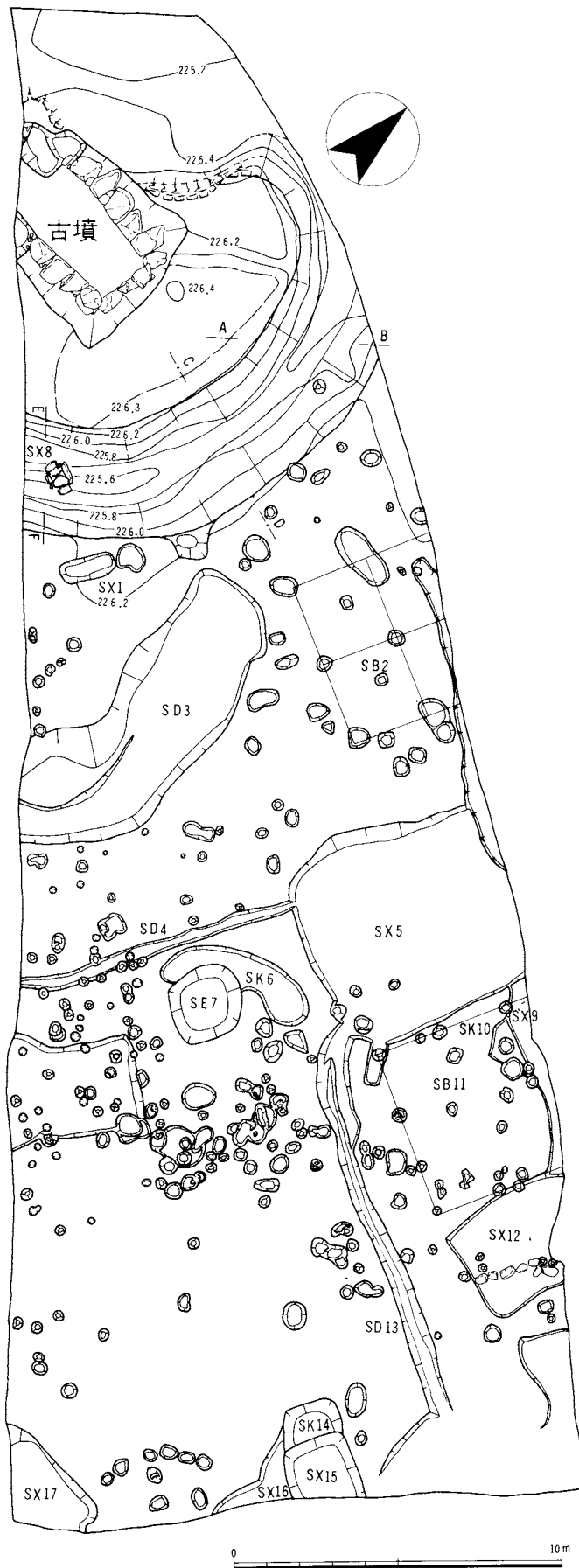
第55図 遺跡位置図(1:50000)



第56図 遺跡地形図(1 : 5000)



第57図 発掘区平面図(1 : 2000)



第58図 遺構平面図(1:200)

古墳時代から中世にかけての集落跡である西沖遺跡^③(6)が所在する。その西には、丸山古墳群(7)や横枕1・2号墳^④(8・9)がある。

大山田盆地を時代別にみると、縄文時代では、前期の土器片を出土した平林古墳^⑤や後期の土器片を出土した川久保遺跡^⑥(10)があり、弥生時代では、沢遺跡、高北遺跡(11)、轟遺跡(12)が知らされ、古墳時代では数多くの古墳が所在し、地域の古墳分布濃度を示している。

盆地の北西端には伊賀最古とされる車塚古墳、同中央部には馬蹄形の周溝を水田区画に残す寺音寺古墳(13) 東部山麓には後円部に横穴式石室をもつ鳴塚古墳(14)などの前方後円墳がある。かつて発掘された辻堂古墳^⑦(15)、平林1号墳、横枕1・2号墳などは横穴式石室を内部主体とする後期古墳であり、さらに盆地の東部、南部の山間部には群集墳が集中している。

奈良時代から平安時代になると、西沖遺跡や三谷遺跡、歌野遺跡、蓮池代遺跡(16)などが発掘調査により大集落跡として確認されている。室町時代では、土豪たちの城館が盆地全体では多く築かれるが、広瀬では浜田氏堡(17)、井堰山城(18)が知られているにすぎない。

2. 遺 構

昭和55年度の第一次調査で、田中遺跡は平安時代から室町時代にかけての遺構・遺物が出土する集落跡であることが確認された。

今回の発掘調査は約600㎡に及んだ。その結果、古墳時代後期の横穴式石室を持つ古墳、平安時代末から鎌倉時代にわたる中世墓・掘立柱建物・溝・井戸・土壇などが検出された。

遺跡の基本的な層序は、第1層に水田耕作土が20~40cm程あり、第2層にマンガ

を多く含んだ茶褐色土の床土が続き、第3層に遺物包含層が続く。第3層上部は褐色砂質土である。下部は、遺構面がやや南から北へゆるやかに傾斜している事に対応して発掘区の北半分に認められ、発掘区北辺では40cm程の厚みとなっている。第4層は地山で、明褐色砂層となっている。

(1) 古墳時代の遺構

田中古墳

1. 墳丘 (第 ㉙)

発掘開始後、第1層最下部の赤茶色土層の掘り下げ過程で、大石が石室状に並んでいる事を確認してから墳丘部の調査が始まった。

もともと墳丘部が砂質土できているため、崩れやすい上に、新道建設や水田耕作で消滅した部分も

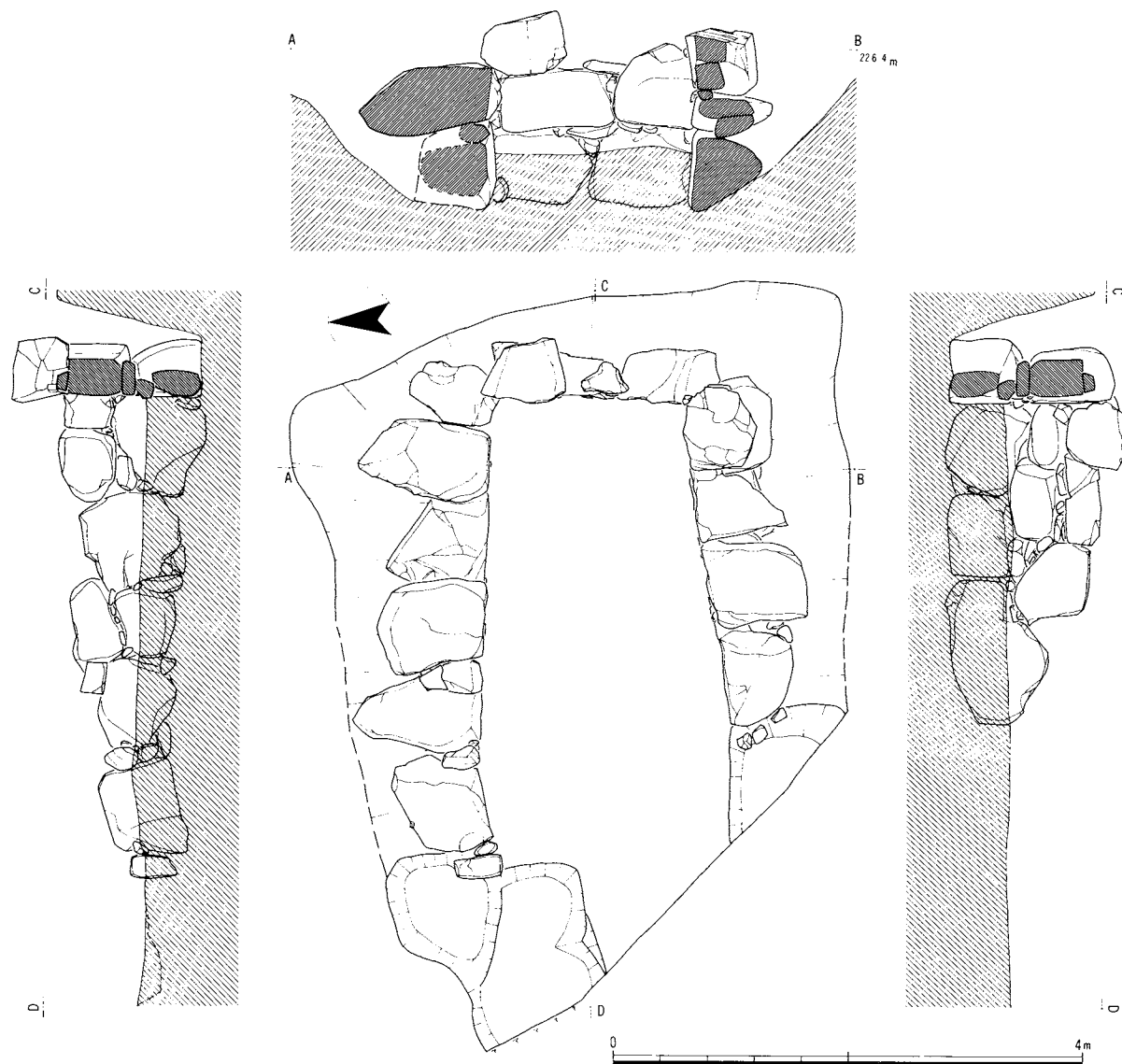
あり、全体の形は不明である。ただ奥壁と東側の周溝との間で墳丘下部を検出した。残存墳丘部高は約30cmで墳丘部の土は締った感じの明褐色砂質土をしているが、断面観察では盛土とは認めがたいものである。

2. 周溝 (第 ㉚)

調査区西端で、古墳を発掘したため、周溝の検出も部分的で、弧状に延長14mを検出した。

周溝の幅は約3.5mを有し、底部は約1mの幅を持ち、深さ数十cmを測るが周溝の断面は墳丘側の傾斜の方が周溝外側の傾斜よりきつい状態である。

周溝のセクションの土層は、第一層が表土で30~40cm、第2層が旧表土で厚いところで約40cm程あり第3層が褐色系砂質土の周溝埋土となっており、須恵器(杯蓋・高杯)や土師器、瓦器などが出



第59㉙ 石室実測図(1:60)

土している。第4層は地山の明褐色細砂となっている。

3. 主体部 (第59図)

主軸をN87°Wに置く右片袖の横穴式石室である。ただし、残存する石組が玄室部に限られたので、玄門の位置が初め明らかでなかった。発掘終了近くになって新道建設のため破壊された石室の西側に当たる部分を調査中、玄門部に据付けた石の抜き取り穴を検出した。このため、北側に片袖をもつものであると考えている。

現存する石室の規模は玄室の長さ4m、奥壁での幅約1.65m、推定できる玄門の幅は約1.6mであろう。

石室の構築は、奥壁、西側壁とも、最下段に角ばった大石(幅70~120cm、高70~80cm)を用い、各石の90度は床面下に据付け埋められる構造である。

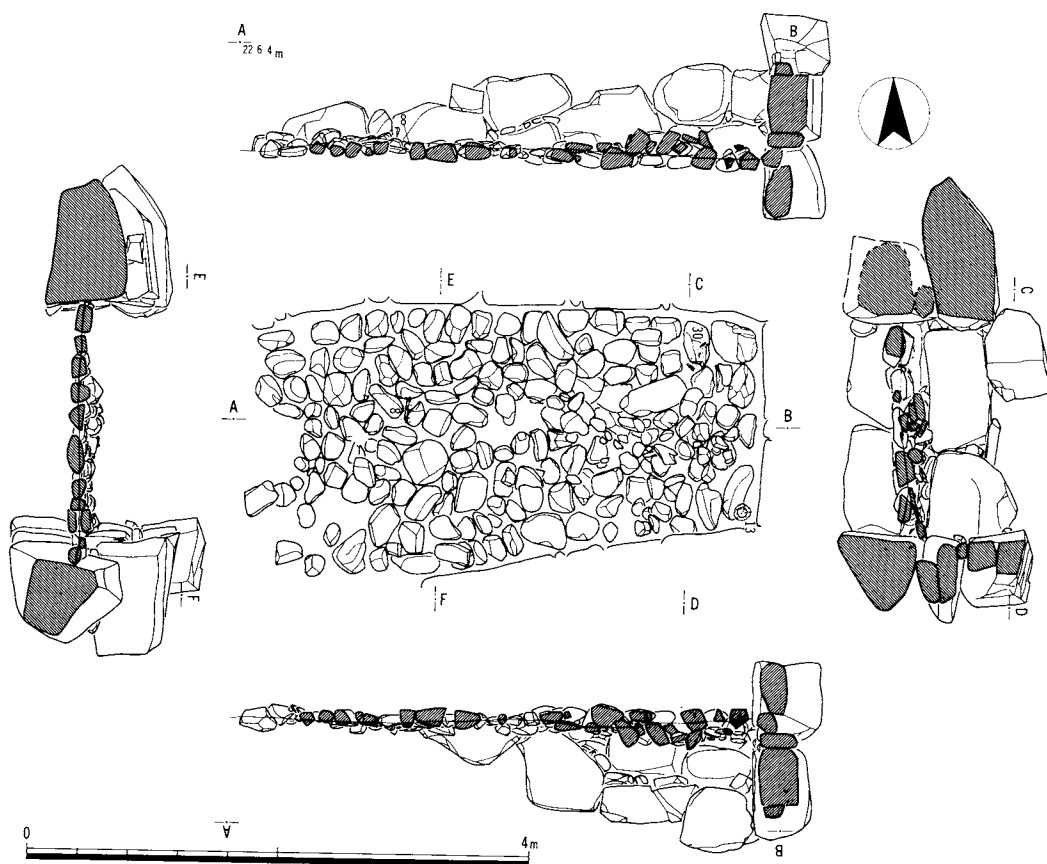
奥壁は、細長い石を2個横長に置き、その上には

ぼ直に二石目を積み、三石目からは持ち送りにしている。垂直の壁高は、床面より65cmを測り、三石目上部で80cmを残し、これより上部は欠失している。北壁の最下段は、5石が残存し、奥壁、玄門側の各1石の石が横長に、残りの石は縦長に置き、二石目の奥壁側の石は、逆に縦長に積み上げ構造的に強化する状況が考えられる。南壁の壁面構成もほぼ同様であり、三石目から持ち送りが強くなる。南壁は床面より約1.05mの高さで遺存する。

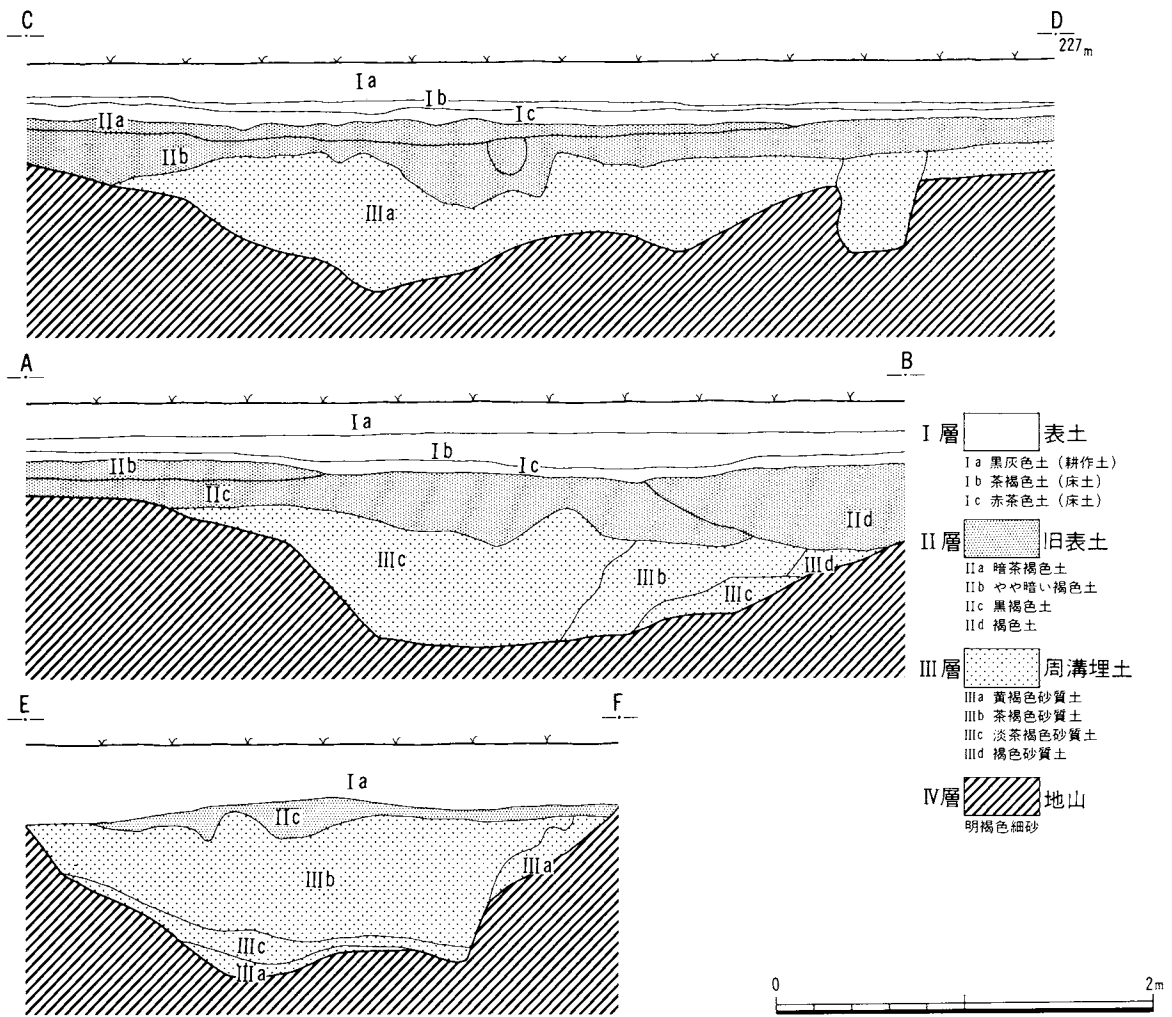
各壁の関係は、片袖のある北壁に対し、互いに直交し、南壁は約100°の開きとなっている。

床面は、径20~30cmの石を敷き詰められている礫床である。北壁側は整然とした敷石状態であるが、奥壁、南壁側は重なりあっている石も少なくない。礫床の標高は225.6mである。

遺物は攪乱により原位置を離れるものが多く、わずかに原位置を保つと考えられるものは、奥壁近く



第60図 礫床実測図(1:60)



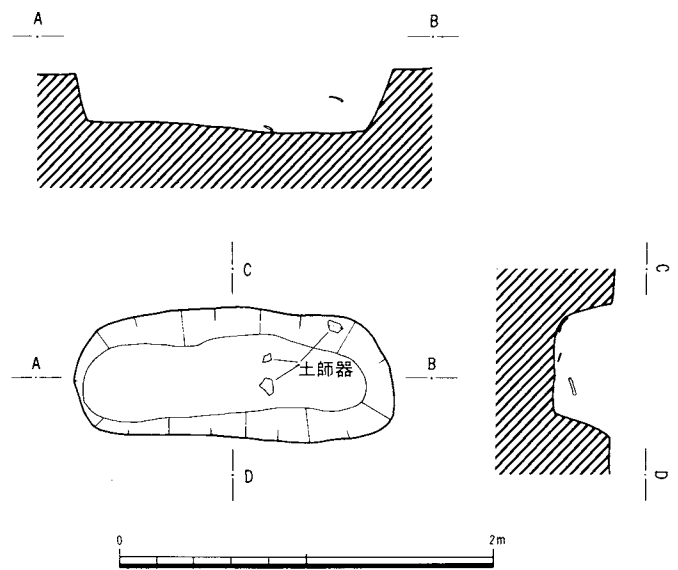
第61図 周溝断面図

の礫床直上で検出された土師器の甕 (13) と鉄鏃 (30) である。須恵器の高杯 (8) は礫床直上及び石室埋土中に破片が散っていた。埋土からは、須恵器の杯蓋 (1・2) 杯身 (3・6)、高杯 (9・10)、瓦器片、鉄芯金銅張鏑 (29) などが出土している。

S X 1 (第62図)

石組の中世墓の東 2 m に位置し、形状は隅丸の矩形で、南北に 1.7 m、東西に 0.7 m、深さ 0.34 m を測る土壇墓である。

遺構埋土の上層は黒褐色砂質土で、人骨片や炭化物などを包含しており、下層には人骨片、炭化物、土器片などが埋もれていた。遺構の底部や肩には土師器片 (14) が埋没時と考えられる状態で出土していた。

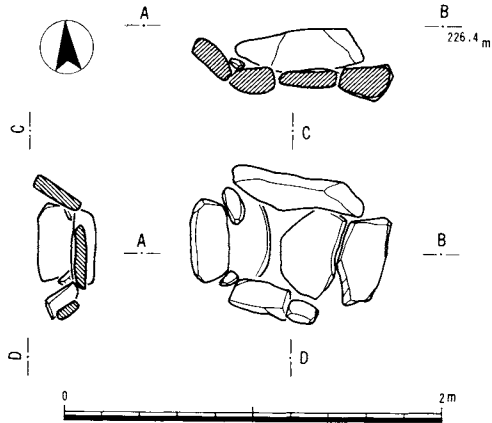


第62図 S X 1 実測図 (1 : 40)

(2) 中世の遺構

S X 8 (石組の中世墓 第63図)

発掘区南辺の古墳の周溝上で検出された石室の中世墓である。表土及び遺物包含層の除去と古墳の周溝検出中に40cm前後の河原石が集中して検出され、



第63図 S X 8 実測図(1 : 40)

精査の結果、箱状に組まれていることが明らかになった。

中世墓は、ほぼ東西に細長く、西の奥壁は横長に45×21cmの一石で築成され、両壁も石を横長に何石か用いたようだが、北では73×20cm一石、南では32×18cmと16×12cmの二石が遺存するのみで、東部分は欠失している。各壁の石の上端はやや外側に開き気味で、床との高さは奥壁で18cm、北の奥壁で22cm、南の奥壁で14cmを測る。床面はおおよそ30×50cmの細長石を西の奥壁から縦長に間隙もなく三石遺存し、各石の端部上面は三方の壁を構成する各石の下端に接するか、この下端と同一レベルにある。この石組の中世墓で埋葬できる幅は40cmである。長さ85cm、高さ14cmまでは確認できたが、それ以上は不明であり、埋土には瓦器、土師器の細片及び炭も若干含まれていた。尚、中世墓の掘形については検出されなかった。

S B 2 石室の奥壁より東11mの位置で検出された2間×2間以上の建物である。

東西の2間は2.6mの等間であり、南北の柱間は2.4mであるが、これだけの検出では棟方向の判断は無理である。柱穴は掘形径40～80cm、深さ16～35cmと様々であり、検出された北西のP i tは土塚で消滅している。各々の柱穴からは、瓦器と土師器の細

片が出土しており、黒褐色砂質土が柱穴の埋土である。

S B 11 南北2間(4.2m)以上×東西3間(5.2m)の建物で南北の柱間は2.0m+2.2m、東西の柱間は2.0m+1.8m+1.5mであり、柱穴はほぼ径30～40cmの掘形を持ち、深さは10cm前後と30cm前後が、交互にならぶ。柱穴埋土は黒褐色砂質土で瓦器の細片が出土している。

S D 3 発掘区中央で弧状に、幅3.5mの溝を10mにわたって検出した。弧状の内側の溝肩には石垣状の石列が1～2段程度認められ、溝の南側と北側の底部での比高は10cmを測り、深さは40cmである。埋土には大小の様々な石が混入しており、瓦器片などが出土した。

S D 4 発掘区中央で南北に走る幅40～50cm、深さ40cmの溝で、北端はS X 5に流れこむ。埋土に瓦質の羽釜(27)、瓦器、土師器が出土している。

S D 13 S X 5から東に走る溝で、全長12m、幅50cm、深さ20cmを測り、S D 4とは互いに直交する位置にある。埋土に土師器の羽釜(28)、瓦器の椀、皿などが出土している。

S X 5 発掘区北辺中央で、一辺6m以上の矩形の遺構を検出した。遺構は池とか溜池などの水にかかわる可能性もある。遺構の深さは30cm位で、人頭大から拳大の石が礫群のように堆積しており、池、溜池などにかかわるものとすれば、その間を水はS D 4→S X 5→S D 13に流れていたと考えられる。埋土には黒褐色土あるいは黒褐色砂質土がつまり、瓦器片が多数出土している。他に青磁、瓦、土師質の羽釜がある。

S X 9 発掘区北辺で帯状に検出された性格不明の遺構で、規模0.3～1.2×6m、深さは10cmを測った。瓦器が出土している。

S X 12 S B 11の東に接し、3.1×4mの矩形で深さ15cmを測る。遺構には、20×40cmの石が横長に7石置かれていた。瓦器、土師器、灰釉片が出土している。

S X 15 発掘区東辺中程で、2.1×2.1m以上の隅丸形状に検出された。埋土上層は黒褐色砂質土で、下層は暗褐色砂質土で瓦器椀片を多数出土している。

S X 16 北側でS K 14、S X 15と重複する。東側は

発掘区外となっており、形状・規模ともに不明である。残存は2.1×2.5×3.5mの三角形をしており、深さ30cmを測る。須恵器、土師器、瓦器が出土している。

S X 17 発掘区南東隅で検出し、南及び東の調査区外に続く。北辺は約3m、深さ50cmを測る。遺物は出土していない。

S K 6 発掘区中央で幅1m前後の帯状を呈する遺構を検出した。深さ20cm、長さ4.5mを測り、S E 7と重複している。埋土は暗褐色砂質土で、瓦器多数、陶器片若干を確認した。

S K 10 北側でS K 9と重複し、深さ10cm、一辺1.5mの三角形状に残り、遺構底部で瓦器碗(18)、須恵器の杯(4)を検出した。

S K 14 1.8×1.0mの隅丸矩形状を呈し、深さ50cmで遺存する。S X 15と重複し、土師器、須恵器、瓦器片を出土している。

S E 7 発掘区中央付近で、一辺2.3mの隅丸方形の素堀井戸を検出した。深さは3.6mを測り、底部は径1.3mの円形になっている。断面はU字形をしており、南壁は垂直に近く、北壁は急傾斜になっている。埋土は5層からなり、第1層は黒褐色砂質土で、65cmの厚みを持ち、径10cm内外の礫や瓦器片を含む。第2層は暗褐色砂質土で35cmの厚み、第3層は暗褐色の砂礫層で100cmの厚みをもち、第4層は褐灰色砂質土で50cmの厚みである。第5層は暗褐色砂礫層で110cmの厚さをもち、最下部にも瓦器、土師器片が出土している。

3. 遺物

遺物は遺物整理箱20箱を数えるが、大半は復元できない瓦器片である。

古墳時代の遺物では、土師器(甕、碗、皿)、須恵器(杯身、杯蓋、高杯、台付壺、甕)、鉄製品(鉄芯金銅張罽、鉄鏃)、平安・鎌倉時代の遺物では土師器(小皿、羽釜)、瓦器(碗、小皿)、瓦質土器(羽釜)、鎌倉以降の遺物では陶磁(播鉢、甕、碗、皿)、瓦、天目茶碗などが出土している。

(1) 古墳時代の遺物

A. 須恵器

杯蓋(1・2) 1は推定口径14.8cm、器高3.2cmの小片である。天井部内面に粘土紐の痕跡がみられ、内面と体部外面に横ナデがみられる。天井部外面は右まわりのロクロでヘラ削りされ、稜がつく。2は推定口径16cm以上の小片である。体部内外面は右まわりのロクロナデを受け、天井部と口縁部とのあいだに稜がつく。1・2は石室内出土である。

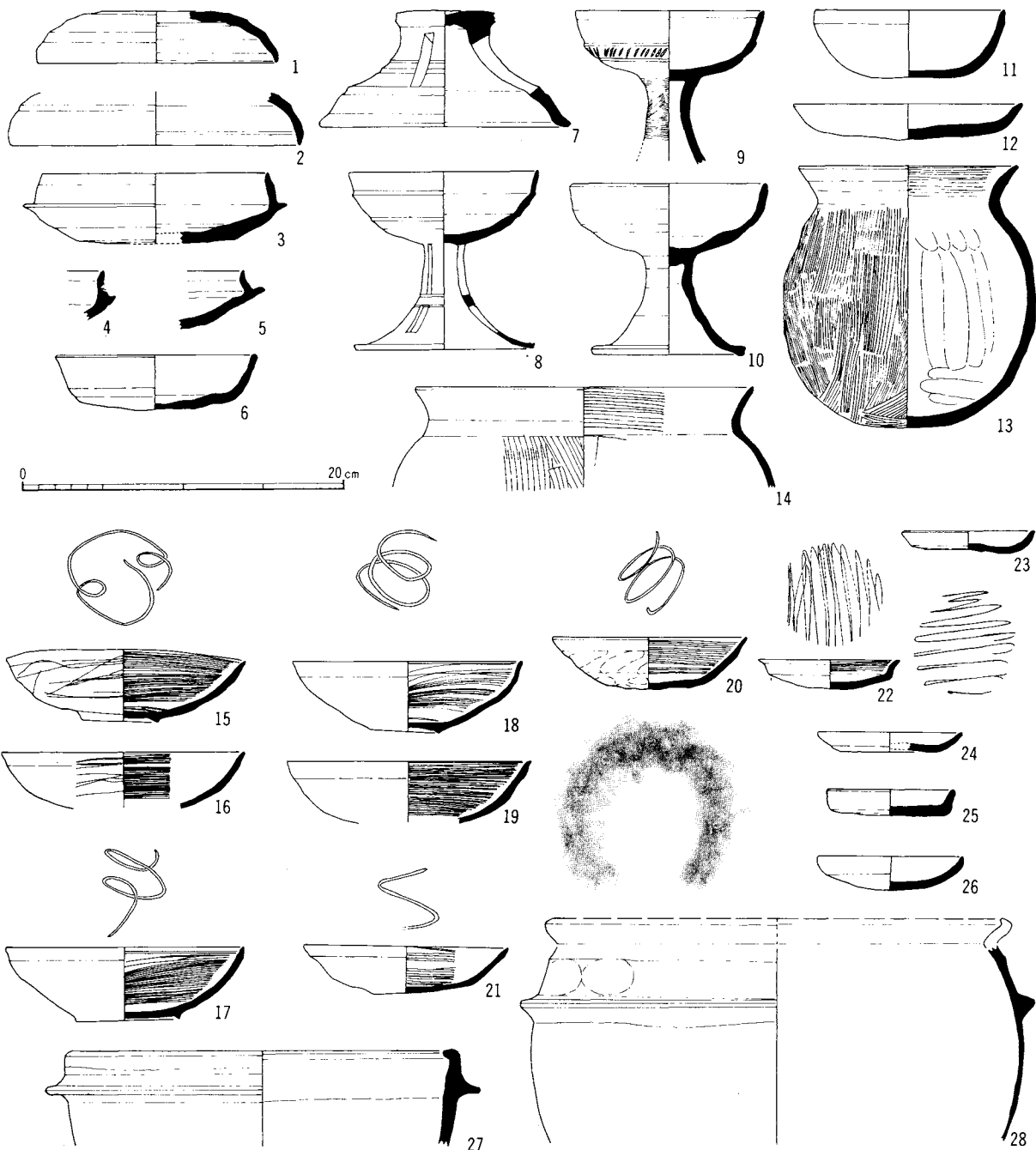
杯身A(3~5) 3は口径14.2cm、器高4.3cmである。たちあがりは内傾して長く、受部は水平に取りつき、共に端部は丸くなっている。内面及び立ちあがり外面は一方向にナデられ、底部外面は右まわりのロクロでヘラ削りされている。石室出土である。4は小片で、直にたちあがった端部は外反して、

丸くおさまっている。S K 10出土である。5は小片で、たちあがりは内傾しながら端部は少し外反する。包含層出土である。

杯身B(6) 口径12.5cm、高さ3.4cmである。底部外面はヘラ切りのままで、内面には一方向ナデが施されているが、粘土紐の痕をとどめる。体部内外面は右まわりのロクロナデがみられる。石室内出土である。

台付壺(7) 推定脚部口径15cm以上である。脚部一段、長方形の四方透しがつくが、1/2程の残存である。脚部内面は右まわりのロクロナデを施している。外面は灰かぶりで暗緑の自然釉がつく。脚部は下方へ開きながら、途中で形成した後内湾しながら端部に達する。端部下面は面を持つ。石室内出土である。

無蓋高杯(8~10) 8は杯部口径11.8cm、脚部口径11.0cm、器高10.9cmである。杯部は右まわりのロクロナデで、体部外面に段のつく稜線を等間に二本作る。脚部は二段三方に長方形の透しがつく。上段は幅2mm、下段は幅6mmで、この間にかすかな段がひとつつく。脚端部の外面が上下にのびて段をなす。9は杯部口径11.8cmである。体部は右まわりのロクロナデを受け、下方の二本の沈線の間には、櫛描刺突文がめぐる。杯部に貼りつけられた脚部外面



第64図 出土遺物実測図

にはカキ目がつき、内面はロクロナデされている。脚部下半は欠損する。9は杯部口径12.4cm、推定脚部口径 9.3cm、器高10.2cmである。杯内底部は乱ナデ、他は右まわりのロクロナデされる。脚部も同じロクロナデを受け、内面のしぼり目は顕著である。脚端部はやや凹みながらも幅4mmの面を外面にもつ。3個とも石室内出土であり、8は一部破片を礫床直上で検出した。

B. 土師器

碗 (11) 口径11.7cm、器高 4.2cmである。内面

をナデ調整し、口縁部外面は端部から約1cmの幅で横ナデ調整をして、口縁部と体部が区別される。体部外面には指押、底部外面には削り調整をする。胎土に1mm程の長石、金雲母を含み、色調は淡黄褐色で、近くが欠損している。P i tの出土である。

皿 (12) 口径14.2cm、器高 2.2cmである。口縁部は中程から端部にかけて外反する。口縁部内外面を横ナデ、底部内面をナデている。底部外面に煤が付着するが、器面は淡橙色で、胎土に径1mm程の小石と金雲母を多く含む。包含層出土である。

甕 (13・14) やや縦長の球形に近い体部から口縁がゆるやかにカーブしながら外反して端部にいたる。体部外面に縦方向、底部外面には不定方向、口縁内面に横方向の刷毛目を施し、口縁内外面を横ナデしている。口縁部内面と体部内面との間は指頭で押え、これから下部全体は指頭でナデアゲて、底部との間は、指頭で横にナデている。13の口縁部には粘土紐を輪積した痕がみえ、体部外面のやや下半部では部分的にヘラ削りして、その上に刷毛目を施している。口径13.5cm、器高16.3cmである。色調は淡黄褐色で、胎土は精良である。石室内礫床直上出土である。14では口縁部内面から体部内面への継ぎ目に粘土紐痕が残る。口縁部が5cm程残存し、胎土に1mm少々の砂粒を含み、色調は淡橙色である。S X 1の底部から出土した。

C. 鉄製品

鉄芯金銅張鏝 (29) 長径10.6cm、短径 6.8cmの楕円形で、厚み1mmを測る。残存状況は悪く、頂部の鉄地面と、右側中～下半部が上方へ屈曲し、全体に緑錆が生じている。金メッキは、全体に施された様だが、ほとんど剥落している。透し孔は六孔数え、孔の隅はやや丸みをおびる。石室内出土である。

鉄鏃 (30) 破片で数本を数え、大きいのは幅6mm、厚さ2mm、長さ6.5mmを測る。

(2) 平安・鎌倉時代の遺物

A. 瓦器

椀A (15・16) やや平な底部から内湾して開く体部に、断面三角形の浅い高台が貼り付く。内底部は連続輪状文を省略した暗文を施し、体部内面に間隙のないヘラミガキを施す一方、体部外面では粗略化する。口縁端内側には沈線が残り、口縁部外面では横ナデが認められる。15は歪みが大きい、完形である。体部外面のヘラミガキは底部付近まで施され、高台内外面は粗雑に横ナデされ、外底部は乱ナデされている。高台下部は0.5～1mm幅の面を持ち、棒状の圧痕や靱痕がついている。口径14.9cm、器高4.5cm、高台径4.7cm、器高指数30である。胎土は灰白色で、精良である。16は器形の残りが悪いが、口縁外面に強い横ナデが認められる。15・16はS E 8出土である。

椀B (17～19) やや球状の内底部から外湾して開く体部に、断面三角形の退化した高台が貼り付き、左右均斉がとれている。内底部の暗文は連続輪状文からラセン状文への移行を示し、体部内面のヘラミガキは間隙が生じ、体部外面には施こされなくなる。口縁端内側には沈線が明確に施こされ、口縁部内外面には横ナデが認められる。17は口径14.4cm、器高4.6cm、器高指数32である。18は口径14.5cm、器高4.5cm、高台径4.4cmである。17・18の胎土は灰白色で精良である。19は器形の残りが悪いが、このタイプである。17は包含層、18はS K 10上面、19はP i tの出土である。

椀C (20) 高台のつかない小型の椀である。体部外面には強い指圧痕が顕著に残り、これが全体を歪み多いものとしているが、体部は直線的に開いている。口縁端内側に沈線を認めないが、口縁部は内外面とも横ナデされ、ヘラミガキは、体部外面では認められず、口縁端部から0.3～1.5cm下の体部内面に雑に施こされている。体部外面下部から外底部にかけて長径5mm程度の楕円形押圧痕が2.6cm間隔で外から内へラセン状に付いている。20の暗文はBに近く、口径12.1cm、器高3.2cm、器高指数26である。胎土は精良で、器面は灰黒色である。P i t出土である。

椀D (21) 内底部から内湾して開く体部に、退化の進んだ断面三角形の高台が糸状に貼りつく。内底部にはN字状の暗文を施し、体部内面には幅の広いヘラミガキが粗雑につき、口縁内側に沈線はなく、口縁外面に横ナデを施す。口径12.8cm、器高4.1cm、高台径3.9cm、器高指数32である。胎土は精良で、灰白色をしている。包含層出土である。

A～Dすべてに体部外面に指圧痕を認める。Aは軽く、Bはていねいに体部を上・下にわけて指おさえをする。Cは非常に強く押えてある。Dは雑に強く押えてある。A～Dすべての内底部は乱ナデを施こした後、暗文をつけている。

小皿 (22・23) 口縁部内外面に横ナデを施こし、内面をヘラミガキして、内底部にジグザク暗文を配する。22は口縁部下部が少しだけ直立ぎみに立ち上り、強い横ナデで端部が外方に折り返えされ、端部上面に面が生じ、体部との間には稜をもつ。体部・

底部に施された強い指圧痕により、外底部がやや凹状になっている。口縁部内面のヘラミガキはていねいで、体部に及んでいる。口径8.8cm、器高2.3cmである。胎土は精良で灰白色である。P i t出土である。23は底部が凸状に少しあがり、口縁部は外方へ開き、端部は丸くおさまっている。底部外面には水挽がみられ、口縁部内面のヘラミガキは粗雑に二回程つけられている。口径8.2cm、器高1.2cmである。胎土は灰白色で、細砂を含む。S X12出土である。

B. 土師器

小皿 (24~26) 手づくねで、外底部を指頭で押え、口縁をつまんで横ナデを施し、内底部はナデる。24は破片で、口縁外面と底部との間に、強い横ナデによる稜がみられる。P i t出土である。25は、口径8.0cm、器高1.6cmである。口縁部は直立しており、端部はやや外反している。S X15の出土である。26は口径 9.0cm、器高1.8~2.2cmで、歪みが大きい。体部内面にはヘラの刻痕が6ヶ所で直線的に残っている。刻みは下から右上にむかって入れられ長いもので 2.7cmで、横ナデで消えているが、口縁部に達

しているものもある。体部の外面には、径1~2mm、深さ 0.2mmの円形状の刻印が8ヶ所程認められる。刻印の内に0.2mm程度の刷毛目が何本か認められる。色調は黄白色で、ほぼ完形で、胎土には径4mmの小石も含まれるが精良で、焼成も良好である。P i t出土である。

羽釜 (27・28) 27は口縁長8.5cm、幅6cm程残存する瓦質の羽釜である。口縁部は内側に肥厚し、端部上面に幅1cmの面をもつ。口縁下部はやや内弯し、内面は横ナデされている。端部外面は直に体部と連らなる。鏝の厚み4mm、突出長1.3cmを測る。外面に煤が付き、胎土は精良である。S D13出土である。28は横12cm、縦13cmの破片で、土師質の羽釜である。残存上部内面は横ナデされ、その下にヘラ条痕が認められ、外面では鏝上部が指頭で押えられ、外面全体がナデられ、煤がついている。鏝の幅は体部で、1.7cm、突出長0.9cmを測り、頂部にやや面をもつが、断面三角形に貼り付く。胎土には砂粒と金雲母が多く含まれる。素地は淡灰褐色をしている。S D4の出土である。

4. 小 結

水田下で検出した田中古墳は、直径18~20m級の円墳と考える。この数値は、現存する孤状の周溝から推定して直径を求めたものである。田中古墳は、奥壁から見て右に袖部を持つ横穴式石室である。石室の規模は、玄室部で幅1.6~2.2m、長さ4.0mを測り、羨道部では幅1.6mであるが、長さは不明である。石室の築成には、構造的な造りが持ち送りなどでみられる。石室の床には石が敷かれ、礫床を構成している。出土遺物は須恵器(杯蓋、杯身、高杯)、土師器(甕)、鉄製品(鉄芯金鋼張鏝、鉄鏝)であり、6世紀後半部にあたるものである^⑨。ほぼ造営、埋葬は6世紀後半から7世紀初めにかけて行われた。

山田盆地の古墳の数は、200に近く、田中古墳を中心に数kmの範囲では170基を数える。その大半は盆地の東と南の山間部に限られ、盆地の古墳の東限は田中古墳の東方800mに位置する三谷古墳群(19)である。田中古墳より東方には、7基の古墳が確認

されている。山田盆地に氾濫を幾度ももたらした服部川は、広瀬地内で河岸段丘の低部を深く刻みながら、やがて、盆地の入口では水田との比高差2m前後を測る。服部川の肥えた土の堆積でできた盆地は古来、伊賀の穀倉地であった。やがて、安定した生産力を保持できるようになった社会には、開発をすすめ、生産力をより高めていこうとする階層の台頭がみられるようになり、各地方で、群集墳の急増現象を示した。盆地の古墳も大部分、この時期のものであり、恐らく2~3世代の間に、同時造営、埋葬は100基を下らないものであったと思う。古墳の規模に大差を認めないなら、これら群集墳の被葬者集団の性格はいかなるものだろうか。すでに発掘調査された古墳で、6世紀後半から7世紀前半に比定されている3基についてふれてみたい。

1.8km北西方の辻堂古墳は、両袖式の横穴式石室を持ち、径20m位の円墳ないし前方後円墳で、石室全長9.8m、玄室幅1.9m、長5.2m、羨道巾1.2~1.6m、

長 4.5 mで、組み合せ式石棺を持つ。遺物には、須恵器、土師器、鉄刀、金環、玉類がある。¹⁰0.8km西方の横枕2号墳は、片袖式の横穴式石室をもつ、径15～20mの円墳で、石室は玄室幅2m、長5.7m、羨道巾1.5m、長2.5mである。遺物は、須恵器、土師器、鉄刀などである。¹¹4.2km西方の平林2号墳は、両袖式の横穴式石室をもち、径18mの円墳である。石室は玄室幅2.1～2.2m、長さ5.1～5.3m、羨道幅1.4m、長2.8mである。遺物は須恵器、土師器、金環、玉類などである。¹²

田中古墳と上記三基の間に、遺構・遺物で強力な上下関係を示すものはないが、この相違は、支配する生産基盤の違いを示すにすぎない。

ところで、広瀬で水田地に残る古墳は田中古墳と沢古墳(3)の2基であり、服部川上流域では古墳は一基も確認されていないが、4km上流の猿野地内の大森遺跡で弥生土器が表面採集されている。多分、古墳時代には稲作が行われていたであろう。山田盆地を安定した穀倉地にしていった盆地の被葬者集団が、服部川上流域の阿波盆地も安定した水稲のできる土地にして行った事が想定できる。そうであるならば、田中古墳に阿波盆地経営を担った被葬者集団のひとり埋葬したと考えられるのである。

ところで、遺物については瓦器にふれてみたい。

田中遺跡出土の瓦器はA～Dの四形態にわかれた。Aは12世紀末、Bは13世紀前半、C、Dは14世紀前半のもの¹³と考える。AからBへの段階では、外面のヘラミガキが消滅し、暗文が連続輪状文からラセン状文に変わり、口径も15cm前後から14cm代へと小形化する。BからC、Dへの段階では、口径が14cm代から12cm代へとさらに小形化し、高台もかすかに糸状に残るか全く消失し、沈線は施されなくなる。C、Dの相異は時期差ではなく、ひとつの時代の多様性を

示すものである。暗文がラセン状文のCは伊賀型の主流であり、N字状のDは伊賀型の非主流とされている。¹⁴

C(20)のように外底部に楕円形押圧痕をもつ瓦器碗は伊賀での初の出土である。土師器皿(26)にも、やや小さいが、同種のもが見られる。同一製作集団が焼いたのかもしれない。

尚、報文中の1.は昭和57年度文化課埋蔵文化財発掘技術者研修生橋本俊士氏の執筆に依る。

(森前 稔)

(註)

- ① 『三重県埋蔵文化財年報11』 三重県教育委員会 1981
- ② 『三重県埋蔵文化財年報13』 三重県教育委員会 1983
- ③ ①に同じ
- ④ 中森英夫「阿山郡大山田村 横枕1・2号墳」『昭和54年度県営圃場整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1980
- ⑤ 『三重県埋蔵文化財年報9』 三重県教育委員会 1978
- ⑥ 『三重県埋蔵文化財年報12』 三重県教育委員会 1982
- ⑦ 森川桜男他「辻堂古墳発掘調査報告書」1973 大山田教育委員会
- ⑧ ⑥に同じ
- ⑨ 田辺昭三『陶色古窯址郡I』により、上限を出土遺物(1～10)でTK43～TK209と比定し、下限を宝珠つまみのつく杯蓋、高台をもつ杯身が未検出であることで判断した。
- ⑩ ⑦に同じ
- ⑪ ④に同じ
- ⑫ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報9』 1979
- ⑬ ①に同じ
- ⑭ 山田猛氏の教示による。

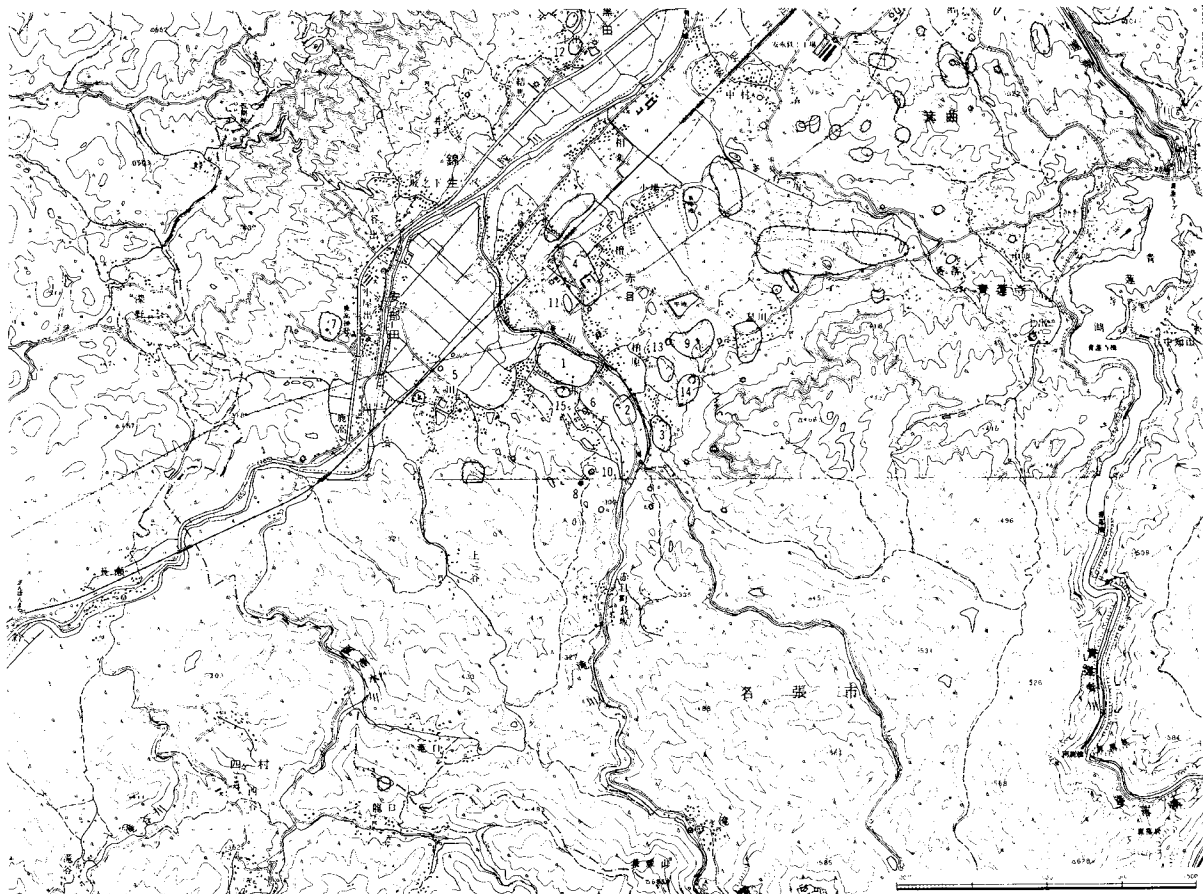
IX 名張市赤目町 ^{つじがい と} 辻垣内遺跡 ・ ^{かみひがしの} 上東野遺跡

1. 位置と環境

名張盆地周辺の雨水を集めて、山間部を開析してきた宇陀川、名張川は、標高 200m前後の盆地中心部で合流する。この間再三堆積と侵蝕を重ね、流域に沖積地を形成してきた。辻垣内^①、上東野遺跡^②は宇陀川の支流滝川左岸の標高 206～216mの礫層と砂層から成る沖積地に立地し、名張市南西部に位置する。行政上は、辻垣内遺跡(1)は名張市赤目町一ノ井字辻垣内 142番地外、上東野遺跡(2)は同柏原字上東野30-1番地外に属する。

名張市で現在確認されている縄文時代の遺跡は、赤目地区では柏原遺跡(3)、赤目壇遺跡(4)が知られている。弥生時代では、蔵持、錦生、箕曲地区などで弥生土器が出土しており、近くでは矢川

遺跡(5)、東日野遺跡(6)がある。古墳時代の名張盆地は県下でも有数の古墳群在り地である。北部の美旗古墳群と南部の古墳群に分れる。昭和54年に美旗古墳群の馬塚、女良塚、毘沙門塚、貴人塚、赤井塚が国史跡に指定され、前3者が中期のもので、後2者が後期とされている。南部の古墳群は、おおむね後期に属し蔵持、錦生、赤目、箕曲地区に群在している。遺跡の周囲 700mの範囲には30基近い円墳が所在する。横穴式石室をもつ前方後円墳では 2km西に全長45mの鹿高神社古墳(7)、0.7km南に全長35mの春日宮山古墳(8)、0.7km北東には琴平山古墳(9)が所在する。集落跡も明田山遺跡(10)、柏原遺跡、川尻遺跡(11)などが知られている。飛鳥



第65図 遺跡位置図(1:50000)

～奈良時代には夏見廃寺が有名で、昭和57年には飛鳥時代の竪穴住居22棟や、奈良時代の掘立柱建物28棟などを検出した鴻之巣遺跡がある。平安時代以降では、瓦器椀が多く散布する赤目壇や、溜り遺跡(12)などがある。中世城館では、滝野氏城跡(13)、宮城

館跡(14)、滝野氏城跡(15)などが知られている。

この様な歴史的環境の地域に辻垣内遺跡・上東野遺跡は縄文時代以降の複合遺跡として立地している。

2. 試掘調査

昭和57年度県営圃場整備事業に伴ない、赤目町一ノ井字辻垣内、同字東野、赤目町柏原字上東野、同字下東野の地内で試掘調査を、昭和57年5月18日より同月25日まで実施した。

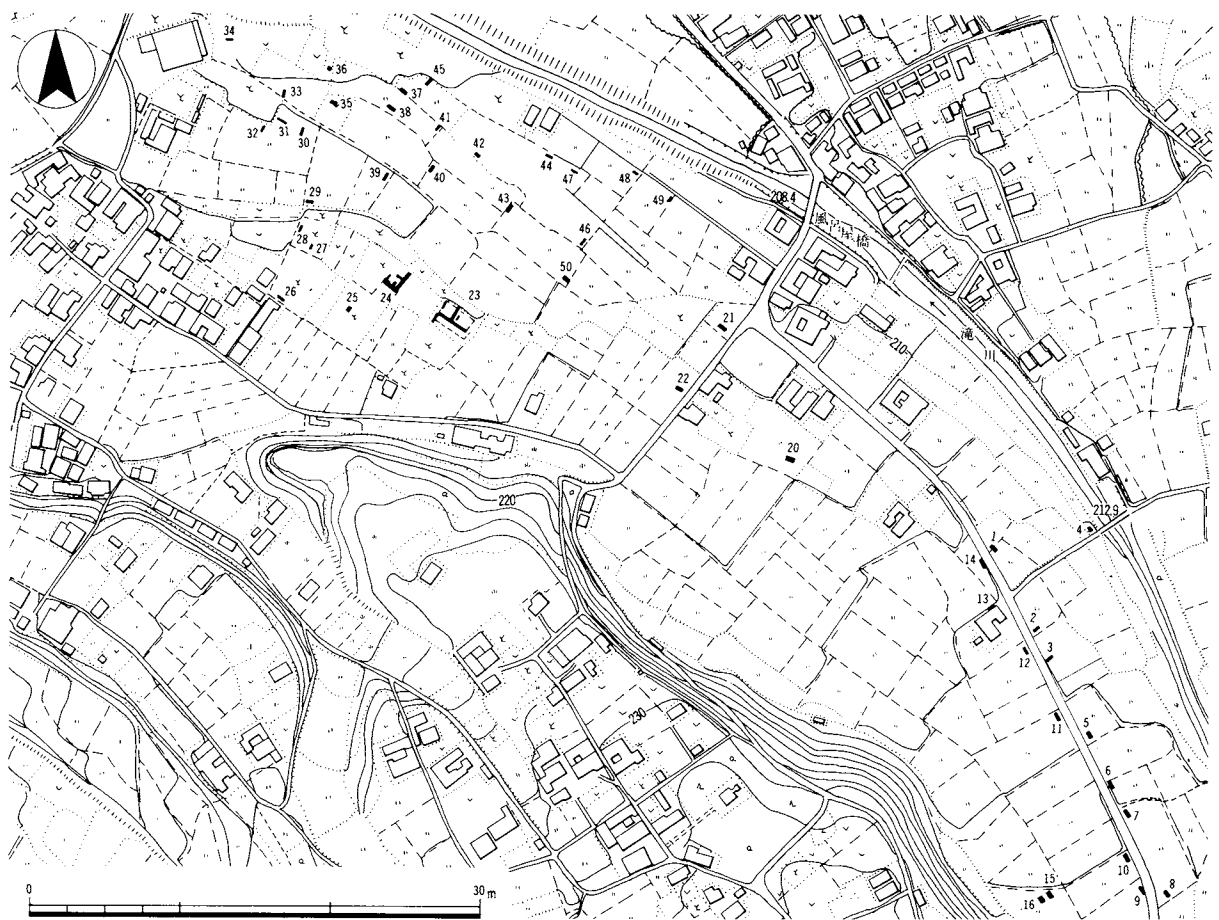
調査は2×4mグリッドを標準に、事業による削平予定地47ヶ所で行ない、第9表の結果を得た。概

要は、遺跡範囲は分布調査時の散布域と同じく、事業地すべてである。遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、天目茶椀、陶磁器、緑釉陶器細片、石器などが広く出土していた。遺構は、遺跡が砂礫の沖積層のため、部分的にしか確認できない状態である。

3. 辻垣内遺跡の概要

名張盆地南西部を流れる宇陀川支流滝川左岸の標高206～212mの水田、畑に、縄文時代以降の遺物

が約10万㎡にわたり散布している遺跡である。調査はやむなく工事対応のできない部分7ヶ所約7280㎡



第66図 遺跡地形図 (1:5000)

No.	規模 m	遺 構			遺 物					備 考	
		Pit	SD	SX	包含層の深さ	石器	縄文	弥生	古墳		中世
1	2×4	○			30~(45)				○		
2	〃				30~(45)				○		
3	〃				30~(45)		○	○	○		
4	〃	○			20~(70)		○	○	○	○	
5	〃				20~ 45						
6	〃				30~(40)				○	○	
7	〃				30~(90)		○	○	○	○	
8	〃				30~(45)				○		
9	〃	○			30~(70)		○	○	○		
10	〃				30~(74)		○	○	○	○	
11	〃	○			50~ 72		○	○	○	○	
12	〃		○		30~(60)		○	○			
13	〃			○	27~(50)				○		
14	〃				30~(50)				○	○	
15	〃				40~100				○	○	陶磁器多
16	〃				26~ 36				○	○	
20	〃	○	○		37~ 70	○	○	○	○	○	縄文石器多
21	〃	○			20~(40)		○	○			
22	〃	○			33~ 45		○		○	○	
23	〃			○	35~ 80		○		○	○	
24	〃	○		○	45~ 90		○	○	○	○	
25	〃	○		○	25~ 40				○		
26	1×4	○		○	25~ 50	○	○		○		
27	2×4				15~ 40			○	○		
28	〃			○	25~ 45			○	○	○	
29	〃				32~100				○	○	
30	〃				なし					○	
31	1×6				なし				○	○	
32	1×4				30~ 50				○	○	
33	1×6				10~ 36		○	○	○		
34	1×4				20~ 40				○		
35	2×4				34~ 64				○	○	
36	1×2				20~ 50		○		○	○	包含層 礫多
37	1×4				28~ 63						
38	2×4				20~ 40				○	○	
39	〃				23~(55)				○	○	瓦器皿多
40	〃			○	20~(80)		○	○	○	○	
41	〃				30~ 55		○	○	○	○	
42	〃	○		○	20~ 60				○		
43	〃	○		○	36~ 73						
44	1×3				20~ 40		○	○	○		縄文多
45	2×4	○			23~ 37	○		○	○	○	
46	〃	○		○	20~(100)		○	○	○	○	緑釉黒色
47	〃	○			25~ 40	○	○	○	○	○	
48	〃				20~160		○		○	○	
49	〃	○			30~ 64		○	○	○	○	
50	〃			○	20~ 50	○	○	○	○	○	

第9表 辻垣内遺跡試掘調査結果一覧表

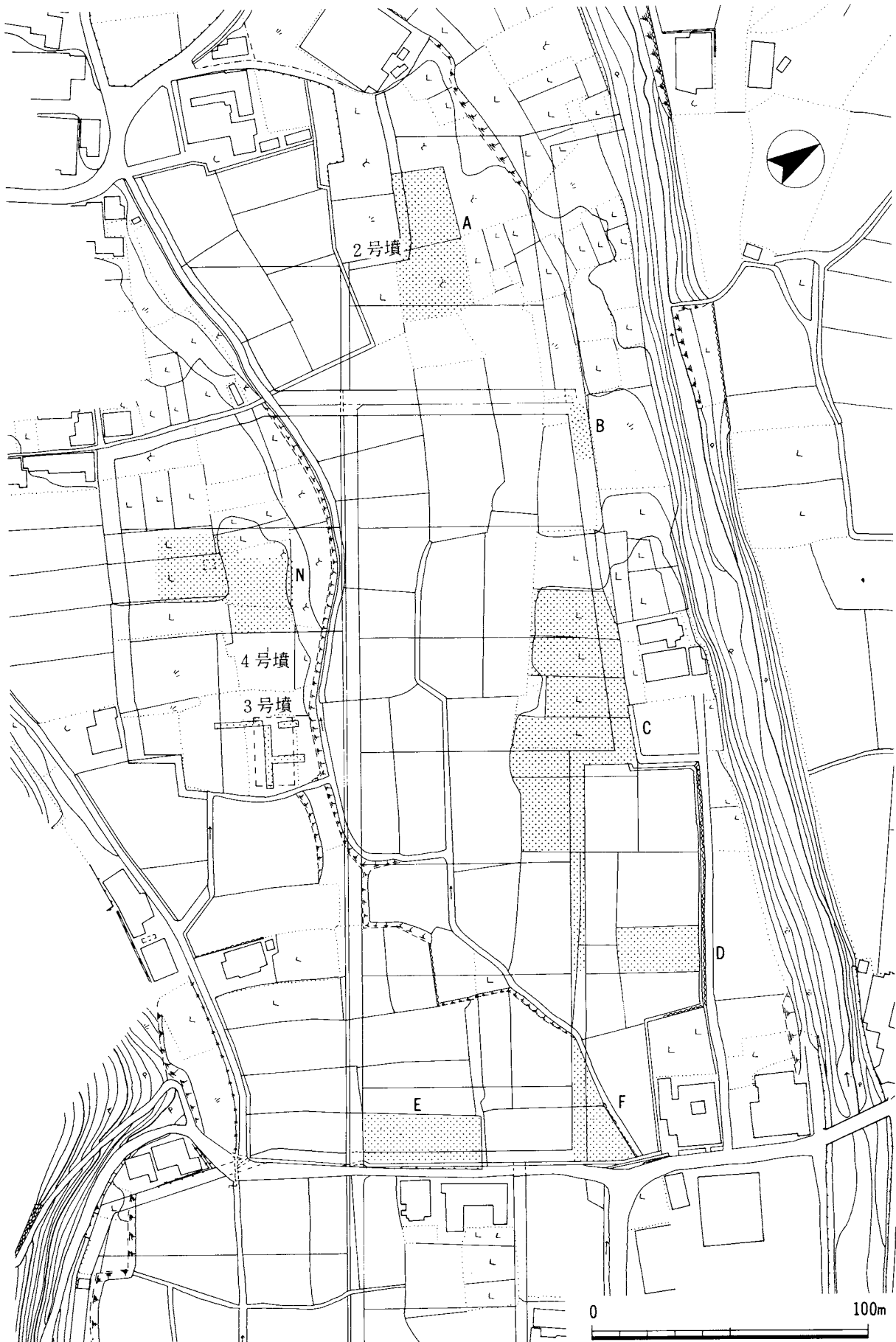
に限って実施された。調査区を便宜上滝川上流より A・B・C・D・E・F・N区と称する。概要は以下のとおりである。

A区は約1,000㎡の発掘区で、主に古墳時代後期の集落跡である。遺構は小石室が1基、掘立柱建物1棟、竪穴住居7棟が検出された。遺物は6~7世紀の須恵器(杯身、杯蓋、台付壺、跣、短頸壺、高杯)、土師器(皿、甕)が大部分であるが、小片ながら「万□」と墨書された暗文のある土師器杯が出土している。小量ながら縄文土器、灰釉陶器、瓦器、陶磁器も出土している。A区の西隣に、現状保存された1辺14mの方墳があり、高さ1.2mを測る。この古墳を2号墳と称する。

B区は約100㎡の発掘区で、水路部分にあたる。調査は、重機による表土除去後、遺構検出に努めたが、礫が多く、確かな遺構は確認できなかった。この付近の100㎡の高所が神社跡と呼称されていたが、神社と結びつく遺構・遺物はなかった。ただ、五輪塔の一部や播鉢など、中世の遺物がめだった。

C区は約3,500㎡の発掘区であり、東西長が160m前後、南北長が50mをこえる細長い形をしている。東の水路部分を中心に、縄文時代の遺構、遺物が広がっている。中には、縄文後期の深鉢を出土した土壇もある。東の水路部分と発掘区中央との間には、弥生中期の壺、甕を出土した土壇や、小形丸底壺を多く出土する古墳時代前期の竪穴住居があり、これから西では須恵器を中心とする古墳時代後期の竪穴住居が多くみられる。正報告で、竪穴住居間の関係等について明らかにしたい。中には8世紀まで下がる杯類も遺構から出土している。竪穴住居が50棟余り、ほぼ同時期と考えられる掘立柱建物が8棟検出された。小石室も1基検出されている。

発掘区中央東寄り、南に開口した横穴式石室をもつ、墳丘部一辺15mの方墳を検出した。これを辻垣内1号墳と称する。墳丘部下部を取りまく石垣状の列石が1段~7段にわたり残っている。石室は両袖式で、全長約8.2mである。玄室長は約3.15mで、奥壁での幅2.0m、入口での幅2.1mを測り、掘形はほぼ長方形である。羨道は約5.05mで、幅1.2~1.4mを測るが、羨道入口部分は右がやや崩れている。周溝は幅2.5m~3.5mで、周溝外側部分は開口部南辺を除い



第67図 発掘区平面図 (1 : 2000)

て、段を持ち、周溝墳丘側は肩と石列の面がなだらかに連なっている。遺物の出土状況は悪く、石室内は盗掘等でほとんど攪乱されており、土師器杯が残るのみで、中には鉄鏃、須恵器もあるが、時期を決定できるものではない。ただ周溝埋土からは多くの須恵器（杯類、高杯、壺、甗など）、土師器（杯、皿、甕、高杯など）が出土しており、時期的には7世紀前半におさまると考える。尚、石室からは石仏

が、周溝からは8世紀頃の須恵器の円面硯が出土している。

C区では、黒色土器（椀）、瓦器（椀・皿）陶磁器、叩石、石鏃、石錐、石錘、石斧、などが出土しており、発掘区西区隅では、「安」のへら書きと文字は不詳だが墨書とが認められる須恵器の盤が出土している。

D区は約480㎡の発掘区である。発掘開始頭初は耕土より人力で掘削をしていたが、砂礫層が中心で、遺構を確認できるものではないとの判断で調査を中止した。ただし、小形丸底壺などの遺物は出土している。

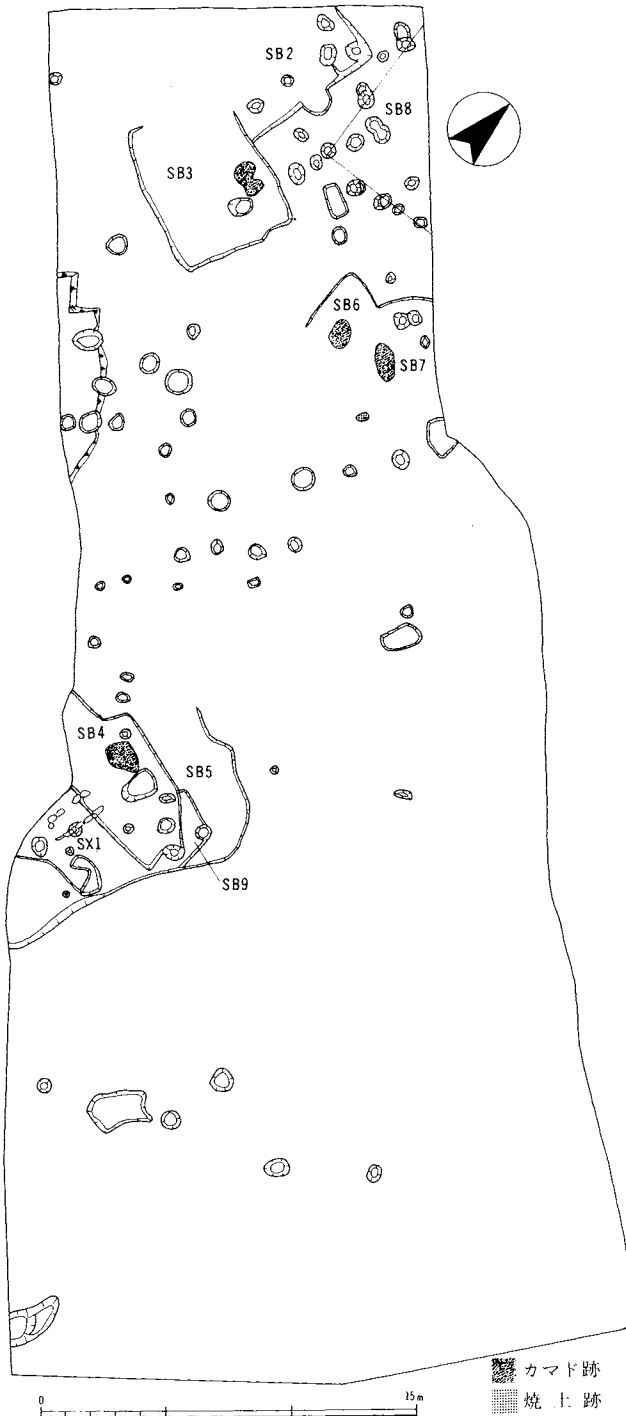
E区は約600㎡の発掘区である。直径7.2mの円形堅穴住居1棟を検出した。主柱穴やカマドと見られる焼土も残り、埋土からは、弥生時代中期の蓋・水差形土器が出土している。鎌倉時代の土塚墓、溝2条も検出されている。中世の土師器や瓦器の出土が多い発掘区である。

F区は約400㎡の発掘区である。古墳時代の堅穴住居1棟、土塚数基を検出した。

N区は約1,200㎡の発掘区である。横穴式石室をもつ、一辺14mの方墳を5号墳と称する。石室は奥壁から見て左片袖で、全長約8.0mである。玄門付近の石が3～4石欠失しているが、玄室は長さ4.0m、幅1.6m、羨道の長さ4.0m、幅0.7mを測る。周溝からは須恵器の四耳壺、長頸壺が出土している。5号墳の周溝と東側で重複している古墳を4号墳と称する。4号墳は全体の $\frac{1}{4}$ ほどしか検出されていないので、形状は不明で、規模も円墳なら径20m以上のものである。小石室、中世墓各1基が出土している。4・5号墳の西側には飛鳥時代前後の堅穴住居13棟、掘立柱建物3棟が検出されている。

4号墳の東40mで4本のトレンチを入れて、確認してから、検出されたものである。3号墳は規模、形状を確認できなかったが、現状保存された。

以下、A区、E区、F区、N区について概述する。



第68図 A地区遺構平面図（1：300）

4. A 地区

S X 1 (第69図)

2号墳に隣接した発掘区南西辺中央で検出した小石室である。

表土除去後、検出したS B 5を初め、2号墳周溝の埋土上面と考え、掘り下げたところ、河原石が箱状に組まれた状態であった。

小石室は、ほぼ南北に細長く、幅56cm、現存長2mを測る。南壁は南西隅に20×25cmの石が一石残存し、床面より15cmの高さである。西壁は、南北両端にほぼ20×40cmの石が2石づつ横長に遺存し、床面より20~30cmの高さである。東壁は、2段残存しているようだが、上段の石は径10~20cmと下段の石より小さく、また床面からの高さも下段以下である事から、2段目というより1段目と2段目の隙間を埋めるための石と考える。下段は西壁よりやや細長い石を6石用い、床面より22cmを測る。

埋土は黒褐色土であり、出土遺物はなかった。小石室の掘形も不明であった。

S B 2 発掘区北隅で検出した「L」字形のもので堅穴住居の一部と考える。復元すると、一辺6m以上の方形プランで、径60cm以上の支柱穴をもつ住居と考えられる。周溝、カマド等はみられない。

S B 3 S B 2の南側を切っている長方形の堅穴住

居である。西辺の全体は不明であるが、南西隅の残りから、規模は5×6mのものとする。深さ20cmを測る。カマドの原形は不明だが、東西端にそれぞれ幅20cm、長さ70cmの壁が残り、焼土が0.8×1.4mの範囲に残っている。周溝、支柱穴は不明である。

S B 4 発掘区南西辺中程で、S B 5・9を切っている堅穴住居である。全体のプランは不明だが、一辺6m以上のもので、深さ10数cmを測る。カマドと考えられる焼土の範囲は1.5×1.5mである。

S B 5 S B 4・9で切られ、遺構上層にS X 1が検出された「L」字形の堅穴住居である。残存部分は6×11mであり、床面は南の方が低く、比高20数cmを測る。周溝、支柱穴等は不明である。

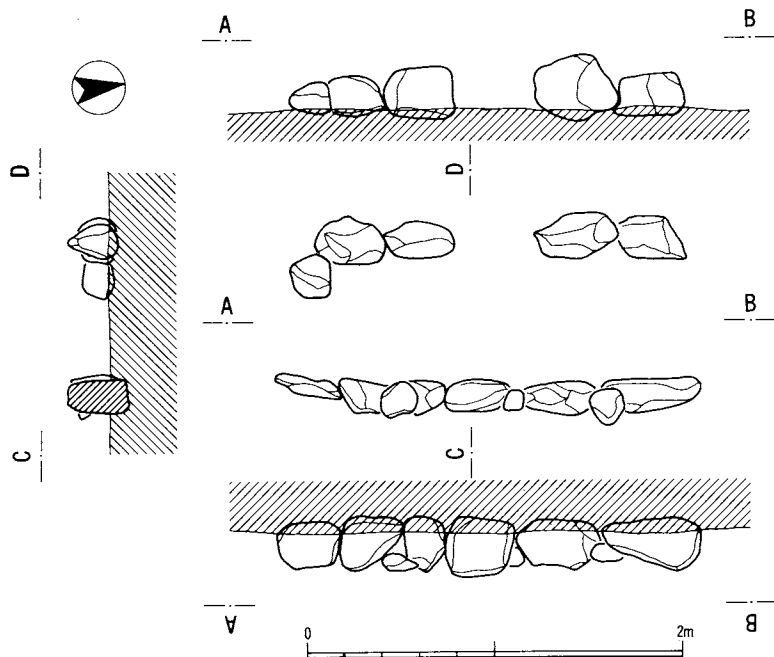
S B 6 発掘区北東辺付近で検出された「L」字形の堅穴住居で、2×3m以上の規模である。カマドと考える焼土の広がりには0.8×1mである。その他は不明である。

S B 7 発掘区北東辺で検出された堅穴住居である一辺4m以上で、形状は全く不明である。カマドと考えられる焼土の範囲は0.8×1.6mである。S B 6と切り合い、周溝、支柱穴等も不明である。

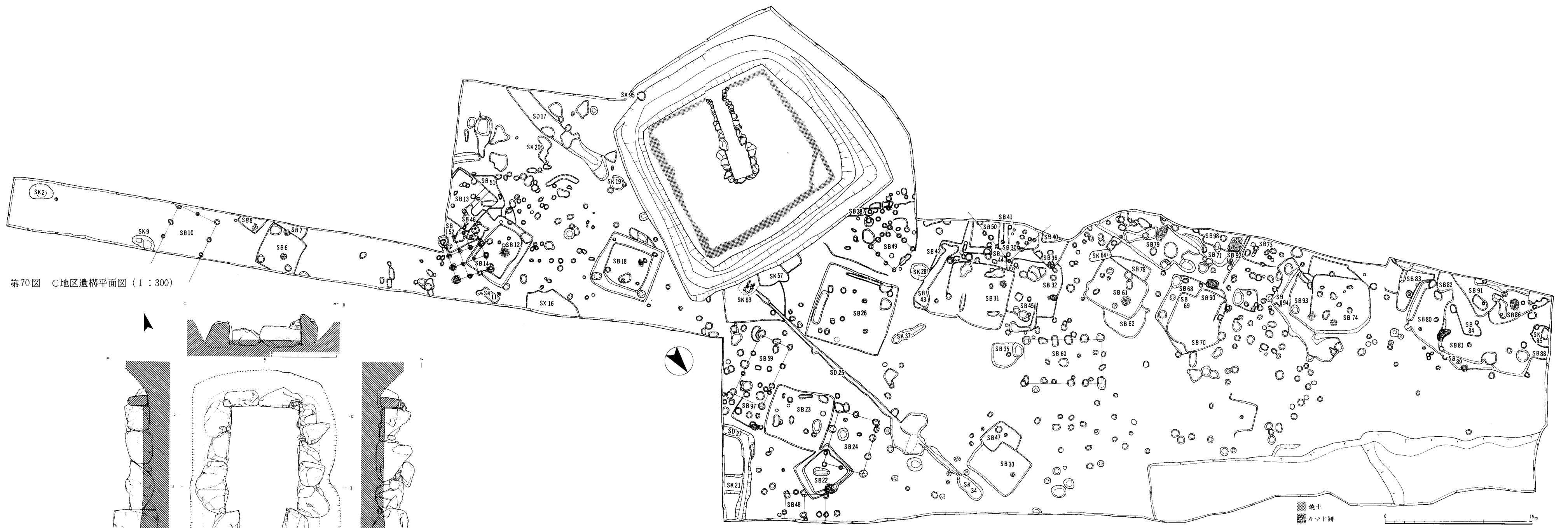
S B 8 発掘区北隅で検出された、南北2間×東西1間以上の掘立柱建物である。南北の2間は2.7m

の等間であり、東西の1間は3.6mを測るが、部分的検出につき、建物全体の様子は不明である。柱穴は径60~70cm、深さ40~65cmであり、埋土は黒褐色土である。

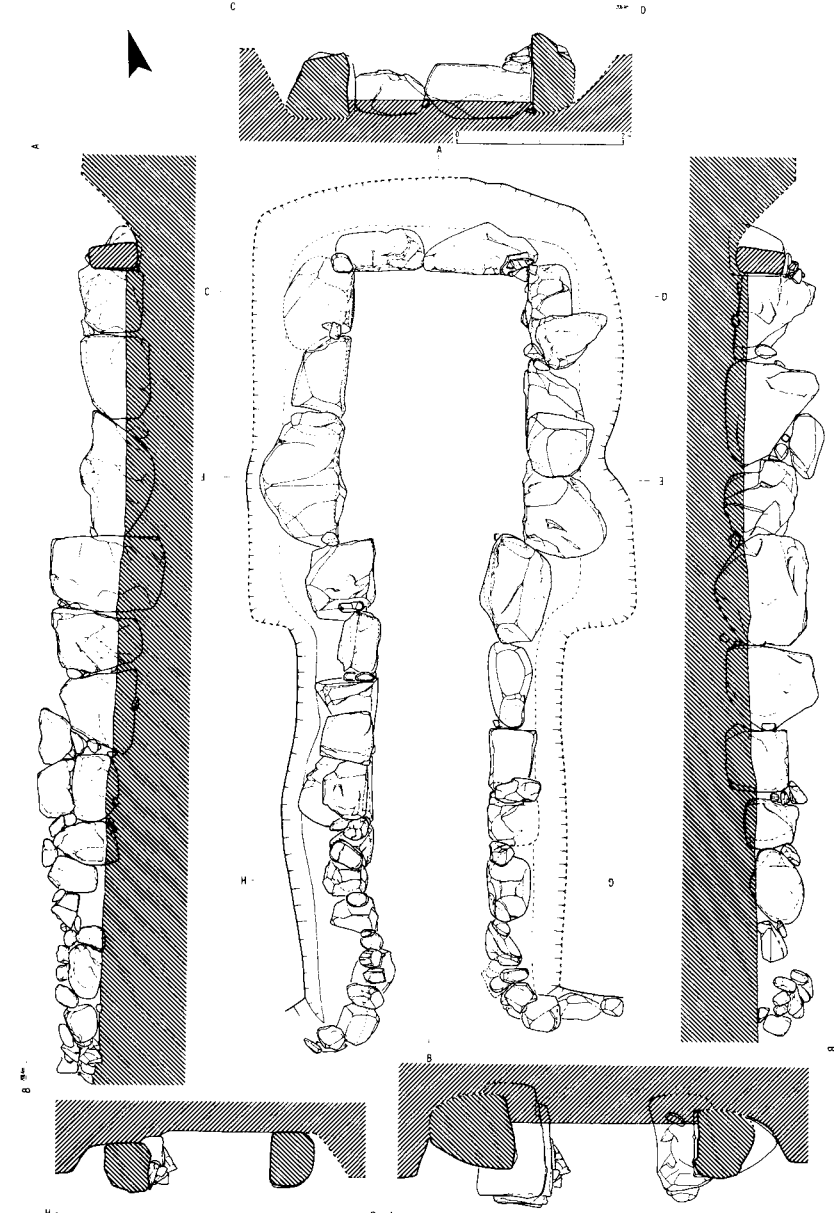
(森前 稔)



第69図 S X 1 実測図 (1 : 40)



第70図 C地区遺構平面図 (1:300)



第71図 辻垣内1号墳石室実測図 (1:80)

5. E 地区

1. 遺構

遺跡の基本的層位は、Ⅰ層：水田耕作土（暗青茶色土）、Ⅱ層：やや黄色を帯びた暗灰色土（ミナトコ、と呼ばれる土である）、Ⅲ層：暗茶褐色土、Ⅳ層：黄褐色色砂質土（地山）で、地表より地下までは約40cmである。遺構の確認面は、Ⅵ層上面である。

遺構は、竪穴住居1棟、溝、土壇である。

(1) 竪穴住居

SB12

発掘区南西端に位置し、南側でSK13と重複するが、SB12の方が先行するものである。東西7.4m、南北7.3mの円形を呈し、南北軸 $N4^{\circ}E$ を測る。4本の主柱穴は、径約60cm、深さ50~60cmである。ほかに床画面上には比較的浅い小穴がみられる。周溝は巾20cm前後、深さ10cm前後と浅い。床面中央より北寄りには $0.5m \times 1m$ の範囲で、厚さ5cmほどのあかく焼けた焼土面と炭化物の面がある。また、床面中央にあるピットは $1.5m \times 1.0m$ 、深さ40cm前後である。壁面が焼けていないが、炭化物も埋土中に含まれているし、位置、形状からみて、炉穴の可能性も考えられる。

遺物は少ないが、床面に接して水差形土器（1）をはじめ弥生土器の甕（2）、壺の蓋（3）、石器（4）が出土している。

(2) 溝

SD3

発掘区北寄りをほぼ南から北に傾斜して走る幅1~1.8m、深さ30~70cmの溝である。南端でSD4と合流する。遺物は須恵器、土師器甕、杯が出土している。

SD4

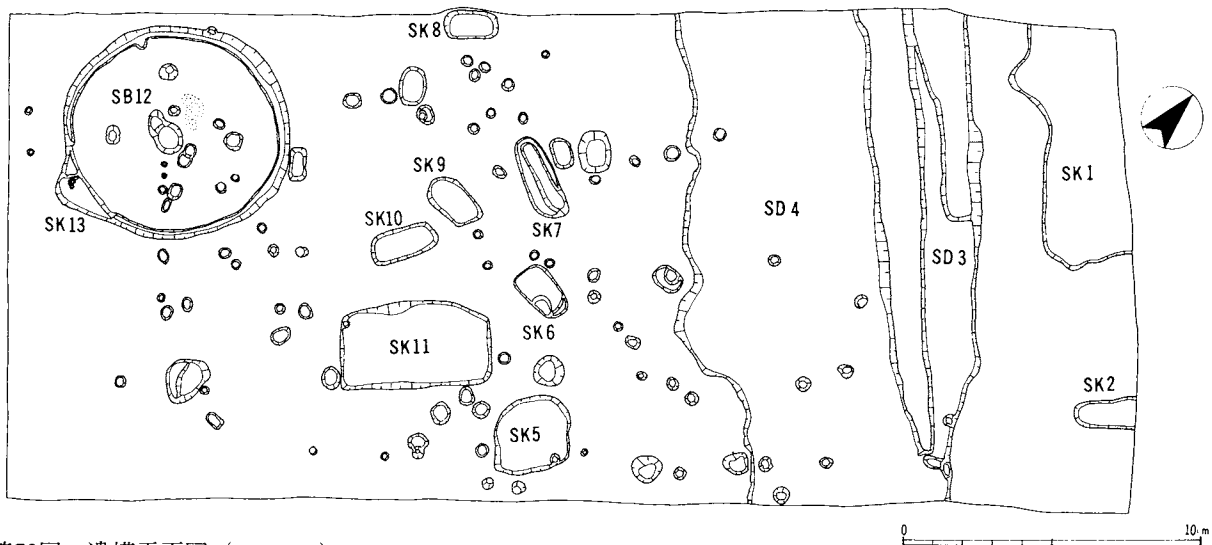
SD3と同様にほぼ南北に走る幅約6m、深さ20cm前後の大溝である。遺物はSD3と同じものであり時期としては同一と考えられる。

(3) 土壇

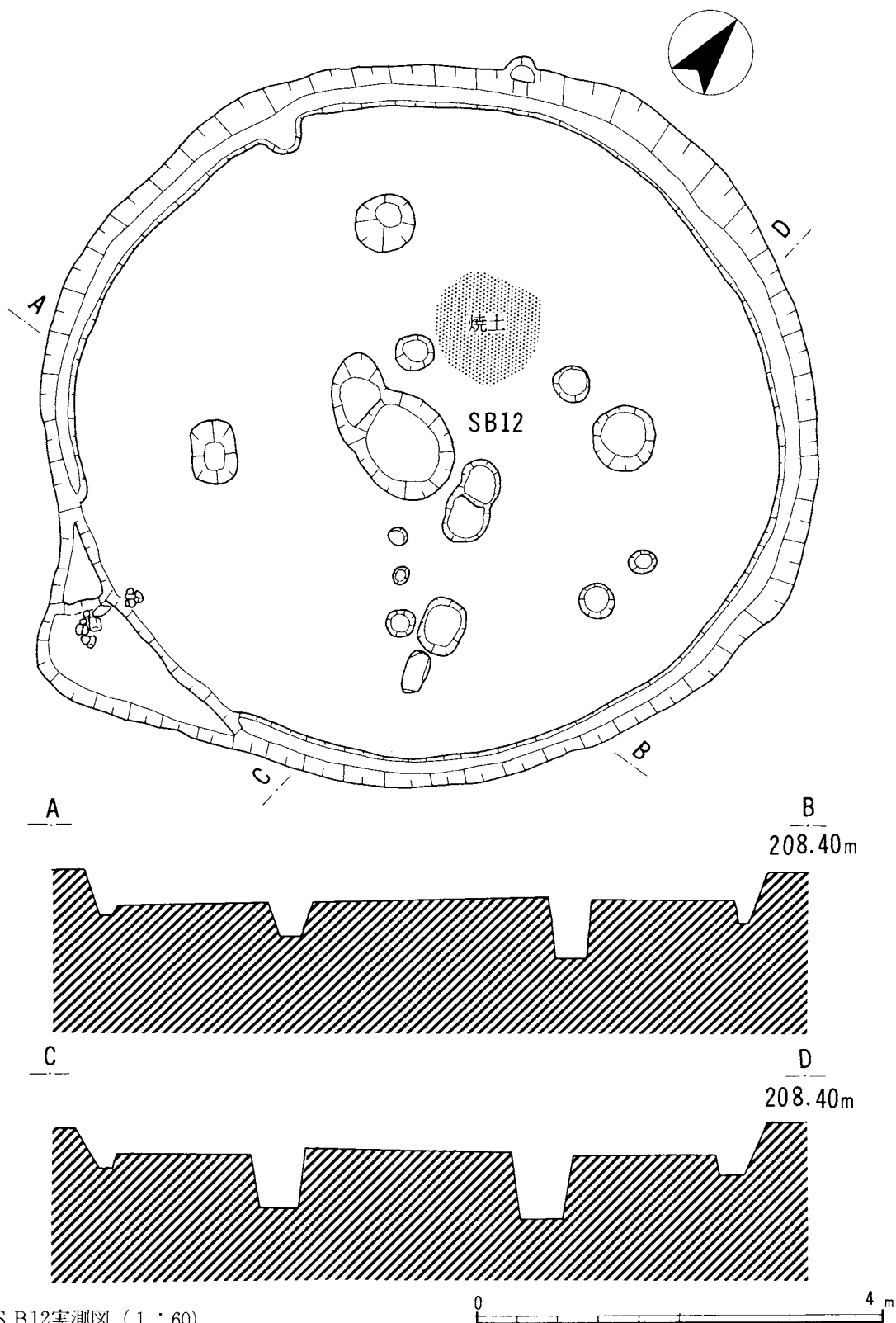
SK1

発掘区北隅で検出した短軸2.5m、長軸8.0m、深さ30cmの方形土壇で、北側は調査区外へ伸びる。遺物はほとんどなかった。

SK2



第72図 遺構平面図（1：250）



第73図 SB12実測図 (1:60)

SK 1の南約4mに位置し、長軸2.0m、短軸1.0m、深さ15cm前後の長方形土壇である。遺物は土師器の小片が極少量である。

SK 5

発掘区中央南寄りで検出した径2.3m、深さ約20cmの方形土壇である。遺物はなかった。

SK 6

長軸1.8m、短軸1.0m、深さ25cm前後の長方形土

塚である。土師器の小片が少量出土している。

SK 7

長軸3.0m、短軸1.0mの深さ10cmの長方形土塚であるが、土塚中央に段がつき長軸2.5m、短軸0.5m、深さ20cmの長方形土塚となる。

SK 8

発掘区中央北端で検出された長方形土塚で長軸1.8m、短軸0.9m、深さ35cmである。埋土は暗黒褐色砂質土である。遺物として土師器が少量出土している。

SK 9

長軸1.8m、短軸1.0m、深さ15cmである。

SK 10

長軸2.1m、短軸1.0m、深さ15cmの長方形土塚で

ある。遺物として、瓦器小皿（1）土師器小皿（2）が出土している。

SK 11

長軸5.0m、短軸3.0m、深さ30cm前後の方形土塚である。埋土は2層に分かれ、暗褐色砂質土と黒褐色砂質土であり、遺物は2層とも含まれており、土師器皿（7～11）羽釜（12～15）瓦器（3～6）が多く出土している。その他、人頭大の石が多く東端から出土したが、遺構に伴うものではないと考えられる。

SK 13

S B12に重複しているために全容は不明である。遺物はなかった。

2. 遺物

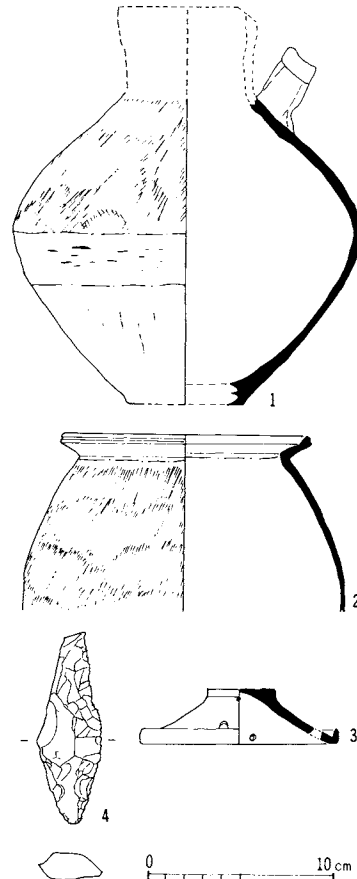
(1) S B12出土遺物（1～4）

水差し形土器（1） 口縁部や体部が欠損しているが、肩部に横位の半環状の把手のつく水差し形土器である。ソロバンの珠状に張った体部をもち、底部は平底である。体部外面は上半部は粗い斜めのハケ目調整を施し、下半部には、横方向のヘラ削りと縦方向のヘラ削りを施している。把手は肩部に押し込んで、ユビオサエしている。また、体部内面は丁寧なナデ調整をしており、胎土の良土もあり、光沢がある。肩部と体部下半部に二次的に煤が付着しており、火に直接かけたのではないかと考えられる。胎土は緻密で、淡橙褐色の色調を呈す。

甕（2） 口縁部が「く」の字状に強く外反し口縁部端部は肥厚しておわる。口縁端部外面に一条の沈線が入る。体部外面を細かいハケ目で調整し、内面はナデ調整である。体部と口縁部には煤が付着している。胎土は砂粒含みや粗である。色調は暗赤褐色を呈す。

蓋（3） つまみをもち、なだらかに広がる笠形である。口縁部は面をもち上方に拡張して尖っておわる。つまみと口縁部は横ナデ調整され、体部は縦方向のヘラ磨きされている。相對位置に2個1組の紐孔がある。砂粒や黒雲母片を含むが緻密な胎土である。色調は暗茶褐色である。

スクレイパー（4） サヌカイトの不定な横長状の剥片を素材として用いている。正面図右に大きな粗い加工を加えて刃部を形成している。長さ5.1m、厚さ0.7cmである。



第74図 S B12遺物実測図（1：4）

(2) SK10出土遺物

A. 土師器

皿A (5) 口径 8.8 cm で内面はナデ調整され、外面は口縁部のみ横ナデ調整して以下は不調整で凹凸をのこす。器壁はやや厚い。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は精良である。

B. 瓦器

椀 (6) 底部のみの出土のため全容は不明である。内面は見込みの暗文で螺旋状である。高杯は低く断面三角形で、径は 4 cm である。胎土は緻密で白灰色である。

(3) SK11出土遺物 (7~19)

A. 土師器

皿A (13・14) 口径約 8 cm で、内面はナデ調整され、外面は口縁端部のみ横ナデされ他は不調整で凹凸をのこす。器壁は口縁部やや厚く下方へ薄くなる。胎土は緻密で、淡赤褐色を呈する。

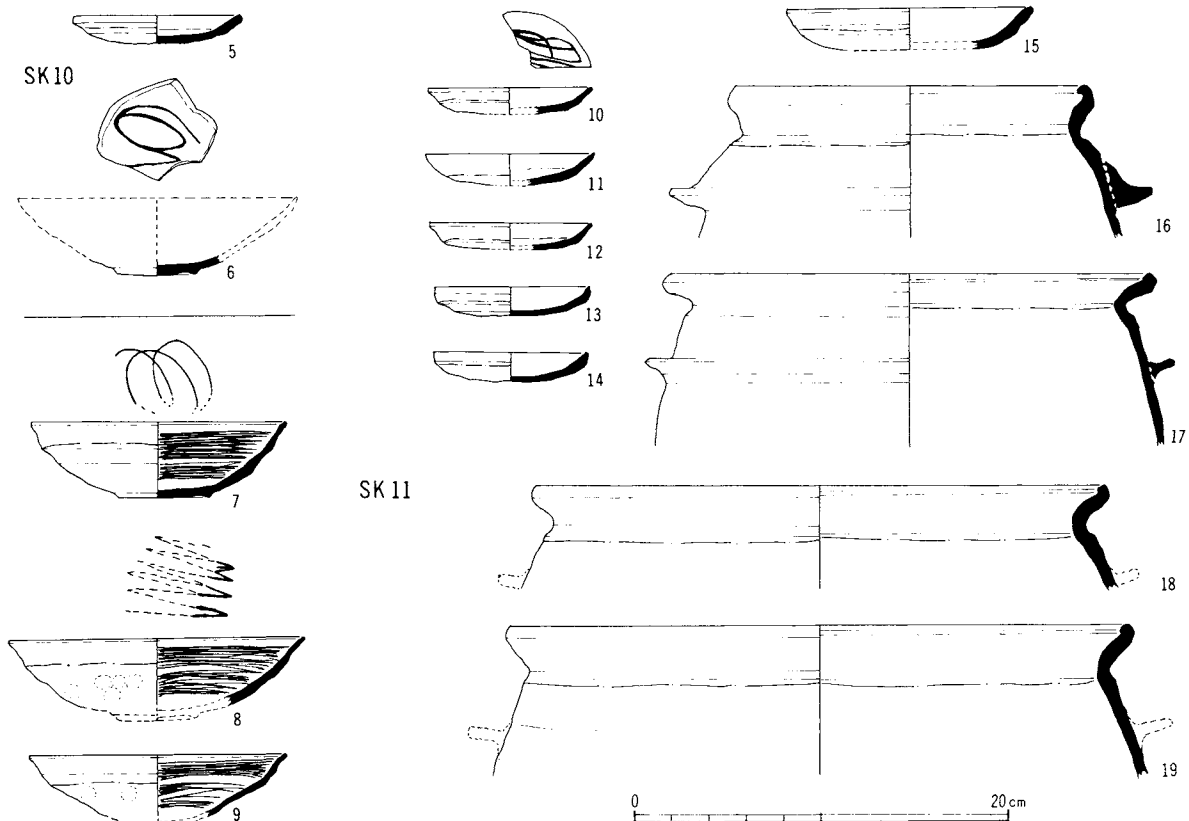
皿B (11・15) 口径 9 cm のものと、12 cm とやや口径の大きいものとに分けられる。器内面はナデ調整され、口縁部外面のみ横ナデして以下は不調整で凹凸をのこす。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は緻密である。

皿C (12) 口径 8.6 cm で、口縁部内外面とも横ナデされている。内面は、ナデ調整、外面下方はユビオサエののち不調整で凹凸がのこる。器壁は口縁部はやや薄い。淡赤褐色で、胎土は緻密である。

土釜 (12~19) (16)は口径19cm前後と推定され、口縁部は弱く外反し、口縁端部を内側へ折り曲げるもので、口縁端部は直立する。鏝は大きめで肩部にあり、断面三角形である。鏝から下の外面には煤が全面に付着する。砂粒、小石を多く含み暗茶褐色を呈す。(17)は口径13cm前後と推定され、口縁部は「く」の字に外反し、口縁端部を内側に折り返している。鏝は小さめで、断面長方形である。胎土は砂粒を含み粗い。色調は内面赤褐色、外面暗茶褐色を呈し、二次焼成を受けたことをうかがわせる。(18・19)は、鏝が剥離しているが、形態としては(12)と同じものである。鏝は口縁部近く取り付けられた痕跡がある。(16~19)の羽釜すべて調整は、口縁部のみ横ナデされ、体部内外はナデられている。

B. 瓦器

椀 (7~9) 口径13~15cm前後のものである。口縁端部内面に弱い稜がつく。外面は、指圧痕がのこり凹凸が目立つ。内面ヘラミガキも粗く、(8・9)



第75図 SK10、SK11遺物実測図 (1:4)

は間隙をもち輪状となる。(7)は推定口径13.6cm、器高4.0cm、底径4.8cmを測り、器高指数29を示す。体部は、あまり内弯せず、外上方へ開く。断面三角形の低い小さい高台が張り付けられる。内底面にらせん状暗文が施される。(8)は、推定口径14.6cm

である。内底面にジグザグ状暗文が施される。

Ⅲ (10) 推定口径8.6cmで、口縁部は外反し、口縁端部は丸くおわる。口縁外面は、ヨコナデで仕上げ、底部外面は、ユビオサエのち不調整で凹凸が目立つ。内底面はジグザグ暗文が施される。

3. 小 結

(1) 遺構について

遺構は竪穴住居(SB12)1棟、溝2条、土壇9基である。SB12は平面が円形で直径約7.4mと規模も大きく、掘り方も約60cmと四隅の主柱穴や周溝^①明確に認められた。床面や埋土よりの出土遺物から弥生時代中期(第Ⅲ～Ⅳ様式)に比定される^②。発掘調査面積が限られていたため、1棟しか検出できなかったが、立地条件としては、発掘区より西側に同時期の集落が広がっていることが予想される。なお名張盆地では、弥生時代後期から古墳時代前後にかけて集落跡は多く検出されてきたが、弥生時代中期のものは初めての検出である。

土壇は全く遺物を包まないものが多く、SK10、SK11が遺物を包含していた。このためSK10、SK11を除いては性格不明としたい。SK10は土師器皿と瓦器碗の出土がみられ、鎌倉時代中頃のものと考えられる。SK11は遺物の量も多かったことから、土器捨て場として利用されたことが考えられ、時期としてSK10より少し古く、鎌倉時代前半～中頃のものと思われる。

以上を概括すると、E地区は、弥生時代中期に集落が一時廃絶した後は、鎌倉時代に入り生活の場として再び開発されたものと思われるが、今回の調査地域はおそらく集落の縁辺部の可能性が考えられる。

(2) 遺物について

小量だが、竪穴住居(SB12)より弥生土器(水

差、甕、壺の蓋)が出土している。これらは、出土状況からみて、一括資料であり、伊賀地方南部が一貫して畿内文化圏に包括されているので畿内の弥生土器編年観に依れば畿内第三様式の新段階から第四様式に比定されるものである。なお、水差形土器は、三重県下の出土例は今まで無く、完形品ではないが、初出例となる^①。また、壺の蓋と考えた土器の胎土は、河内産とよく似ており、名張盆地での畿内との交流を示す好例と思われる。

次に土師器土釜については、体部上半しかないが「く」の字に外反する口縁部と肩部に水平の罫をめぐらすこと、調整方法などからして、菅原正明氏の分類に依れば^③大和B型のものであり、時期として12世紀後半から13世紀前半に位置づけられる。瓦器については、近年の諸研究があるが、川越俊一氏の編年に依れば、E地区の瓦器碗は第三段階A～Bに比定でき、12世紀後半から13世紀前半に位置づけられる。これらの土釜や瓦器碗はその特徴から大和型に分類できる。このように大和型の瓦器碗、大和盆地を主な分布範囲とし、伊賀地方にも及んでいる。

しかし、伊賀地方の瓦器については、伊賀町の場遺跡の報告書^⑤によれば、的場遺跡出土の瓦器は大和、撰津とは異なる変遷をたどるとしている。時期差、技法差については今後の資料の増加により検討を待ちたい。また、伊賀には東大寺領をはじめ多くの荘園が分布し、名張市には黒田庄が存在していたことからして、大和で生産された、土釜、瓦器碗等が東大寺領へはこぼれた可能性^⑦がある。

(中村信裕)

(註)

- ① 谷本鋭次、山沢義貴 「東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』 三重県教育委員会 1970
- ② 宇佐晋一、森川桜男 「伊賀における弥生式土器、土師器の集成」『伊賀郷土史研究4』1961
- 末永雅雄、小林行雄、藤岡謙二 「大和唐古弥生式遺跡の研

究』京都帝国大学文学部研究報告 第16冊 1943

『池上遺跡・第二分冊、土器編』大阪文化財センター 1979

③ 菅原正明 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』1982

④ 川越俊一 「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文

化財論叢』 同朋舎 1982

- ⑤ 駒田利治 『の場遺跡発掘調査報告』 伊賀町教育委員会
1970
- ⑥ 水口昌也・門田了三 『赤目壇遺跡発掘調査概要』 『名張市

遺跡調査概要 Ⅲ』 名張市遺跡調査会 1979

- ⑦ 橋本久和 『上牧遺跡発掘調査報告』 高槻市教育委員会
1980

6. F 地区

1. 遺構

遺跡の基本的層位は、Ⅰ層：水田耕作土（暗茶色土）、Ⅱ層：茶褐色土、Ⅲ層：黄褐色土（地山）で、地表から地山までは、30cm程度である。各遺構の埋土は、暗茶褐色土である。

遺物包含層は、明確に認められず後世の開墾等により削平されたものと思われる。

(1) 竪穴住居

SB1、2、3

3棟の竪穴住居が重複するもので、SB1→SB2→SB3の順である。SB1は、東西3.9m、南北4.8mの方形を呈し、南北軸N4°Wを測る。深さは10cm前後と浅い。床面北寄りの2ヶ所に焼土がみられる。周溝、主柱穴等は認められない。遺物としては、土師器が少量出土している。SB2は、東西5.0mの方形を呈し、南北軸N7°Wを測る。深さは10cm前後と浅い。遺物として土師器甕(1)、須恵器杯(2)が出土している。SB3は、SB2に北端

を切られており、東西3.0m、南北3.7mの方形を呈する小型の竪穴住居である。南北軸はN17°Eを測り、深さは約10cmである。遺物は少量である。

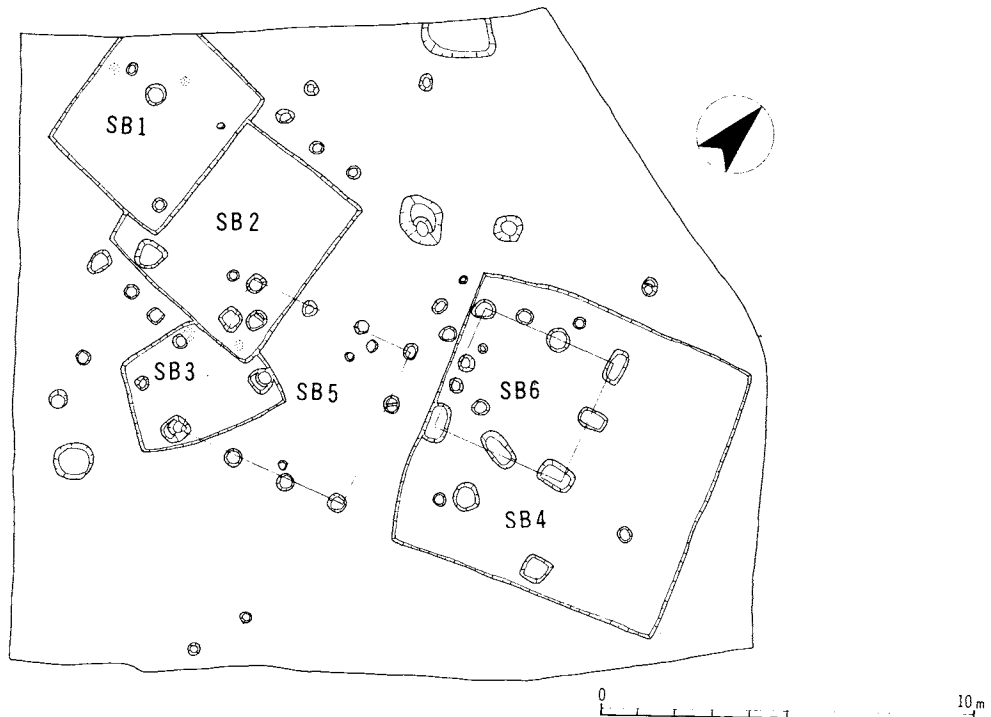
SB4 (第77図)

東西7.8m、南北7.5mの方形を呈し、南北軸N22°Wを測る大型の竪穴住居である。深さは10cmと浅い。埋土は黒褐色土であり、土師器甕(3・4)、壺(5・6)、高杯(7~12)が出土している。北辺中央部壁寄りに長軸0.8m、短軸0.6m、深さ40cmの方形ピットが検出されたが、貯蔵穴と考えられる。

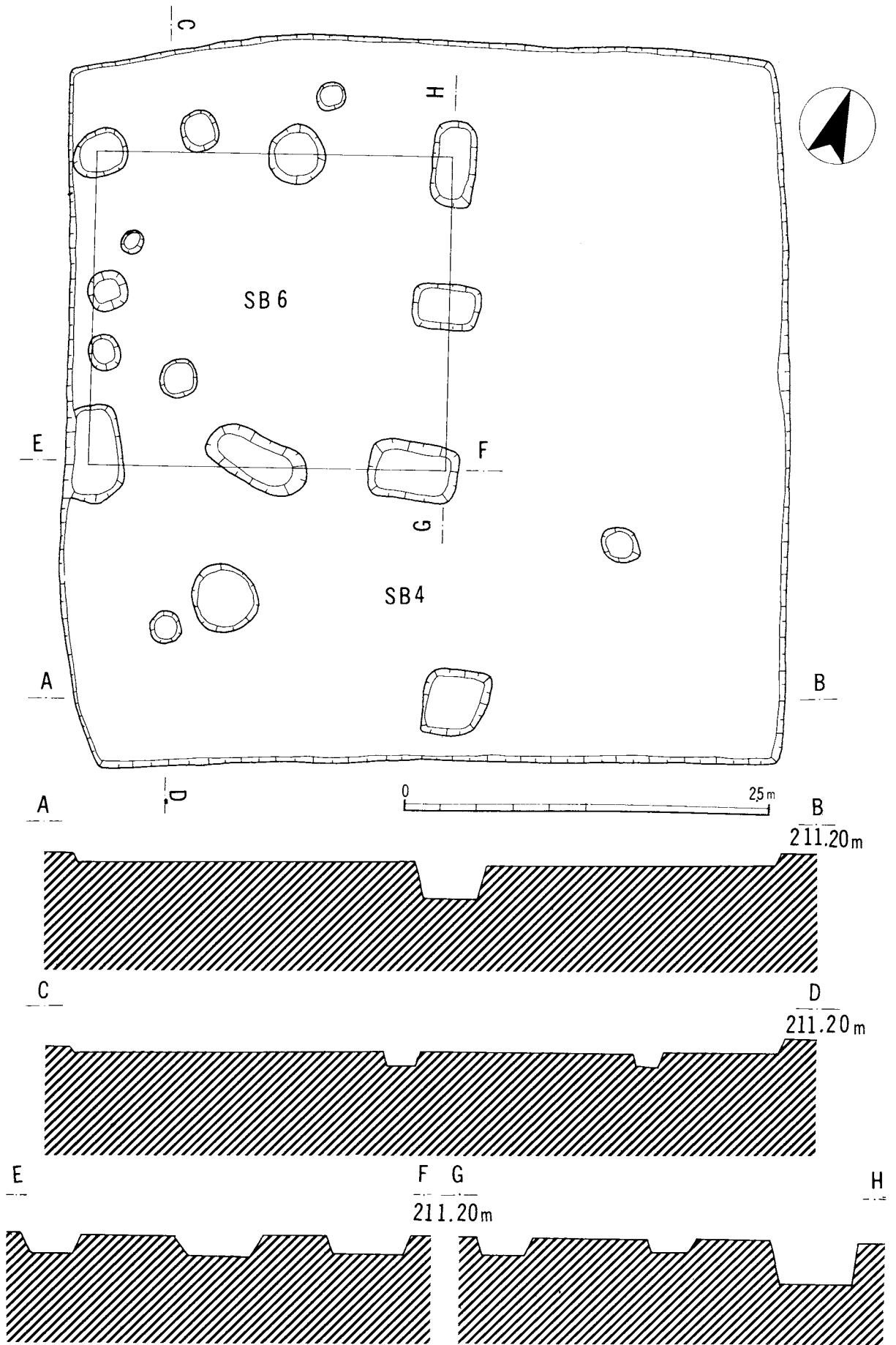
(2) 掘立柱建物

SB5

桁行4間(4.5m)、梁行4間(4.5m)で、棟方向はN17°Wである。柱掘り方は径40~50cm、深さ20~30cmである。柱穴中からの遺物の出土は、ほとんどなく土師器の小片が極少量である。



第76図 遺構平面図(1:200)



第77図 SB4、SB6実測図(1:60)

S B 6

桁行2間(3.8m)、梁行2間(3.6m)で、棟方向はN19°Wである。柱掘り方は径40~60cmの円形を呈するものの他、長軸1.0m、短軸0.5m前後の

方形の掘り方をもつものと様々である。深さは30cm前後である。柱穴中からの遺物の出土は、ほとんどなく土師器の小片である。

名称 (SB)	規模 (m)		主柱 穴間	深さ (m)	南北軸	備	考
	東西	南北					
1	3.9	4.8	—	10	N40°W	遺物-土師器少量 焼土(北寄り)	
2	5.0	5.2	—	10	N70°W	遺物-土師器甕(1)、須恵器杯(2)	
3	3.0	3.7	—	10	N17°E	遺物-土師器少量	
4	7.8	7.5	—	10	N22°W	遺物-土師器甕(3・4) 高杯(7~12) 小型丸底壺	

第10表 竪穴住居の規模

2. 遺物

(1) **S B 2 出土土器**

A. 土師器

直口壺(1) やや外反する短い口縁部に口縁端部は上方に伸び尖っておわる。体部の最大径は、口縁口径よりやや大きい。下半部は欠損している。口縁部内面はナデ調整、外面は横ナデされている。体部外面は粗いハケ目調整され、内面は右回りの横方向のヘラケズリを施す。胎土は砂粒や金雲母片を含みやや粗であり、色調は暗赤褐色である。

B. 須恵器

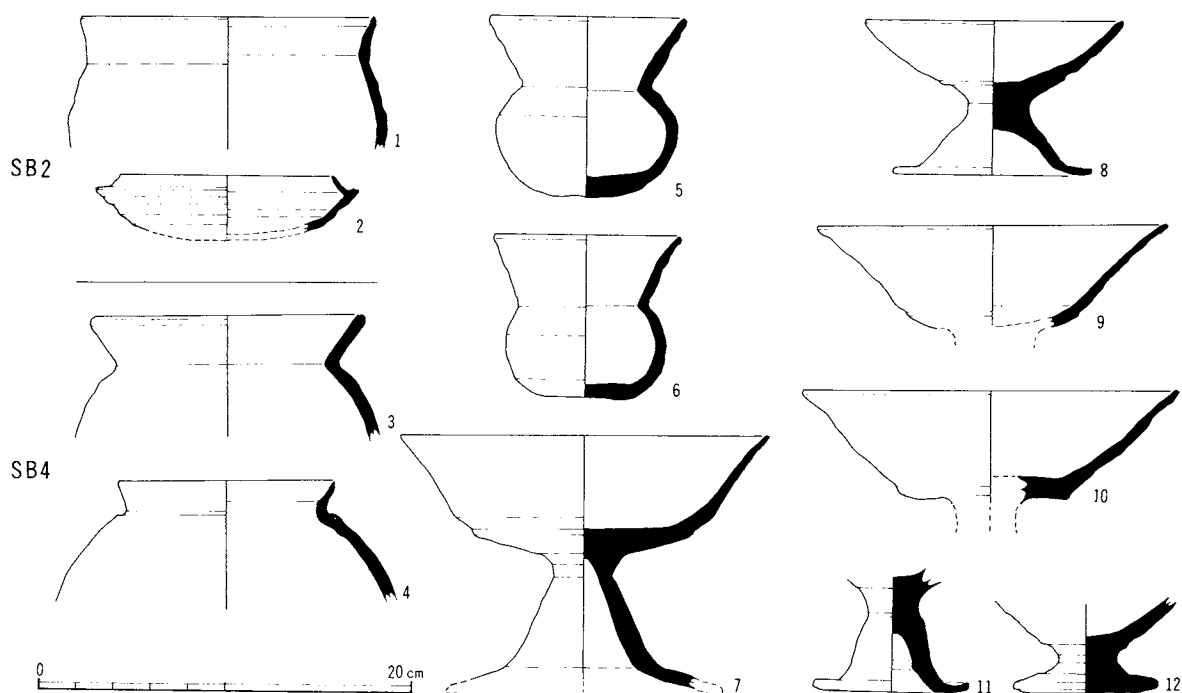
杯身(2) 推定口径11.4cmの杯身の小片で、立ち上りは内傾し短い。灰白色の色調を呈し、細砂粒

を含む。器壁は薄手であり、外面ヘラケズリは底部1/3以下に限られる。

(2) **S B 4 出土土器**

土師器

壺(5・6) (5・6)は、ずんぐりとした横長の胴部にやや長めの口縁部がつくものである。口径は体部の最大径より大である。口縁部は内外面とも横ナデされ、口縁端部は丸くおわる。体部は外面ユビオサエののちナデられているが、不調整で凹凸が目立つ。内面は指圧痕がのこり凹凸が目立つ。(5)は全体に黒くくすんでおり重量感がある。胎土は緻密である。(6)は砂粒と金雲母片を含みやや粗で



第78図 S B 2、S B 4 遺物実測図 (1:4)

ある。色調は茶褐色である。

甕 (3・4) (3)は「く」の字に外反する口縁部は肥厚しており、口縁端部は外方に面をつくり丸くおわる。体部の器壁は厚い。口縁部は内外面とも横ナデされ、体部は内外面ともナデられている。緻密な胎土を呈し、淡茶褐色である。(4)は短い口縁部は弱く外反し凹んでおり、口縁端部は尖っておわる。口縁部体部上半部の一部しか残存していないが、全体として雑なつくりである。口縁部と体部の接合以外は、ナデられている。体部内面には粘土紐の継ぎ目がのこる。

高杯 (7~12) (7)は杯底部と口縁部との境界が稜をなして鋭く屈折し、口縁部が大きく外反し薄

くおわる。口縁部は内外面を横ナデして仕上げている。杯底部はユビオサエののちナデているが凹凸をとどめる。脚柱部は八の字に広がり、縦方向のヘラケズリを施している。脚裾部は脚柱部との境が屈折して、内外面を横ナデしている。淡茶色を呈し、砂粒と金雲母片を含み、やや粗である。(9・10)の高杯は杯部のみで脚部が欠損しているが、(7)の高杯と同型式の高杯と考えられる。(8)は、他の高杯より小ぶりで杯部が浅く、脚柱部が中太り気味でヘラミガキされる。脚柱部は外方へ伸びる。(11)の脚部は(8)の高杯と同型式と考える。(12)は円盤状の裾部をのち、脚柱部はほとんどなく杯部は上方に広がる。

3. 小 結

(1) 遺構について

検出遺構として明確なものはSB1、SB2、SB3、SB4の竪穴住居4棟と、SB5、SB6の掘立柱建物2棟である。床面埋土の出土遺物より時期決定すれば、SB4は古墳時代前期(4世紀中葉~後半頃)、SB2は下って古墳時代後期(6世紀後半)に位置付けられる。なお、SB1、SB3は遺物は極少量のため時期決定は困難であるが、SB2との切り合い関係よりSB1→SB2→SB3の順になると考える。SB1、SB2は規模も類似し、小時期差による立て替えとも考えられる。

次に、掘立柱建物は2棟とも南北軸がほぼ同一であることからして、同時期のものと考えて差し支えないと考える。時期決定に必要な土器が柱穴内からほとんどなかったことから困難であるが、包含層中に瓦器片・土師器羽釜片などがあることからして、鎌倉時代と考えたい。

以上、遺構について述べたが、限られた発掘面積と少数の住居検出のため、集落構造等を云々することはできないが、今回保存されることになった発掘区より北側に広がる可能性が大である。このため、

(註)

① 田辺昭三 『陶邑古窯跡群Ⅰ』 平安学園考古クラブ 1966

F地区の調査では古墳時代と鎌倉時代の生活の一部を解明できただけである。

(2) 遺物について

SB2とSB4より土師器と須恵器がわずかであるが伴出して出土している。SB2の須恵器杯身(2)は、須恵器の特徴—立ち上りの内傾化、底部ヘラケズリの縮小等—の類似点から『陶邑古窯跡群Ⅰ』^①の編年によるTK43~TK209に比定され、6世紀後半に位置づけられる。

SB4出土の土師器は、いわゆる古式土師器と呼ばれるものである。小型丸底土器や高杯の形態上の特徴からして、名張市人參峠遺跡^②SB15、SK15の出土土器に類似していることからして、「布留式」新相段階の時期に相当するものと考えられる。(12)の土師器は他に出土例がなく、極めて希な土器である。その他、遺構伴出でない土器の中に、中世の土器(土師器、瓦器)が含まれている。土師器土釜や瓦器の形態からして、E地区の土器と似ていることからして、大和型の土釜、瓦器と言える。時期としては鎌倉時代と考える。

(中村信裕)

② 水口昌也、門田了三 「名張市遺跡調査概要Ⅱ」 名張市教育委員会 1979

7. N 地区

N地区は、辻垣内遺跡の西端部に位置し、A～D地区より1～3mほど高い地区にあり、遺跡の背後にあたる南側には標高225m（比高16m）の丘陵が広がる。調査の結果、A～F地区と段差をもつ東端部で辻垣内3号～5号墳が相並んで築造されていたことが確認できた。3号墳は、「塚」として古くから地元の人々に祭られてき、当初より事業地内から除外されており周溝の確認調査のみ実施し周溝肩以下を現状保存とした。4号墳は、大半が地区除外とな

っており、周溝の一部検出にとどまった。5号墳は、度々の協議の結果やむなく本調査となった。今回の調査は、5号墳を中心とする削平部分で実施した。5号墳周溝埋土で、小石室・中世墓を各1基検出し、さらに古墳群の西方で飛鳥時代の竪穴住居13棟と奈良時代と推定される掘立柱建物4棟などを検出した。遺物は比較的少なく木箱（60×40×20cm）に15箱ほどであり、飛鳥～奈良時代の須恵器・土師器が大半をしめる。

1. 遺構

1. 辻垣内3号墳

標高209mの台地端部に位置する。畑地・水田として利用されているが、その一隅に横穴式石室の一部と思われる石材が露頭し、集積されている。この部分は、古くから「塚」として伝承されてきたこともあり、現状保存された。

調査は、墳丘・周溝の確認のため、幅2mのトレンチを4本設定して行なった。

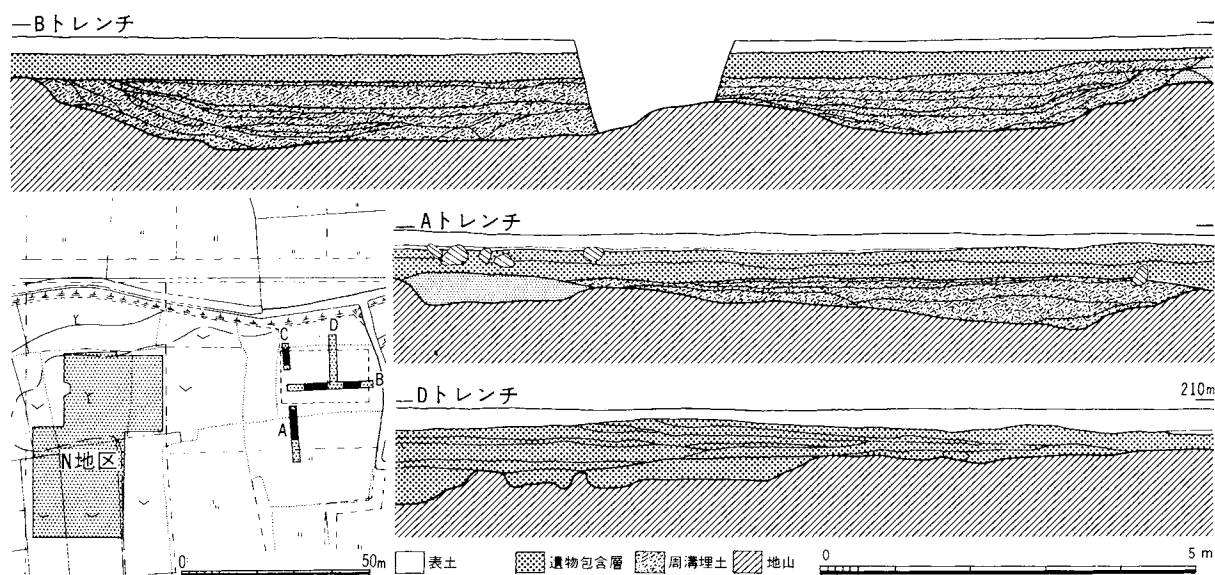
A～Cトレンチで3号墳の周溝を確認し、Bトレンチで幅8.2m・深さ0.9mのものと判断できた。周溝内側での傾斜は大きい、外側の傾斜は小さく、

A・Cトレンチの外側肩は、明瞭さを欠く。周溝は表土下0.6mほどで検出されたが、墳丘は既に削平されている。また、墳形も明確でない。周溝は、黒色～黒褐色砂質土がレンズ状に堆積しており、周溝の埋没には、多少の時間の経過が認められる。

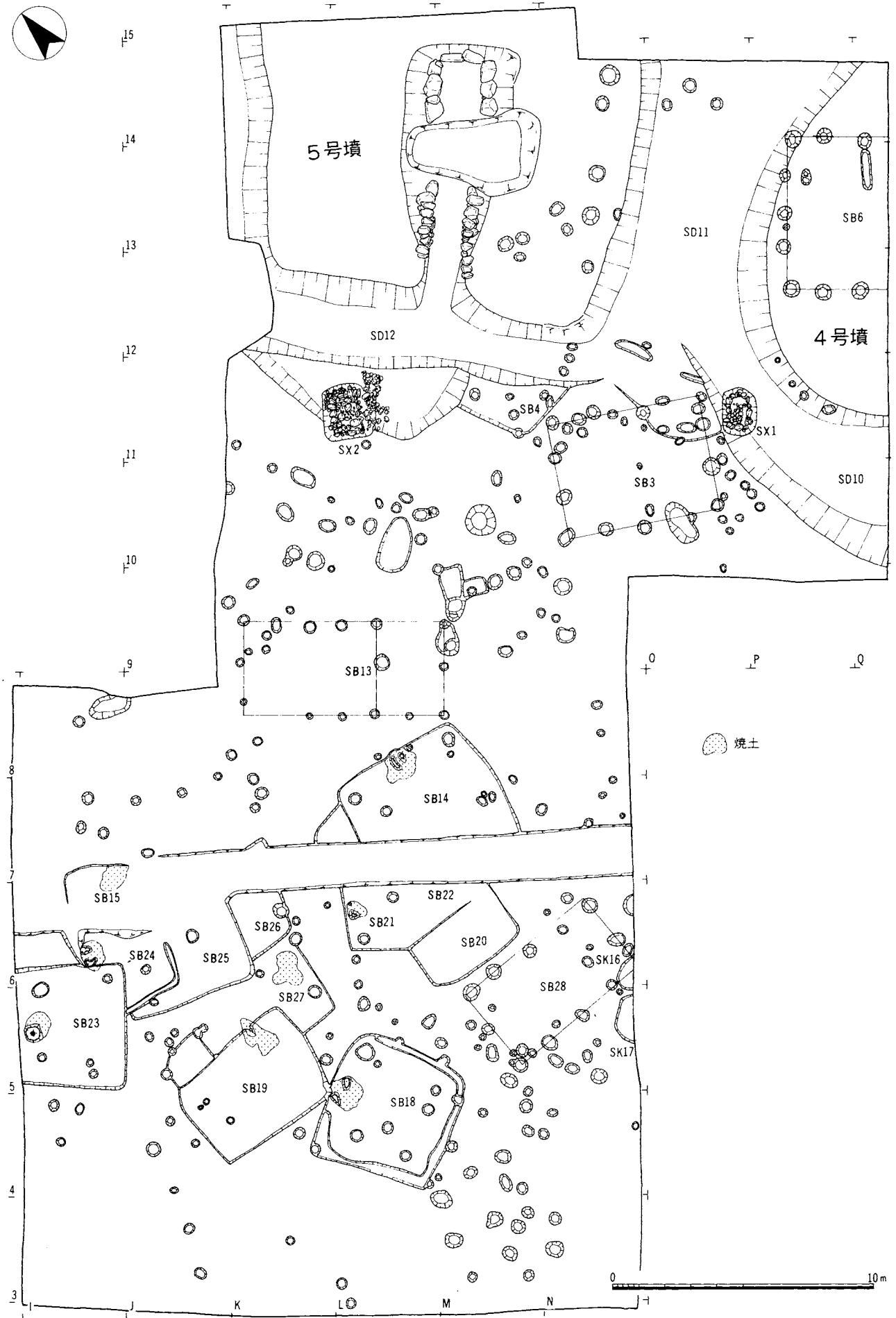
Bトレンチでは、3号墳周溝の南約2mで幅4.7m・深さ0.5mの溝を検出している。方向も、3号墳周溝とほぼ同じであり、埋土も類似していることから、古墳の存在が推定される。

2. 辻垣内4号墳

調査は、墳丘と周溝の一部にとどまり古墳の全容



第79図 N地区全体図(1:2000) 3号墳トレンチ断面図(1:100)



第80图 N地区遺構平面図 (1:200)

を明らかにするには至らなかった。調査区が限定されているため速断はできないが、周溝は、孤状を成しており径10m前後の円墳と推定される。

周溝SD10は、幅約4m・深さ0.4mの浅いものである。周溝北側は、SD11となり5号墳の周溝と重複しており、土層断面では4号墳が後出すると観察できた。SD11の墳丘裾で須恵器長頸壺(11)・四耳壺(14)が出土し、ほぼ完形に復元できたことからともに墳丘裾に置かれていたと推定できる。

内部主体は、未調査のため不明であるが、周溝断面に石材が認められ横穴式石室と推定される。

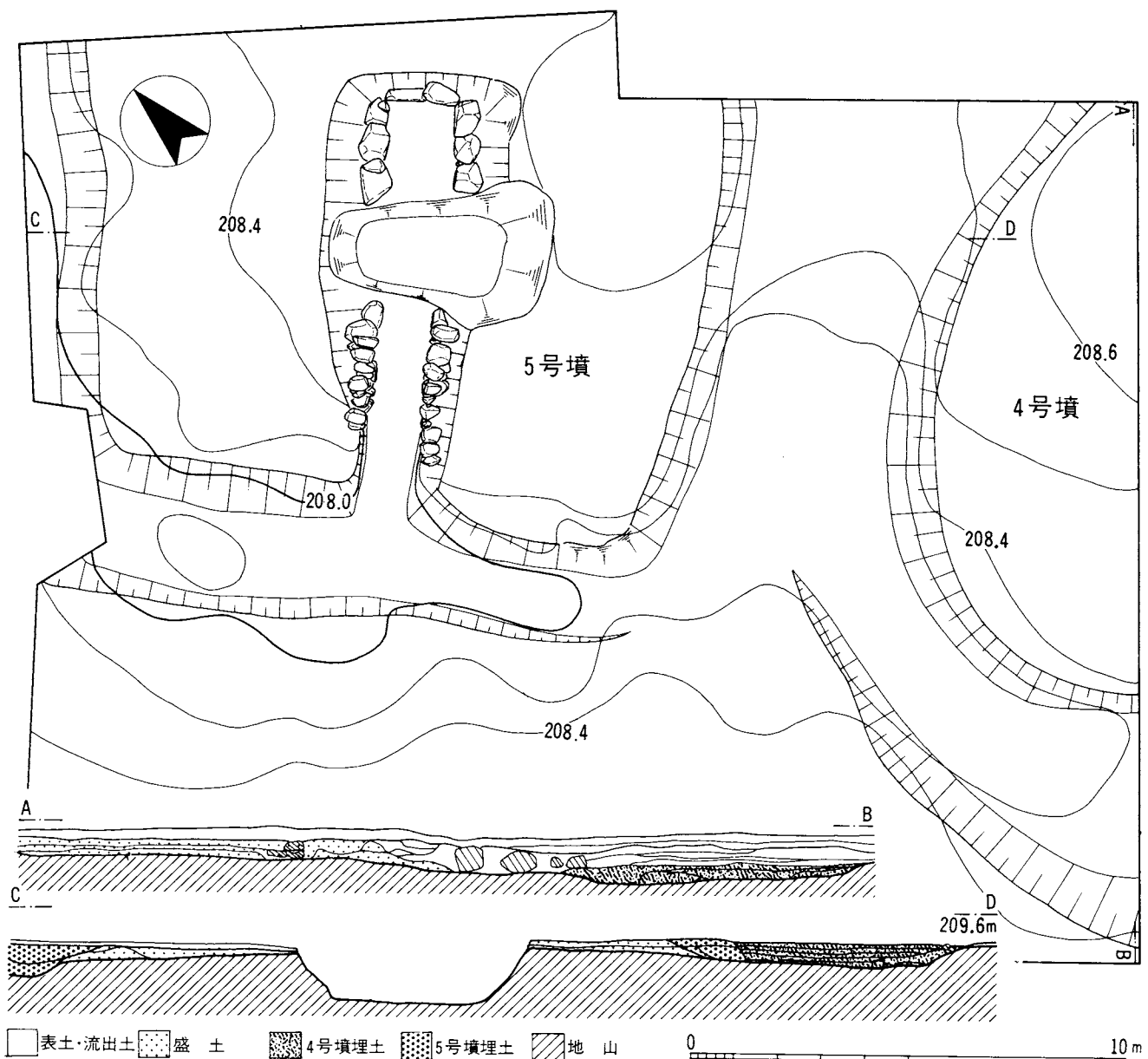
なお、墳丘上には、4間×3間以上の規模をもつ

掘立柱建物SB6が検出された。古墳西方で、この建物と同様な規模をもつSB28が飛鳥時代と推定できることから、4号墳は築造後あまり時期を隔てず削平されたのであろう。

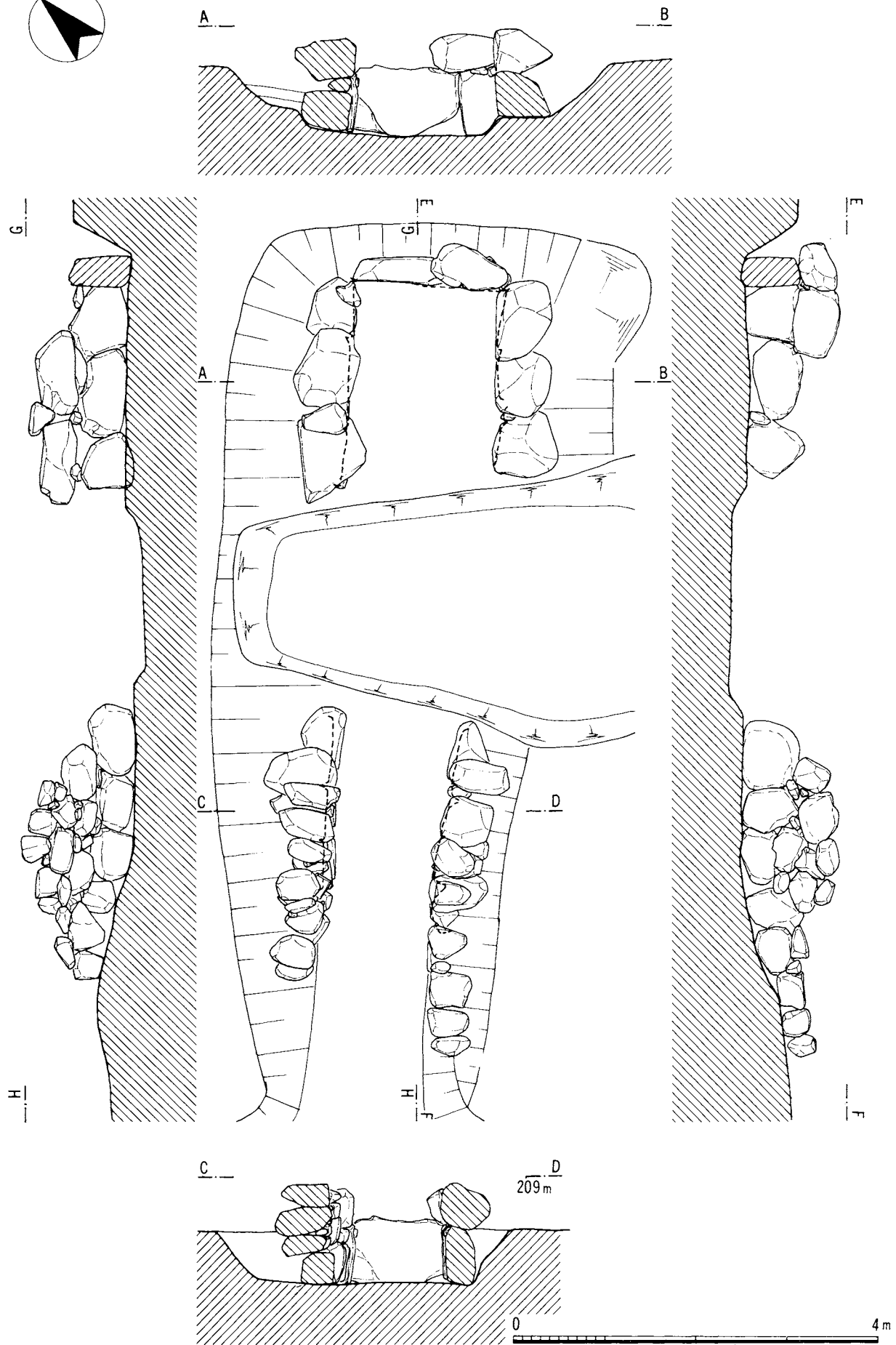
3. 辻垣内5号墳

5号墳は、一辺約14mの方墳であるが、墳丘は高さ0.4mほどしか残されていなかった。

周溝は、北東辺を除く三辺SD11~SD12を確認したが、南東辺SD11は4号墳の周溝と重複し、4号墳が後出するのでSD11での周溝規模は不明である。



第81図 辻垣内4号・5号墳調査後実測図(1:150)



第82図 辻垣内5号墳石室実測図(1:60)

周溝の形状をとどめている南西辺で、幅約3m・深さ0.3mである。北西辺は、周溝内側のみの検出である。

横穴式石室を内部主体としているが、石室中央部が攪乱されており、基部の抜きとり痕も検出できなかった。したがって、石室の平面形を判断するのは難しいが、玄室・羨道部の石の並びから左片袖の形態と推定される。石室全長は、9.0mである。

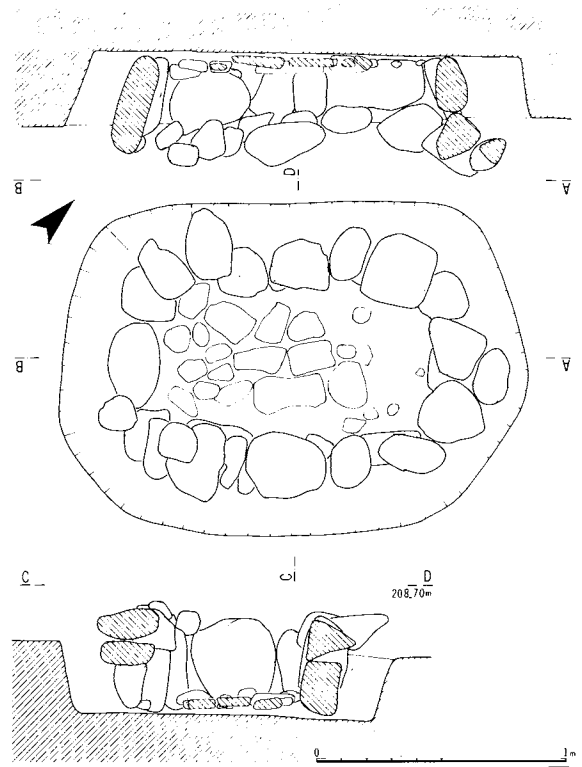
玄室は、奥壁部が長さ2.2mのこされているのみで全長は不明。奥壁幅1.6m。奥壁は、基部に二石を横積みし、この上に数段積上げていたのであろうが、二段目までしかのこらず石室内より高さ1.1mである。右側壁は、基部で3石横積みし、二段目まで高さ1.0mをのこす。左側壁では、基部で3石を横積みし、2段目まで高さ1.0mをのこす。

羨道部は、全長4.4m以上・幅1.2mであり、玄室主軸に対して僅かに西へ偏る。周溝への開口部では、地山を掘りこんでいるだけで石積みしていない。また、羨道石積の先端部では地山が傾斜して上がり、石積みは積み上げの段数を少なくしている。右側壁では、基部6石を横積みし、4段目まで高さ1.2mをのこし、左側壁では基部8石を横積みし、4段目まで高さ1.1mをのこす。

石室の構築にあたっては、幅3.2~4.2mで地山の砂礫層を0.6m掘りこんでいる。石積みは、奥壁を据えた後両側壁の石積みを行なっている。また、裏後めは、殆ど石を用いていない。

4. 小石室

4号墳の周溝SD10の埋土層内で検出した。1.9m×1.3mのほぼ長方形に埋土層を掘りこみ、長径約30cm・短径約20cmの石を用い、内法1.0m×5.0mの長方形に石を組んだものである。石組みは、各辺とも石の面を内側に揃えて立ち組みされており、二段目を小口積みする。また、奥壁は一石を立てている。更に、床面には拳大の石を中央部に敷きつめている。石の組み方は、横穴式石室における石積みに類似しており、古墳時代末期の小石室と推定される。ただし、出土遺物はない。



第83図 小石室(S X 1)実測図(1:30)

5. 竪穴住居

13棟の竪穴住居を検出したが、SB4を除いた住居は古墳群の西方に位置し、同一地点での重複が著しい。そのため、一部で前後関係を確認し得なかったものもあるが、その前後関係は次のとおりである。

SB4 → SD12

SB20・SB21 → SB22

SB18・SB27 → SB19

SB27 → SB26 → SB25 → SB23 → SB24

竪穴住居は、後世の溝に攪乱されていたりして、その規模・構造に不明な部分もある。平面形は、正方形ないし長方形を示し、一辺が5m前後のものであり、確認面からの深さは20cm前後のものが多い。全容が判明した竪穴住居では、北壁中央部にカマドを設けている。周溝・柱穴の検出状況は悪く、明確に検出した例は少ない。竪穴住居の床面には、主柱穴内部の空間に黄灰色の砂礫を含む粘質土を貼り付けており、固く締っている。住居出土遺物には、須恵器・土師器及び砥石があり、多くは埋土層からの出土である。

SB4

住居と推定される南西隅のみの検出であり、他の部分は古墳の周溝であるSD12と溝の西に位置する凹地に削られている。周溝は認められず、支柱穴も残存部分が少なく断定できない。遺物には、土師器・須恵器があり、古式土師器も含まれることから若干他の住居より先行するかもしれない。

SB14

住居の南西部を溝に削られていて全容は不明であるが、5.5m×5.0m以上の規模と考えられる。周溝・支柱穴とも検出されない。北壁中央部にカマドを設け、両袖の基部をのこす。床面中央部に1.5m×1.5mの範囲に貼床が認められる。須恵器蓋(29)はカマド、同蓋(30)は床面の出土であり、他は埋土層からの出土である。

SB15

溝に削られており、北東隅のみの検出である。北壁にカマドを設けており、カマドの位置を壁中央と推定すれば、東西約4mの小さな竪穴である。遺物は、土師器の細片のみである。

SB18

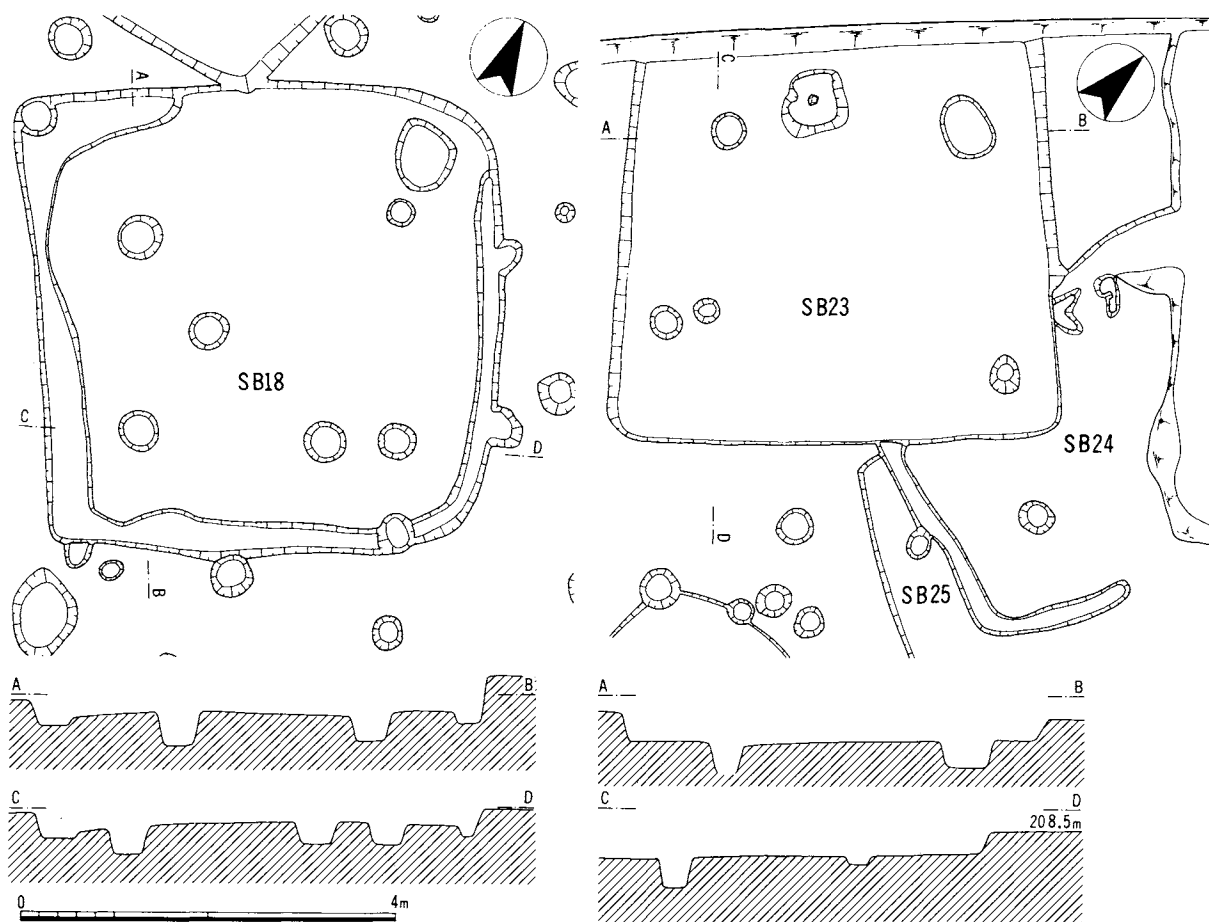
東西5m×南北4.8~5.2mの台形状の平面形を示す。北壁中央部にカマドを設け、両袖の基部をのこす。周溝は、北壁北部分を除く壁下で検出され、幅40cm・深さ10cmである。支柱穴間の柱間は、東西2m・南北2.8mであり、この範囲に貼床が認められる。北東隅に径0.7m・深さ0.6mの貯蔵穴を設ける。須恵器杯(36)はカマドから出土し、他は埋土層からの出土である。

SB19

東西3.6~4m×南西5.4mの台形状の平面形を示す。カマドは、北壁中央より東に偏って設けられる。周溝・支柱穴とも検出されない。住居中央部に貼床が認められる。土師器杯(40)は、カマドからの出土である。

SB20

SB22に削られ南半分ほどの検出である。周溝・支柱穴とも検出されない。須恵器短頸壺(43)は、床面からの出土である。



第84図 SB23・24実測図(1:80)

S B 21

北東部を溝に削られ、南部分はS B 20・S B 22と重複関係にあり、北西部のみの検出である。S B 20よりは先行するが、S B 22との前後関係は不明である。北壁にカマドを設け、カマド中央には支石を立てる。周溝・支柱穴とも検出されない。遺物には、土師器がある。

S B 22

S B 21・S B 20と重複関係にあり、S B 20より後出するがS B 21との前後関係は不明である。また、S B 14との重複関係も考えられるが明瞭でない。全容が不明であり、竪穴住居以外の遺構の可能性もある。

S B 23

東西 4.2 m×南北4.4~4.8 mの台形状の平面形を示す。北壁の立ち上がりは未検出であるが、カマドの位置から考えて調査区壁ぐらいであろう。周溝は検出されず、支柱穴も明瞭でない。カマド中央部には、支石を用いる。住居中央部で東西2 m×3 mの範囲に貼床が認められる。遺物には、須恵器杯、土師器杯・甕がある。

S B 24

S B 23・S B 25と重複関係にあり、S B 25→S B 23→S B 24の順序で築かれている。北部分を攪乱されている。北壁にカマドを設け、両袖の基部をのこす。周溝は、北辺・西辺及び南辺の西部分で検出した。支柱穴は、明瞭でない。カマド内から須恵器杯身(53)が出土した他、床面から土師器甕(54)・砥石(55)が出土している。

S B 25

S B 24・S B 26と重複関係にあり、S B 26より後出しS B 24より先行する。周溝・支柱穴とも明瞭でない。須恵器・土師器の他鉄鏝(59)が出土。

S B 26

S B 25と重複関係にあり、S B 25より先行する。北部を溝に削られているが、南東隅と南西部を検出した。周溝・支柱穴とも明瞭でない。遺物には、土師器皿(60)等がある。

S B 27

S B 26・S B 19と重複関係にあり、両者より先行する。南東隅部のみの検出である。周溝・支柱穴とも不明である。南壁近くにカマドと推定される焼土・粘土の固まりがある。遺物には、土師器がある。

遺構名	規 模 ^m (東西×南北)	深 ざ ^m	周 溝	カマド	出 土 遺 物			備 考
					須 恵 器	土 師 器	そ の 他	
S B 4	—————	0.15		———				
S B 14	5.5×5.0以上	0.08		北 壁	29・30	31・32・33	34	
S B 15	—————	0.14		北 壁				
S B 18	4.9×5.0	0.20	北壁は部分的	北 壁	35・36	37・38・39		
S B 19	5.4×4.9	0.25		北 壁		40・41		
S B 20	4.0×—————	0.17		———	42・43	44・45		
S B 21	—————	0.23		———				
S B 22	—————	0.04		———		46		
S B 23	4.4~4.8×4.2以上	0.25	西部分に確認	北 壁	47	48・49・50・51・52		
S B 24	3.0×3.4以上	0.12		西 壁	53	54	55	
S B 25	5.0×—————	0.20		———	56・57	58	59	
S B 26	—————	0.08		———		60		
S B 27	—————	0.10		———				

————— は不明

第11表 竪穴住居一覽表

6. 掘立柱建物

4棟の掘立柱建物を確認したが、調査区全体に点在し、棟方向等に統一性は認められない。

S B 3

調査区東部の古墳群西側で検出した4間(6.0m)×3間(4.4m)の建物である。柱間は、桁行・梁行とも不揃いである。柱掘形は、径50cm・深さ30cmとと比較的大きい。

S B 6

4号墳墳丘上で検出した4間(5.6m)×2間(2.8m)以上の建物である。北側柱の柱穴は、隅柱を結んだ線よりわずかに外側にはみ出す。柱間は、比較的等間となり140cmほどのものである。

S B 13

調査区中央部で検出した建物で4間(5.2m)×2間(3.6m)の身舎に2間の張り出し部がつく。柱穴が明瞭でないところもあるが、柱間は比較的等間となり、桁行で140cm・梁行で180cmとなる。柱掘形は、径30cm・深さ20cmと小さい。

S B 28

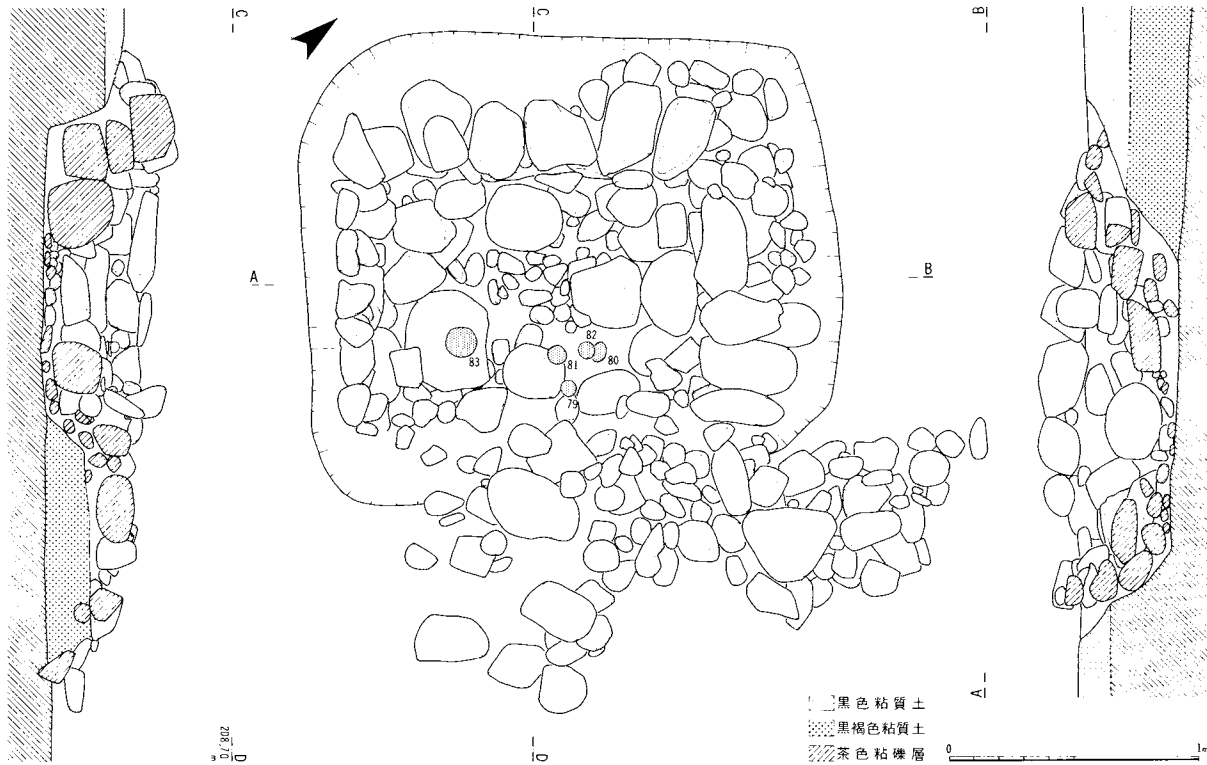
調査区西側の竪穴住居群南で検出した4間(5.6m)

×2間(3.3m)の建物である。桁行は、1.2m+1.6m+1.6m+1.2mと中央2間が広い。柱掘形は、径50cm・深さ30cmと比較的大きい。柱穴内から暗文をもつ土師器杯が出土していること、及びこの地区の包含層にも同様な形態をもつ土器が出土していることから、建物の時期を示すものと考えられる。

7. 中世墓

5号墳西の凹地埋土層内で検出した。2.1m×1.9mの長方形の掘形をもつ土坑内に、内法1.3m×1.0mの空間を石組によりつくっている。南辺では、明確な石組みが認められず、幅5m・長さ2.3mの石敷が石組肩より一段低いレベルで認められた。三辺の石組みは、長径約35cm・短径約20cm前後の石を基本的に小口積みしている。また、床面には、拳大ほどの小石を粗く敷きつめている。石組内には、中央西寄りに径約30cmの大きな石を四石用い、0.4m×0.4mの小さな空間地をつくっている。この空間地は、納骨場所として用いられたと推定されるが、容器などの遺物は存在しなかった。

石組内の南辺近くには、供献遺物である瓦器椀(83)1点・土師器小皿(78~82)5点が出土。



第85図 中世墓(S X 2)実測図(1:30)

2. 遺物

1. 辻垣内3号墳

A～Dトレンチで検出した周溝埋土及び包含層から須恵器・土師器・瓦器が出土した。

(1) 須恵器

蓋 (1) 口径13.0cm・器高3.2cm。天井部と口縁部の境に稜線をもたず、口縁部は外傾して開く。天井部内面を一定方向にナデる。

杯 (2) 口径14.5cm・器高2.8cm。口径のわりに器高の小さい偏平な器形をなす。やや長めの立ちあがりには直立気味となり、受部は短く水平にのびる。底部外面 $\frac{1}{2}$ ほどをヘラケズリし、内面を一定方向にナデる。

甕 (3) 口縁部を欠く。胴部最大径8.0cm。直立気味に開く口頸部と、やや肩の張る体部からなる。口頸部には2条の沈線をめぐらし、肩部と体部の境に2条の沈線にはさまれた刺突文をめぐらす。穿孔は、この刺突文上で外面から施される。

2. 辻垣内4号墳

周溝SD11・12から須恵器・土師器が出土。須恵器には、蓋・杯・高杯・広口壺・長頸壺・四耳壺がある。土師器には、甕の破片があるが、図示できるものはない。

(1) 須恵器

杯 (4～6) 4は、口径12.2cm。5は、口径11.2cm・器高3.7cm。ともに、立ちあがりには内傾し、受部は水平にのび、端部は丸くおさまられる。底部外面の $\frac{1}{2}$ ほどを回転ヘラケズリし、口縁部及び内面をロクロナデする。砂粒を多少含む。6は、口径12.8cm・器高3.9cm。口縁部が外側へ屈曲するものである。底部外面の $\frac{1}{2}$ ほどを回転ヘラケズリし、口縁部及び内面をヨコナデする。底部中央に脚部及至はつまみの痕がみられないことから杯と判断した。類例が、陶邑古窯址郡のTK217にある。^①

高杯 (7・8) 7は、底径11.2cmの脚部のみである。透しは、長方形で3方向に穿孔していると考えられる。透し下辺に1条の沈線をめぐらす。脚端部は、屈折して角張る面をつくる。8は、口径11.2cm

器高5.2cm。杯部はゆるやかに内湾し、口縁端部は丸くしあげる。脚部は、「八」字形にのび、端部は大きく屈曲して外上方にのび丸くまとめられる。砂粒を含み、青灰色を呈す。

甕 (9) 体部の $\frac{1}{2}$ ほどしかのこっていない。最大径は、体部中央よりやや上方にあり、9.2cmを測る。体部外面上方および内面は、ロクロナデを施し、体部外面下半を回転ヘラケズリする。青灰色を呈す。

長頸壺 (10・11) 10は、口縁・脚端部を欠く。推定口径9.5cm・推定器高26.5cm、胴部最大径17.2cm。細く長い口頸部は、上半部で外反して開く。丸味をもつ体部は、中央部に最大径をもち、この部分に2条の沈線にはさまれた刺突文をめぐらす。脚は「八」字形に大きく開く。体部下半を回転ヘラケズリする。口頸部の一部と体部上半に自然釉がかかる。11は、底部・脚部を欠く。口径9.3～9.7cm・胴部最大径は、体部中央より上にあり、18.1cm。口頸部はゆるやかに外反し端部で直立気味となる。体部は、ほぼ球形であり、下半を回転ヘラケズリし、口縁端部は内外面ともヨコナデする。砂粒を含み、灰色を呈す。

平瓶 (12) 口径5.0cm・器高11.6cm・胴部最大径13.4cm。体部は、中央部に最大径をもち、全体に丸味のある器形をなし、背面中央部より左側より斜行する口縁部をつける。体部下半は回転ヘラケズリを施し、その後体部全面に粗いカキ目をめぐらす。細砂を含み、灰色を呈す。

短頸壺 (13) 口径4.6cm。体部下半を欠く。短い口頸部は、肥厚して内傾する。端部は丸く、外面に稜線をもつ。肩の張る体部をなすものと思われる。

四耳壺 (14) 口径19.2cm・器高42.9cm・体部最大径42.9cm。短い口縁部はわずかに外傾し、端部は肥厚し内傾する面をもつ。最大径は、体部中央よりやや上にある。肩部中央に鉤状の耳を四方に配す、口縁部はヨコナデし、体部外面は、格子状叩き目の後にカキ目を施し、内面には同心円文・輪状文の叩き目をのこす。底部にはカキ目が及ばず、叩き目は密である。体部上方 $\frac{1}{2}$ ほどまで灰がかぶり、自然

釉が底部にまで及んでいる部分もある。底部には、輪トチの痕がみられ、口縁部内面にはヘラ記号がある。胎土は密で、焼成は良好であり、灰色を呈す。

広口壺 (15) 口径13.8cm。外傾する口頸部は、比較的短く、端部は丸く仕上げる。口頸部内外面ともヨコナデを施し、焼成は良好である。

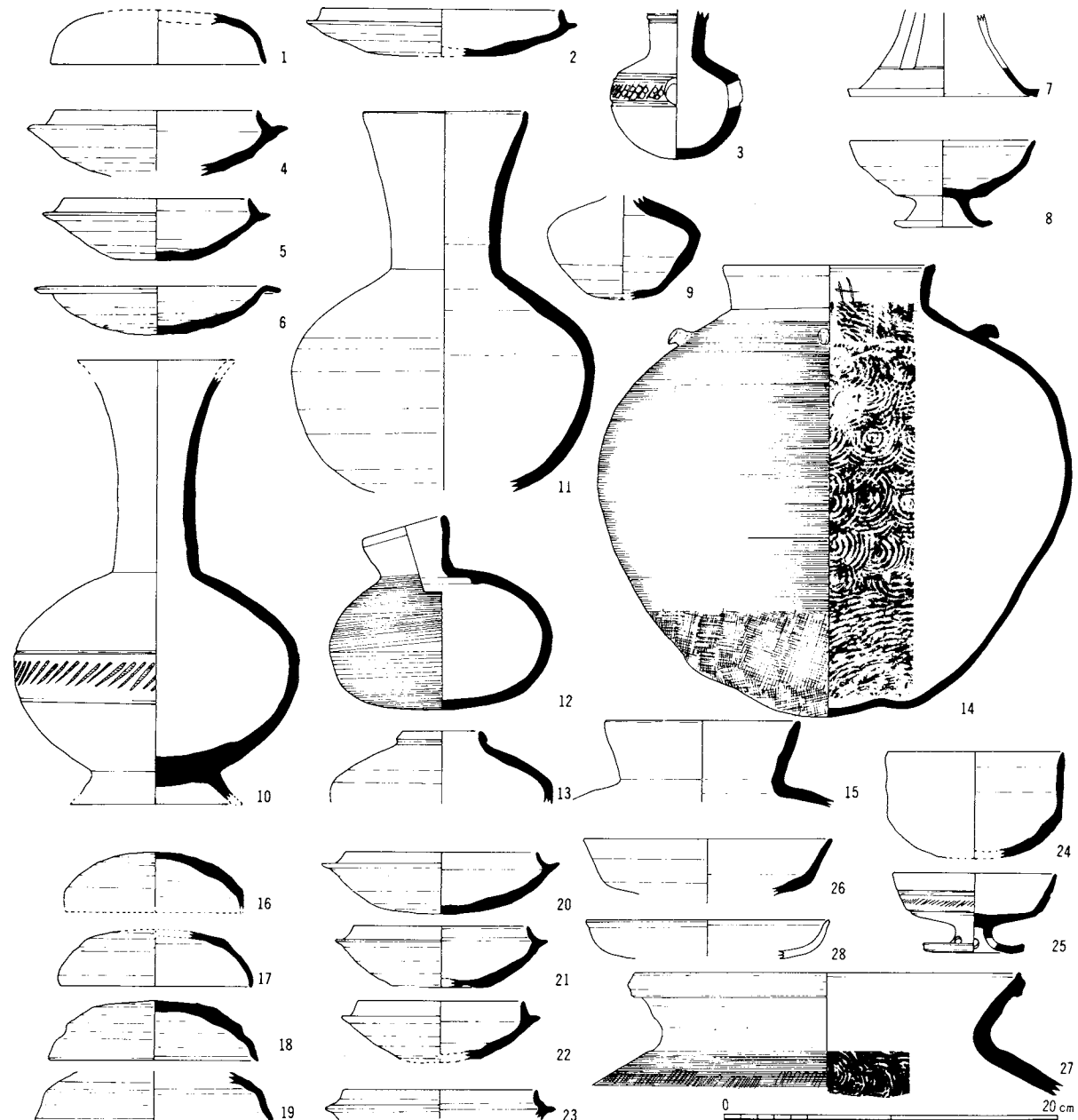
3. 辻垣内5号墳

出土遺物には、須恵器蓋・杯・碗・高杯・甕、土師器皿などがある。石室内からは、玄室攪乱層で須恵器蓋 (16)・杯 (20)、羨導部で須恵器碗 (24)・高杯 (25・26) が出土した他は細片のみの出土である。

その他の遺物は、大半が周溝S D10からの出土である。

(1) 須恵器

蓋 (16~19) 口径10.4~14.4cm・器高3.4~3.8cm。天井部と口縁部の境はゆるやかであり、16・17は天井部 $\frac{1}{3}$ ほどを回転ヘラケズリするが、18はヘラ切り不調整である。これらの蓋は、口縁部の形態から2種類に分類される。口径10~11cm内外のもの(16・17)は、口縁部がまっすぐ下方にのび端部を丸く仕上げている。口径12~14cm内外のもの(18・19)は、口縁部が「八」字形に開き、端部が内傾する面をもつもの(18)もある。



第86図 古墳出土の遺物 (1:4、14; 1:6)

杯 (20~23) 口径10.0~12.6cm、器高3.7~3.9cm。立ちあがりは、短く内傾し、端面は丸い。受部は、短く水平または上外方へのび、端部の稜は鈍い。底部は、平底に近い。底部 $\frac{2}{3}$ ほどを回転ヘラケズリし、受部および立ちあがりは、ヨコナデする。

椀 (24) 口径10.1cm・器高6.4cm。口縁部は、長く直立し、端面は薄くひきだされる。底部は丸味をもつ。底部を回転ヘラケズリする。

高杯 (25・26) 25は、口径9.8cm・器高4.8cmの小形品である。杯部は、平底の底部と屈折して直線的に外傾する口縁部からなる。口縁部下半には、2条の沈線と、この間に刺突文をめぐらす。脚部は短く、大きく屈曲して開く。端部は、直立する面をもつ。脚部には円孔透しを三方に配す。26は、口径約14.5cmの杯部である。口縁部は、直線的に外傾して開き、端部は丸い。

甕 (27) 口径23.0cm。口縁部は比較的短く、「く」字形に外傾し、端部は肥厚し縁帯状となる。口縁部内外面はヨコナデし、体部外面は平行叩きの後カキ目を施し、内面には同心円状の叩き目をのこす。

(2) 土師器

皿 (28) 口径14.6cm。口縁部は大きく内湾し、端部でわずかに外反して、内傾する面をつくる。口縁部付近は、内外面とも横方向のヘラミガキを施す。細砂を多少含み、褐色を呈す。

この他に、口縁部が大きく内湾し、内面に正放射状暗文をもつ明褐色の杯の細片もある。

4. 竪穴住居

1. S B 14

(1) 須恵器

蓋 (29・30) 29は、口径13.1cm・器高3.4cm。30は、口径9.8cm・器高3.6cm。ともに天井部は、丸味をもち平坦である。天井部と口縁部の境は稜線をもたず、口縁部は緩く外傾する。口縁部は、29で丸く、30は内傾する面をもつ。ともに天井部をヘラケズリし、口縁部内外面をヨコナデする。底部内面は、一定方向のナデで仕上げる。

(2) 土師器

甕 (32・33) 32は、口径約32cm。33は、口径約27cm。ともに口頸部の破片である。32は、「く」字形

に大きく外傾する口縁部をもち、体部より器壁は厚い。口縁部は、外上方につまみ上げられた結果、口縁部が凹む。口縁部・体部外面は、縦方向の粗いハケ目、口縁部内面は右下りのハケ目、体部内面は横方向のハケ目を施し、口縁部内外面ともヨコナデ調整する。細砂・雲母を含み、淡茶色を呈する。

(3) 石製品

砥石 (34) 両端を欠損した砥石であり、現存する長さ4.1cm。断面は台形をなし、四面ともに使用痕を認める。

2. S B 18

(1) 須恵器

杯 (35・36) 35は、口径11.1cm。36は、口径9.2cm。器高3.5cm。35は、短く直立する口縁部をもち、受部は短く水平にのびる。36は、矮小化した立ちあがりに外上方に短くのびる受部をもつ。底部の $\frac{2}{3}$ をヘラケズリし、底部内面を一定方向にナデ調整する。35・36には、明瞭な時期差が認められ、カマド出土の36をS B 18の廃絶期のものと考えたい。

(2) 土師器

皿 (37) 口径19.2cm・推定器高3.9cm。内湾する口縁部は、端部でわずかに外反し、薄くひき出され、端部は丸くわずかに内傾する面をもつ。口縁部内外面をヨコナデし、体部外面は不調整。体部内面は、斜方射状暗文を施す。砂を殆ど含まず、褐色を呈する。

杯 (38) 口径15.6cm・器高5cm以上。大きく内湾する体部は、口縁部でオサエられ直立気味となり端面は湾曲する面をもつ。口縁部外面は、ヨコナデ後粗い横方向のヘラミガキを施し、体部内面には斜方射状暗文を施す。体部外面下半をヘラケズリする。

甕 (39) 口径24.8cm。外傾する口縁部は、ヨコナデされ、端部で上方につまみ上げられ、外面する端面は凹む。細砂・雲母を含み、淡褐色を呈する。

3. S B 19

(1) 土師器

杯 (40) 大きく内湾する体部は、口縁部で外反し、内傾する面をもつ。口縁部をヨコナデし、外面は横方向にヘラミガキする。体部内面は、正放射暗文を施す。細砂をわずかに含み、明褐色を呈する。

甕 (41) 口径14.2cm。「く」字形に外傾する口縁

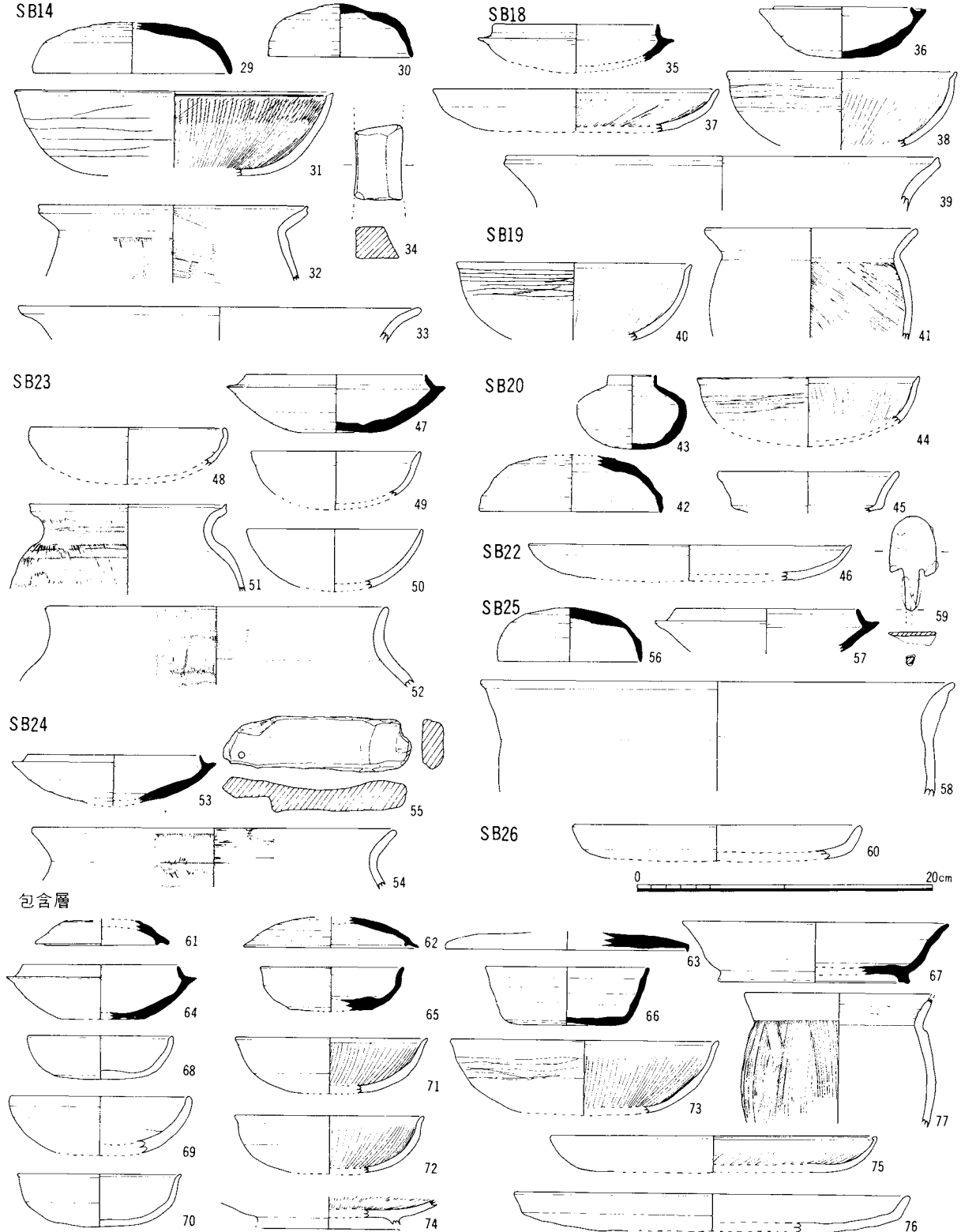
部は、端部でわずかに角張り外上方を向く面をもつ。頸部は、オサエられわずかに凹む。口縁部は、ヨコナデされるが、内面には横方向のハケ目が施されていたらしい。体部外面は、縦方向のハケ目が施されるが剥離のため図化し得ない。内面には、右下りの

細いハケ目を施す。

4. S B 20

(1) 須恵器

蓋 (42) 口径12.2cm・推定器高3.9cm。丸味をもつ天井部は、ほぼ平坦になると思われ、外傾して



第87図 竪穴住居・包含層の遺物 (1:4)

開く口縁部は、端部で直立気味となり、丸くおさまる。天井部は、ヘラ切り不調整。口縁部をヨコナデし、天井部内面を一定方向にナデ調整する。

短頸壺 (43) 口径3.4cm・器高5.0cm・胴部最大径7.4cm。短く直立する口縁部は、端部で内傾する面をもつ。体部は、肩の張る器形を成し、底部はわずかに丸味をもつ。体部外面下半をヘラケズリし、口縁部内外面及び肩部をヨコナデする。

(2) 土師器

杯 (44) 推定口径14.8cm。内湾する体部は、口縁端部でわずかに外反し、内傾する面をもつ。口縁部は内外面ともヨコナデされ、外面には横方向のヘラミガキを施し、体部内面には正放射状暗文を施す。細砂を多少含み、明褐色を呈す。

高杯 (45) 口径12.0cm・杯部高2.6cm。外反して開く口縁部は、端部でわずかに肥厚して丸くおさまる。口縁部は内外面ともヨコナデし、杯底部外面はヘラケズリする。細砂・雲母を含み、明褐色を呈す。

5. S B 22

(1) 土師器

皿 (46) 口径21.6cm・器高2.5cm。内湾して開く体部は、口縁部で器壁を薄くし、端部は内傾する面をもつ。口縁部内外面及び内面はヨコナデし、体部外面は不調整。雲母を含み、褐色を呈す。

6. S B 23

(1) 須恵器

杯 (47) 口径12.2cm・器高3.9cm。短く内傾する立ちあがり短く水平にのびる受部をもつ。底部外面を $\frac{1}{2}$ ほどヘラケズリする。

(2) 土師器

杯 (48・50) 48は、推定口径13.0cm。内湾する口縁部は、端部で丸くおさまる。口縁部内外面ともヨコナデ調整。砂を含まず、淡灰褐色を呈す。49は、推定口径11.5cm。内湾する体部は、口縁端部でわずかに外傾し、内傾する面をもつ。口縁部及び体部内面はヨコナデ調整し、体部外面は不調整。雲母を含み、暗茶褐色を呈す。50は、口径11.8cm・推定器高4.2cm。大きく内湾して開く体部及び口縁部は、端部で丸くおさまる。口縁部内外面及び内面はヨコナデ調整し、体部外面は不調整。

甕 (51・52) 51は、口径13.2cm。大きく弯曲し

て開く口縁部は、端部で肥厚して上方につまみあげられ、外方に直立してわずかに凹む面をもつ。口縁部外面及び体部外面には、右下りのハケ目を施し、口縁部外面ともヨコナデ調整する。体部内面は、ナデで仕上げる。細砂を含み暗茶色を呈し、外面には着煤する。52は、直立気味に開く口縁部を有し、端部は多少角張り、上方を向く面をなす。口縁部内面に横方向のハケ目、口縁部外面と体部外面に縦方向のハケ目を施す。口縁部は、その後ヨコナデ調整される。体部内面は、ナデで仕上げられる。

7. S B 24

(1) 須恵器

杯 (53) 口径11.8cm・推定器高3.8cm。立ちあがり短く内傾し、端部は丸い。受部は、短く水平に伸び、肥厚する。底部外面の $\frac{1}{2}$ ほどをヘラケズリする。

(2) 土師器

甕 (54) 口径約42cm。「く」字形に外反する口縁部は、端部が多少角張り外上方へ向く面をなす。口縁部内面には、横方向のハケ目、口縁部外面及び体部外面には縦方向のハケ目を施し、口縁部内外面をヨコナデする。細砂を含み、淡褐色を呈す。

(3) 石製品

砥石 (55) 長さ12.8cm・幅3.6cm・厚さ1.6cm。長辺の一端には、小さな穿孔がある。片面のみに使用痕がのこり、弯曲する。

8. S B 25

(1) 須恵器

蓋 (56) 口径9.8cm・器高3.6cm。口径のわりに器高が大きい。口縁部は、直立気味に開き、天井部はわずかに丸味をもつ。天井部は、ヘラ切り不調整。内面は一定方向のナデを施す。

杯 (57) 口径12.4cm。短く内傾する立ちあがり短く水平にのびる受部からなる。

(2) 土師器

甕 (58) 口径約31cm。肥厚して、直立気味に開く口縁部をもつ。口縁部をヨコナデする。

(3) 鉄製品

鉄鏝 (59) 長さ6.4cm・幅3.2cmの平根型。袂を有す。

9. S B 26

(1) 土師器

皿 (60) 口径19.5cm・器高2.4cm。口縁部は、屈曲して開く。比較的厚い器壁は、端部で尖り気味となる。細砂・雲母を含み、褐色を呈す。

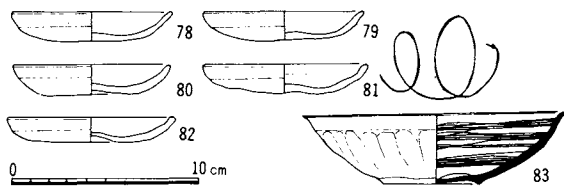
5. 中世墓

(1) 土師器

小皿 (78~82) 口径7.2~9.0cm・器高1.4~1.7cm。口縁部はゆるく内弯して開き、端部は丸い。平底気味のもの (78・79) と底部中央部が凹むもの (80~82) がある。口縁部内外面をヨコナデし、底部外面はオサエ成形のままである。底部内面を同心円状にナデるもの (79・81) もある。鉄分の多い土を用いており、赤色顔料を塗ったような仕上げになる。砂をあまり含まず、雲母を含む。

(2) 瓦器

椀 (83) 口径13.6~14.1cm・器高3.6~3.9cm。大きく内弯する体部。口縁部は外反し、口縁内面直下には段状の沈線をめぐらす。底部は、断面3角形の低い高台が貼り付けられる。底部内面には、二輪の暗文を施し、体部内面には間隙の多い太目のヘラミガキが施工される。体部外面は、指頭によるオサエ痕をのこす。口縁部はヨコナデする。



第88図 S X 2 出土遺物(1:4)

6. 包含層

(1) 須恵器

蓋 (61~63) 包含層出土の蓋には、各種のものがあ、図示した以外にかえりをもたないものもある。61は、丸い天井部をもち、突出するかえりをもつ。口径7.6cm。62は、かえりが矮小化したものであり、口径10.0cm。ともに天井部を欠くが、宝珠つまみが付くものであろう。63は、口径16.4cm。天井部は水平となり、口縁端部は垂直に下方にのびる。

杯 (64~67) 蓋同様各種の形態の杯がある。64は、口径10.5cm・器高3.7cm。短く内傾する立ちあ

がりと短く水平にのびる受部をもつ。底部は、平底となる。外面には、自然釉がかかり調整不明。65は口径9.8cm・器高3.0cm。平らな底部から内弯する体部へ続き、口縁部はわずかに外弯して直立気味に開く。底部外面は、ヘラ切り不調整で内面は一定方向のナデで仕上げる。66は、口径11.0cm・器高3.9cm。平らな底部は、屈折して直線的に開く口縁部をもつ。口縁部内外面をヨコナデし、底部外面はヘラキリ不調整、内面は一定方向のナデで仕上げる。67は、口径18.0cm・器高4.0cm。断面方形の高台は、直立する。内弯して外開する体部は、口縁部が外反する。

(2) 土師器

杯 (68~74) 暗文をもたないA類 (68~70) と暗文をもつB類 (71~74) に分類され、各々口径により細分される。

A類は、内弯してのびる体部をもつが、口縁部が丸くおさまるもの (68・69) とわずかに外反して内傾する面をもつ (70) がある。68は、口径9.8cm・器高3.0cm。69は、口径12.0cm・推定器高4.0cm。70は、口径11.2cm・器高3.6cm。ともに細砂・雲母を多く含み、68・69は淡褐色、70は明褐色を呈す。

B類には、口径13cm前後のもの (71・72) と口径18cmのもの (73) がある他、高台をもつ例 (74) もある。71は、口径12.8cm・器高3.7cm。72は、口径12.8cm・器高3.9cm。ともに口縁端部が外反し、内傾する面をもつ。口縁部内外面をヨコナデし、内面に正放射状暗文を施す。細砂をあまり含まず、明褐色を呈する。73は、口径約18cm・推定器高5cm。口縁部は、内外面ともヨコナデし、外面を横方向にヘラミガキする。体部以下の外面は、ヘラケズリする。内面は、正放射状暗文を施す。74は、底径9.8cmの高台である。高台は、外傾して開く。内面に正放射状暗文を施す。

皿 (75・76) 暗文をもたないA類 (76) と暗文をもつB類 (75) に区分される。

A類 (76) は、推定口径26.8cm・器高2.5cm。平らな底部は、わずかに丸味をもち、屈曲して直立気味の口縁部へつづく。口縁端部は、尖り気味となる口縁部内外面をヨコナデし、底部外面を粗くヘラケズリし、内面を不定方向にナデ調整する。

B類(75)は、推定口径22.0cm・器高2.4cm。平らな底部から内弯してつづく口縁部は、端部で内側にまきこまれる。口縁部内外面をヨコナデし、内面に斜放射状暗文を施す。

甕(77) 口径12.6cm。「く」字形に外反する口縁

部は、頸部でわずかにオサエられ体部へ続く。口縁部内面に横方向のハケ目を施し、内外面ともヨコナデする。体部外面は、縦方向に細いハケ目を施し、内面をナデアゲル。細砂・雲母を多く含み、暗茶褐色を呈す。

3. 小 結

辻垣内遺跡は、滝川左岸に立地する広大な遺跡であり、縄文時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。N地区は、遺跡の西端部の微高地に位置し、古墳群と飛鳥時代の集落跡を中心とする地区である。以下N地区で検出された遺構・遺物の要約をもって、小結としたい。

1. 古 墳

辻垣内遺跡では、5基の古墳が確認されており、N地区で3号～5号墳の計3基の古墳が、台地端部に相並んで築造されていた。調査が部分的であるので、墳形等その全容については必ずしも明確ではないが、3基とも横穴式石室を内部主体とする後期古墳と考えられる。

5号墳は、一辺約14mの方墳であり、内部主体の横穴式石室は、攪乱されているが左片袖のものと推定された。羨道部では、地山をその一部としてとりこんでおり、石材の省力化をはかっている。

出土遺物は、石室内が攪乱されているため、石室内副葬の状況は不明である。玄室出土須恵器(16・20)が、『陶邑古窯址群』のTK 209あるいは『陶邑』のⅡ型式5段階に比定^②できることから、埋葬時期の1点^③を7世紀前後におくことができる。また、周溝遺物にも、大きな器形の差が認められず、追葬が行なわれたと想定しても大きな時期差がなかったものと考えられる。

4号墳の周溝遺物は、5号墳の須恵器と器形上大差はないが、杯(6)・高杯(8)のようにTK 217あるいはⅡ型式6段階・Ⅲ型式1段階で認められる新しい要素をもつ須恵器が含まれることから、4号墳は5号墳より後出すると考えられる。これは、周溝埋土の重複関係とも符号する。

2. 集 落

住居を構成する遺構には、竪穴住居13棟と掘立柱建物4棟があり、竪穴住居は、同一地点での重複が著しい。竪穴住居の規模は、一辺5m前後のもの(SB14・18・19・23・25)から一辺3m前後のもの(SB24)まで各種あるが、前者のものが多い。平面形は、カマドをもつ辺が長いやや横長を示す。すべての住居床面には、主柱穴内側部分一面に砂礫を含む暗茶色土が貼られ、固く締まっていた。

竪穴出土の遺物は、土師器・須恵器を主体としており、これ以外にSB14・24で砥石、SB25で鉄鏃が出土している。遺物は、量的に少なく、また完形の出土例はきわめて少ない。遺物の出土状況は、前述したとおりであり、多くは埋土層からの出土であり、住居の埋積過程に混入したことも当然予想されるが、一括遺物として扱った。その中にあって、カマド内出土の遺物は、竪穴住居廃絶直後の時期を示すものと考えられる。

須恵器では、蓋・杯が大半を占める。その型式は、SB14の蓋(29)やSB23の杯(47)がTK 209に比定され、SB25の蓋(56)やSB18の杯(36)がTK 217に比定される。一方伴出する土師器には、杯・皿・甕があり、杯に時期的特徴がよく認められる。即ち、暗文をもつ杯は、藤原京で杯Cとして区分されるものであり、その器形・技法から飛鳥Ⅱとして位置づけられるものである。以上のことから竪穴住居群の時期を7世紀前半^④を中心とするものとして把握できる。数少ない遺物で区分することは、問題がこのころが、出土遺物から古い器形で構成されるグループ(SB23・24・20)と新しい器形を含むグループ(SB14・18・25)に区分できる。

時期がやや不明なSB4を除いた12棟の竪穴住居は、同一地点での重複が著しく当然時期差をもつ

のである。これらの竪穴住居は、方向によって、一辺が東西に向くもの（S B 14・9・20・22・24・25・26・27）北に対して西に偏るもの（S B 15・21・23）およびその中間的なもの（S B 18）に区分される。そして、前述した重複関係、出土遺物、および棟方向により少なくとも3群の時期差として考えることも可能である。

I群は、辺方向が北に対して西に偏るもので、時期的に先行するグループ（S B 15・21・23）である。S B 15では、カマドの位置を異えるが、S B 21・23では同方向に支石をもつカマドを付設している。また、S B 23で暗文をもたない杯のみを出土していることも時期的な特徴と言える。

II群は、一辺が東西に向くもので、新しい要素をもつ須恵器を含み、I群に続くグループ（S B 14・18・25）である。

III群は、II群と同じ要素をもつが、重複関係により最も新しい時期のグループ（S B 19・24）である。

しかし、重複関係が明瞭でないものや、出土遺物が細片であり時期を決定しがたいものもあり、II・III群の区分は、検討の余地がのこる。

以上の区分によれば、一時期に存在した竪穴住居は2～3戸となり、出土遺物の時期差は半世紀前後である。

3. 古墳と集落

以上のように古墳築造は、7世紀前後に行なわれたものであり、一方竪穴住居は7世紀前半代に営まれたものであり、古墳と集落が同時存在した可能性も強い。ただ、ここでいう同時存在とは、即物的な意味であり、両者の関係は不明である。

また、S B 28の柱穴内より竪穴出土の土師器杯と同形態の杯を出土していることやこの地区で出土遺物も大きな時期差を示さないこと、および柱穴形態は大きく古い時期の様相を示していることから、S B 28の時期は竪穴住居の時期と大きな時期差をもたないと考えられる。また同様な構造をもつS B 6と4号墳の関係から、古墳群は比較的早い時期に削平され集落の一部として利用されたものと推定される。

従って、辻垣内遺跡における古代の土地利用形態は、きわめて密度が濃く、遺構の重複関係が著しい。

最後になったが、N地区の調査には福田典明君（同志社大学学生）の協力を得、本文2の1～3は主として同君に依る。（駒田利治）

〈註〉

- ① 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ 1966
- ② ①に同じ
- ③ 中村浩他『陶邑』Ⅰ～Ⅲ 大阪府教育委員会
- ④ 『飛鳥・藤原宮跡発掘調査報告Ⅰ』奈良国立文化財研究所 1976
『飛鳥・藤原宮跡発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所 1978

8. 上東野遺跡

1. 遺 構

遺跡の基本的層序は、Ⅰ層：水田耕作土（暗青灰色土）、Ⅱ層：やや黄味を帯びた暗灰色土（ミナカトコ、と呼ばれる土である）、Ⅲ層：黄褐色砂礫土（地山）で、地表より地山までは約30cm程度である。遺構検出面はⅢ層上面であり、暗茶褐色の砂質土を埋土に持つ。

遺物包含層は明確に認められず、後世の開墾等により削平されたものと思われる。

遺構は、竪穴住居8棟、小石室1基、溝、土壇等である。

1. 竪穴住居

SB1

発掘区北西隅で検出されたもので、全体の約半分を確認した。東西5.4m以上、南北3.4m以上の隅丸方形を呈し、深さは40cm前後である。南辺の一部は、S X 2（小石室）にかかっている。南北軸はN17°Wである。埋土は茶褐色土であり、遺物の包含量は多い。土師器壺・甕・高杯・鉢・器台があるが、特に床面に接しているとか、一部分に集中したという状態ではない。

SB6

SB1の南東約1.5mに位置し、東西5.5m、南北5.1mの方形を呈し、南北軸N10°Wを測る竪穴住居である。深さは約20cmである。主柱穴と思われるピットを3個検出したが、もう1個は不明である。



第89図 遺跡地形図（1：5000）



第90図 発掘区平面図 (1:2000)

直径35~60cm、深さ20~30cmである。周溝・焼土面等はみとめられない。埋土から床面にかけて多くの遺物が包含されており、一定の場所に集中するというより全体に散布するという感じである。土師器壺・甕・鉢・高杯・器台があり、甕・鉢が特に多かったが、完形品はない。

SB 7

SB 6の東約5mに位置しており、東端は発掘区外に延びている。東西6.3m以上、南北5.0mの方形を呈し、南北軸N20°Wを測る竪穴住居である。深さは約20cmである。周縁部には幅約30cm、深さ10~15cmの周溝が巡る。遺物は少ないが床面に接して、南辺中央寄りから土師器甕(4)、高杯(5)が出土し、埋土中から同様に土師器甕も出土している。主柱穴、焼土等は見られない。

SB 9

SB 7の南隣りにあり、発掘区により斜めに切られている。東西4.2m以上、南北5.2mの方形を呈し、南北軸N22°Wを測る竪穴住居である。深さは

15~20cmである。周溝、主柱穴、焼土等はみとめられない。遺物は少なく、土師器甕(6)の他は土師器の細片のみである。

SB 10

発掘区中央よりやや西寄りに位置し、東西4.6m、南北4.1mの方形である。南北軸N5°Wを測り、深さ20~25cmである。周溝、主柱穴、焼土等はみられない。遺物として、土師器甕(7・8・10)、鉢(10)が出土している。

SB 11

SB 10の南約3mに位置し、東西5.4m、南北5.2mの方形を呈し、南北軸N36°Wを測る竪穴住居である。床面では中央部寄りの隅に主柱穴4個を検出した。直径40~80cm、深さ約50cmである。南壁面西隅に長軸1m、短軸0.7m、深さ約25cmの貯蔵穴をもつ。床面中央付近に焼土がみとめられたが、周溝カマド等はない。遺物として土師器壺(11~13、37)甕(14~24)、鉢(30~34)、高杯(25~29)、ミニチュア土器(35・36)が出土している。

SB14

発掘区東寄りに位置し、SB15、SB16とともに3棟の竪穴住居が重複する。東西7.6m、南北7.8mの方形を呈する大型の竪穴住居である。南北軸N10°Wを測り、深さ約30cmである。周溝、主柱穴、焼土等はみとめられない。東南隅にみられる焼土は、SB16に伴うものとする。遺物として、土師器甕鉢、高杯、器台等と共に、須恵器杯が出土している。

SB15

SB16と重複しており、東西4.6m、南北4.8mの方形を呈する竪穴住居である。南北軸N21°Wを測り、深さは約10cmと浅い。床面北西寄り焼土が

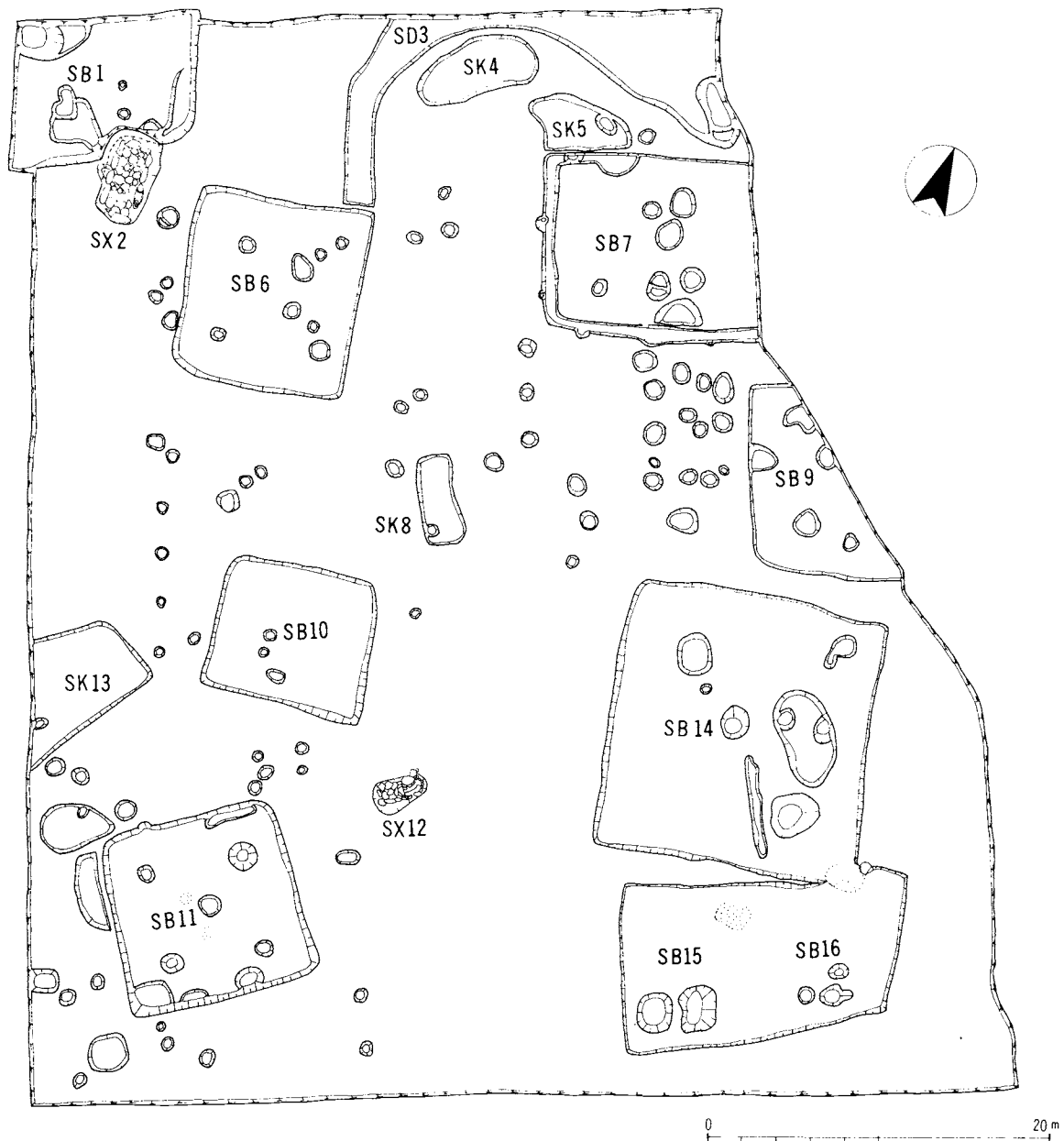
みとめられた。周溝、主柱穴等はない。遺物として土師器・須恵器の細片がある。

SB16

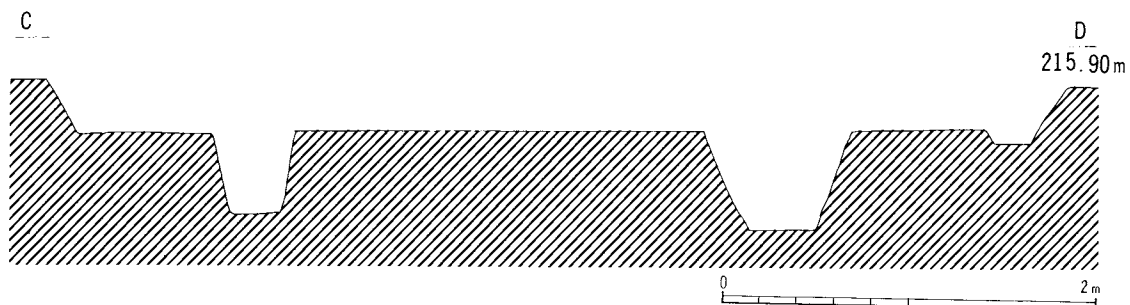
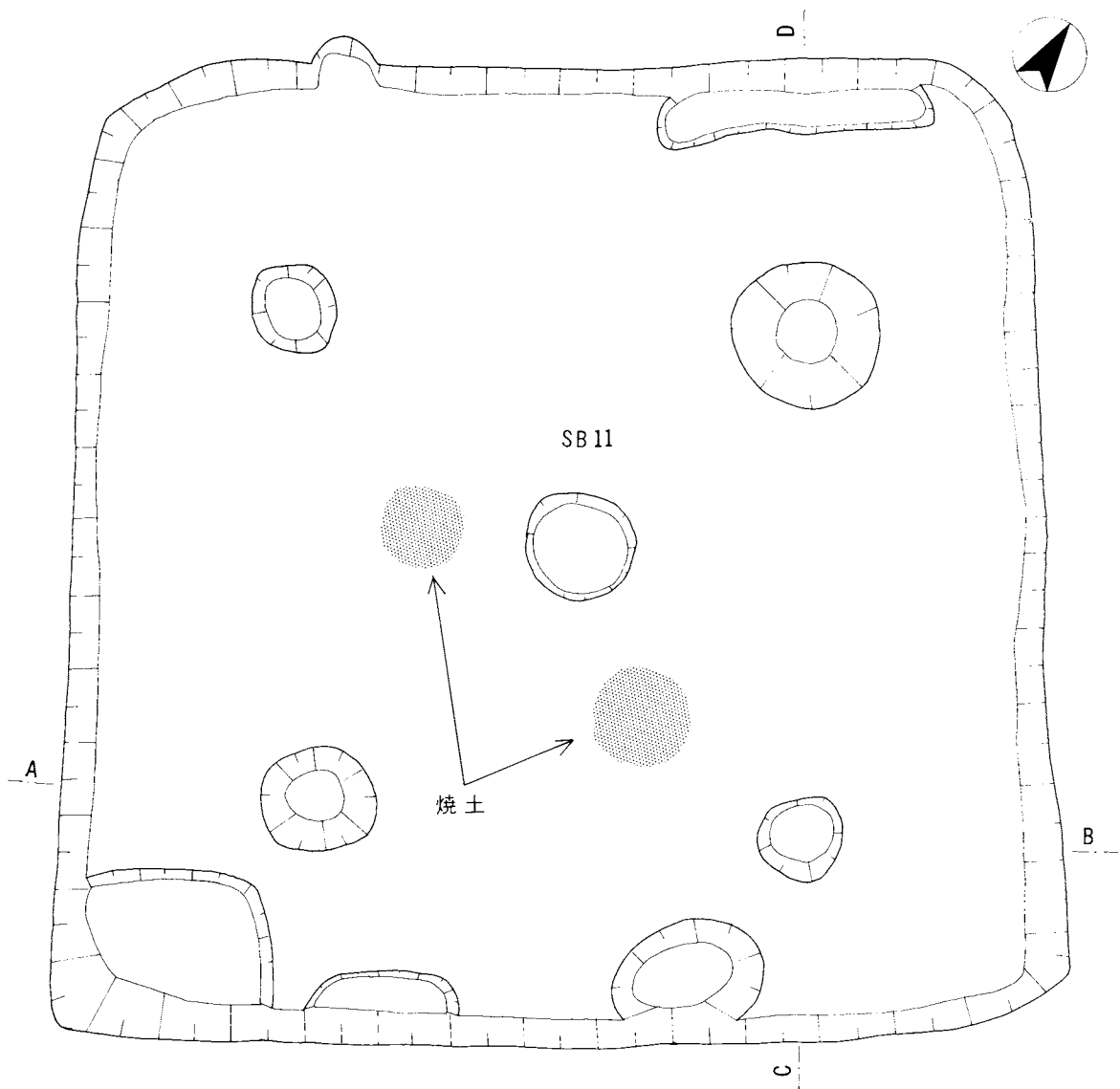
SB14、SB15と重複するため、全容は不明であるが、北辺に焼土が厚く推積し、焼土の中に立石もみとめられるとともに、土師器甕も出土していることから、カマドと考える。東西3.0m以上、南北4.0mの方形を呈し、南北軸N10°Wを測る竪穴住居である。

2. 小石室 (SX2)

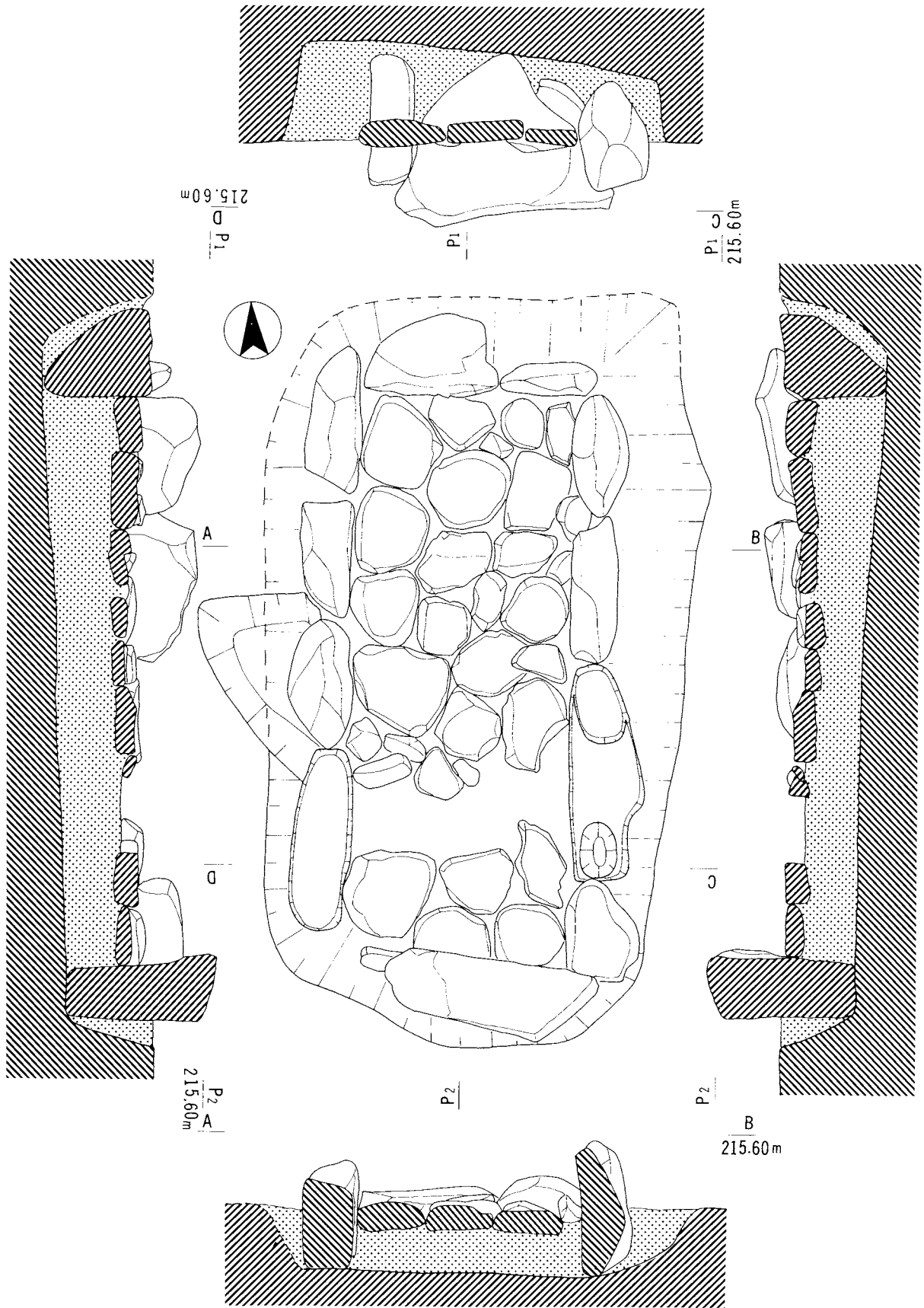
SB1の南辺を切ってつくられており、川原石を



第91図 遺構平面図 (1:200)



第92図 SB 11実測図 (1 : 20)



第93图 SX2 (小石室) 实测图 (1:20)

名称 (S B)	規模 (m)		主柱穴間	深さ (cm)	南 北 軸	備 考
	東 西	南 北				
1	5.0以上	3.5以上	—	30~40	N 17° W	
6	5.1	5.5	2.8	20	N 10° W	
7	6.3以上	5.0	—	20	N 20° W	周溝
9	4.2以上	5.2	—	20	N 22° W	
10	4.6	4.1	—	25	N 5° W	
11	5.4	5.2	2.8	30	N 36° W	焼土 (中央) 貯蔵穴
14	7.6	7.8	—	30	N 10° W	
15	4.6	4.8	—	10	N 21° W	焼土
16	3.0以上	4.0	—	15	N 10° W	焼土、カマド(北辺)

第12表 竪穴住居の規模

用いた長さ約1.9m、幅約0.8mの長方形の石室である。石室は、長軸約2.6m、短軸約1.5m、深さ約40cmの隅丸長方形の掘形に構築される。底面は平担であるが、壁面は急斜面であり、床面の敷石底部までと、両木口石と掘り方までの間に黒褐色砂質土が埋まっている。床面を囲むように、両側壁は川原石4~5個を用いており、木口石の高さからみても、2段積みであったと思われる。木口に当る南壁では大型石を縦に用いており、北壁では、南壁よりやや小さい石2個を縦に用いている。なお北壁はさらにもう一段石積みされていたものである。床面には、扁平な石が整然と敷きつめている。なお南寄り、横一列に石がなくなっているが、後世の削平により移動したと考えられる。遺物は少なく、床面の南側直上の埋土から須恵器杯身(38)が1点出土している他、土師器細片が数点ある。小石室は、ほぼ南北軸にそって築かれている。(N 3° W)

3. 溝

S D 3

幅0.8m、深さ15cmであるが、北流するほど幅広く、深くなり発掘区北端で東流する。遺物は、土師器、須恵器の細片が多く、石器(サヌカイト)も

出土している。

4. 土 塚

S K 4

長さ3.6m、幅約1.5m、深さ約40cmのやや楕円形の土塚である。土師器が極少量出土するだけである。

S K 5

S B 7の北隣りにあり、深さ約30cmの不定形な土塚である。出土遺物は土師器の細片が極少量である。

S K 8

発掘区中央に位置し、長さ2.5m、幅1.0m、深さ約15cmの長方形の土塚である。埋土中から土師器が極少量である。

S K 12

長軸1.6m、短軸0.7~1.0m、深さ30~40cmの石組土塚である。埋土は黒色土であり、底面に拳大~人頭大の礫が敷きつめられ、長さ1.3m、幅0.5mの長方形となるが、小石室とも言えるかもしれない。遺物の出土がないため時期決定は難しい。

S K 13

深さ約20cmで、西側は発掘区で切られている。全容は不明であるが土塚とした。土師器が極少量出土した。

2. 遺 物

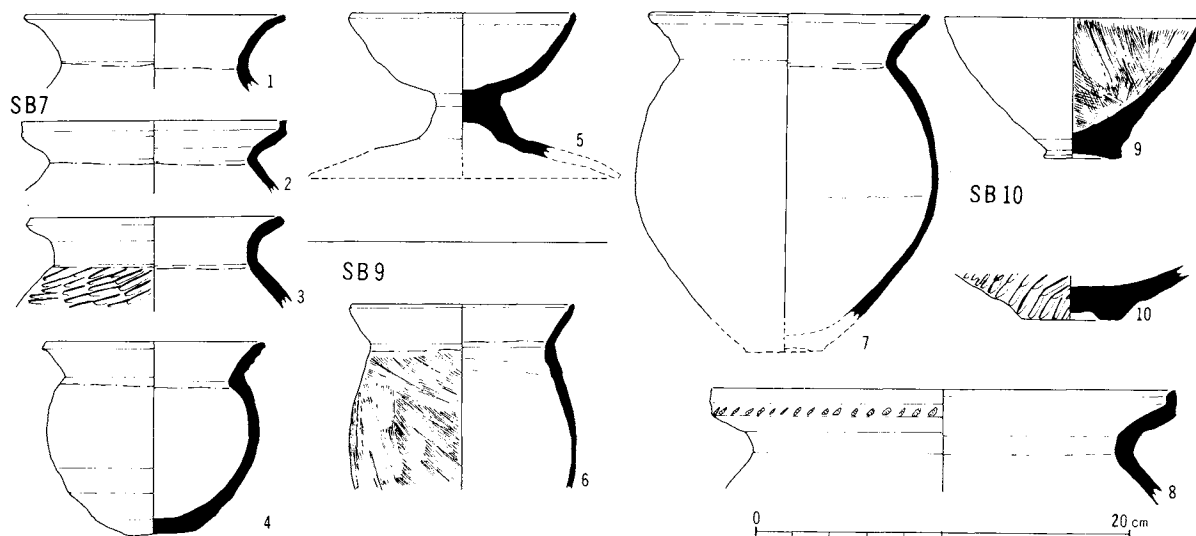
1. S B 7出土土器 (1~5)

A. 土師器

壺(1) 口縁部と体部の一部の出土で大部分の体部は欠損である。口縁部は、ラッパ状に開き、口

縁端部はわずかに外方に面をなす。口縁部内外面ともヨコナデされる。胎土は緻密で、淡黄褐色の色調を呈する。

甕(2~4) (2)は、口縁部は体部より「く」の字状に外反し、口縁端部が約1cm足らず立ちあが



第94図 SB7・SB9・SB10遺物実測図(1:4)

り、受口状となる。口縁端部の立ち上りはやや内傾し、端部は角ばっておわる。口縁部内外面ともヨコナデされている。体部は内外面ともナデられている。胎土は金雲母片・長石・砂粒を含むが緻密である。色調は淡褐色である。(3)は、口縁部が体部より立ちあがり、さらに屈曲して口縁端部は外方に面をつくる。口縁部内外面はヨコナデされ、体部外面には右上りの叩き目を施している。細砂粒を含みやや粗い胎土である。色調は淡黄褐色である。(4)は小型の甕の完形品で口径11.6、器高10.2である。「く」の字に外反する口縁部に口縁端部はわずかに面をもつ。体部外面は下から上へヘラケズリし、内面はナデている。底部はわずかに平底風である。胎土は小石を含み粗く、色調は淡茶褐色である。

高杯(5) 脚裾部を一部欠損するが杯部・脚柱部は欠損していない。杯口径12cmの小型盃状の杯部をもち、脚部は短い支柱部である。脚裾部は一部欠損するが、まっすぐ裾広がりになると思われる。脚部径は杯部径より大きくなる。支柱部は中実である。口縁端部外面はヨコナデされる。杯部内面と杯部外面から脚部外面にかけては、縦にヘラ磨きする。胎土は黒雲母片・細砂粒を含みやや粗い。色調は淡赤褐色である。

2. SB9出土土器

土師器甕(6) 口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部はやや内傾しておわる。口縁部と体部との境

付近は肥厚し、粘土紐のつなぎ目のこる。体部は下半部に向うほど器壁は薄くなる。口縁部は内外面ともヨコナデされている。体部外面は細かいハゲ目が施され、体部外面はナデられている。胎土は砂粒含むが緻密である。色調は暗褐色である。

3. SB10出土土器(7~10)

A. 土師器

甕(7・8・10) (7)は「く」の字に外反する口縁部は、上方でわずかに角度をかえて、さらに外反する。口縁端部はわずかに内傾し、外方に面をつくる。口縁部内面と外面上方のみヨコナデされ、口縁部外面以下から肩部にかけてナデ調整される。体部外面と内面上半部は強くナデつけられる。体部下半部は下から上へヘラケズリにより整形する。体部から口縁部にかけて煤が付着する。胎土は細砂粒・金雲母片を含みやや粗である。色調は赤褐色である。(8)は口縁部はいわゆる受口状であり二度外反し、口縁端部はまっすぐ立ち上がり、内に斜めに面をつくる。口縁端部外面には、刺突文を施す。口縁端部はヨコナデ、口縁部内面から体部にかけては横方向のヘラミガキ、口縁部外面から体部にかけてはナデ調整である。胎土は密で色調は口縁部が暗茶褐色、口縁部内面は淡黄褐色である。(10)は底部のみの出土である。外面に右上りの叩き目を施している。底部は輪台である。

鉢(9) 口径13.8cm、器高7.4cmの完形の鉢で

ある。高台状の底部を作り付けたものであり、指の圧痕がのこる。体部内面にはくもの巣状の細かいハケ目が施されている。体部外面は上から下へヘラケズリされ、体部下方から底部にかけてはユピオサエののちナデられる。胎土は細砂粒・金雲母片を含みや粗である色調は淡褐色である。

S B 11 出土土器

A. 土師器

壺 (11~13・37) (11) は、口径13.2cm、器高12.3cmの完形の壺である。口縁部はやや内傾しており、口縁端部は丸みをもっておわる。体部最大径は下方にあり、下方に膨らみをもつ。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面はナデられている。(12・13) は口縁部が大きく上方にひらき、体部は小さく扁平であり、口縁部径が、体部最大径より大である。(12) は口縁部内外面をヨコナデ、体部内外面はナデて仕上げている。胎土は小石を含むがわりと密である。色調は淡茶褐色である。(13) は口縁部内面と外面上方をナデて、口縁部下方から体部外面はコピオサエののちナデているが不調整で凹凸目立つ。体部内面は下から上へヘラケズリをしている。胎土は細砂粒含み粗である。色調は暗茶褐色である。(37) は大型の壺で口縁部は欠損している。ほぼ球形の体部をもち、平底である。体部には粗いハケ目が施され、内面はナデている。

甕A (15~18) (15) は体部外面に叩き目をもつタイプである。推定口径約16cmであり、なだらかな体部をもち、口縁部は外反し、口縁端部は内外面ともヨコナデされる。体部外面は上半部は右上り、下半部は平行の叩き目を施す。体部内面は口頸部をユピオサエし、指圧痕がのこり、体部はナデている。(16) は推定口径約13cmの小型品である。口縁部は「く」の字に外反し、口縁端部は角ばっておわる。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は右上りの叩き目を施し、内面はナデている。(17) は推定口径約16cmの大型品である。「く」の字に外反する口縁部は体部との接合痕が明瞭にのこり、肥厚する。口縁端部は外方に面をつくる。口縁部は内外面ヨコナデされている。体部外面は右上りの叩き目を施し、内面はユピオサエののちナデられているが凹凸が目立つ。(18) は他の甕と同様に「く」の字に外反する

口縁部をもち、内外面ともヨコナデされる。体部外面は叩き目を、内面は横方向のヘラケズリを施している。甕Aの胎土は、砂粒等を含み粗である。色調は茶褐色系統である。

甕B (19~22) 体部外面にハケ目調整を施すタイプである。(19) は口縁部はまっすぐ上方に開き、口縁端部が肥厚し、わずかに内傾する平坦面をもつ。口縁部内外面ともヨコナデされる。(20) は、立ち上がる口縁部がやや内傾し、口縁端部は外方に肥厚して、上端が平坦な面となる。体部は球形の体部をもつと思われる。口縁部は内外面ともヨコナデされる。体部外面は肩部は縦方向のハケ目、以下は横方向のハケ目を施す。体部内面は横方向のヘラで削り、うすく仕上げている。(21) は口縁端部が内側に肥厚しており、上方に平坦な面をもつ。体部は球形の体部をもち、丸底をもつと思われる。口縁部は内外面ともヨコナデされる。体部外面は細かいハケ目で調整し、内面はナデている。また、体部外面には煤が付着する。(22) は口縁部が「く」の字に外反し、口縁端部は外方に面をつくる。口縁部はヨコナデされる。体部外面には粗いハケ目を施し、内面はナデているが、一部粘土紐のつなぎ目がのこる。甕Bの胎土は粗く、淡茶褐色の色調が多い。

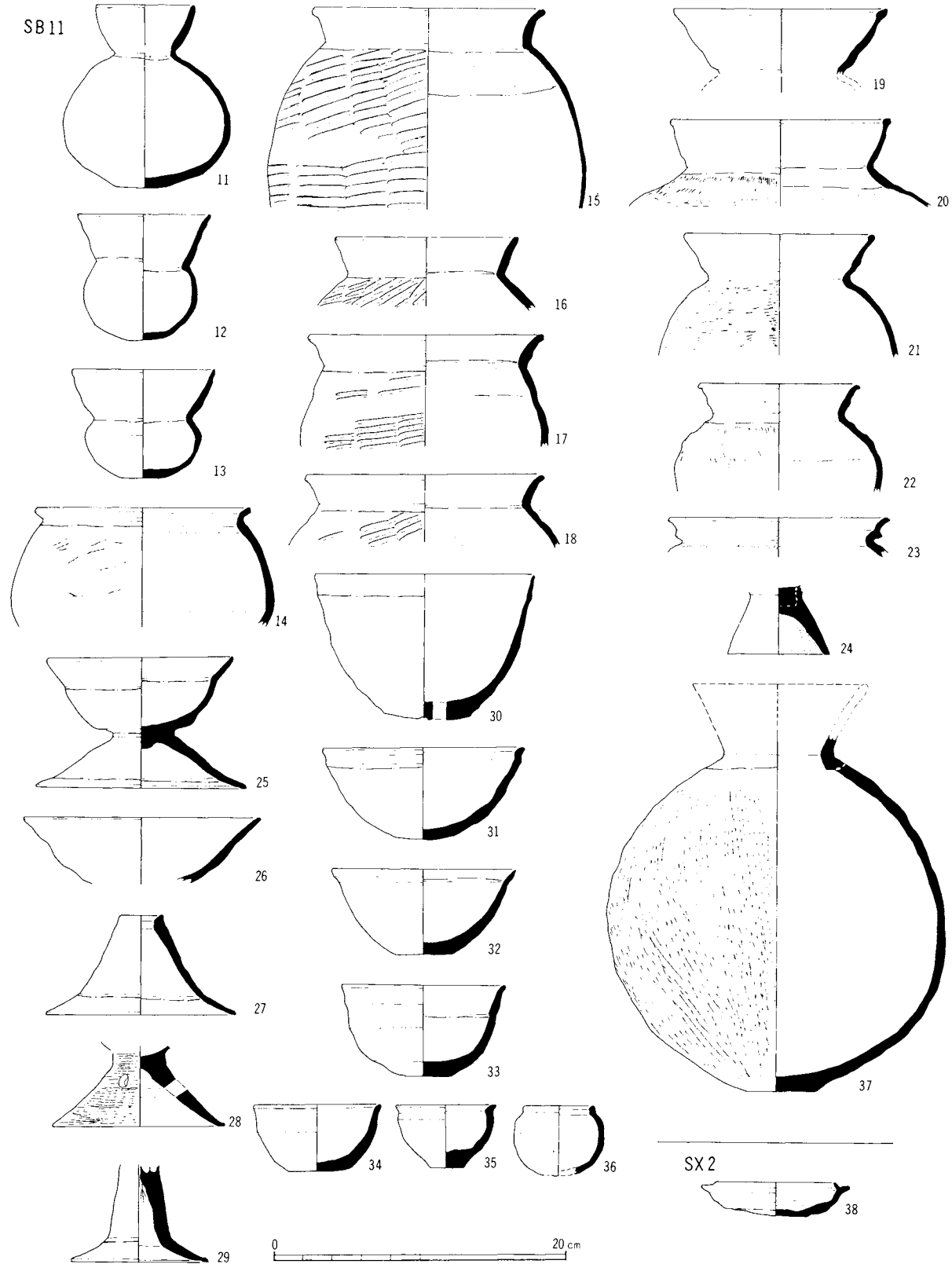
甕C (14) 「く」の字に外反する短かい口縁部をもち、口縁端部は外方に面をつくる。体部は下方に膨らみをもつ。口縁部は内外面にヨコナデをし、体部内外面はナデられている。胎土は小石・砂粒を含み粗である。色調は淡褐色である。

甕D (23・24) (23) はいわゆる台付S字状口縁のもので、(24) は別個体のもと思われる台である。口縁部は短かく二段に外反し、頸部と体部の境に小さな段がつく。体部肩部外面には斜行するクシ目を施す。(24) の台部は裾端部は折り返さない。裾部内面には指圧痕のこる。

高杯 (25~29) (25) は杯口径12.7cm、器高8.8cm、脚裾径14.2cmのほぼ完形品である。短く外反する口縁部をもった杯部と、脚支柱部はほとんどなく、ハの字に大きく裾広がる。杯部と脚部は挿入法による。杯部口縁部は内外面ともヨコナデされ、杯部内面はナデられるが一部ヘラ磨きもみられる。杯部外面は下から上へヘラ磨きされる。脚部外面は上から

下へ縦の粗いヘラケズリを施し、裾部内外面はヨコナデし、内面はナデで仕上げている。(26) は杯部のみの出土である。杯部は大きく外反し、口縁部外面のみヨコナデし、その他はナデで仕上げる。(27~29)

は脚部のみの出土である。(27) の脚柱部はハの字に開き、脚裾部は薄く尖っておわる。脚支柱部は中空である。(28) は脚部に3個の円孔を穿つ。脚部外面には粗いハケ目を施し、内面をナデで仕上げている。



第95図 SB11・SX2 遺物実測図 (1:4)

(29)は脚部は下方に向かって太くなり、脚裾部は屈曲して端部はわずかに下方に肥厚しておる。脚部外面は縦方向のヘラ磨き、内面と裾部はナデられている。また脚柱状部内面にしぼり目をのこしている。

甗 (30) 口径15.2cm、器高9.8cmの完形品である。体部は丸みをもった深いもので、平底である。底部に約1cmの一孔を焼成前に穿つ。全体的に剥離が進んでいる。体部内面はナデ調整され、体部下半部はヘラケズリされる。

鉢 (31~34) (31)は口径13.8cm、器高6.2cmである。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は内傾した平坦な面をつくる。底部は丸底である。口縁外面をヨコナデし、口縁内面はナデている。体部外面はヘラケズリして仕上げる。(32)は短く外反する口縁部をもち、平底である。頸部はほとんどしまらない。口縁部はヨコナデし、体部は内外面ともナデているが、内面は丁寧にナデている。(33)も(32)と同形態であるが、体部は(32)より膨らみをもつ。

3. 小 結

上東野遺跡は、滝川に面した扇状地上に形成された弥生時代後期から古墳時代にかけて営まれた集落遺跡である。発見された遺構は、竪穴住居9、小石室1基、土壇、遺跡などがあり、出土遺物は、古式土師器が全体の出土量の約90%を占めており、その他、須恵器、瓦器、土師器、石器が若干出土している。ここでは、今回の調査によって得られた成果を中心に、若干の考察を加えて小結としたい。

1. 竪穴住居について

今回出土した竪穴住居は9棟である。形状は大部分が方形である。規模についてみると、1辺5m前後のものが大部分をしめており、1辺7mをこえる大型のものは1棟(SB14)だけである。周溝の認められるものは1棟(SB7)だけであり、他の竪穴住居は巡っていない。当遺跡の中でも良好な遺構と思われるSB11は、面積28.1㎡であり、四隅の主柱穴が明確である。床面中央付近には炉跡と推定される焼土面が認められる。他に、主柱穴はSB6に認められるが、他のものは主柱穴が明確でない。

口縁部と体部の境は明瞭でない。体部下半に煤が付着する。口縁部外面にはユビオサエの痕跡がのこり、凹凸が目立つ。(34)は小型の鉢である。口縁部はまっすぐ立ち上がり、口縁端部はわずかに外反し、内傾した面をもつ。剥離がすすんでおり、調整方法不明である。鉢の胎土は小石・砂粒含み粗である。色調は淡茶褐色である。

ミニチュア土器 (35~36) (35)はユビオサエによる整形である。(36)は外面ヘラケズリ、内面をナデて仕上げている。

4. SX2出土土器

須恵器杯身 (38) 口径8cm、器高2.3cmを測る。底部はヘラ切り後未調整であり歪んでいる。立ち上がりは短く、内傾している。底部内面のみナデている。胎土は細砂粒含みや粗である。色調は灰白色である。

貯蔵穴は、SB11(南西隅)を除いて認められない。

これらの様相は、当遺跡の北西約500mの辻垣内遺跡の竪穴住居にも見られる。

さて、これらの時期について考えてみると、SB10の埋土内より弥生土器の甗(7・8・10)、鉢(9)が出土しており、これらの土器の特徴からして弥生時代後期に比定できる。

次に、古墳時代前期(4世紀中葉~後半)の竪穴住居として、出土遺物から勘案すれば、SB1・6・7・11が相当すると考えられる。また、SB14~16は埋土中に須恵器杯が出土しており、この土器は陶邑編年のTK43に類似しており、6世紀後半頃に比定できる。さらに、SB1・6は多量の土器が埋土から出土していることからして、住居の廃絶後土器捨て場に変化していった可能性がある。

以上、遺構について述べたが、当遺跡は弥生時代後期から古墳時代後期にかけて生活の場として活用されたことがわかる。こうしてみると、当遺跡の南や県道より西の地域に集落の広がりが予測される。名張盆地では、今まで古墳時代の住居としては土

山遺跡、人參峠遺跡、白早稲遺跡などから多数検出されているが、名張盆地南西部では赤目檀遺跡のSB1しかなく、当遺跡の竪穴住居は、そのSB1より古いものである。また、辻垣内遺跡の竪穴住居も、当遺跡より新しいものである。こうしてみると、当遺跡の竪穴住居は名張盆地南西部では、今のところ一番古くなり、赤目檀遺跡や辻垣内遺跡より滝川の上流にあたることからして、弥生時代後期から古墳時代前期の集落は、次の古墳時代中期から後期にかけてその一部は下流へ移動していったことが考えられる。

2. 遺物 (SB7・10・11出土土器) について

SB7出土の土器は、受口状の口縁(2)や叩き目を持つ甕(3)、高杯(5)がある。このうち、高杯(5)は布留遺跡山口池地点等Ⅲ層出土の土器に類似していることから、「庄内式」並行期に相当するものと考えられる。

SB10出土の土器の特徴として、甕(7・10)、鉢(9)の3点とも中央部が凹む輪台状の高台をもち、(8)の口縁部が屈曲する受口状の甕がみられることからみて畿内第5様式新相から「庄内式」並行期

にあてはまると考える。

SB11出土の土器をみると、甕は叩き目を施すタイプとハケ目を施し口縁端部が肥厚するタイプに分けられる。前者のタイプは、「庄内式」の特徴であり、後者は「布留式」である。S字状I縁甕(23)は、木下・安達分類に依れば第Ⅲ類にあたる。また、甕(14)・高杯(25)はSB11出土の中では一番古い土器と考える。その他、鉢(31~34)の特徴からして、SB11出土土器は「布留式」古相にあてはまると考える。なお、今回図示できなかったがSB1の出土土器の中に、「坂田寺下層出土」の土器と類似の鉢1点、小型丸底土器2点が出土しており、畿内とのつながりを示す好例と言えらる。これらの土器は、名張市人參峠遺跡のSK21・SX33の土器とも類似していることからして、「布留式」古相にあてはまると考える。

以上、古式土師器について畿内と比較することにより、年代を比定してきたが名張における今後の資料の増加をまって、さらに比較検討しなくてはならない。

3. 小石室 (SX2) について

発掘調査の結果、墳丘・天井石は後世の開墾等により削平されたらしく無かった。石室は、扁平な川

名 称	規 模 (m)		副 葬 品	時 期	古 墳 群 の 概 況
	幅	長 さ			
尻矢5号墳(名張市)	0.7	2.45	須恵器杯、銀環、管玉 ガラス製小玉、メノウ製小玉	6世紀中葉	尻矢古墳群 横穴式石室 1,4,6,8号墳 木棺直葬 2号墳 竪穴式石室 3号墳
尻矢7号墳(名張市)	0.6	1.65	須恵器杯、鉄鏃、土師器杯、 高杯、刀子	6世紀終末	
男山2号墳(名張市)	0.7	1.5	須恵器杯、蓋	7世紀前半	男山古墳群 横穴式石室 1号墳 もう1基あるが、未掘である。
男山3号墳(名張市)	0.5	2.4	—————	7世紀前半	
男山4号墳(名張市)	0.7	1.9	須恵器杯、蓋	7世紀中葉	
下河原遺跡(名張市)	0.5	1.5	須恵器杯、蓋	7世紀前半	
白早稲遺跡(名張市)	0.65	2.25	—————	7世紀前半	
上東野遺跡(名張市)	0.8	1.9	須恵器杯	7世紀初頭	
辻垣内遺跡(名張市)					横穴式石室 A B地区 4号墳 C地区 1号墳 N地区 5号墳
AB地区SX1	0.6	1.9	—————	—————	
C地区SX1	0.4	1.0(現存)	須恵器、土師器片	7世紀初~中葉	
N地区SX1	1.2	2.2	—————	—————	
山の下B古墳群(安濃町)					山の下B古墳群 横穴式石室 2、13号墳 木棺直葬 1号墳
1号墳第2主体	0.43	1.9	須恵器杯、蓋	6世紀中葉	
4号墳	0.45	1.9	—————	—————	
7号墳	—————	—————	—————	—————	
9号墳	0.45	2.2	金環	—————	
11号墳	0.35	1.4	須恵器壺	7世紀初頭	
城坂古墳(安濃町)	0.7	1.7	—————	—————	

参 考

上野山14号墳(一志町)	0.45	1.6	須恵器、土師器、刀子	6世紀中葉	横穴式石室 10,11,12,13号墳
--------------	------	-----	------------	-------	---------------------

第13表 三重県下における小石室一覧表

原石を側壁・床・木口と用途に応じて、大・中・小の石を配置している。

石室の規模は、幅 0.8 m、長さ 1.9 m であるので単葬用と考える。

造営時期については、出土した須恵器杯 (38) の形態、手法等から、陶邑古窯跡群編年中の TK 209 型式に比定され、7 世紀初頭に造営されたものと推定される。

次に、小石室について県下の発掘調査例を表にしてまとめてみた。その結果、次のような 4 つの点を挙げることができる。

1) 時期—築造は 6 世紀中葉に開始され 7 世紀中葉

(註)

- ① 昭和 57 年 三重県教育委員会発掘調査
- ② 田辺昭三 「陶邑古窯跡群Ⅰ」 平安学園考古クラブ 1966
- ③ 水口昌也、門田了三 「名張市遺跡調査概要」名張市教育委員会 1978
- ④ 水口昌也、門田了三 「名張市遺跡調査概要Ⅲ」 名張市教育委員会 1980
- ⑤ 水口昌也、門田了三 「名張市遺跡調査概要Ⅱ」 名張市教育委員会 1979
- ⑥ 水口昌也、門田了三 「名張市遺跡調査概要Ⅲ」 名張市教育委員会 1980
- ⑦ 置田雅昭 「大和における古式土師器の実態—天理市布留遺跡出土資料—」『古代文化』 1970
- ⑧ 水口昌也、門田了三 「蔵持黒田遺跡」 名張市遺跡調査会 1978
- ⑨ 田中 琢 「布留式以前」『考古学研究 12 卷 2 号』 1965

までの時期に継続している。

2) 規模・形態—規模としては、幅 0.5 m 前後、長さ 2 m 以下が多い。石室の形態として、類例を求めれば箱式石棺に類似するが、手近な川原石などを使用していることは異なる。

3) 地域—伊賀地方 (特に名張盆地) に多くの発見例がある。

4) 立地—小石室の立地は、単独の場合はなく、古墳群の一部として構成され、規模の大きい横穴式石室の傍にある。(例、尻矢 4 号墳と尻矢 5 号墳・7 号墳、山の下 1 号墳と第 2 主体、辻垣内 4 号墳と S X 1)

(中村 信裕)

- ⑩ 安達厚三、木下正史 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌 60-2』 1972
- ⑪ ⑩に同じ
- ⑫ ④に同じ
- ⑬ ⑩に同じ
- ⑭ 「尻矢古墳群 現地説明会 資料」 名張市教育委員会 名張市遺跡調査会 1981
「男山古墳群 現地説明会 資料」 名張市教育委員会 名張市遺跡調査会 1980
「下河原遺跡」『三重県埋蔵文化財年報 12』 1981
「下白稲遺跡」 ⑤に同じ
「山の下 B 古墳群」『三重県埋蔵文化財年報 12』 1981
「城坂古墳」『三重県埋蔵文化財年報 13』 1982
- ⑮ 三重県総務部学事文書課主事 吉村利男氏 (前三重県教育委員会文化課主事) の御教示による。

I 度会郡大宮町 ^ひ樋ノ谷 ^{たに}遺跡

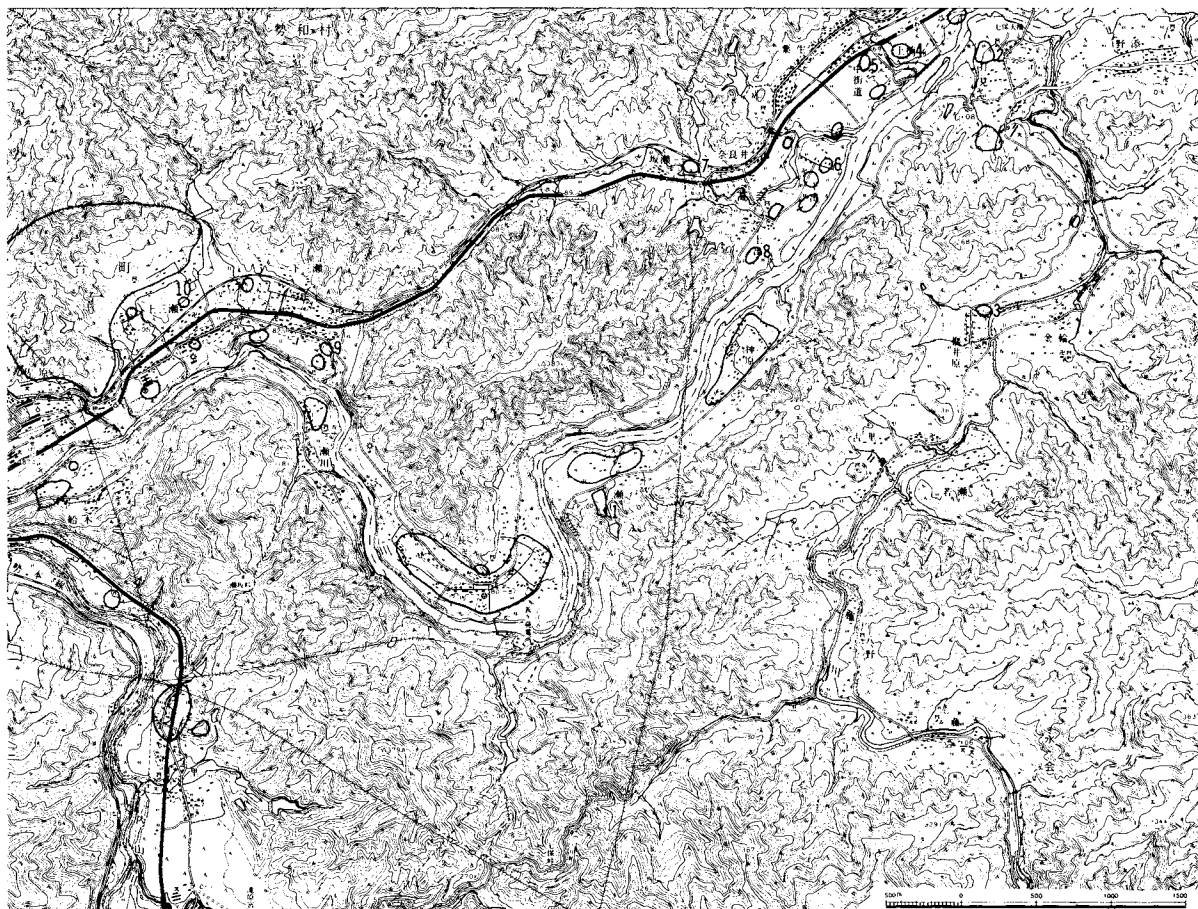
1. 位置と環境

樋ノ谷遺跡(1)は、大台山系に源を発し、蛇行しながら東流して伊勢湾南岸に流れ込む宮川の中流域に存在する。遺跡は、宮川右岸の河岸段丘と、標高150mほどの山から北にのびる舌状を呈する尾根の端部とが接する場所の北側斜面に位置し、標高は80mを測る。

遺跡の現状は水田であるが、それぞれの田の境になる畦畔には石積みがあり、田の面は60~80cmの比高差をもった棚田状になっている。

周辺には宮川に沿って、大宮町に所在する北裏遺跡、北ノ林遺跡、大久保遺跡、野原大西遺跡、野手遺跡(瑛状耳飾り出土)、小田原古ヶ山遺跡(2)、櫃

井原遺跡(3)、長者野遺跡など、また、対岸の大台町には、中新田遺跡、後山西A・B遺跡、天理教会前遺跡、神瀬遺跡、神昭寺遺跡、宮の上遺跡、向海道遺跡(4)、谷ノ上遺跡(5)、久保遺跡(6)、坂瀬遺跡(7)、高瀬遺跡(8)、神戸北遺跡(9)、中野遺跡、上三瀬遺跡(10)、佐原緑町遺跡、向林遺跡、弥起井悪水の東遺跡、川合遺跡、上弥起井遺跡、下田東遺跡、出張遺跡(昭和51・52年度大台町教育委員会調査)など多数の先土器~縄文時代の遺跡が集中している。宮川流域は、櫛田川流域と共に、縄文時代の遺跡があまり多くないと言われている県下の他地域に比べて、縄文時代の遺跡が集中する地域であ



第96図 遺跡位置図(1:50000)

る。縄文時代の遺跡が多くみられる地域でありながら、発掘調査例は極めて少なく、各遺跡の実態については不明な点が多い。先年、大台町教委主体のもとで行われた出張遺跡の調査はその中でも本格的な

調査の一つであり、今回の調査を含めこの地域における縄文時代の解明に少なからず寄与するものであろう。

2. 遺 構

遺跡の基本的な層序は、第Ⅰ層；耕作土（灰褐色粘質土）、第Ⅱ層；床土（黄褐色粘質土）、第Ⅲ層；黒褐色土（包含層及び遺構埋土）、第Ⅳ層；地山（黄褐色土）となる。しかし、南から北側にかけて傾斜する地形の制約を受け、南側においては第Ⅲ層の堆積が極めて薄く、北側に厚く堆積する状況を呈している。第Ⅱ層、第Ⅲ層が遺物包含層であり、第Ⅱ層には中世以降の土器（土師器、陶器類）、第Ⅲ層には縄文時代の遺物が包含されている。第Ⅲ層は縄文時代早期から中期までの遺物を混在しており、第Ⅲ層の堆積の下限は、縄文時代中期をさかのぼらないものと判断される。

検出された遺構としては、竪穴住居2棟、土坑30基余りである。竪穴住居はいずれも縄文時代に属し、1棟（S B 1）は縄文時代早期に位置づけられ、他

の1棟（S B 26）は中期に位置づけられる。土坑のほとんどは縄文時代のものであり、1基（S K 25）からは暗緑色を呈した玦状耳飾りが出土している。

S B 1（第100図）

発掘区の北隅より検出された。規模は東西3 m、南北3.6 mのやや南北に長い円形を呈し、地山を25 cmほど掘り込んで構築されている。長軸はほぼ南北方向である。柱穴は中央部及び東側と西側に計5個あり、北側及び南側では認められない。また中央部から南側にかけて、さらに20 cmほどの掘り込みがある。この掘り込みの部分からは、多数の石が出土したが、地山面にしっかり据えられたものではない。この竪穴住居の床面からは、楕円文をはじめ、山形文、格子目文の押型文土器が出土している。



第97図 遺跡地形図（1：5000）

S B 26

発掘区最南端より検出された。規模は4×4.8mと早期の竪穴住居よりやや大きく、隅丸方形を呈する。柱穴はあまり明確ではないが、3個認められる。北東側壁に沿って、深さ30～40cmの貯蔵穴と考えられる穴を持っているが周溝は認められない。また南東寄りには焼土があり炉跡と考えられる。この住居の床面には中期中葉に比定される土器片が出土した。

S K 20 (101図)

発掘区ほぼ中央で検出された。直径1mほどの円形を呈しており、内部には多数の集石がある。石は大きなものでは、径30cmほどあり、中央部に深く投げ込まれたように積みあげられている。この土壇覆土からは、若干の炭化物と共に、多数の土器が出土した。押型文土器(第102図17)も1点検出されてい

るが、ほとんどが中期のものである。また土壇の最下層からは、石斧(第104図1)が出土した。

S K 19

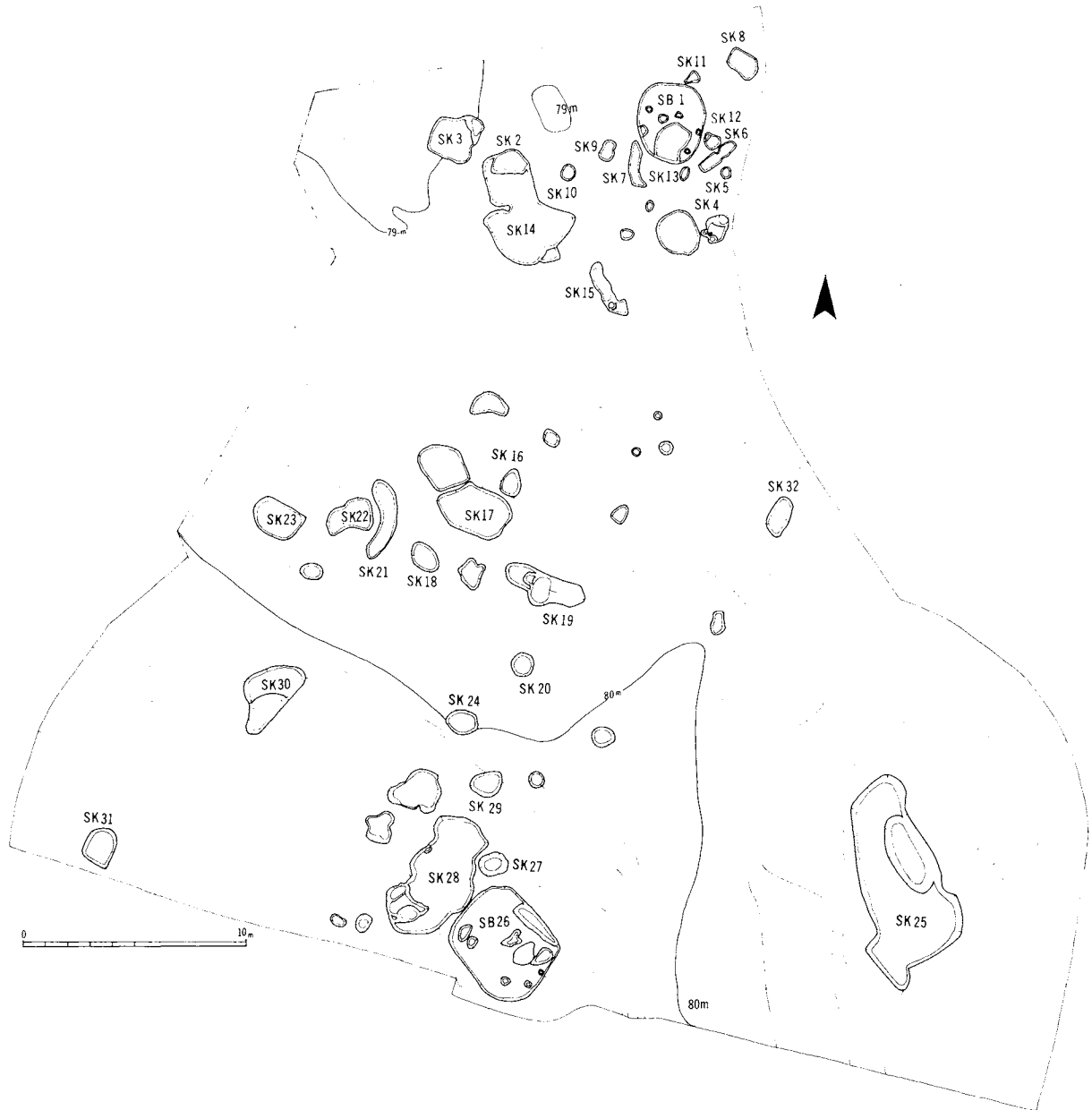
S K 20の北約3mに位置する。東西に長く、中央部が深くなっており、最大60cmの深さを測る。東側の床面からは1点の押型文土器(第102図15)が出土したが、多くの土器片は中期に比定される。

S K 25

6月に実施した試掘坑でその一部を検出したものである。この土壇からの出土遺物は少ないが、試掘時に磨石と考えられる丸い石(径8cmほどの硬砂岩製)が出土している。また、今回の調査では、土器はほとんど出土していないが、数点の石錘(第104図4～7)の他、土壇の肩の部分から半分に割れた珧状耳飾り(第104図8)が出土している。



第98図 発掘区平面図(1:2000)



第99図 遺構平面図（1：300）

3. 出土遺物

出土した遺物は、土器と石製品に大別される。土器は縄文時代早期～中期のものと、表層近くから出土した室町時代のものがある。数量的には縄文土器は整理箱10箱分であり、中世室町時代のものは8箱ほどである。石製品の中には県下で6例目の出土である球状耳飾りをはじめ、石鏃、石斧、石錘、それに磨石と考えられるものや、石皿と考えられるものなどがある。

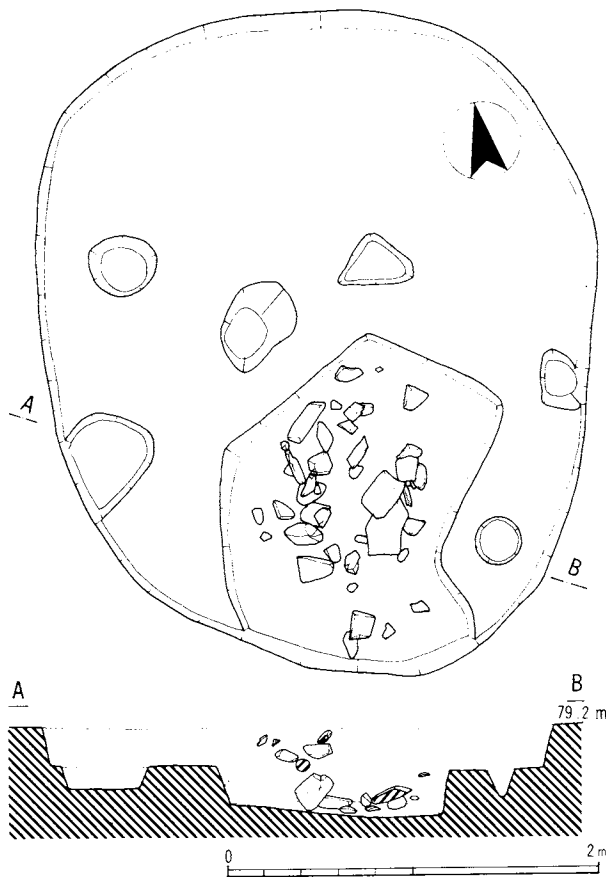
(1) 縄文時代早期の土器

いずれも細片であるが、整理箱2箱分出土している。

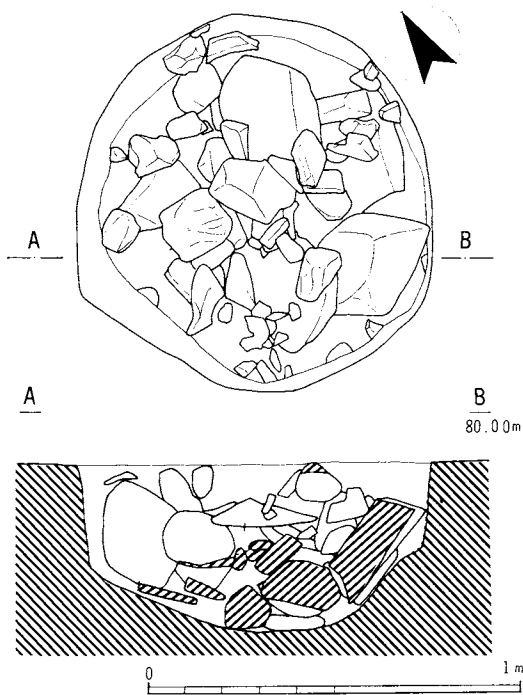
A 押型文土器

a 山形押型文土器（1～11）

(1) は口縁部破片であり、器形はやや外傾し、口縁はわずかに波状を呈する。推定口径は29.6cmで口縁下8mmの部分に外から内に向かって穿孔された



第100図 SB1実測図(1:40)



第101図 SK20実測図(1:20)

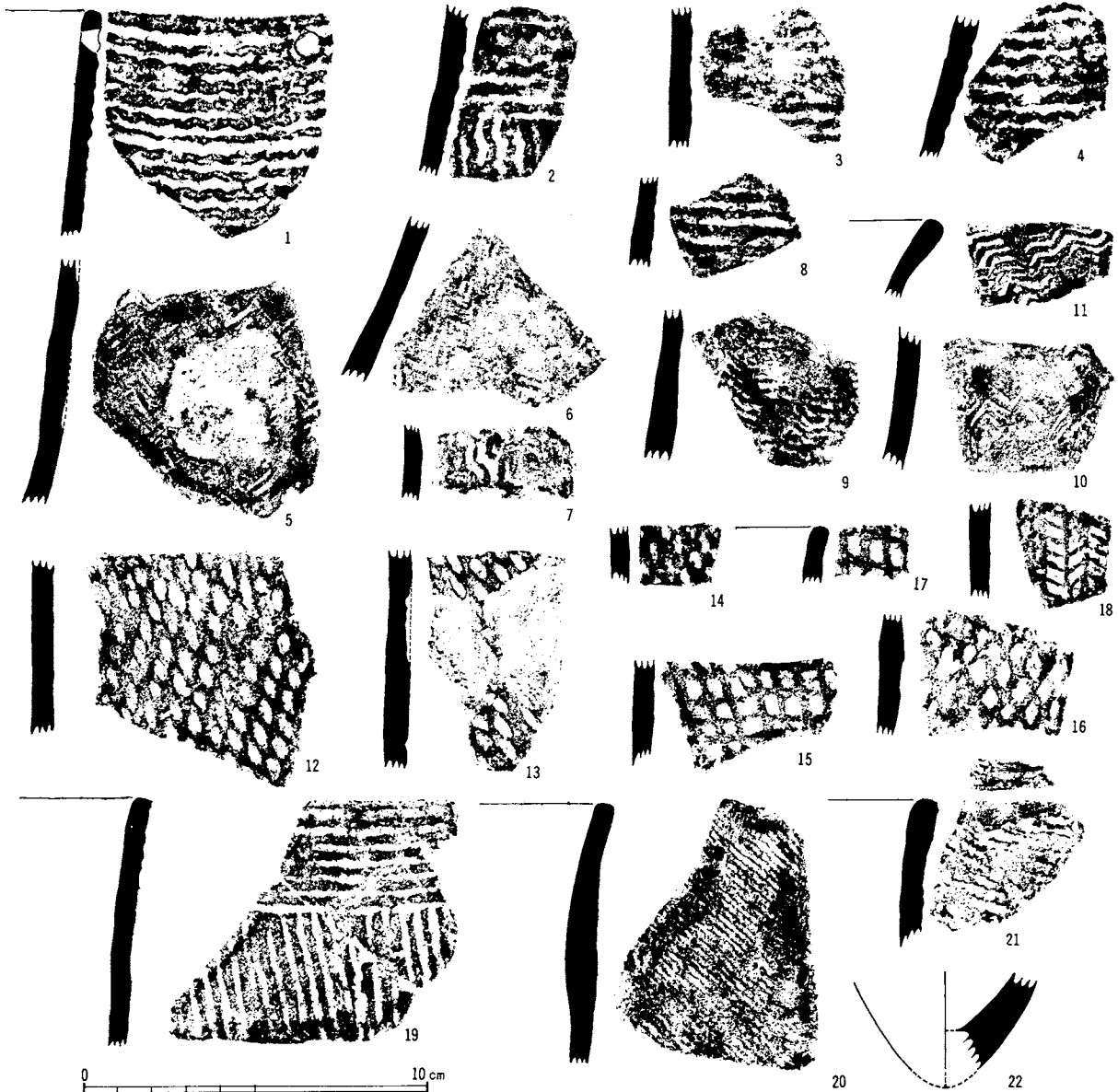
補修孔が存在する。文様は口縁上にはなく、口縁直下から横方向になだらかな丸味をもった山形が施されている。凸面幅・凹面幅はともに約3mmであり、山形の1山の幅は9mmの長さで山の高さは1.5mmである。比較的強く押捺されており、原体は直径1.2cmの丸軸と考えられ、6本の谷線が見られる。原体長は2.9cmである。胎土中には、砂粒はあまり含まれておらず、器表面の下部には若干の煤が付着している。(2)は口縁部直下の破片である。直線状に外傾する器形と考えられ、文様は(1)と同じくなだらかな丸味をもった山形が施されている。施文方向は、口縁部文様と見られる横位施文と、部体文様と見られる縦位施文がある。原体は横位・縦位とも同一で凸面と凹面は共に約3mmの幅である。山形の1山の幅は約9mmの長さで、山の高さは2mmである。

(1)よりも押捺は弱い。胎土中には若干の金雲母を含んでいる。器壁は風化して非常に脆弱である。

(3)は前述の(1)、(2)と同じくなだらかな丸味をもった山形文であり、凸面と凹面の間隔は幅約3mmであるが、1山の幅については磨耗がはげしく判別できない。胎土中には細砂粒を多く含んでおり、表面は脆弱である。押捺も強くない。施文は横位に施されているが、1周の長さは不明である。(4)は(2)と同様の部位破片と考えられる。横位施文と縦位施文の交差する部分である。文様は(1)～(3)と同様に、なだらかな丸味をもった山形であり、凸面と凹面の幅は約4mmで、1山の幅は約7mm、山の高さは2.5mmである。胎土中には少量の細砂粒と共に若干の金雲母を含む。器壁は脆弱である。(5)は(1)～(4)とは異なり、非常にシャープな頂部をもつ山形文であり、凸面と凹面の幅は共に約2mmであり、1山の幅は1.4cmで、山の高さは7mmである。施文は横位に施されており、押捺は非常に弱く器表面も脆弱であるために今にも溶解しそうである。胎土中には長石粒をはじめ多くの細砂粒を含んでいる。なお中央部には4×3cmほどの剝離部分が見られる。(6)は(5)よりも山形がゆるやかになるが、出土した山形文土器片の中ではシャープな部類に入られる。凸面と凹面の幅はそれぞれ約2mmであり、1山の幅は約1cmの長さで山の高さは7.5mmである。施文は横位に施されている。胎土中には白色の細砂

粒を多く含んでおり、器壁は脆弱である。なお、(5)と同じく押捺は弱い。(7)は(6)よりもゆるやかな山形をしている。凸面幅は2mm、凹面幅は3mmであり、1山の幅は8mm、山の高さは3mmである。縦位に施文されている。胎土中には細砂粒を多く含んでおり、器壁はかなりもろくなっている。(8)は(3)と同じく山形頂部に丸味をもっており、文様幅、山の頂部間、胎土共に(3)とよく似ており、同一個体の可能性がある。(9)は(7)よりも山形がゆるやかになる。凸面・凹面の幅は共に約2mmであり、1山の幅も1.8cmと長く、山の高さは3mmと低い。胎土中には長石粒を多く含み、器壁はかな

り脆弱である。下部が厚くなるため、底部近い破片と考えられる。(10)は(5)と類似するが、凸面の幅が約2mm、凹面の幅が約3mm、1山の幅が1.2cm、山の高さが5mmであり、(5)の土器片とは若干の違いを見せている。山形頂部は鋭角となるが、押捺は弱い。器壁は脆弱である。(11)は口縁部片であり、口縁断面は丸味をもち外反する。口縁上に文様はないが、口縁直下では右上がり強く押捺回転されている。口径は21.6cmほどと推定される。凸面幅・凹面幅は共に約3mmで、1山の幅は約1.1cmの長さで山の高さは2mmである。胎土中には金雲母片を含み、堅緻な焼きしまりを呈している。



第102図 縄文時代早期の土器拓影図 (1:2)

(S B 1 出土	1~10、12~14、19~22)
(S K 19 出土	15
(S K 20 出土	17

これら山形文を施文した土器片の内(1~10)まではS B 1から出土しており、(11)のみ地山直上の包含層中から出土している。

b 楕円押型文土器 (12~14)

ネガティブな楕円形の押型文土器片である。(12)は楕円粒の長径が7mm、短径4mmで、条の間隔が4mm、節間隔が3mmで、右下がりの縦位施文であり、原体は1周3cmである。胎土中には長石粒を多く含み、強い火熱を受けて器壁がもろくなっている。(13)は(12)と同じく右下がりの縦位施文がしてあり、楕円粒の長径が7mm、短径が3mmで、条間隔・節間隔は共に4mmである。胎土中には砂粒を多く含むが、長石粒はみられない。器壁は(12)ほどもろくはないが、部分的に剝離した面が見られ、1周の長さは不明である。(14)は(12)、(13)よりも楕円の粒が小さく、長径で6mm、短径が3mmであり、条間隔・節間隔共に5mmである。(12)、(13)と同じく左上→右下方向の縦位施文である。胎土中には砂粒を多く含んでおり、脆弱である。細片であるため原体長などは不明である。

c 格子目押型文土器 (15~18)

(15)は短辺が4mmと5mmの2種類を持ち、長辺が6mmの長方形をした格子目文を施してある。条間隔・節間隔は共に2mmであり、左上から右下方向に縦位施文されている。破片中央部あたりに格子目の乱れが見られるが、原体回転の境目に当たるものと思われ、原体は1周約2.4cmと考えられる。胎土中には長石粒をはじめ多くの細砂粒を含んでいる。(16)は菱形状の格子目文である。各辺はそれぞれ4mmであり、条・節間隔は3mmである。施文の状況は、強い押捺のため稜がかなりシャープになっている。胎土中には長石粒を多く含んでおり、残存状態は良好である。(17)は口縁部小片であるため口径の大きさは不明であるが、器形はわずかに外反する。右下がりの縦位施文で口縁部文様を構成するようであり、口縁上に文様はない。格子の大きさは、短辺が3mm、長辺が6mmであり、条間隔が2.5mm、節間隔が2mmである。胎土中には細砂粒を含む。残存状態は良好である。(18)は矢羽根状をした格子目文の土器である。格子の大きさは、短辺が3mm、長辺が5mmであり、条・節間隔共に2mmほどである。施文は縦位

に施されているが、横方向に1.5cmで文様に乱れが認められる。胎土中には少量の細砂粒を含んでいるが、金雲母等は含まれていない。

格子目押型文土器の中で、S B 1からは、(16)が出土した。(15)はS K 19から、(17)はS K 20から出土した。また(18)はS B 1の3mほど北方の発掘区最北端から出土している。

B その他の土器

a 沈線文土器 (19)

口縁は平縁で直立する。口縁断面は平担である。文様は口縁上にはつかず、口縁部文様として7条の平行沈線が左から右方向に横走する。以下には沈線を左上→右下に斜走させている。各沈線の間隔は、4mmずつであり、沈線の幅は2.5mmであり、沈線間の凸面幅は2.5mmである。胎土中にはごく少量の金雲母を含み、他に細砂粒を多く含んでいる。また、器壁外面には煤が多く付着しており、器表は脆弱である。

b 縄目を施した土器 (20・21)

(20)は口縁部片で、器形はやや外反する。口縁断面は平担である。節の細かい原体を斜走させている。内面は横方向にいていねいにナデられている。胎土中には白色の細砂粒を多く含むが、雲母等は認められない。外面には煤が口縁上までよく付着している。(21)は(20)と同様口縁部片である。(20)より節の大きい原体を使用している。器壁面に凹凸がかなりあり、所々縄文が消えている。口縁断面は丸棒状となる。やや外反する器形であり、器表面には、口唇部直下に1cmほどの無文部があり、横にナデた後右下がり方向で燃糸を斜行させている。胎土中には長石をはじめ白色の細砂粒を含んでいるが、器壁の残存状態は良好である。(22)は文様が認められないが砲弾形をした尖底土器の底部近くである。胎土中には長石粒等の細砂粒を多く含む、煤等の付着はない。

(19~22)は共にS B 1から出土している。

(2) 縄文時代早期以外の土器

a S B 26出土の土器 (7・8)

(7)は地文縄文の上に、沈線で平行線を横走させ、その一番下の線から大きくU字形を構成する沈線と、真下に伸びる平行沈線を走らせている。なお、

施文方法は、先に縄文を施し、横位の平行沈線を引き、その後縦位の平行沈線を引いている。器壁はわりあい薄く、胎土中に金雲母等の砂粒が多く含まれている。(8)は断面カマボコ状の突帯を貼り付け、その上に半截竹管の爪形を連続刺突する。これは体部文様の一部であり、中期に比定される。

b SK14出土の土器 (1・2・3)

(1)は口縁部で、口縁端は大きく内弯する。篋状の工具で文様を描出している。内弯する口縁部にはU字状の区画を作り、同列に短沈線で縦位に描出している。大きく弯曲して体部にかかる部分では、逆U字形に区画をし、内部に×字状の文様を刻み、その両側には長い平行線を縦位に懸垂させる。沈線は下部の方が浅くなるため、底部付近は無文になるものと思われる。(2)と(3)は同一個体の可能性がある。地文に撚糸文を施し、突帯を貼りつけ区画をしている。(2)は突帯の上に斜方向に刻目を入れてあり、口縁上にも刻目を入れてある。(3)の突帯には刻目を入れていない。

c SK20出土の土器 (4・5・6)

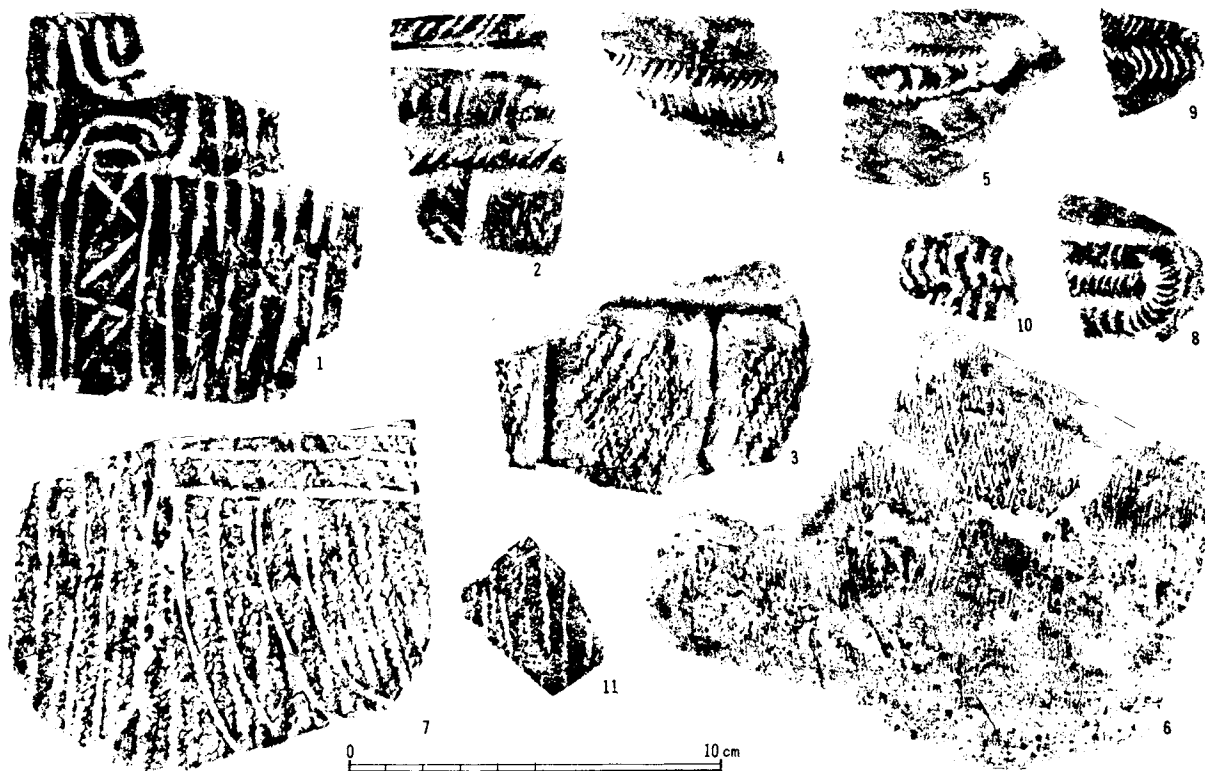
(4)は口縁部片である。口縁は大きく内弯する。口縁はゆるやかで丸味を帯びた広い面となる。口縁

直下は1.6cmほどの幅でくぼみ、くぼみ内は篋状工具で連続刺突されている。内面には口縁部の下の方から粘土をナデ上げており、粘土粒が口縁上に5mmほどの長さで9mm間隔で残されている。(5)は楕円形にくぼめ、内面の周圍に篋状工具による結節沈線を配し、区画内には篋先で刺突文を充填する。

(4)、(5)共に中期にみられる施文手法の特徴をよく表している。(6)は刷毛状工具を用いた浅い条痕が施されており、条痕の上を細い篋状工具で横位に沈線を引いてある。外面には部分的に煤が付着しており、胎土中には砂粒を多く含みもろくなっている。

d その他の土塚から出土した土器 (9~11)

(9)はSK19から出土しており、北白川下層II a式に類似する爪形文土器である。D字形の爪形文が2列横走り、爪形的一端が太く深く刻まれている。内面は篋状工具でていねいに磨かれており、器壁は堅く締まっている。胎土中には非常に細かい雲母片等の細砂粒が含まれている。(10)はSK28から出土しており、(9)よりは荒い爪形文が施されている。2列の横走が認められる。爪形の一方向の端には深く刺突したような形跡がある。内面はていねいにナデ



第103図 縄文時代前・中期の土器拓影図(1:2) (SK14出土1~3、SK19出土9、SK20出土4~6) (SB26出土7~8、SK27出土11、SK28出土10)

られており、(9)のように筒状工具のあたっての線は認められない。(11)はS K27から出土しており、捺糸文が縦走している。胎土中には砂粒が多く含まれ脆弱であるが、内面はていねいにナデられている。

C 石製品

a 石斧 (1)

(1)はS K20の底部から地山に接した状態で出土した。自然礫の一端を両面から打ち欠いて刃部を形成している。表面は非常に滑らかであり、刃部については打ち欠き面がそのまま残り、刃先も一定の面をなしていない。長さ14.2cm、幅7.6cm、厚さ2.3cmである。

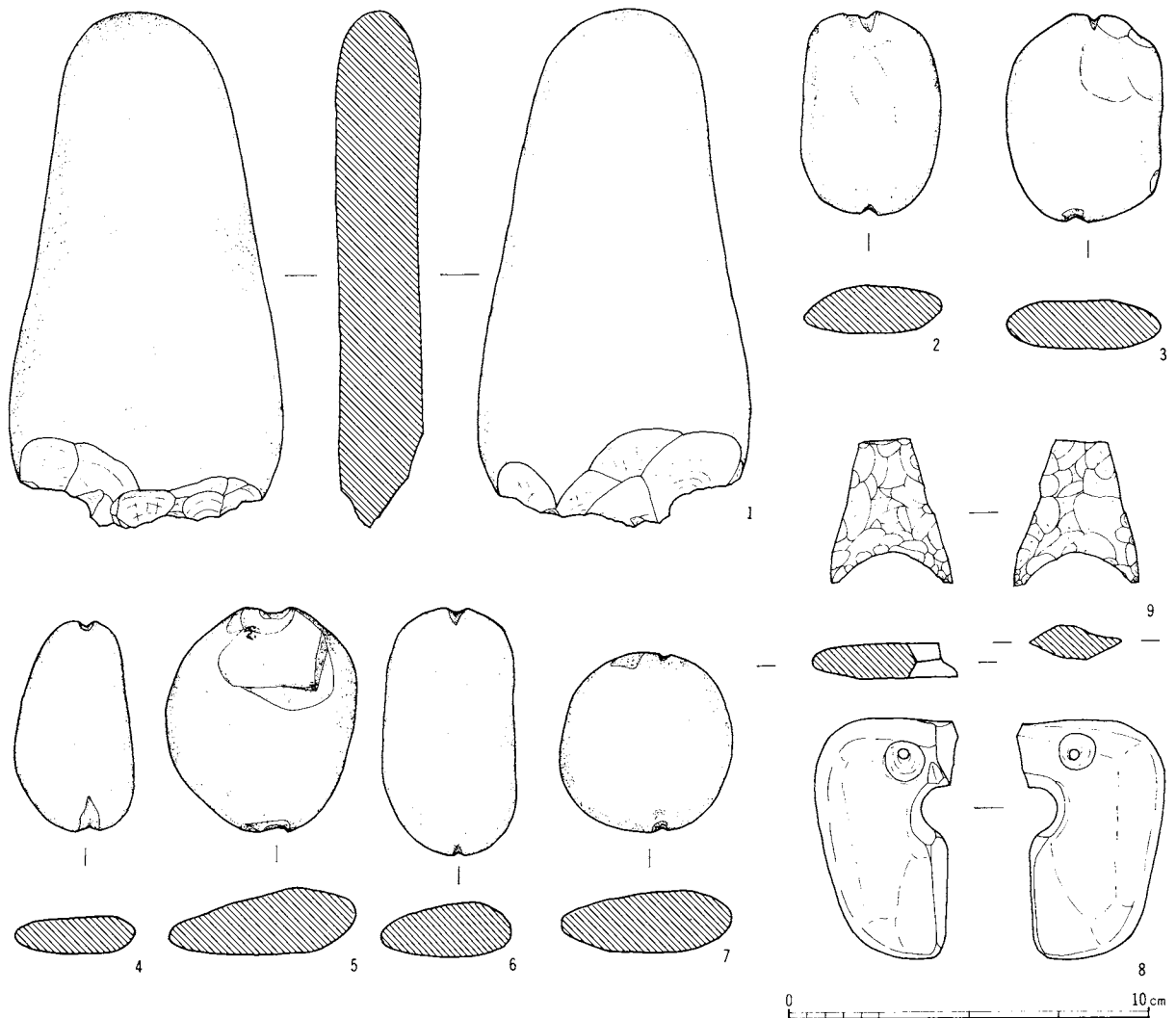
b 石錘 (2~7)

(2)、(3)は共にS K20から出土している。長

軸の両端を擦っている。重さは(2)が50.3g、(3)が44gである。(4~7)は共にS K25から出土している。(4)、(6)、(7)は長軸の両端を擦って加工しているが、(5)は長軸の両端を打ち欠いて調整しているのみである。重さは(4)が30.7g、(5)が76.6g、(6)が60.2g、(7)が58.4gである。

c 玦状耳飾り (8)

S K25より出土している。全体にていねいに磨かれており、両面とも平滑に仕上げられている。色調は暗緑色を呈し、材質は不明である。中央部で折れている。残り半分は発見できなかったが、使用中に折れたものらしく、両側から穿孔されている。穿孔方向に若干のズレがある。なお、折れた面はそのまま加工は加えられていない。



第104図 石器実測図 1~7 (1:2) (S K20出土1~3)
8、9 (1:1) (S K25出土4~8)

d 石鏃 (9)

S B 1 の西方50cmの地山面に接した状態で出土した。先端を欠損しているが、残存する重量は 1.1g

である。現存長 1.9cm、幅が 1.7cm、厚さ 4mmである。基部は凹基無茎であり長三角形を呈する。

4. 小 結

種ノ谷遺跡は以上の如く縄文時代早期、中期を中心とする遺跡であるが、以後、縄文時代後期から鎌倉時代にかけての遺物は認められず、長い時代の空白を経て室町時代になって再び生活した痕跡が認められる遺跡である。縄文時代早期に属する押型文土器が出土した遺跡は、員弁郡照光寺遺跡、野々田遺跡をはじめ、鈴鹿市の東庄内A遺跡、南畑田遺跡、一色山遺跡、松阪市の射原垣内遺跡等がある。特に射原垣内遺跡に代表されるように、櫛田川流域には早期の土器が出土する遺跡が数多くあり、当遺跡の所在する宮川流域と共に縄文時代の遺跡が集中している所である。しかし、今までの調査例から押型文土器に伴う遺構は検出されておらず、今回の調査で明らかになったように、縄文時代早期の竪穴住居が検出されたことは非常に意義の深いことである。全国的にも縄文時代の早期の住居跡の検出例は数少ないが、無論県下では初例の住居跡である。また、遺物から見れば、押型文土器も山形文、楕円文、格子目文とバラエティーがあり、その多様性を見ることができる。

中期以降になると関東地方の勝坂式土器の影響を持つものや、瀬戸内地方の船元式の影響を持つものもあり、当地域が東西の両文化圏の影響を受けていると考えられる。

石製品をみると、県下で6例目に当たる玦状耳飾りは非常にていねいな加工をされている。なお、この耳飾りは使用途中に欠損したものと思われ、補修孔を穿けて再び使用されたものと考えられる。他の製品に再利用されたことも考えられるが、欠損部に

は再加工の跡もなく、大阪府藤井寺市美稜町所在の国府遺跡の例から考えても、他製品転用の為の穿孔ではなく、補修孔として穿けられたものと考えるのが妥当であろう。他には図化できなかったが、12~15cmほどの楕円形をした円礫が多数出土している。これらは表面が非常に平滑なものが多く、磨石として使用されたものと考えられる。また、磨石と共に利用される石皿についてはS K 20の中から出土した大きく平坦な石がこれに当てられよう。この石は、33×25cmの方形をし厚さが13cmほどあり、表面が前述の磨石と同様に非常に平滑であり、わずかながら凹みを持っている。

なお、今回の発掘調査は、昭和51~52年度に調査された大台町出張遺跡と共に、宮川流域における縄文時代以前の歴史を解明する上で非常に貴重な資料が得られたと言えよう。なお、当遺跡から考えられる今後の課題を列挙しておきたい。

- ①押型文土器の多様さが、果たして同時期に展開されたものなのか、地域的特色であるのかという点についての検討を加えたい。
- ②縄文時代の早期における竪穴住居について、そのプラン、規模、覆屋構造等において今後の類例を待って詳細な検討を加えたい。

本調査に当たっては、現場において文化庁文化財保護部記念物課調査官の岡本東三氏に、また、報文作成に関しては奈良国立文化財研究所飛鳥藤原調査部文部技官の土肥孝氏に多大の御教示を得た。ここに記して謝意を表わしたい。

(高見宜雄)

(参考文献)

- 土肥 孝 「縄文早・前期の土器—近畿地方」『縄文土器大成1 早・前期』講談社 1982
- 岡本東三 「縄文時代Ⅰ(早期・前期)」『日本の美術2』No189 至文堂 1982
- 可児通宏 「押型文土器の変遷過程」『考古学雑誌』第55巻第2号 日本考古学会 1969

- 片岡 肇 「押型文土器」『縄文文化の研究3 縄文土器Ⅰ』雄山閣 1982
- 宮崎朝雄 「擦糸文土器」 同上

I 安芸郡安濃町 ^{まえだ} 前田遺跡

1. 位置と環境

前田遺跡(1)は、行政的には三重県安芸郡安濃町前田字奄の下に所在する。

地理的環境としては、鈴鹿山脈の南端の伊賀越に源を發して東方の伊勢湾に注ぐ、安濃川の中流南岸に位置する。当遺跡は、安濃川の支流である穴倉川と、この支流である生水川、北大谷川に挟まれた丘陵に立地する。この丘陵は、三紀層の浸食残丘であり、東西約800m、南北約400m、比高約20mを測る。前田遺跡は、この丘陵の東方尾根上に位置する。弥生時代の遺構群(山頂区)と、東麓に位置する中世以降の包蔵地(山裾区)に大別できる。

前田遺跡の歴史的環境を概観すると、安濃川の南岸と北岸とでは、遺跡の分布密度が大きく異なる点が目につく。これは、北岸よりも南岸の方が小支流が多く、安定した可耕地が多い事と関連するものであろう。前田遺跡に関しても、安濃川本流の氾濫源よりも、生水川や北大谷川等の小支流が形成した沖積地の方が、弥生時代の可耕地としては安定していたと思われる。

安濃川に伝播した弥生文化は、下流沖積地に拠点集落である納所遺跡^①(2)を出現させ、漸次流域に大小の遺跡を形成した。弥生時代の遺跡は、下流沖積地とこの南岸の半田丘陵に多く、前田遺跡の立

地する中流域にも見られるが、上流には少ない。半田丘陵からは、外縁付紐の神戸鐸^②(20)と、三遠式の野田鐸^③(21)という2個の銅鐸が出土している。また、同丘陵上からは高松弥生墳墓^④(24)や大ヶ瀬遺跡^⑤(25)のように、弥生時代後期前半の方形台状墓や墳丘墓が知られている。

古墳時代も右岸に遺跡が多い。右岸では中流から南北に造出しを持つ方墳として著名な明合古墳^⑥(34)から、約2km間隔に前方後円墳(35~39)が所在し、海岸平野に臨む池ノ谷古墳^⑦に続く。右岸でも約2km間隔に堂山2号墳(40)と、帆立貝式の君ヶ口古墳^⑧(41)が存在する。一方、長谷山東麓には400~500基の長谷山古墳群(45)が知られ、またこのほかにも多くの古墳群が存在する。しかし、これら群集墳の内には、坂本山古墳群^⑩(26)のように前期の小方墳群も存在し、弥生時代の方形周溝墓や方形台状墓との関連において注目される。

前田遺跡では山頂で方形台状墓を検出したが、同一丘陵上には前田1~2号墳が存在する。1号墳は平板測量の結果、1辺15m程の方形墳と推定された。遺物は採集されておらず、時期決定は不明であるが、後期群集墳というだけでなく、前期の方墳や弥生時代の方形台状墓の可能性も一応考えられようか。

2. 遺 構

調査区は山頂区と山裾区に分けられるが、山裾区では明確な遺構は確認されなかった。

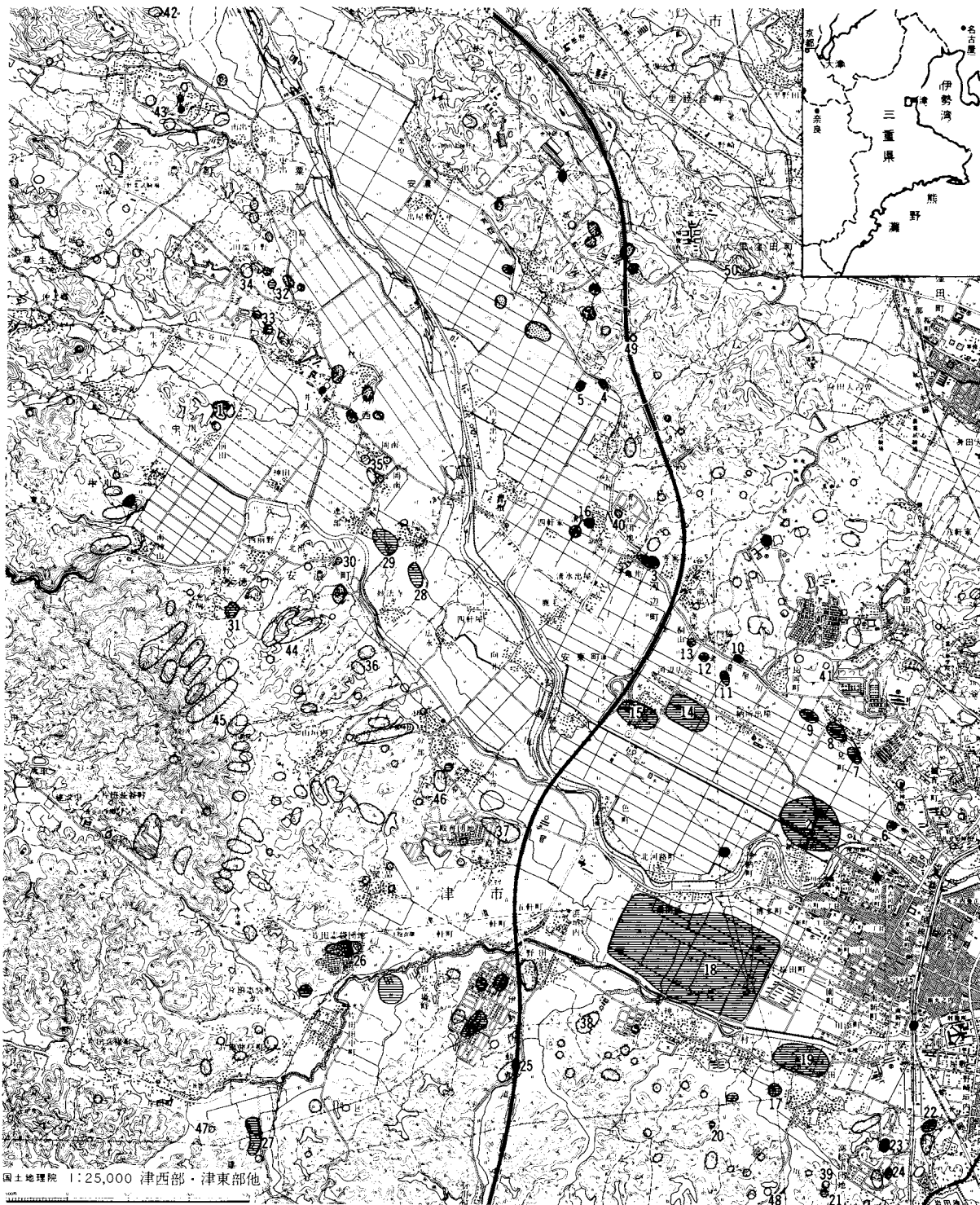
(1) 山頂区

調査は、尾根頂部とこれより南に延びる小尾根を対象としたが、後者には遺構、遺物は認められなかった。尾根頂部では、2基の方形台状墓(SX1と2)を検出した。尾根頂部の北東は狭い鞍部であるが、ここでは尾根の稜線と削り残した2本の短い溝

(SD3・4)を検出した。

SX1 (第108~110図)

東西約8m、南北約6mの略長方形で台状を呈し、四周は地山を掘り込んだ溝によって区画されていたと思われる。封土は地山の削り出しと盛土によって構成されているが、全体に流土が著しく、主体部は不明であった。現状ではわずかな盛土を残すのみであり、区画溝底からの平均的な高さは約90cmで



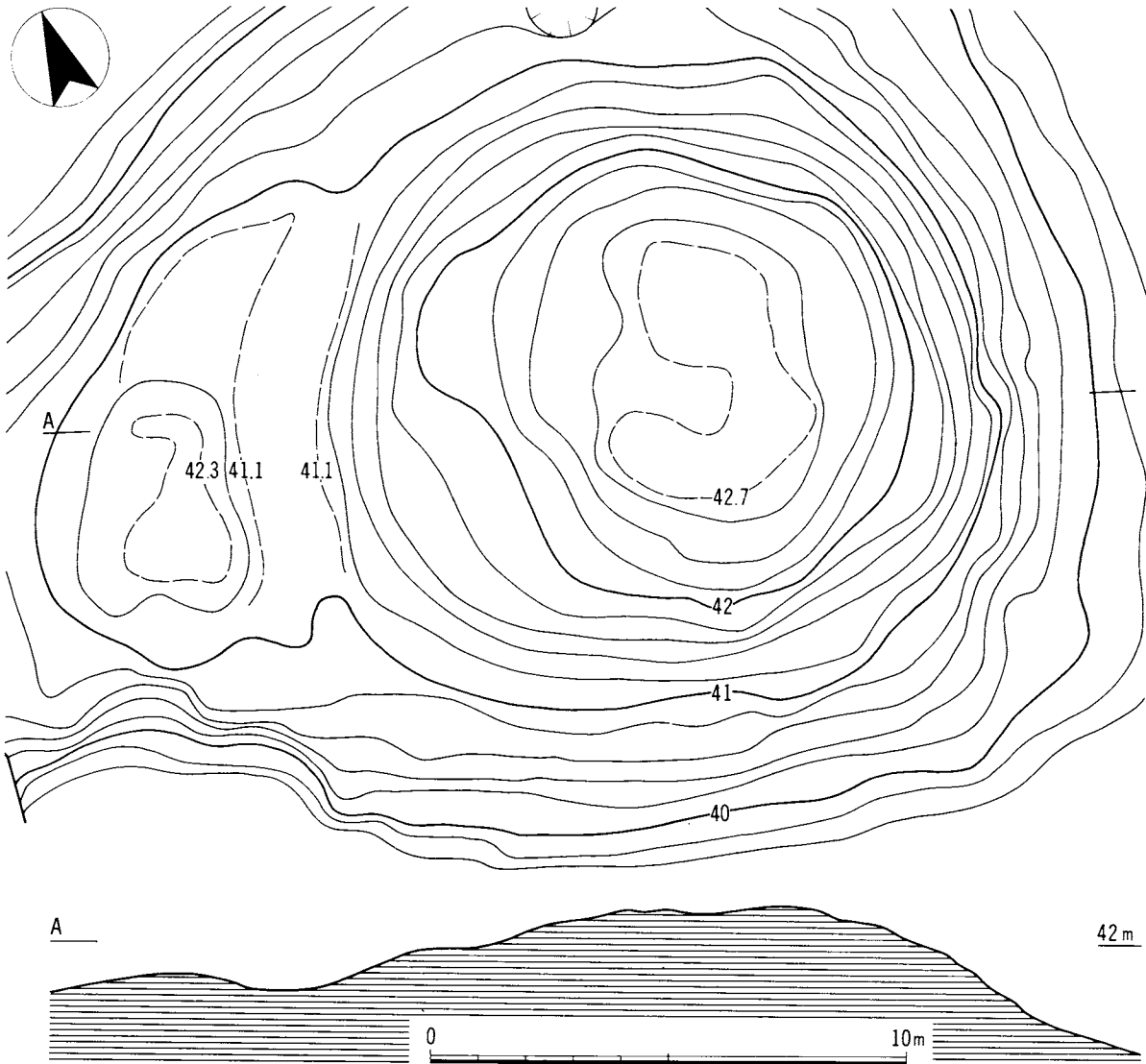
第105図 遺跡位置図

弥生時代包蔵地
 古墳時代包蔵地
 古墳(群)

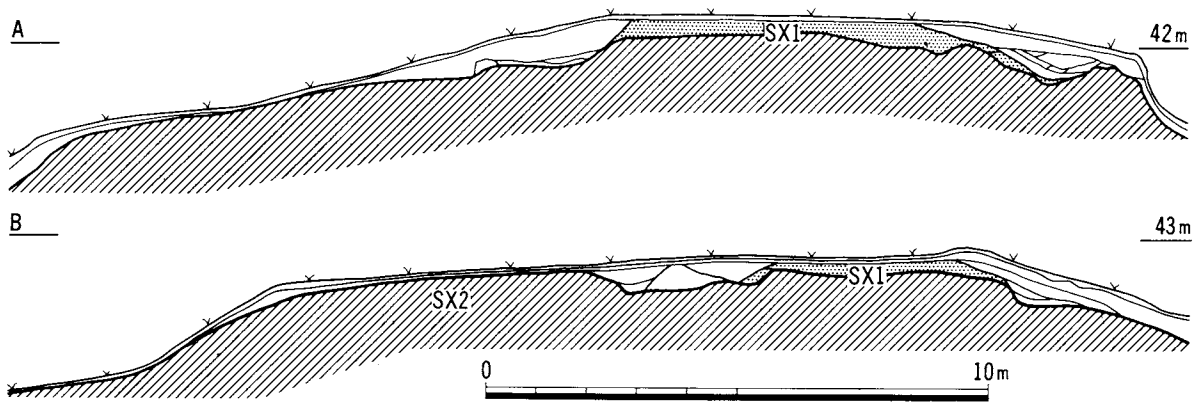
1. 前田遺跡	11. 森山東遺跡	21. 野田銅鐸出土地	31. 光明寺遺跡	41. 君ヶ口古墳群
2. 納所遺跡	12. 桐山遺跡	22. 笠取遺跡	32. 田端上野遺跡	42. 戸島古墳群
3. 亀井遺跡	13. 松ノ木遺跡	23. 高松遺跡	33. 北浦遺跡	43. 大塚古墳群
4. 北端遺跡	14. 中跡部遺跡	24. 高松弥生墳墓	34. 明合古墳群	44. 前田古墳群
5. 辻ノ内遺跡	15. 清水遺跡	25. 大ヶ瀬遺跡	35. 岡南墳群	45. 長谷山古墳群
6. 大御堂遺跡	16. 上村遺跡	26. 坂本山古墳群	36. 御屋敷跡墳群	46. メクサ古墳群
7. 竹内遺跡	17. 神戸遺跡	27. 新畑遺跡	37. 殿村遺跡	47. 高井古墳群
8. 市場遺跡	18. 神館神社遺跡	28. 浄土寺南遺跡	38. 鎌切遺跡	48. 元井池古墳群
9. 宮代遺跡	19. 神戸銅鐸出土地	29. 浄土寺西遺跡	39. 口蓮池古墳群	49. 日余1号墳
10. コウゼン遺跡	20. 田倉田遺跡	30. 田倉田遺跡	40. 堂山古墳群	50. 墓の谷1号墳



第106図 遺跡地形図



第107図 山頂区調査前測量図 (1号墳)



第108図 山頂区調査前測量図・土層図

ある。

主体部は地山面で精査したが、わずかに西半部において土のヨゴレが目立ち、高杯(1)や甕(2)が出土したに過ぎない(第110図B)。不定形で浅く、主体部と断定するに至らなかったが、おそらく主体部の痕跡であろう。

西区画溝は固い地山を掘り下げているが、外側の肩はほとんど流失しており、土層の断面観察によってわずかに知れる(第108図A断面)。この溝の埋土中からは、壺(3)1個体分と、台状部から出土した甕(2)の細片が出土した(第109、110図C)。これらの土器は、溝底から約10cm浮いた状態で埋没しており、台状部から転落したものかと推定される。

北区画部は、断面観察によっても全くテラス状を呈しており、現状からは区画溝の外側肩が流失したものか、当初からテラス状を呈していたものかは断定し難い。地山面から10cm程遊離して壺(6)の破片が散在していた(第109、110図H)。1個体分と思われるが、原位置から転落した状態である。

東区画溝は、固い地山を掘り下げているが、調査後測量図(第109図)でも外側の肩が認められる。溝の推定規模は、長さ約7m、幅約2mであり、ほぼ一

直線を呈す。

南区画溝は、尾根頂部を切断するものであり、最大幅は0.8mを測る。

S X 2 (第108~110図)

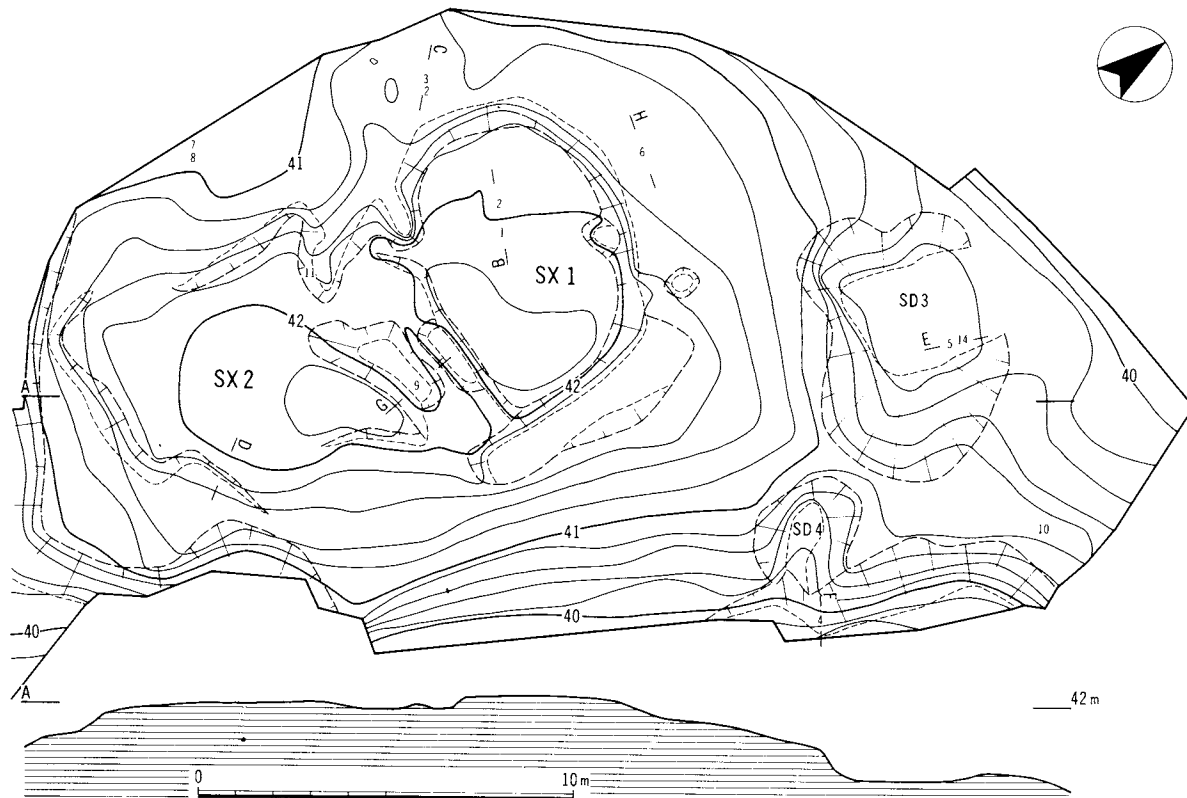
山頂部南半を占めて、S X 1の南に並ぶ。北側に区画溝を持ち、他の3面にはわずかな段をとどめており、1辺約7mの略方形台状を呈す。

南区画溝は、中央部が最も深く40cm程を測り、最大幅は1.2mである。溝底から8cm程浮いた状態で壺(9)が出土した(第109、110図9)。底部片は正立状態であったが、破片数も多くなく、原位置とは考え難い。

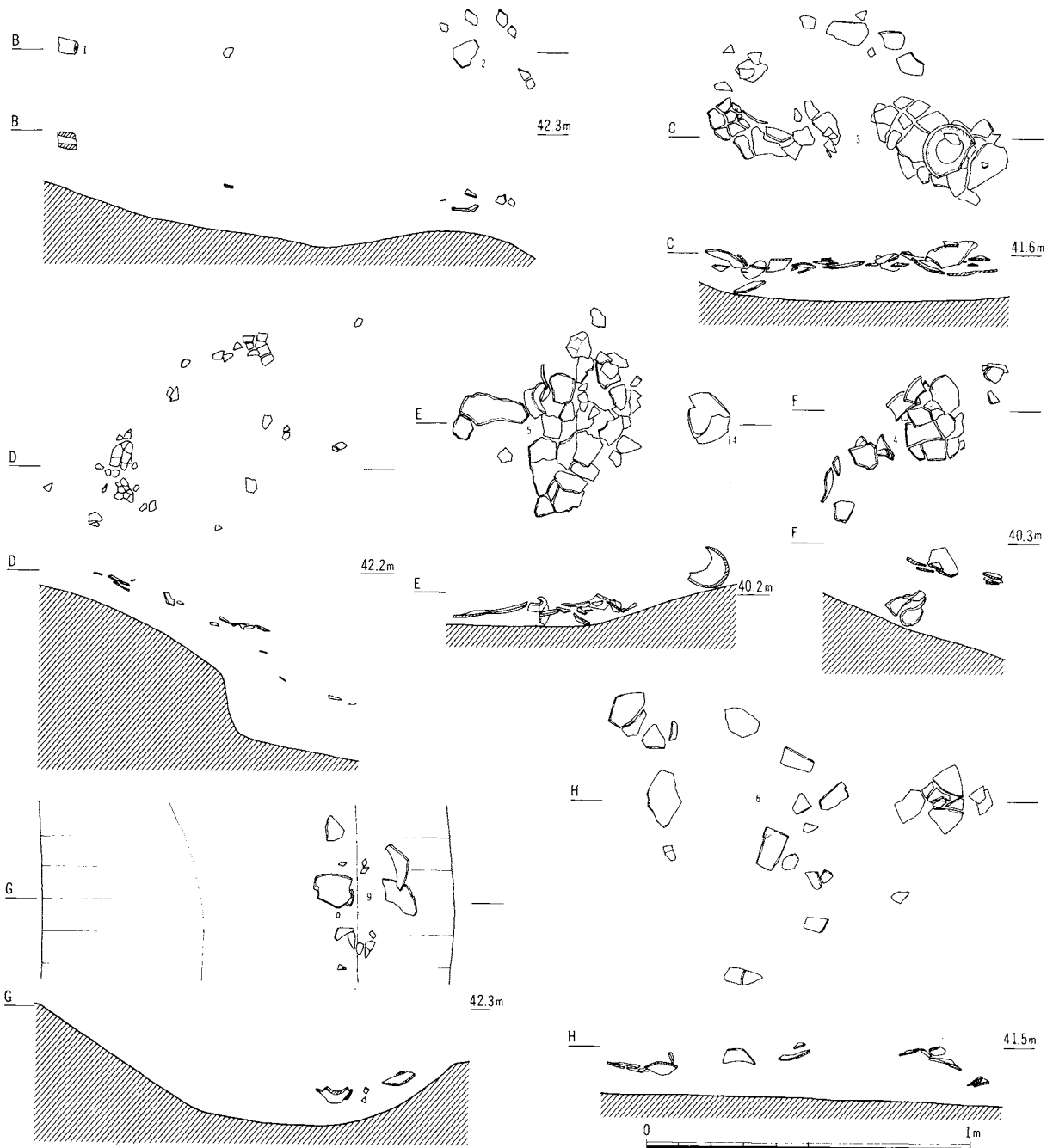
また、台状部南東の肩でも壺らしい土器の細片が集中していた(第109、110図D)。さらに、S X 2から西にやや下った黒褐色の埋土からは、平底の壺2片(7~8)が出土した。

S D 3 (第109~110図)

尾根頂部の北東の鞍部北斜面に位置する、短い溝である。北斜面に開口しているものの、中央部が最も深く、最大長は約7m、幅約5mを測る。尾根の鞍部稜線を掘り残しており、S D 4と共に尾根を区画したような状況を作り出している。溝の中央部か



第109図 山頂区調査後測量図(小文字数字は土器の個体番号)

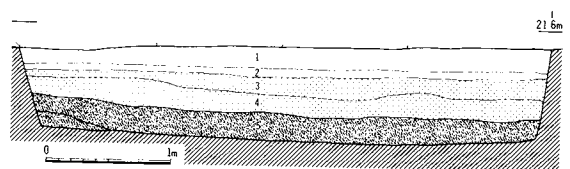


第110図 山頂区土器出土状況 (小数字は土器の個体番号)

らは、壺(5)が地山面に接して出土し、この近くからは中世陶器が地山面からやや遊離した状態で出土した(第109、110図E)。

SD4 (第109~110図)

鞍部の稜線を残して、SD3の反対側である南斜面に掘られたものである。南側の開口部に向かう程低くなり、小さな谷状を呈す。開口部東側斜面からは壺(4)が出土した(第109、110図F)。



第111図 山裾区土層図

(1) 山裾区

山頂区の南東の小さな谷に南北と、山裾の水路に並行して東西の試掘溝を設定した。

両試掘溝共に遺構は認められず、東西試掘溝から中世以降の遺物が少量したに過ぎない。

3. 遺物

山頂区出土の弥生土器のみを図示した(第8図)。これらの土器は、全体的に黄褐色を呈し、胎土に金雲母や石英、長石風の砂粒を含む。また、壺底部は焼成前後にかかわらず穿孔痕の確認された例はない。

SX1や2の台状部からは高杯(1)と甕(2)が、区画溝とSD3や4からは壺(3~9)が、SD3~4より東の尾根上からは器台(10)らしい破片が出土しており、出土地点と器種にある程度の傾向がうかがわれる。

1は高杯脚柱状部片であるが、風化が著しく、文様や技法等は不明である。

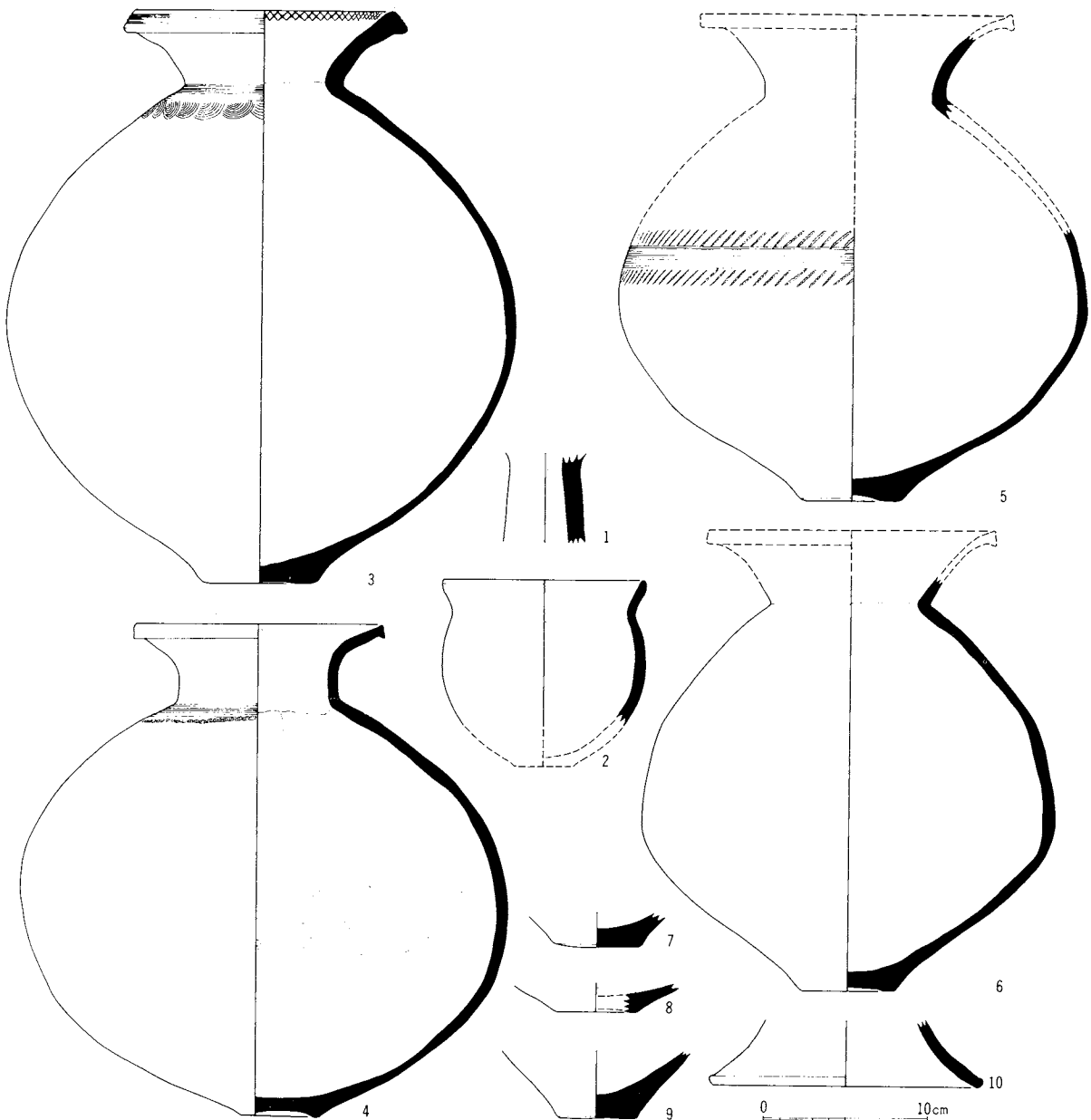
2は小型甕である。口径は約12cm、器高は11cm余

りであろうか。外面にスガが付着している。

3は口径15.5cm、器高34.5cmを測る広口壺である。口縁部は直線的に外反し、端面は下方にやや拡張して櫛描横線文を配す。また、口縁部内面には篋描格子文が1条見られる。体部は推定復元であるが、球形を呈し、頸部近くに櫛描の横線文と重弧文をとどめる。底部は、わずかに上げ底気味の平底である。

4は唯一復元できた壺であり、口径14.5cm、器高28.6cm測る。頸部は直立した上が強く外反する。体部は球形を呈し、頸部近くに櫛描横線文と櫛状具による刺突列を配す。底部は上げ底である。

5は、図上復元のために器高や器形には疑問を残



第112図 山頂区出土土器 (1:4)

す。頸部はラッパ状に外反し、球形の体部と、上げ底気味の平底が付く。体部中央には楕描横線文と、この上下に斜位の楕目列をとどめる。

6も壺であるが、口頸部を欠く。体部は岡上復元であるが、やや下ぶくらみであり、無文と思われる。

4. 小 結

SX1とSX2は、地山を削って区画溝やテラスを施け、中央に1辺数mの略方形台状部を作り出し、盛土をしている。埋葬主体は不明であるが、上述の諸点と共に、尾根上に立地し、弥生時代後期に属す点から、いわゆる方形台状墓と考えられる。築造時期は、遺構に伴う土器が全て弥生時代後期に属し、他は須恵器小片が表土から2片出土したほかに微量の中世遺物が見られただけである事実から明らかであろう。SX1とSX2は尾根頂部に接して並ぶが、両者の前後関係は不明である。あえて推定すれば、SX2北区画溝出土壺(9)は、SX1出土の壺(3、6)よりも古相を帯びているといえようか。

方形台状墓の台状部出土土器(1~2)は高杯と小型甕であり、区画溝やこの周辺から出土した土器(3、6~9)は全て壺であり、出土地点によって器種に違いが認められた。台状部出土の1~2は、埋葬主体に関わる可能性がある。また、区画溝やこの周辺から出土した壺は、あるいはSD3出土の5も含めて、台状部からの転落品かと考えられる。

SD3とSD4は、方形台状墓(SX1~2)が立地する尾根頂部から、北東に延びる尾根の鞍部に稜線を残して両斜面に掘られた短い溝である。出土遺物から、方形台状墓と同時代と思われるが、性格は不明である。想像をたくましくすれば、方形台状墓が所在する山頂部と、これに通ずる鞍部を溝によって区画しながらも、尾根稜線は山頂部への通路と

7~9は、壺の平底片である。9は他の壺よりも立ち上りが強い点が特徴的である。

10は器台片と推定したが、壺の縁部の可能性も皆無ではない。内面は不明だが、外面にはナデを施す。

して残したものかと考えられよう。

ところで、当概報では「方形台状墓」という用語を使用しているが、近藤義郎氏は「墳丘墓」という用語も考えられた¹¹。両者は、封土が主として削り出しによるか、盛土によるかによって区別されている。しかし、両者は「用語があらわれた時点での強調の仕方によったものであり」、「用語を厳重に規定するだけの実態の究明が十分なされていないのであって、用語上の多少の混乱はここ当分づくものと思われる」とも述べられている¹²。確かに現状では、「用語上の多少の混乱」もやむを得ないと思われる。そこで、当概報では報告者なりの、「方形台状墓」と「墳丘墓」の概念規定を、一応示しておこう。すなわち方形台状墓とは、集団墓地から隔絶した高所に立地し、溝やテラスで区画し、地山の削り出しや盛土によって立体的に造られた、特定小集団の墓である。主被葬者の明瞭な例もあるが、この点は必要条件でない。一方、立地や造墓技術は方形台状墓と基本的に変らないが、主墳丘に祭壇としての造出しが付設され、主被葬者が明瞭であるものを墳丘墓と呼ぶ。したがって、例えば山陰を中心に分布する四隅突出墓の突出部は、「道」¹³ではあり得ても、主墳丘部に付設された祭壇とは考え難く、報告者の理解に従えば、方形台状墓の一種となる。以上の理解に基づいて、当遺跡のSX1とSX2は「方形台状墓」と呼ぶが妥当と考える。

(山田 猛)

(註)

- ① 伊藤久嗣『納所遺跡』三重県教育委員会 1980
- ② 外縁付紐2式であり、高さ40cmの流水文鐸である。河内の恩智鐸や淡路の倭文鐸および伝大和出土鐸と同范。東京国立博物館蔵
- ③ 突線紐3式であり、高さ64.5cmの3遠式に属す。津市専修寺蔵
- ④ 谷本鋭次『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市文化財保護協会 1970
- ⑤ 伊藤久嗣「IV 大ヶ瀬遺跡」(『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告 1』)三重県教育委員会 1973
- ⑥ 三重大学歴史研究会原始古代史部会「三重県安芸郡明合方墳について」(『ふびと』23 1965)

- ⑦ 全長55m程の前方後円墳とされている。
- ⑧ 全長30.7mの前方後円墳とされている。三重大学歴史研究会原始古代史部会『堂山一号墳』安芸郡安濃村教育委員会1974
- ⑨ 菅室康光『君ヶ川古墳発掘調査報告』津市教育委員会 1974
- ⑩ 小玉道明他『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』津市教育委員会 1970
- ⑪ 近藤義郎「古墳以前の墳丘墓」(『岡山大学法文学部学術紀要』37 1977)
- ⑫ 近藤義郎『前方後円墳の時代』1983
- ⑬ 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」(『考古学研究』26-3 1979)

Ⅱ 阿山郡大山田村 ^{うたの}歌野遺跡

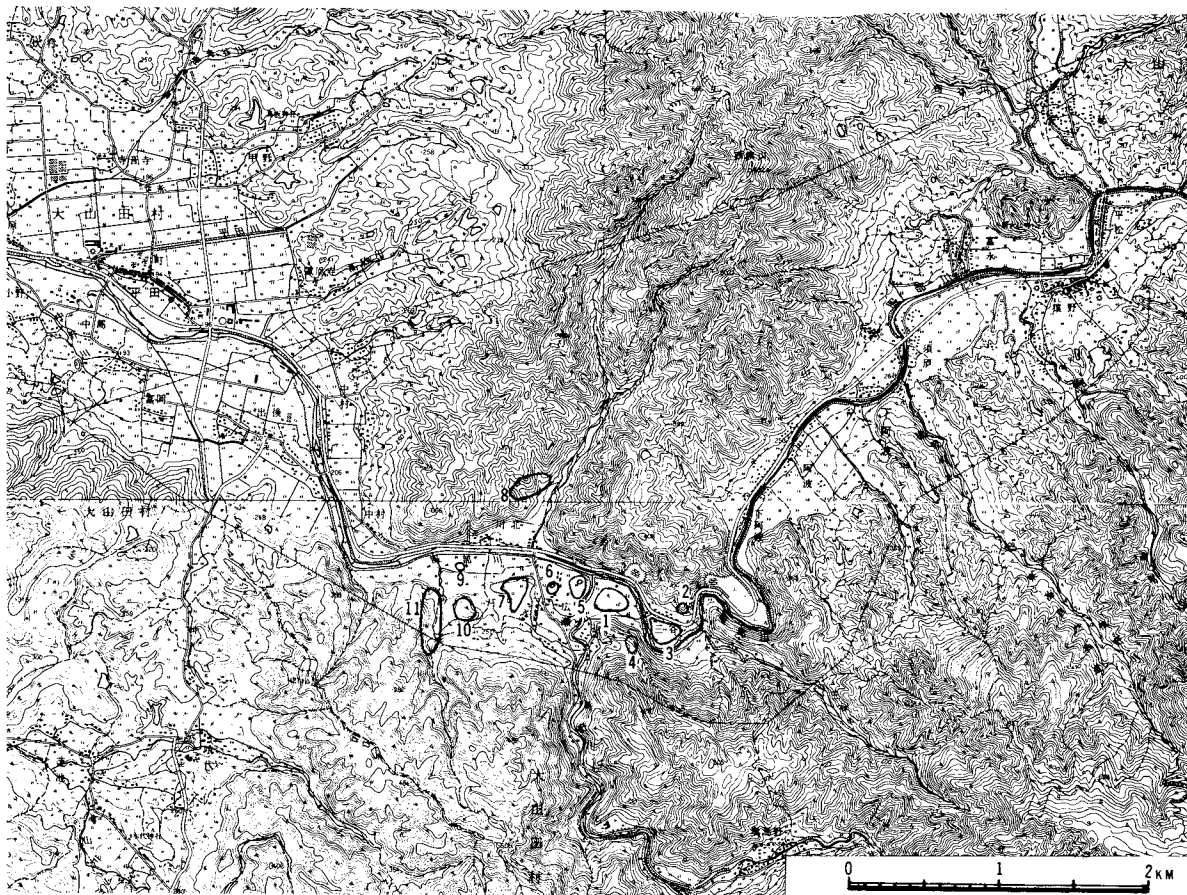
1. 位置と環境

歌野遺跡は、阿山郡大山田村大字広瀬字歌野 331番地ほかに所在する。

伊賀、伊勢を分ける布引山地に源を発する服部川は、東高西低の村内を西流する。その流れによる浸食と堆積、あるいは隆起の相互作用は、流域に平野と段丘を形成した。広瀬地区は、その中流域に位置し、南部の青山高原を源とする馬野川が服部川と合流する。遺跡はこの服部川左岸、馬野川右岸の下位河岸段丘上にあり、標高230mの水田下にある。

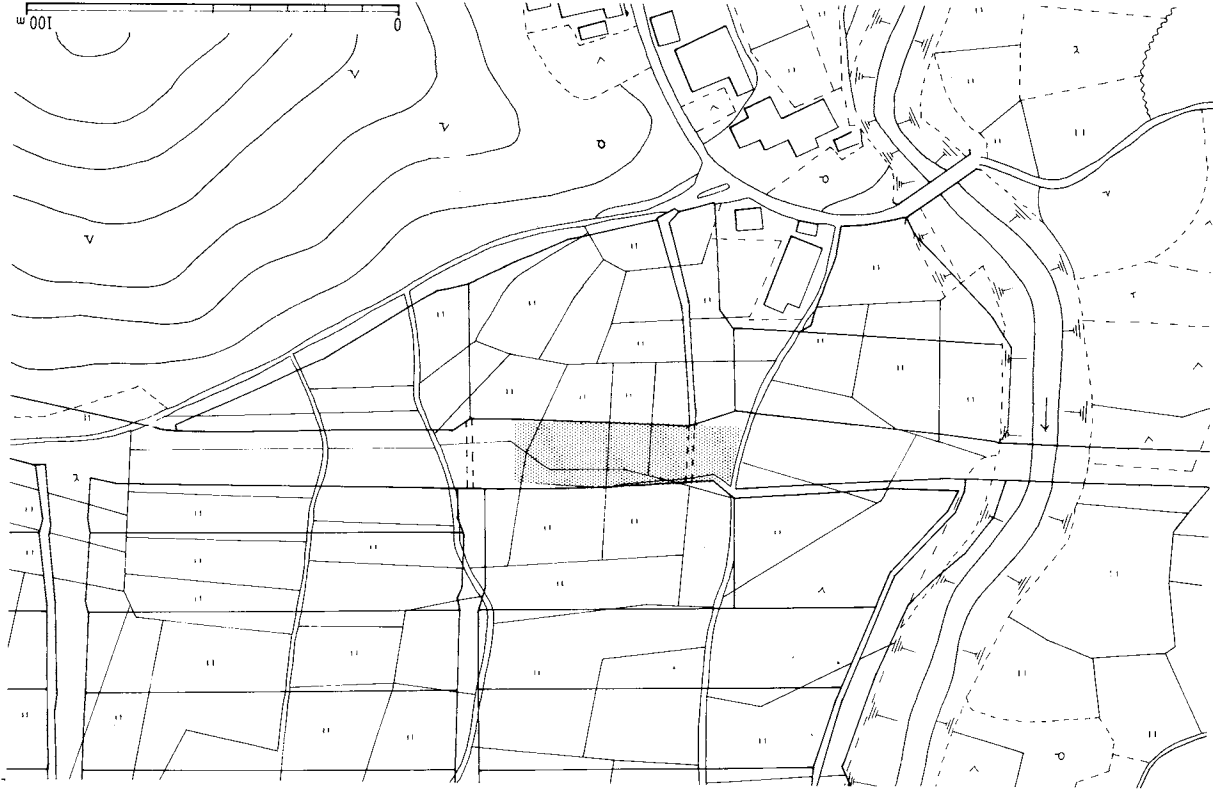
本遺跡の立地する服部川中流域・馬野川下流域(旧行政区画上は阿山郡布引村)には、弥生時代の沢遺跡(5)をはじめ、三谷遺跡(3)、西沖遺跡(7)

田中遺跡(6)がある。これらは、古墳時代以降、奈良時代を経て中世に至るまで、複合的にこの地域に集落の存在したことを物語っている。古墳では、大山田村における古墳の東限をなす三谷古墳群(2)をはじめ、広瀬山ノ神古墳群(4)、山ノ神古墳群(8)、丸山古墳群(10)、清水谷古墳群(11)、沢古墳(5)等や、消滅はしたが、横枕古墳群(9)、田中古墳(6)もある。それらは、後期の横穴式石室をもつものである。昭和54年度以降、この地域に農業基盤整備事業が実施されるに伴い、古墳や遺跡の現状保存への努力ないしは発掘調査が行われ、考古学的にも解明されつつある。

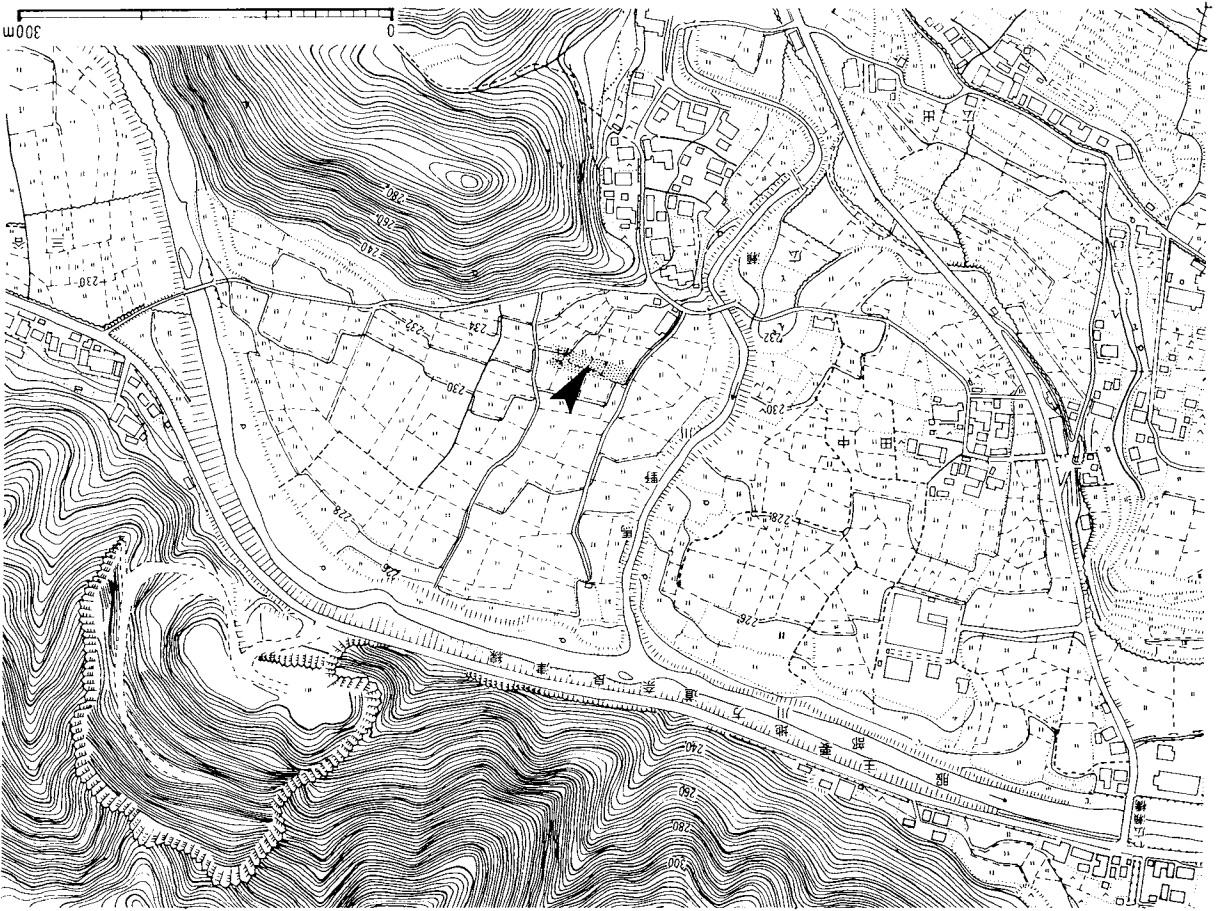


第113図 遺跡位置図 (1:50000)

第115图 发掘区平面图 (1:2000)



第114图 遗迹地形图 (1:6000)



この流域よりさらに下流の地域（旧行政区画は阿山郡山田村）では、縄文時代、弥生時代の遺跡が確認されている。また、古墳では、車塚古墳（大山田村と上野市の境に位置し、行政区画は上野市に属する）や寺音寺古墳、鳴塚古墳等の前方後円墳並びに辻堂古墳や数多くの群集墳がある。さらに、白鳳時代の鳳凰寺廃寺があり、条里制遺構も近年までみられた。

上流域（旧行政区画では阿山郡阿波村）では、笠取山北方での先土器時代の有舌尖頭器発見以外に、中世以前の遺跡は知られていなかった。近年の圃場整備事業等の調査で縄文土器の出土をはじめ、おもに中世以降の遺跡の存在が明らかになりつつある。また、東大寺再建にかかわる新大仏寺もある。

2. 遺 構

検出された遺構は、飛鳥時代の竪穴住居1棟及び十字にはしる溝と、奈良時代の竪穴住居27棟である。多数のピットもあるが、掘立柱建物として認めるに至らなかった。（第116図・第14表）

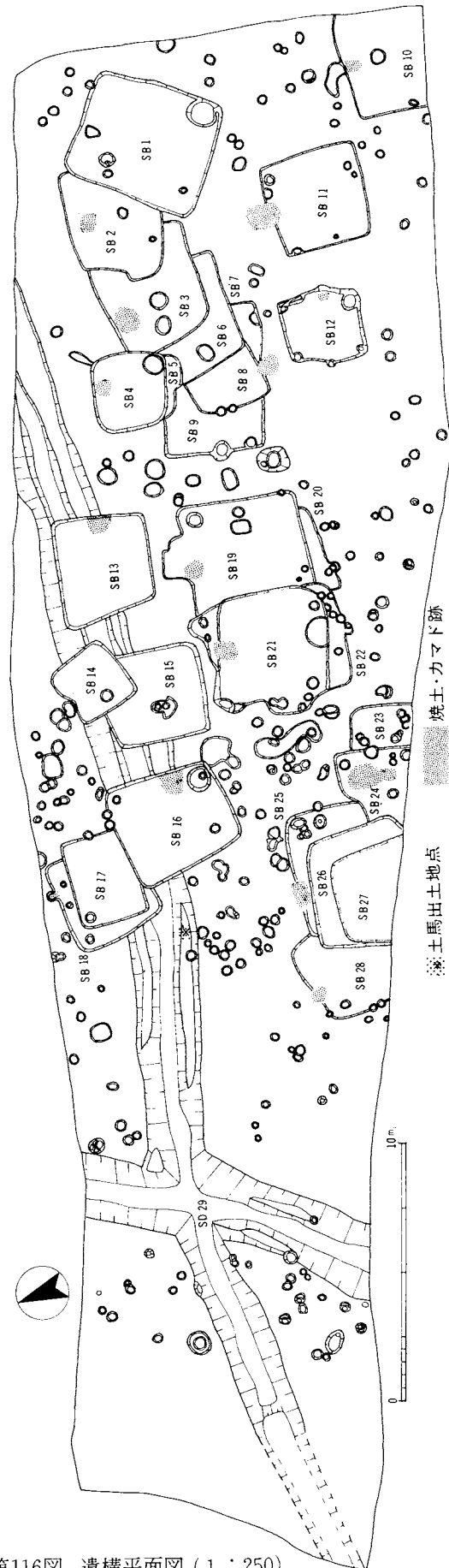
(1) 飛鳥時代の遺構

S B 26 発掘区西側の南辺にあり、南側の一部は調査区外となっている。S B 25、S B 27及びS B 28を掘り進める過程で床面から検出されたもので、それらより下層にあった。東西辺及び北辺より約50cm内側に、厚さ10cm程粘土を張りつけてある。

S D 29 発掘区の北及び西端寄りに十字にはしる溝である。幅約1.5～2.7m、深さ1.2～1.5mで、底部はほぼU字形である。部分的ではあるが、底部に至るまでの間に段状をなす所もある。古墳時代から飛鳥時代にかけての土器が出土している。その量も多く、おもに須恵器である。この溝はその後埋没し、奈良時代には竪穴住居（S B 13～18）が立地するところとなる。S B 16の西2mの、埋没した溝の検出最上面からは土馬が出土した。

(2) 奈良時代の遺構

今回の調査における主な成果は、奈良時代の竪穴住居（S B 1～25、S B 27～28）をまとめて検出できたことである。1,100㎡の調査面積からは濃密なものであった。



第116図 遺構平面図（1：250）

名称 (S B)	規模 (m)		深 さ (cm)	南北軸	カ マ ド (焼 土)	土 器	新 旧	備 考
	東 西	南 北						
1	4.5	5.5	15	N46° E		⊕ 鉄製手斧	• (新) ↑	南東隅に貯蔵 穴
2	4.0	3.5	15	N10° E	北 (焼 土)	⊕	• ↑	
3	4.5	4	8	N 8° W	北 (焼 土)	⊕	• ↑	
4	3	3	12	N 9° E	北 カマド (支 石)	⊕ ⊕ 製塩土器	• ↑	
5	2.5	—	6	—		⊕	•	
6	4	—	13	N 2° W		⊕	• (古)	
7	—	—	13	N11° E		⊕ 製塩土器		
8	—	3	10	N 6° W	南 (焼 土)	⊕		
9	—	4	10	N16° E		⊕ ⊕		
10	—	—	6	N 8° E	北 (焼 土)	⊕ ⊕ 鉄製紡錘車		
11	4	4	5	N 4° E	北 カマド (支 石)	⊕		南東隅に貯蔵 穴
12	3	3	20	N10° E	東 (焼 土)	⊕ ⊕ 製塩土器		
13	4	3.7	14	N 6° E	東 (焼 土)	⊕ ⊕		
14	2.5	2.5	17	N13° W		⊕ ⊕		
15	3.5	4	12	N 9° E		⊕ ⊕		
16	4	4.5	19	N 4° W	東 カマド	⊕ ⊕	• (新) ↑	
17	3.5	2.5	22	N 6° E		⊕ ⊕	• (古) ↑	
18	3.8	3.8	18	N 7° W	北 カマド (支 石)	⊕ ⊕		
19	—	4.6	17	N10° E	北 (焼 土)	⊕ ⊕		
20	—	—	14	—		⊕ ⊕	• (古) ↑	
21	4.3	4.3	19	N10° E	北 カマド・煙 道、(支石)	⊕ ⊕	• (新) ↑	
22	4.3	7	7	N 6° E		⊕	•	
23	—	—	13	N14° E		⊕		
24	—	—	15	N14° E	(焼 土)	⊕ ⊕ 製塩土器		
25	4.8	—	20	N12° E	北 カマド			
26	4.7	—	12	N15° E		⊕	飛鳥 (下層) ↑	
27	3.7	—	18	N10° E	北 (焼 土)	⊕ ⊕	• (新) ↑	
28	3.5	—	20	N10° W	北 (焼 土)	⊕ ⊕	• (古) ↑	

⊕ 土師器 ⊕ 須恵器

第14表 竪穴住居の概況

竪穴住居は、単独にある3棟のほかは重複している。形は方形で、一部は長方形である。規模は、一辺が4 m以上のものもあるが、平均的には3～4 mのものが多い。また、一辺が2.5mと小さいものもある。深さは、20cmを越えるものが少なく、遺存の状態は良好とはいえない。住居の向きは、S B23を除いて東西への傾きは10°前後である。検出された27棟の竪穴住居中16棟で、カマドないしは焼土を確認した。それらは北辺または東辺にあるが、S B8のみ南に位置している。それらのうち、カマドとしての構造的な特徴を残すものは6基で、あとは焼土であ

る。S B16とS B21のカマドは遺存が良い。これらは、30～40cmの細長の川原石を、周囲には数個を、中央には支石として1個を縦に用いている。S B21のカマドには、長胴甕を用いた煙道がほぼ原形をとどめる形で接続している。住居の北辺にあるカマドから外側へ土師器の長胴甕3個の底部を割り欠き連結している。2個は横に、先端の1個は底を斜にたてている。(図版74—下)貯蔵穴が確認されたのは2棟で、S B12のものは南東隅にあり、土師器の杯、皿、甕、須恵器の杯、甕ならびに製塩土器が出土した。支柱穴や周溝として明確に確認できたものはない。

3. 出土遺物

整理箱80箱の土器をはじめ、土馬、鉄製の紡錘車及び手斧等が出土した。それらは、古墳時代～飛鳥時代と奈良時代後半の2時期に区分できる。

(1) 古墳時代～飛鳥時代の遺物 (図版78)

S D29とS B26から出土のものである。S D29出土の遺物はおもに須恵器で、杯、甕(C)、長頸壺、短頸壺等がある。土師器は杯・甕等である。S B26からは土師器甕(B)が出土している。

(2) 奈良時代後半の遺物

S B26以外の竪穴住居出土の遺物は奈良時代後半のものである。それらの多くは土師器で、杯、皿、甕等がある。須恵器は前者に比して少ないが、杯、甕、鉢、長頸壺がある。そのほかに、土馬、製塩土器、鉄製の紡錘車及び手斧等が出土した。土馬の出土地点は、埋没した飛鳥時代の溝跡ではあるが、奈良時代後半の竪穴住居(S B13～18)の検出面と同レベルであり、ともに出土の土器等からも、奈良時代後半の竪穴住居と同時期のものと考えられる。出土遺物のうち、土馬、S B16の遺物及び製塩土器についての概要は次のとおりである。

A. 土馬 (第117図)

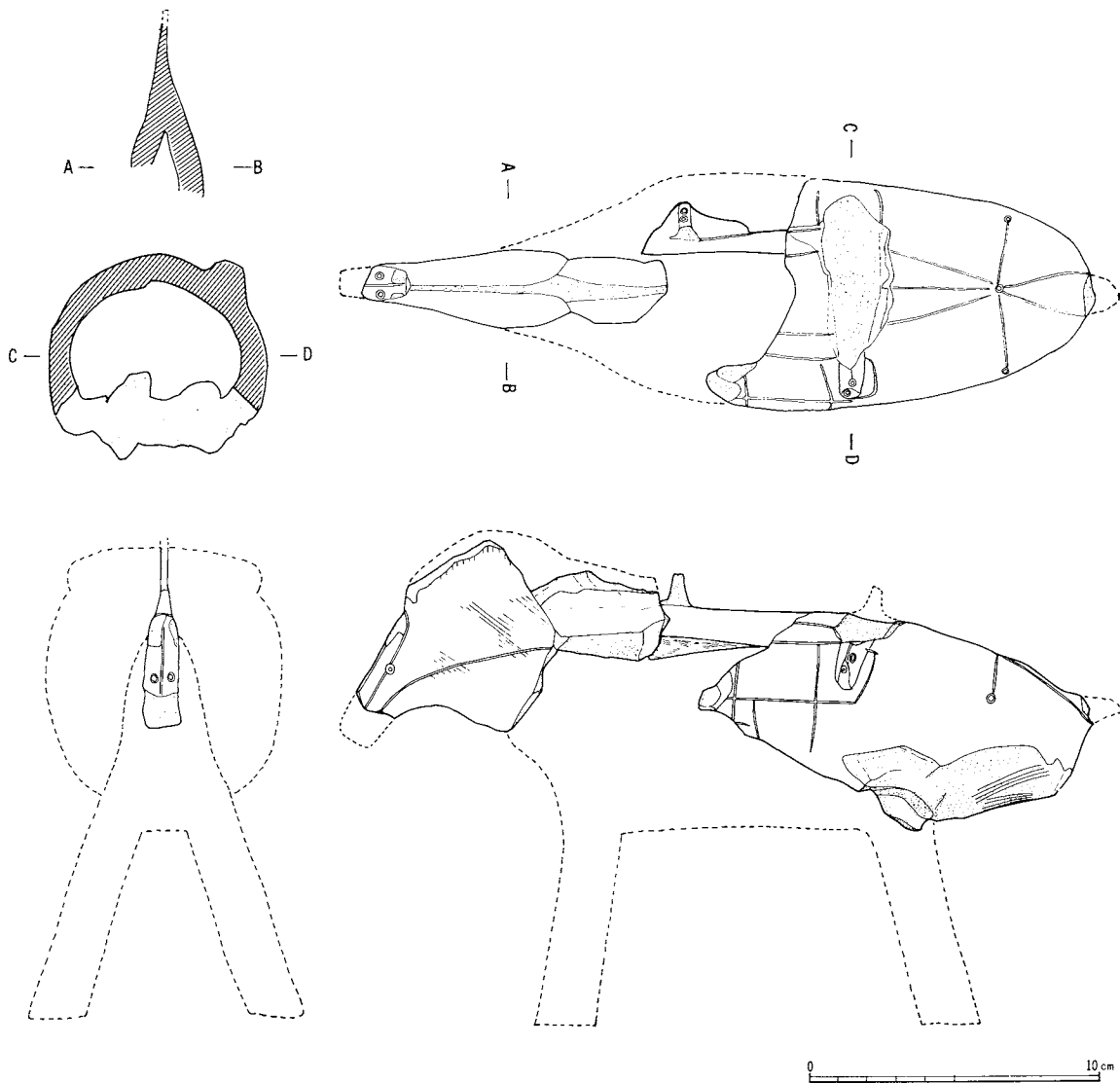
全面朱塗りの土馬で、頭部、頸部、胴部及び脚部を部分的に残す。厚さ8 mm程度の板状の粘土をおり曲げて製作してあり、胴部や頸部は中空となっている。顔は目と鼻を径3.5mm程の竹管を各2個刺突して表現している。馬具は、鞍の前輪と後輪のみ粘土紐を用いて貼付(その多くは剥落)している。それに

は、径3.5mm程の竹管の刺突で鞍褥を表わしてある。そのほかは、面撃、手綱、尻撃、杏葉等を簡描の沈線で表現している。たてがみや頸部にはハケ目調整を施す。耳は剥落し不明である。脚は右前脚と思われるものが残る。胴部から剥離しているが、その状況とつくりから、やや斜めに外方へ開き接地したものと思われる。その脚の芯にあたる部分を、径約3.5 mmの穴が縦貫する。遺存の状況から、土馬全体の高さは17cm程であったと考えられる。

B. 土師器

皿(1) 口径14.2cm、器高2.9cm。口縁部はわずかに外反し、外面には1条の沈線がめぐる。口縁部、体部とも、外面はヨコナデと粗いヘラ磨きしている。底部外面は、部分的にヘラ削りがみられる以外、不調整である。内面は全面にヨコナデ、底部にラセン状暗文が施されている。赤橙色を呈し、胎土も密である。

甕(7) 口径25cm、器高(底部欠損)28cm。口縁部はやや内弯し、端部が肥厚する。外面に縦方向のハケメ、内面に横方向のハケメをいれ、そのあとを内外面ともよこなでしている。体部の外面上部は縦方向のハケメ、下部は縦方向にヘラ削りしている。体部内面は斜方向のハケメをいれる。底部は欠損のため不明である。なお、体部外面上部にヘラによる2本の平行する記号状の弧(欠損のため部分的)が認められる。形態や製作手法的特徴からは、いわゆる「近江型」^①に属するものである。灰橙色を呈する



第117図 土馬実測図

が、外面の下半は有機物が付着し黒褐色となっている。胎土は密で、細砂粒を含む。

甕 (2) 口径14.5cm、器高(底部欠損) 12cm。口縁部は外反し、中央部でわずかに肥厚、内外面をヨコナデしている。体部は外面の上半は斜方向のハケメをいれ、下半はヘラ削りしている。内面は横方向のハケメをいれている。底部は欠損し不明である。胎土は密で、淡黄橙色を呈する。体部外面には有機物の付着で黒褐色の部分もみられる。

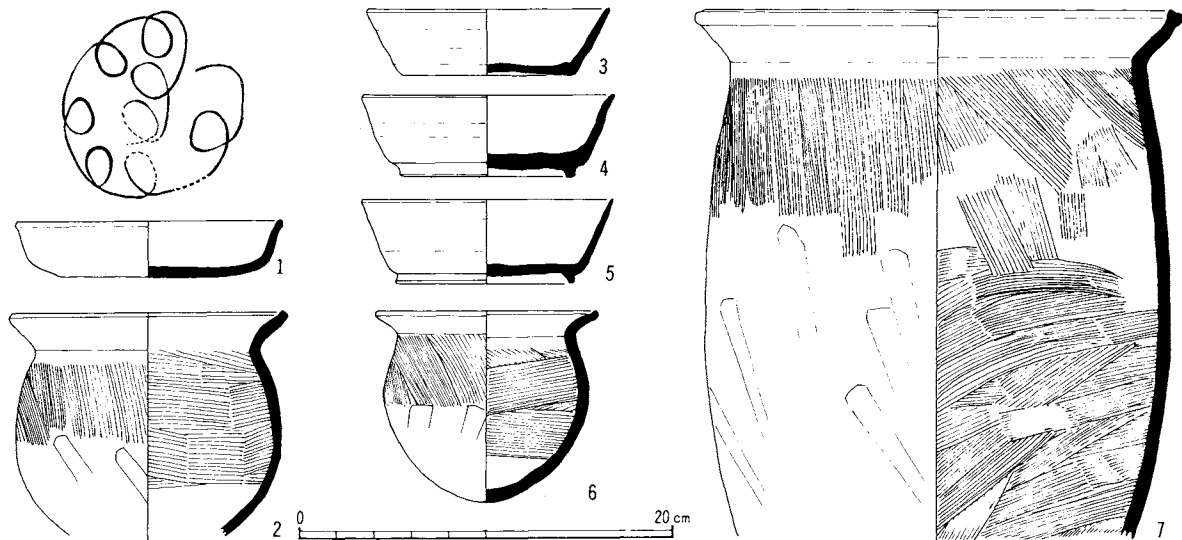
甕 (3) 口径11.7cm、器高10.2cm。口縁部は外反し、端部は丸味をもってわずかにたちあがる。内外面ともヨコナデしている。体部の外面は斜方向のハケメ、内面は、横方向と斜方向のハケメを施す。底部は内外面ともヘラ削りしている。胎土は密で細砂

粒を含む。赤橙色を呈する。

C 須恵器

杯 (3) 口径13cm、器高3.5cm。底部は平底で、体部との境界は屈曲する。体部は上半からは外傾度をややゆるめて直線的に口縁部に至る。口縁部と体部の内外面及び底部内面の外周部にはロクロナデを施す。底部の内面中央部に仕上げナデ、外面にヘラ削りを行っている。胎土は密で白色細砂粒をわずかに含み、灰白色を呈する。

杯 (5) 口径13.5cm、器高 4.5cm。高台を有する杯で、体部の直下にわずかに下方へはる。体部との境界はやや丸味をもち、口縁部にかけて直線的に外方へのびる。体部と口縁部はロクロナデによる調整が施され、底部内面中央部は仕上げナデを行う。底



第118図 S B16出土の土器

部はへら削りを行う。胎土は密で白色の細砂粒を含む。焼成は良好、堅緻で、内面は灰色、外面は暗灰色を呈する。

杯(4) 口径13.4cm、器高4.3cm。焼成不足で、内外面とも有機物の付着と磨耗により、調整等の特徴は把握できない。

D 製塩土器 (図版78-A)

口径18cm、器高5.5cm。薄い底部(約4mm)に厚味のある(約8mm)の粘土紐の継目を残した体部が直立して接合されている。胎土は1~3mmの砂粒を含み脆い。

4. 結 語

調査の結果、飛鳥時代及び奈良時代後半の2時期の集落跡を確認することができた。

飛鳥時代の遺構については、溝(S D29)と竪穴住居1棟(S B26)とごく限られたものであるが、その検出の状況から、この時期の遺構の多くは調査区外にあるものと思われる。S D29から出土の遺物には古墳時代のものも含まれる。本遺跡に隣接し、すでに発掘調査が行なわれた西沖遺跡(昭和55年度)、三谷遺跡(昭和56年度)でも、古墳時代の集落跡が確認、検出されている。また、当歌野遺跡とその周辺には後期群集墳が多数存在し、その一部は発掘調査されている。(昭和54年度横枕古墳群、昭和57年度田中古墳) これらの事実は、この地域における古墳時代以降の歴史的な発展を物語っている。

S B26以外の竪穴住居は、その出土遺物から奈良時代後半のものと考えられる。十分な整理に達していない現時点での概観ではあるが、竪穴住居相互の時期差を認めるに至っていない。S B16出土の土師器の杯(1)は平城Ⅳ頃の時期に比定されるものである。^{②③④}

1.100㎡の中に28棟の竪穴住居を検出しながらも、道路予定地という幅員の限定された範囲での調査であったので、集落の構造的解明に資するような成果を得ることができなかった。

土馬の出土についてであるが、そのつくりが中空であるという点で他に例をみないものである。現在県下で21か所から38点が出土している。(第15表)伊賀では4点目の出土となる。

鉄製の紡錘車の出土は県下で5例目である。しかも同じ地域内の西沖遺跡、三谷遺跡に続くものであり注目したい。県下の他の出土地は、鈴鹿市の寺垣内遺跡、上野市の上寺遺跡である。

製塩土器として本来の形に復元できる1個体を検出できたことも、成果の一つである。三谷遺跡の1個体に続くもので、いずれも志摩式製塩土器といえよう。

整理途中での本概報であり、当遺跡の出土の良好な供膳用具としての土師器についてじゅうぶんな報告に至らず残念である。他の特殊遺物の出土ともあ

わせみる時、当地域の当時の文化の水準の高さを知る思いがする。

(中森英夫)

	遺跡名	所在地	個体数		遺跡名	所在地	個体数
1	天王平遺跡	多度町小山字西天王平	1	12	カリコ遺跡	〃 世古字カリコ	2
2	御衣野遺跡	〃 御衣野字西谷	1	13	蓮池代遺跡	上野市蓮池	1
3	大膳寺跡	四日市市南いかるが町	2	14	鴻之巣遺跡	名張市夏見	1
4	鳥居本遺跡	一志町小山字鳥居本	1	15	発シ B 遺跡	明和町有爾中字発シ	1
5	——	松阪市山室町	1	16	末野 A 遺跡	鈴鹿市郡山	1
6	斎宮跡	明和町斎宮	14	17	末野 C 遺跡	〃	1
7	水池遺跡	〃 明星字水池	2	18	——	嬉野町川北	1
8	粟垣内遺跡	〃 馬之上字粟垣内	2	19	結馬遺跡	名張市結馬	1
9	大林古墳	〃 上村字大林	1	20	——	松阪市清水町管生	1
10	カウジデン遺跡	多気町河田字カウジデン	1	21	歌野遺跡	大山田村広瀬字歌野	1
11	——	玉城町上田辺坂手国生神社	1				

第15表 三重県土馬出土遺跡一覧表

(註)

- ① 小笠原好彦「近畿地方七、八世紀の土師器とその流通」(『考古学研究』第27巻2号 1980)
- ② 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』を中心に、同報告書の各巻
- ③ 田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」『平安学園研究総集』第10号 1966
- ④ 大阪府教育委員会『陶邑Ⅰ』～『陶邑Ⅴ』の各巻

圖 版



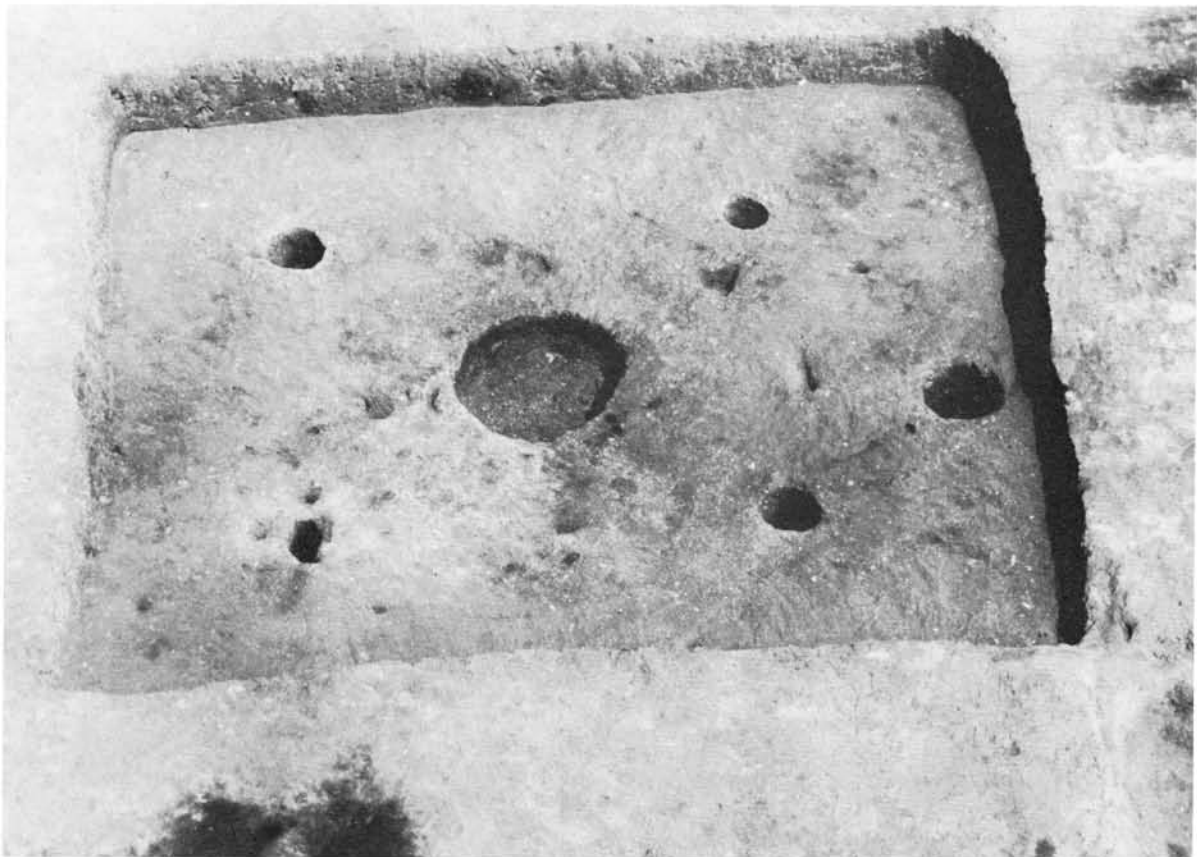
調査風景



SK15 (縄文土器出土状況)



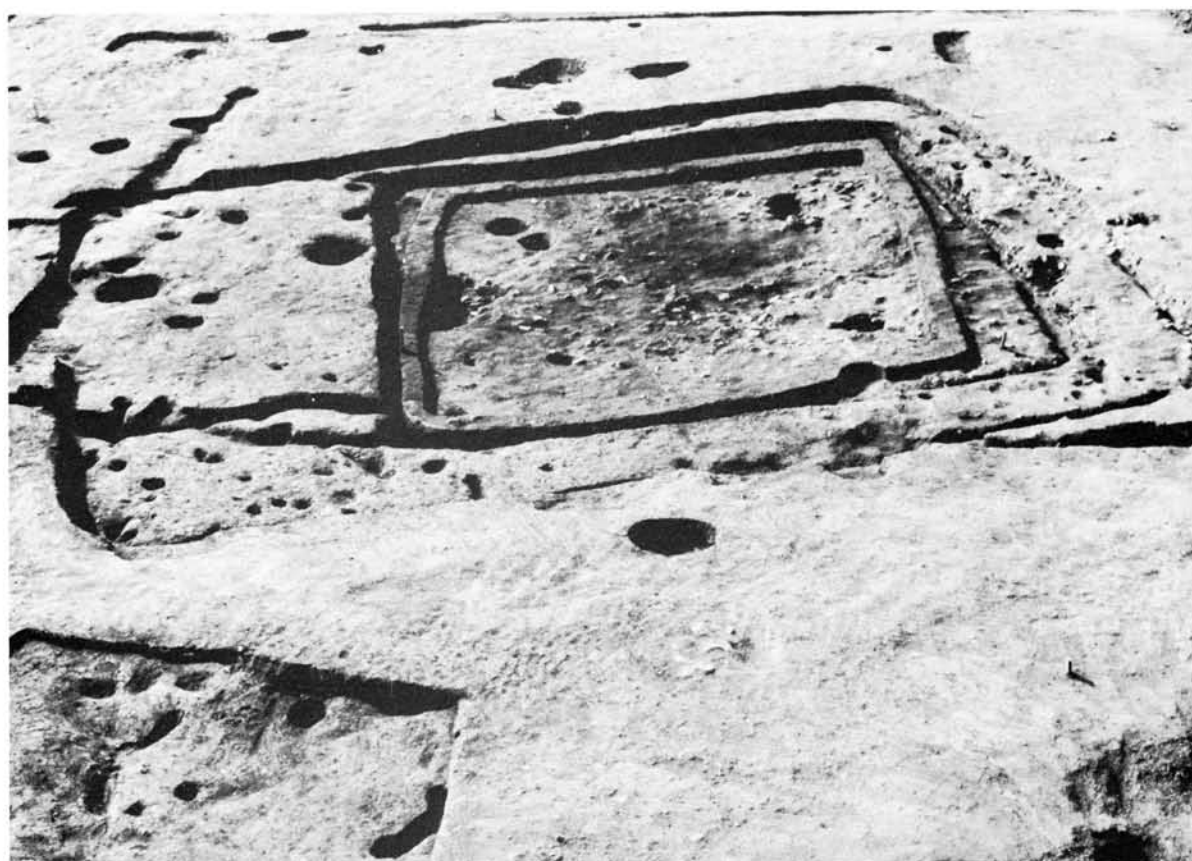
SB5 弥生土器出土状況（西から）



SB5（西から）



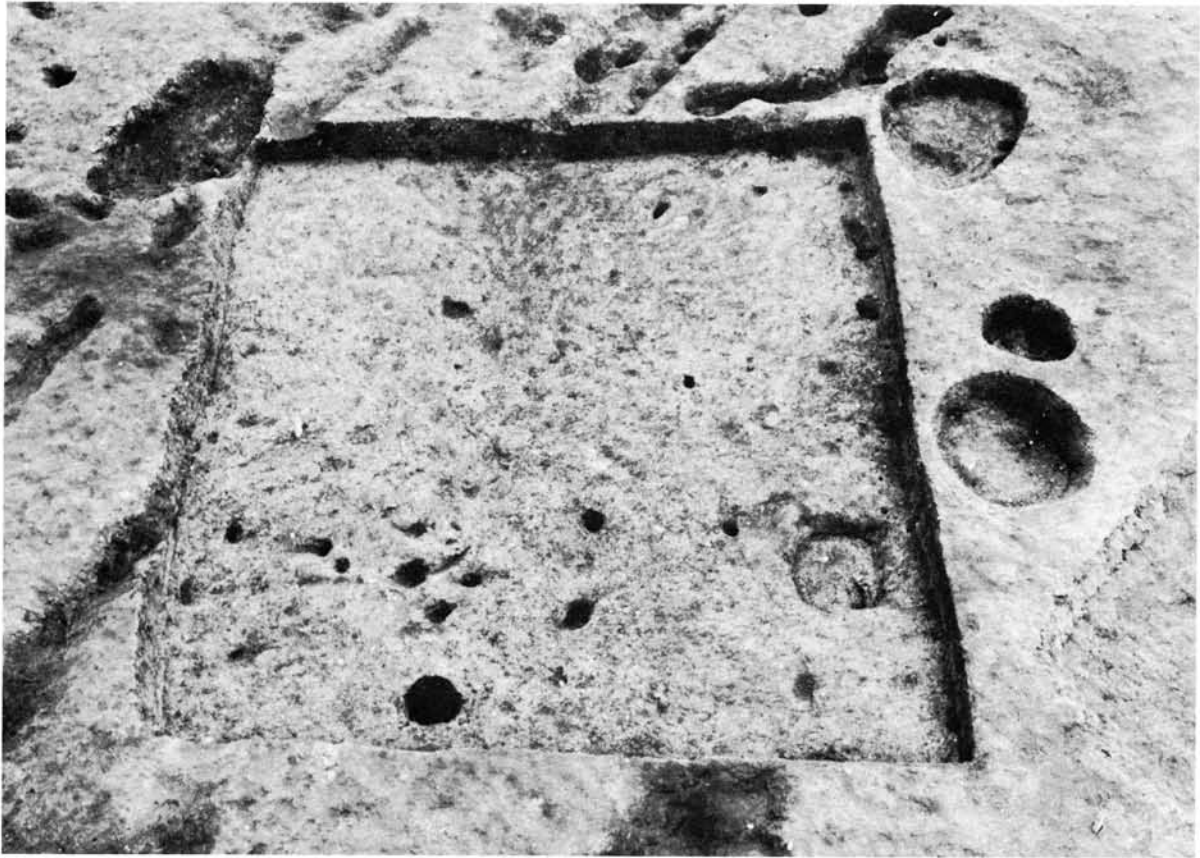
SB5 弥生土器出土状況（東から）



SB8・SB9・SB10（東から）

PL 4

起A遺跡



SB7 (西から)



SB13 (東から)



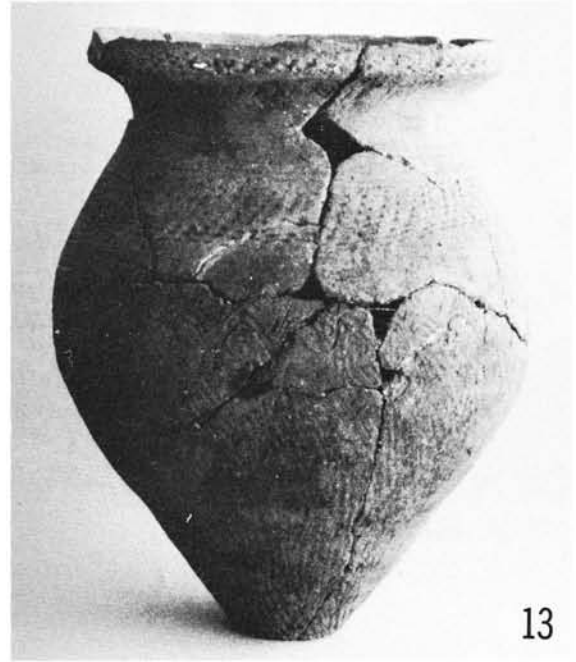
SX16 (北から)



SX19 (北から)

PL 6

起A遺跡



出土土器 (1 : 3)





航空写真



調査風景（中井地区）



中井地区SA1 (北から)



藤ヶ森地区全景 (南から)



藤ヶ森地区北半（南から）



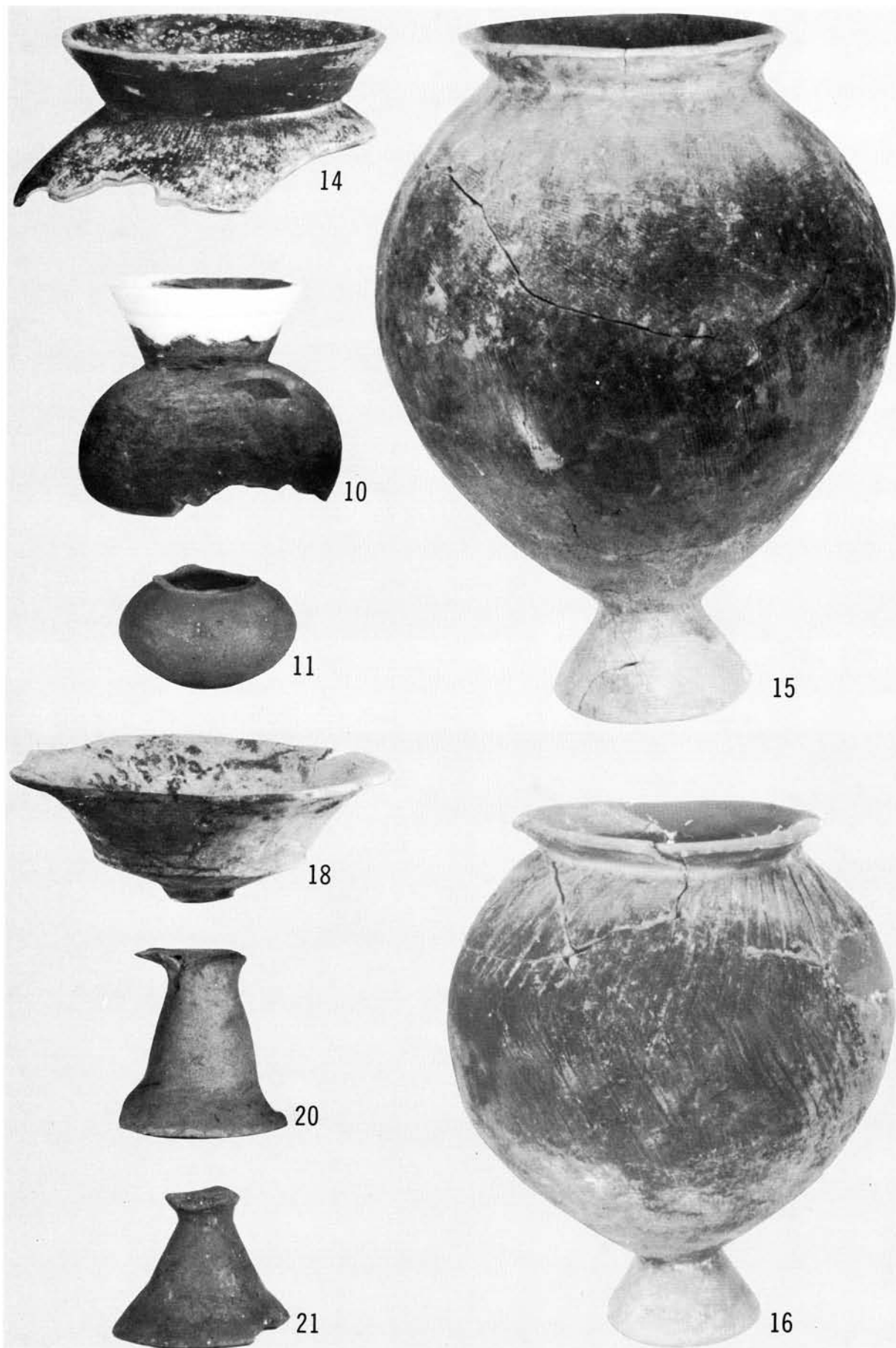
SX3（南から）



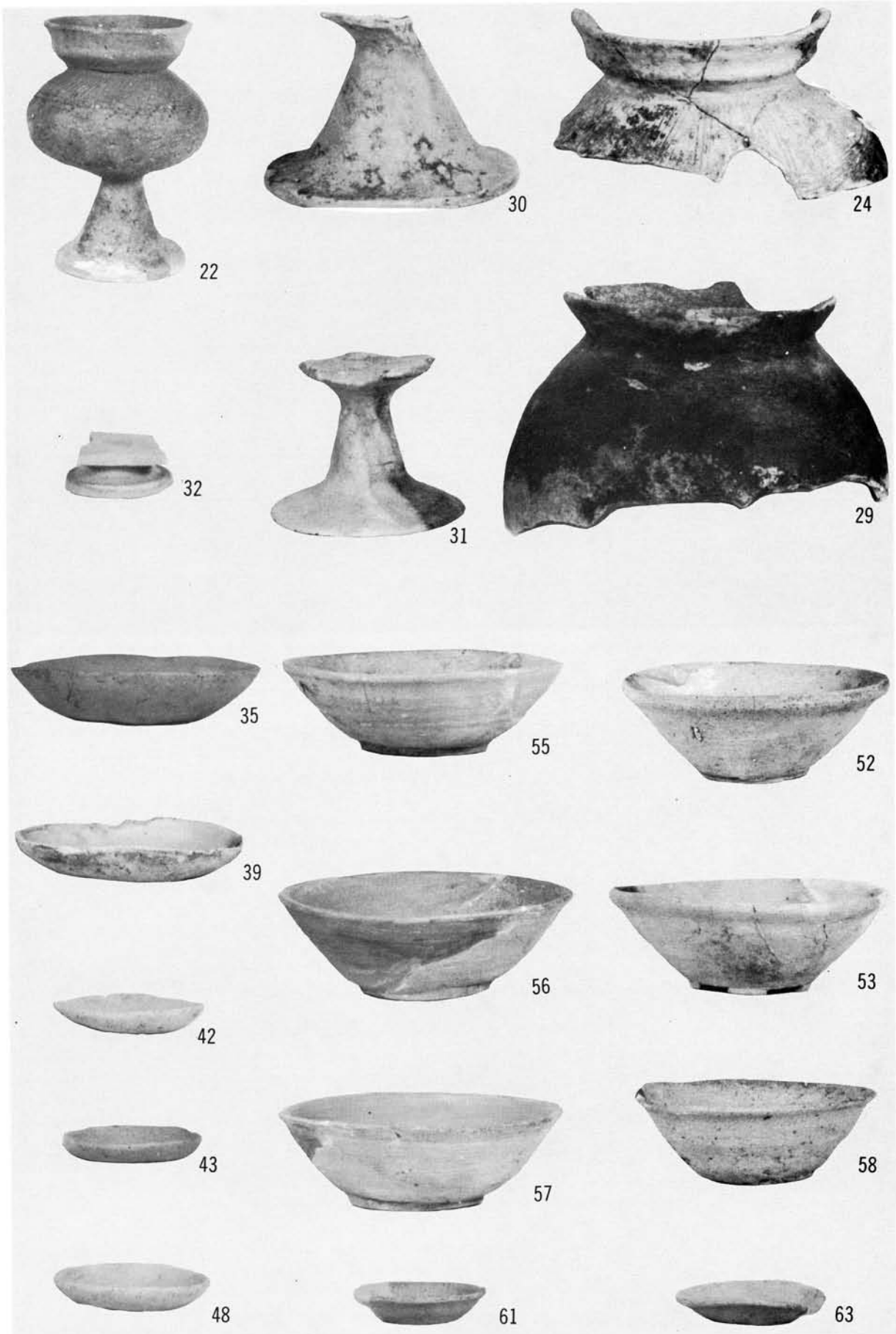
SD4 (南から)



SD4 (北から)



SD4 出土土器 (1 : 3)



出土土器 (1:3)

PL14

宮間戸遺跡



航空写真



調査前風景



A地区（北から）



A地区 土壇群

PL16

宮間戸遺跡



B地区（北から）



B地区 土壇群



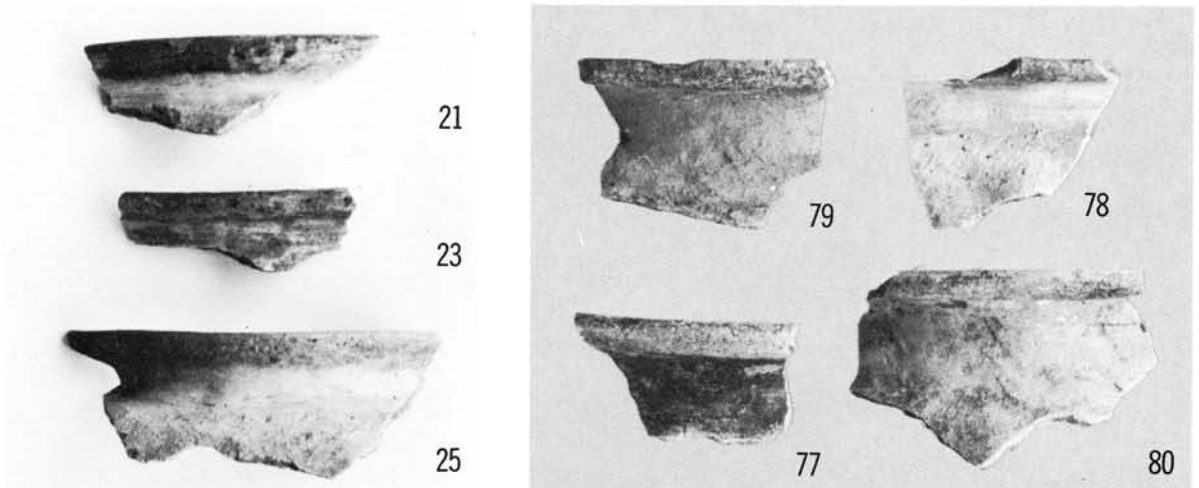
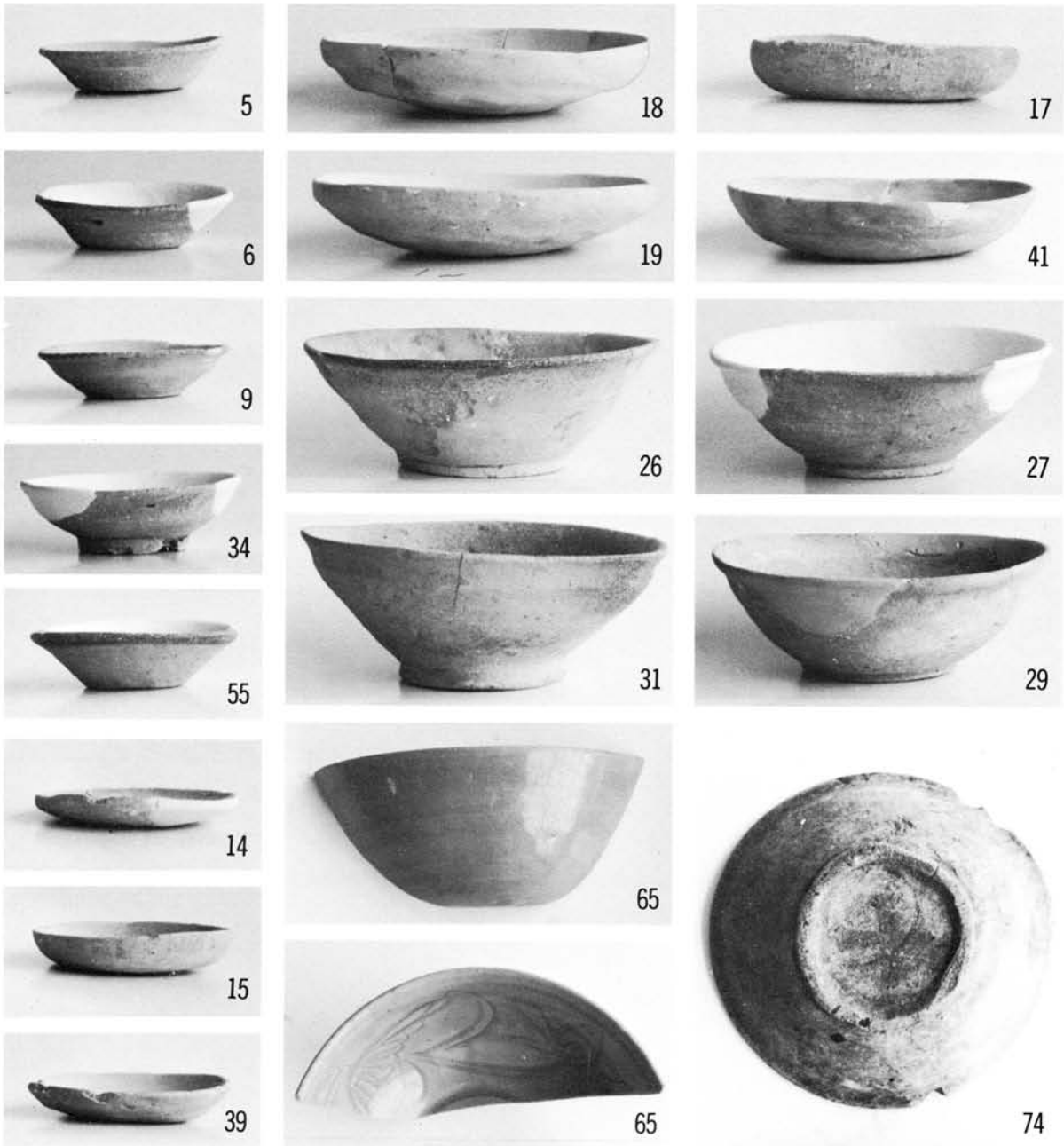
C地区（西から）



D地区（北から）

PL18

宮間戸遺跡



出土土器 (1 : 3)



航空写真



調査風景



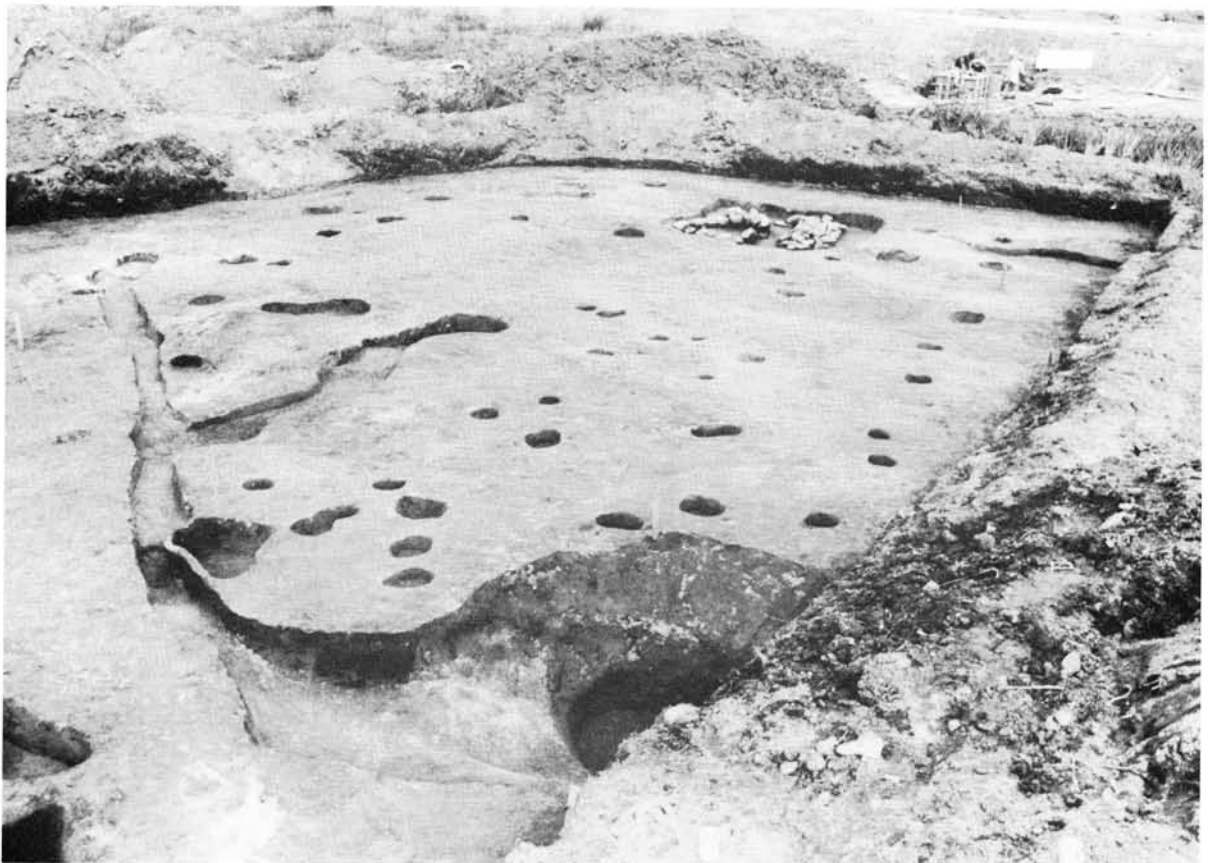
発掘区全景（北から）



発掘区北半（南から）



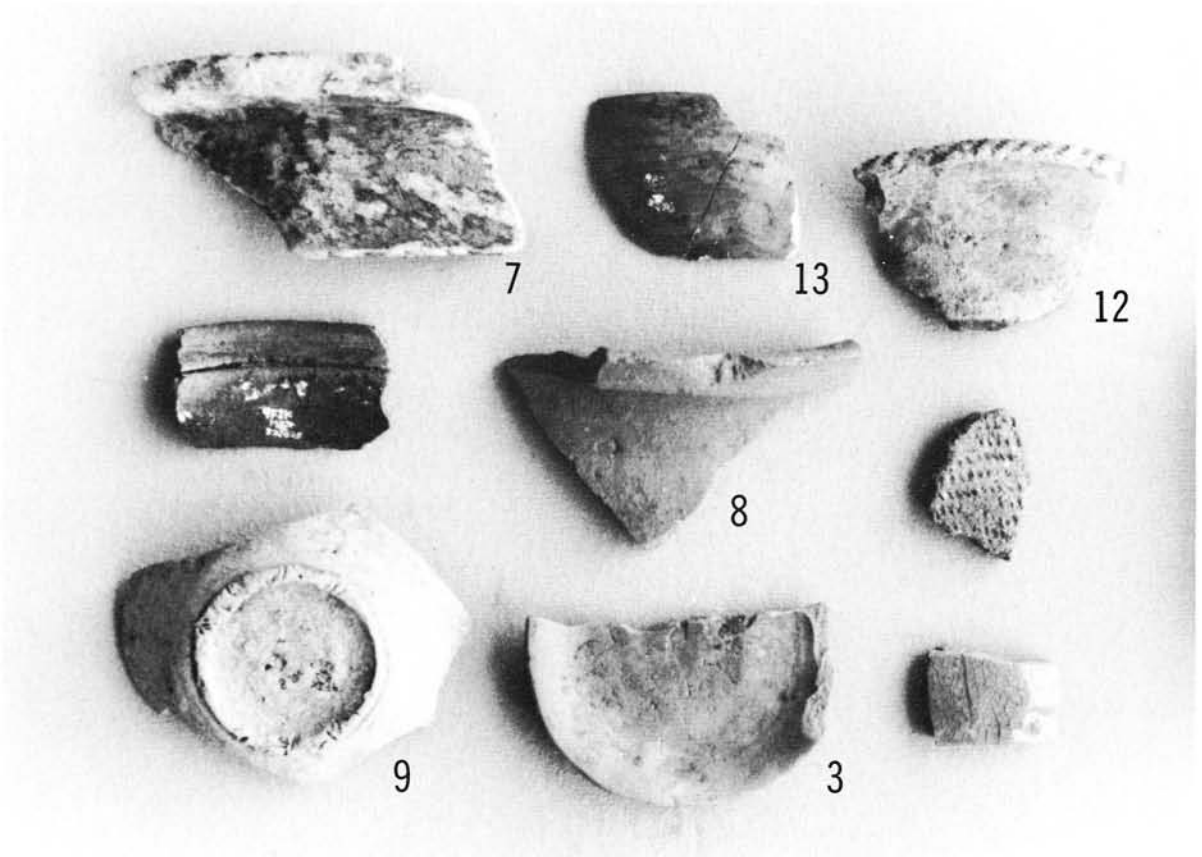
発掘区中央部（西から）



SD2・SK3（西から）



SX4 (西から)



出土土器 (1 : 3)



航空写真（南から）



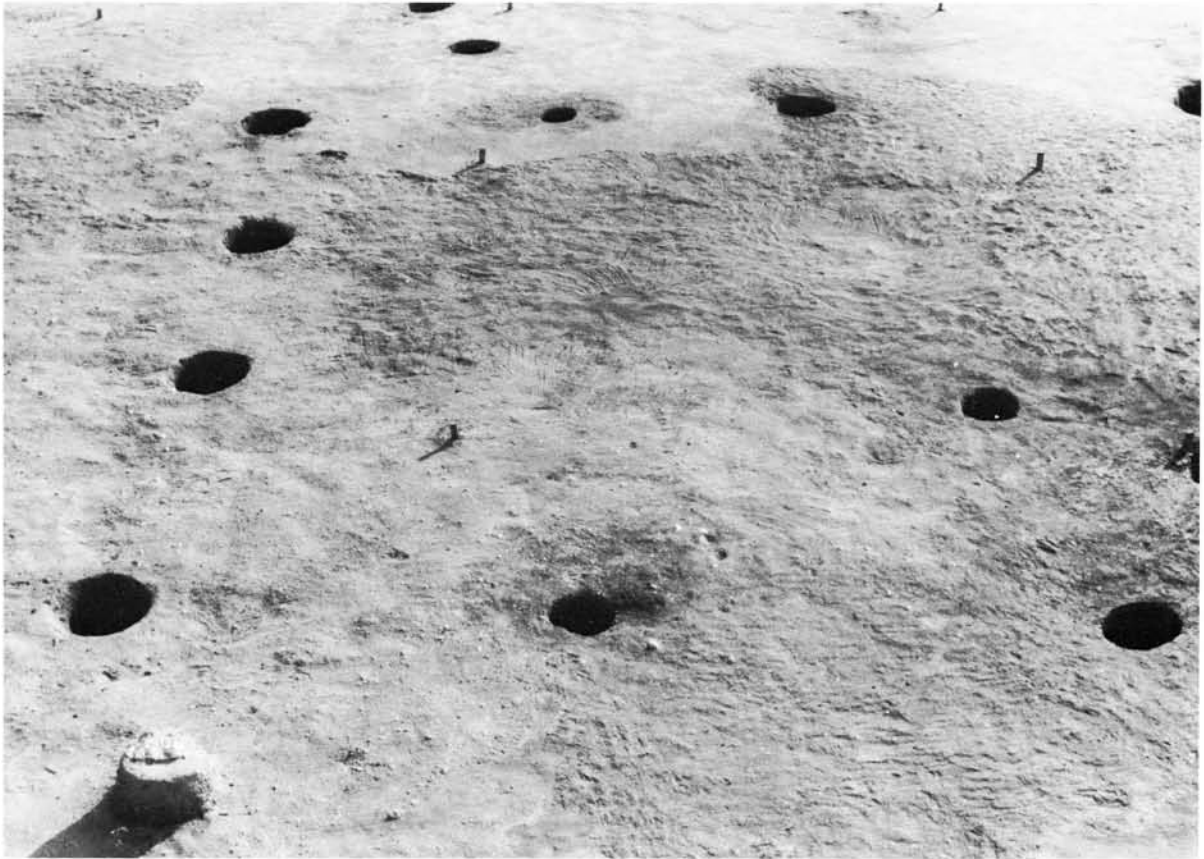
調査前全景（西から）



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）



SB4 (北から)



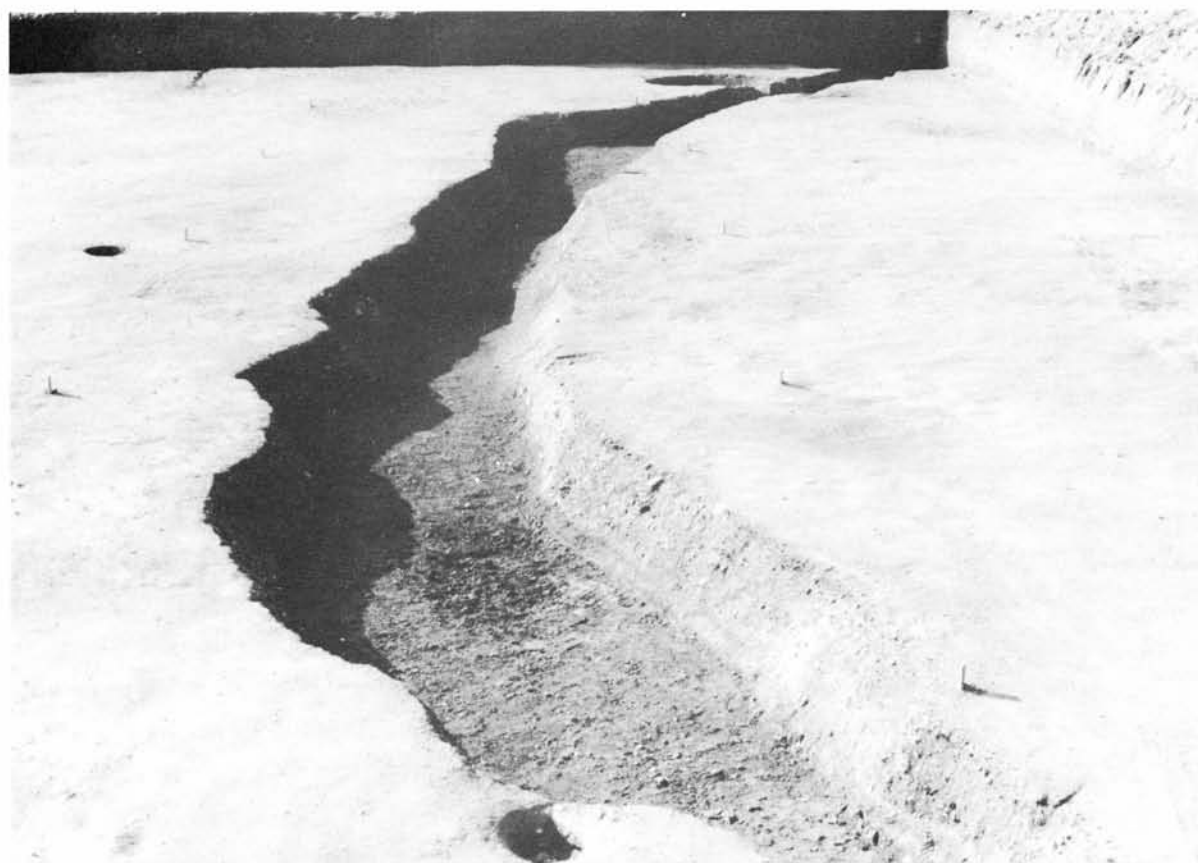
SB6 (北から)

PL26

服部遺跡



SB7 (北から)



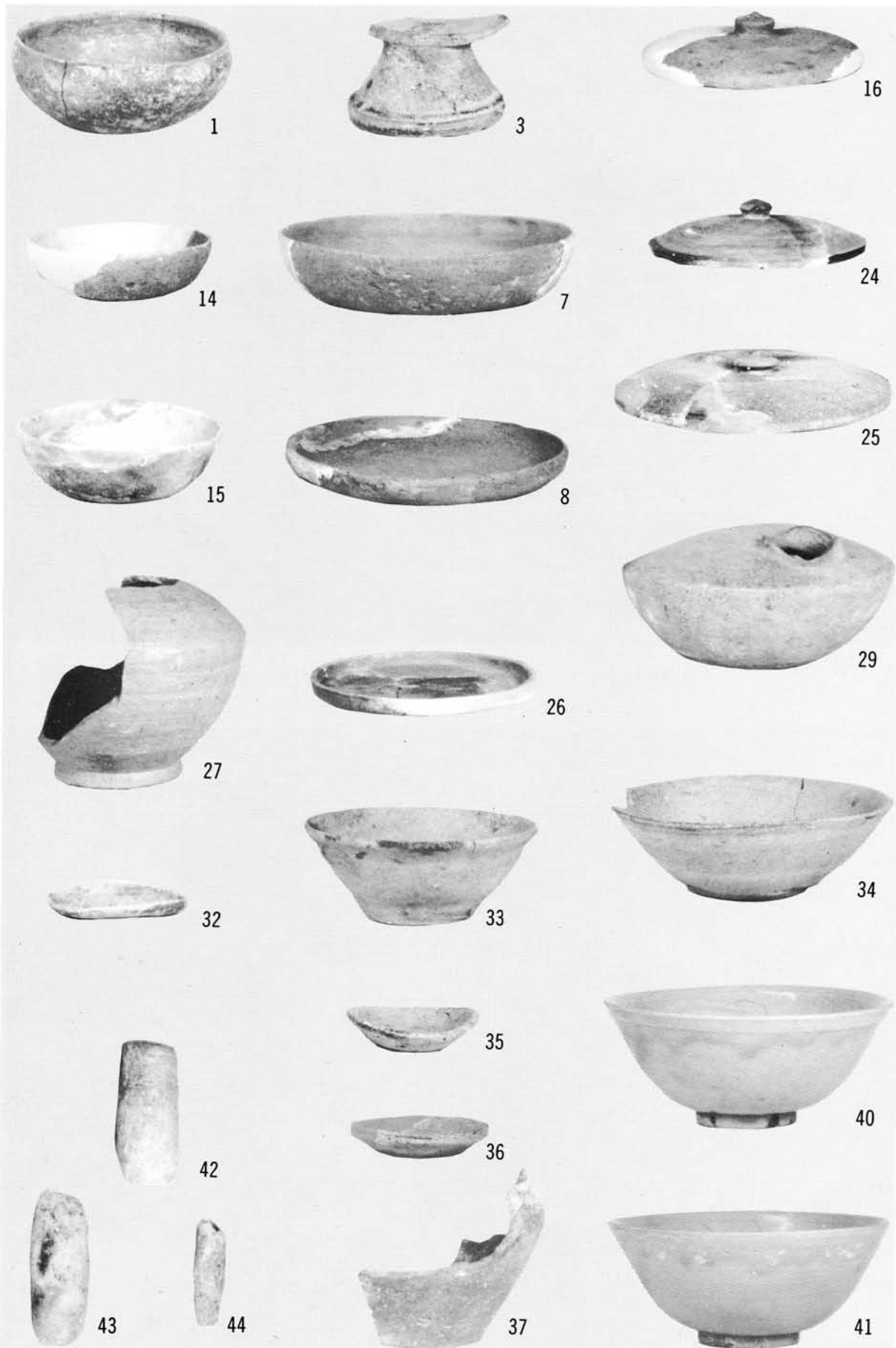
SD1 (東から)



SX9 出土状況



SX10 出土状況



出土土器 (1 : 3)



航空写真



調査前風景（西から）



調査区近景（西から）



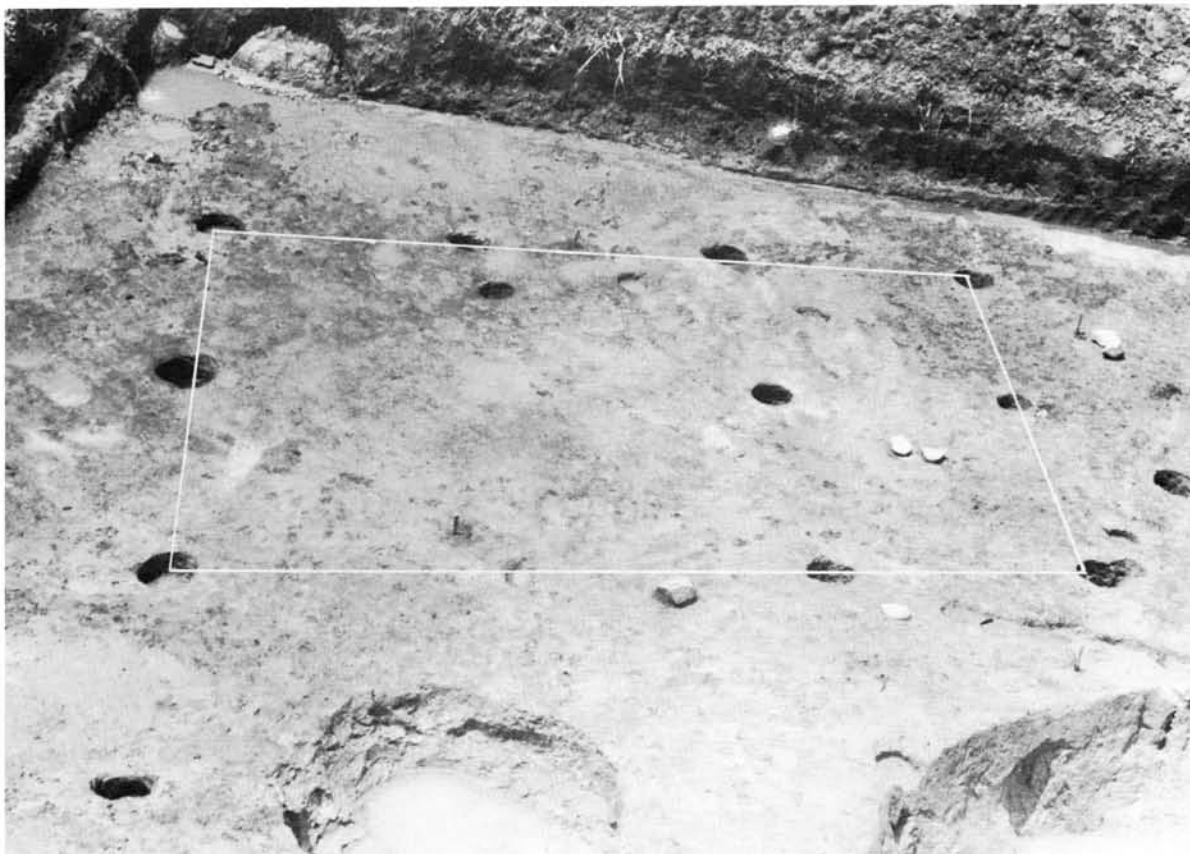
弥生土器出土状況



調査前風景（南から）



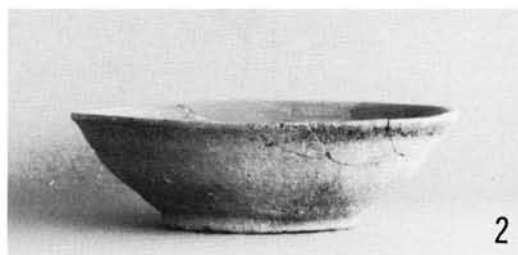
SE3 井筒出土状況



SB4 (西から)



SD2 遺物出土状況



SE3 出土土器 (1 : 3)



SD2 出土土器 (1 : 3)



東西排水路（西から）



南北排水路（南から）



航空写真



発掘前全景（西から）



発掘風景（東から）



発掘後全景（西から）



横穴式石室（西から）



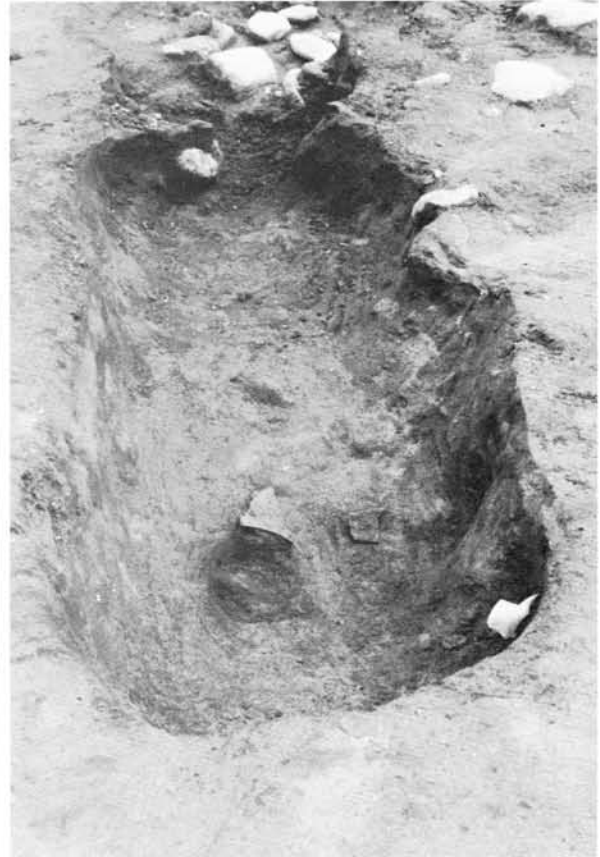
同上 礫床除去後



古墳全景（南から）



中世墓（東から）



SK1（南から）



SB11 (南から)



SE 7 (南から)

PL40

田中遺跡



3



10



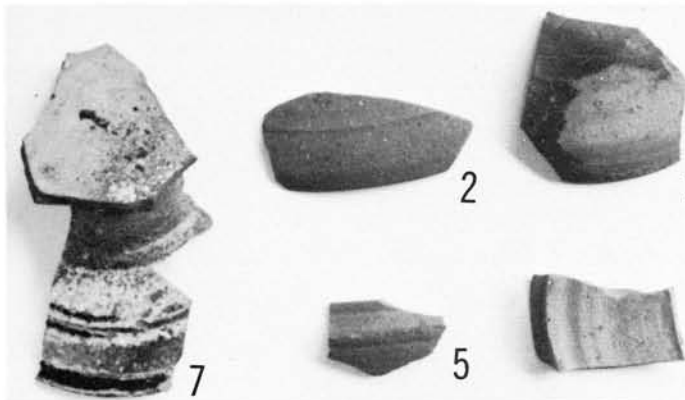
9



6



8



1

2

4

5

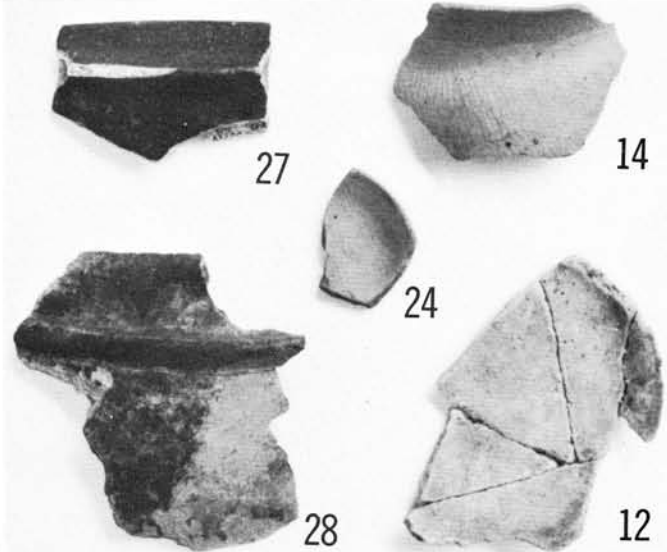
7



11



13



14

27

24

12

28



29



30

出土土器 (29・30以外は1:3)



15



17



17



18



20



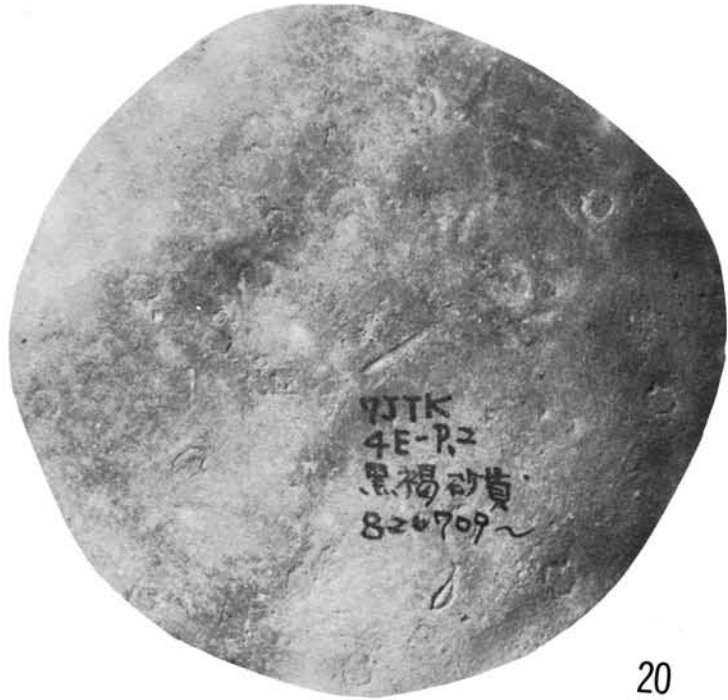
22



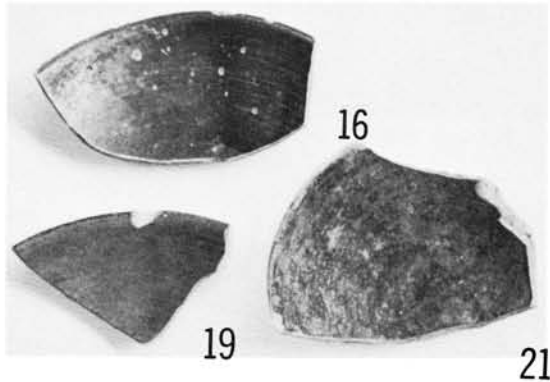
22



23



20



16

19

21



25



26



26



辻垣内遺跡全景（西より）



辻垣内遺跡C区東端部（西より）



辻垣内遺跡SB12（南から）



辻垣内遺跡SB14（北から）



辻垣内1号墳全景（南より）



辻垣内1号墳石室（南より）



辻垣内1号墳全景（東より）



辻垣内1号墳周溝（北より）



調査区遠景（南から）



調査区全景（西から）



SB12 (北から)



SB12 (北から)



SK 6、7、9、10、11 (北から)



SD 3、4 (北から)



調査区全景（西から）



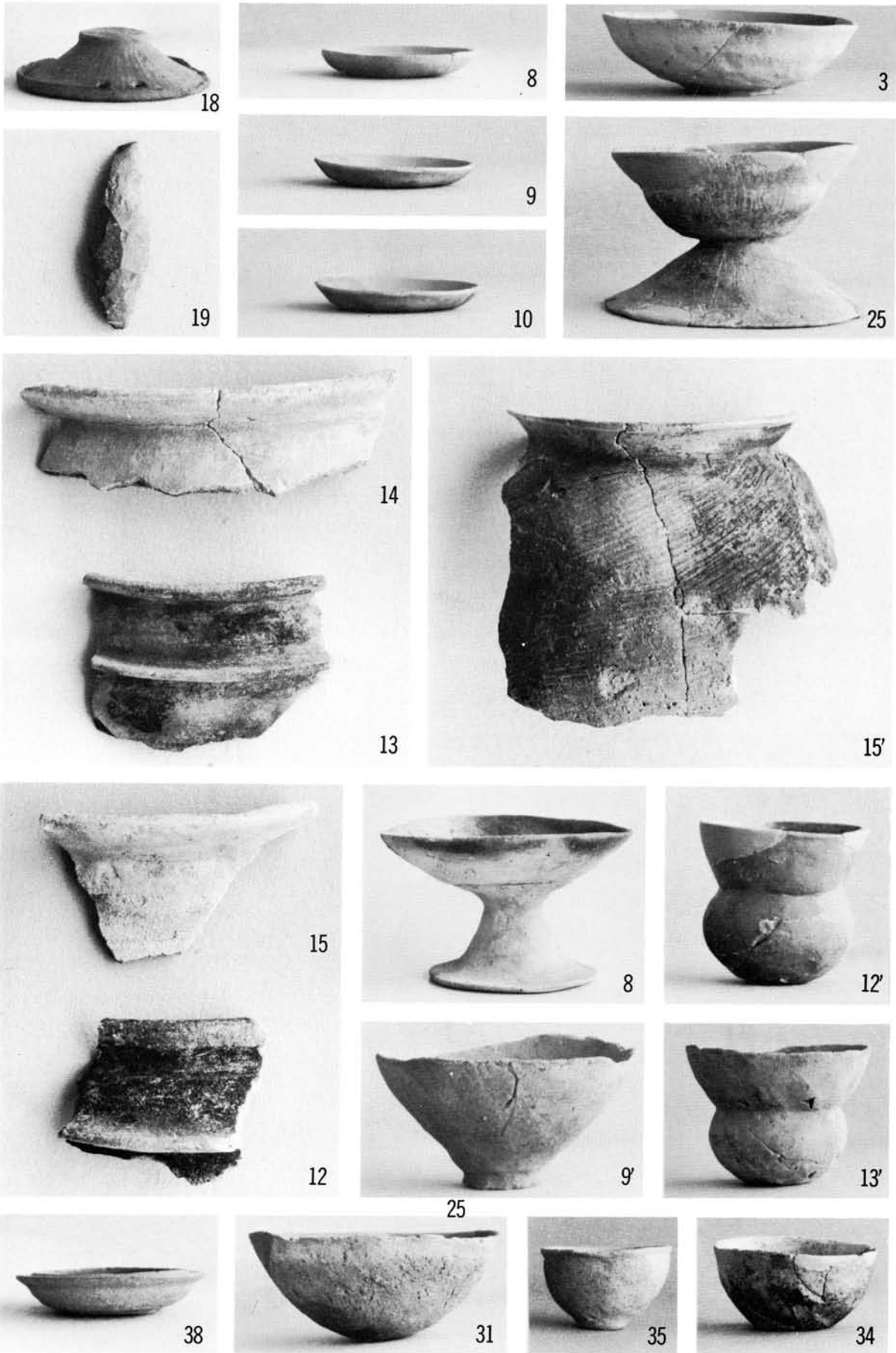
SB4・SB6（北から）



SB4 土器出土状況（西から）



SB1・SB2・SB3（北から）



出土土器 (1 : 3) E地区 (3、8~10、12~15、18、19)、
F地区 (8)、他は上東野遺跡



辻垣内遺跡 N地区 全景（西）



辻垣内遺跡 N地区 堅穴住居群（南）



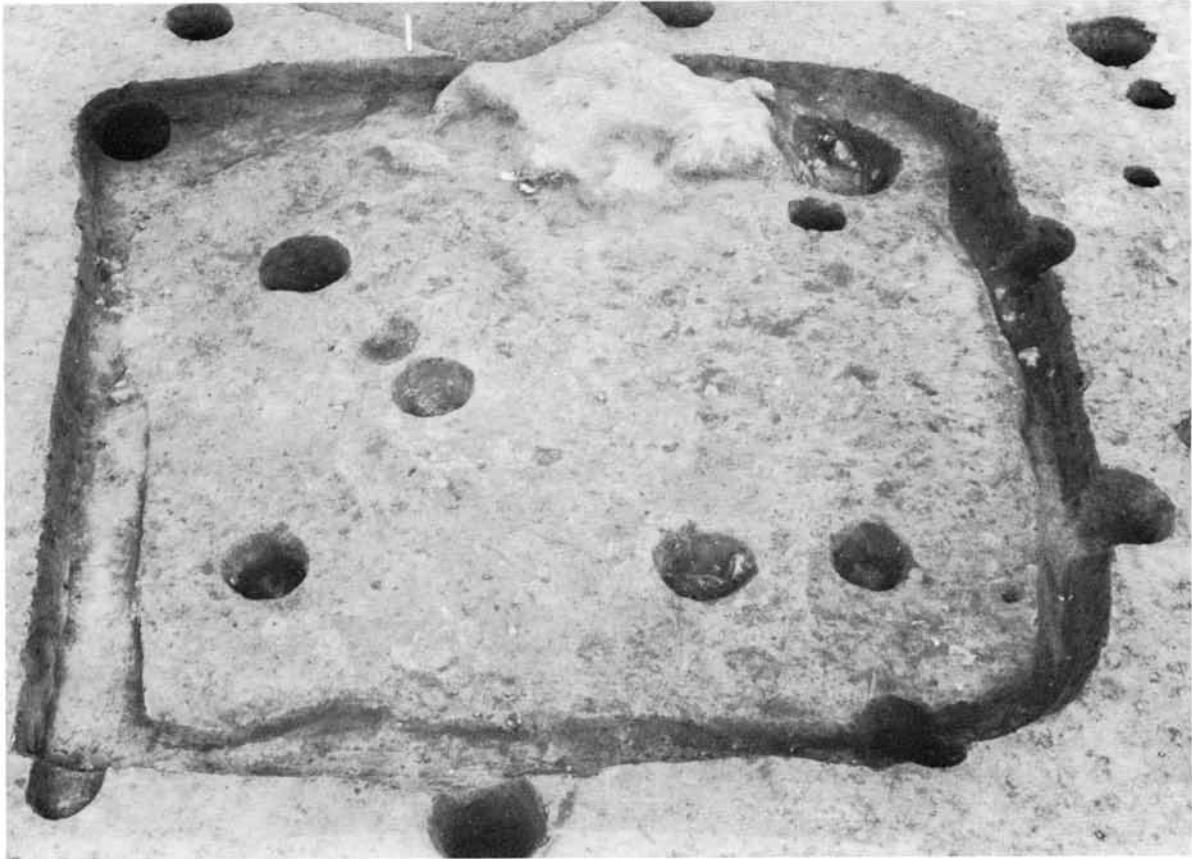
辻垣内 5号墳全景（南）



辻垣内 5号墳 石室全景（西）

PL54

迁垣内遺跡



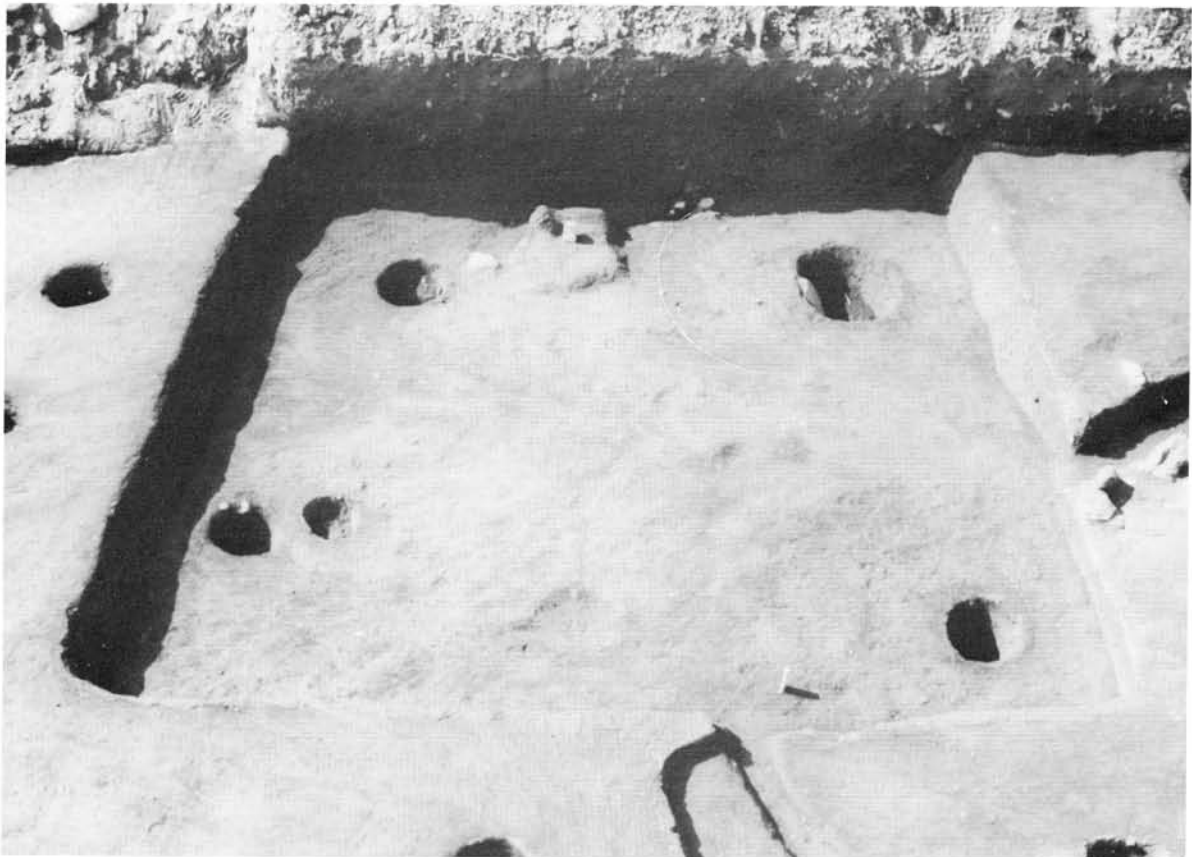
SB18 (南)



SB18 (南)



SB23・SB24・SB25 (東)



SB23 (南)



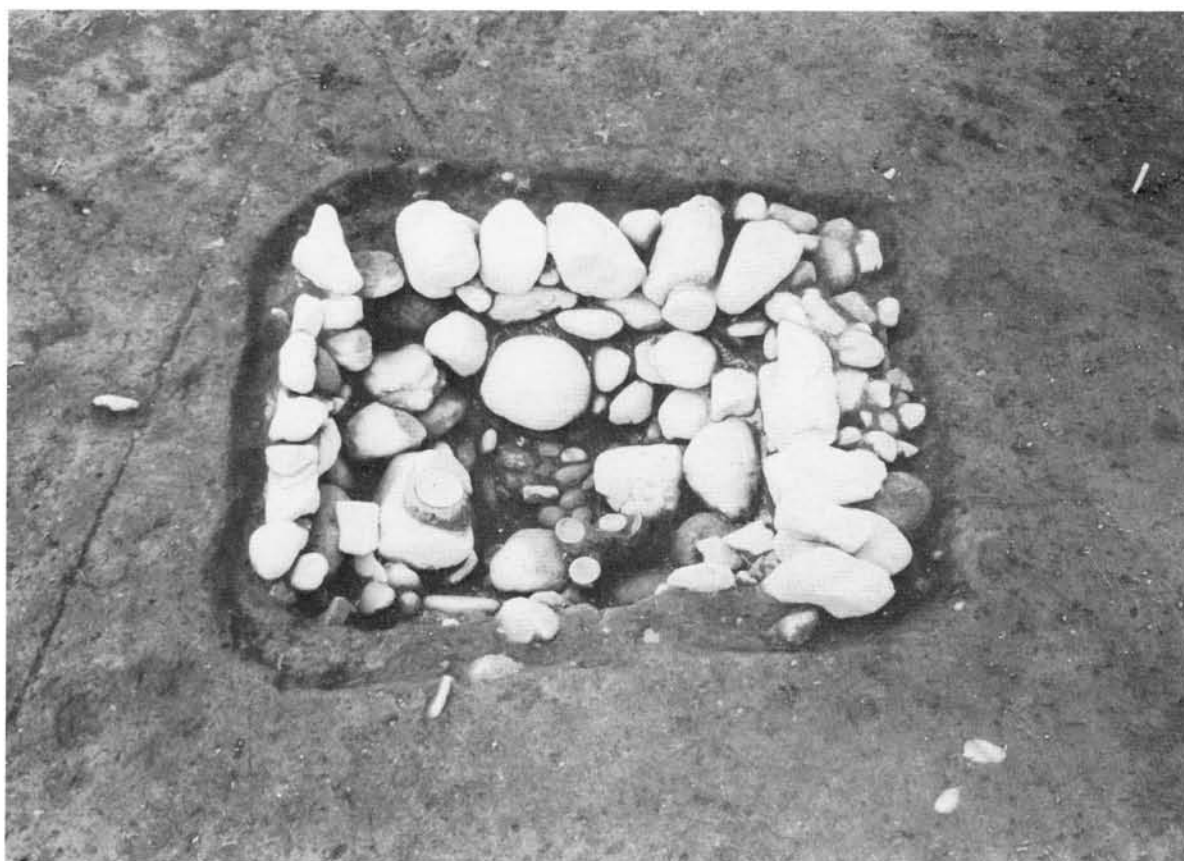
SB 28 (東)



SB13 (東)



SX1 (北)



SX2 (南)



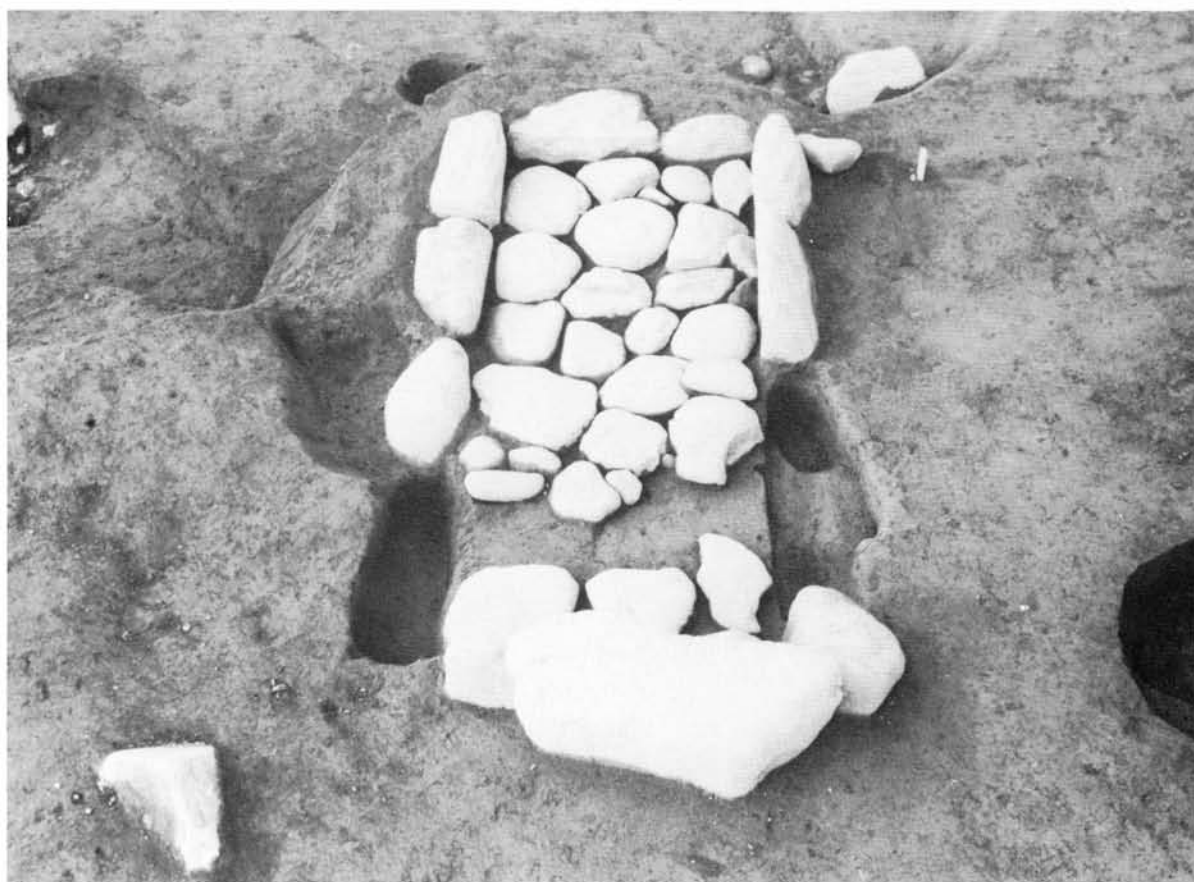
調査区遠景（東から）



調査区全景（北から）



SB1・SX2 (東から)



SX2 (南から)



SB7 (南から)



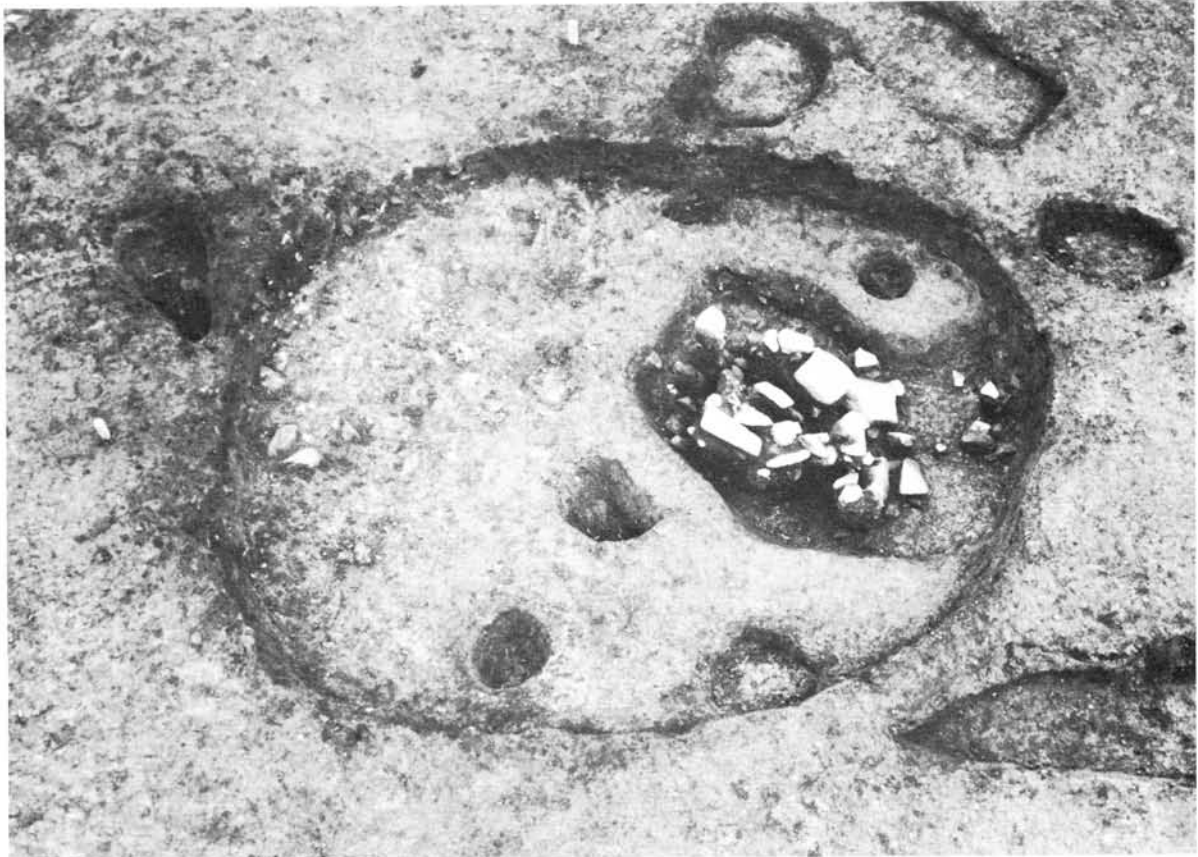
SB11 (東から)



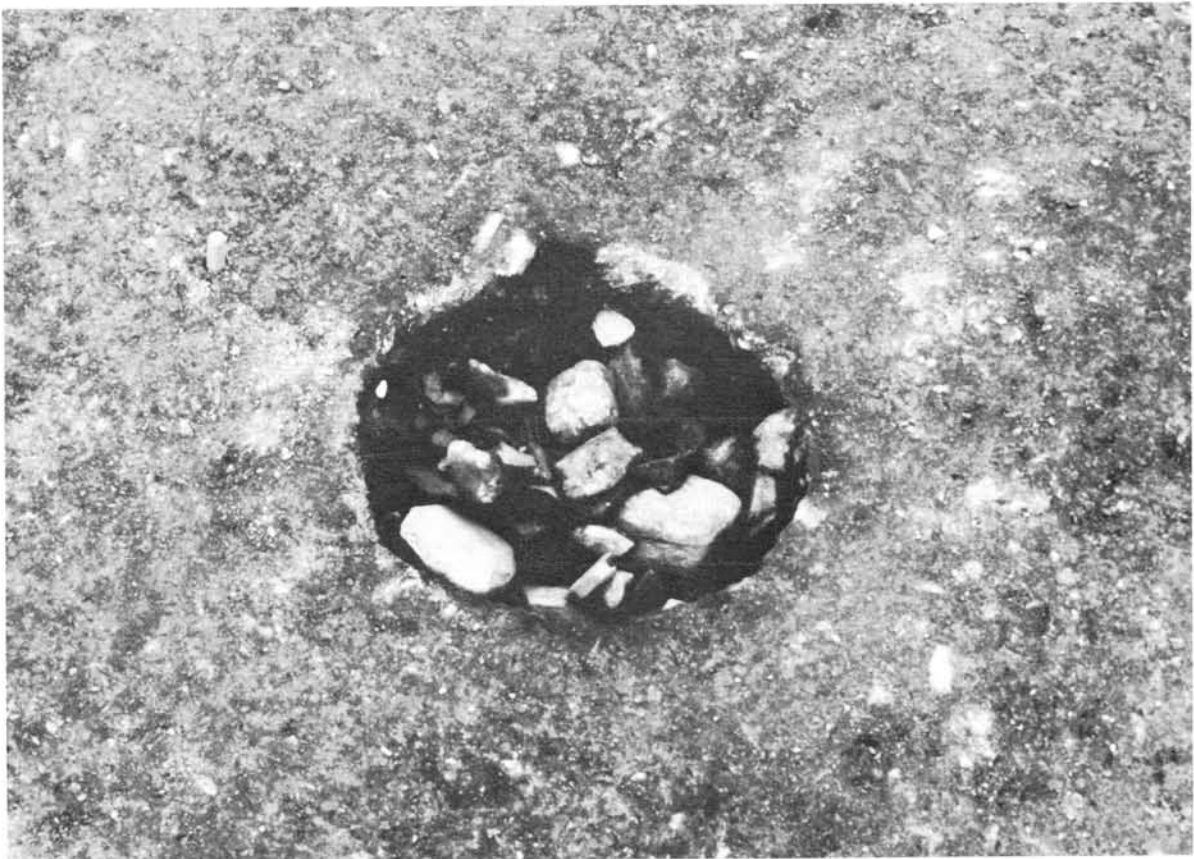
調査風景（南から）



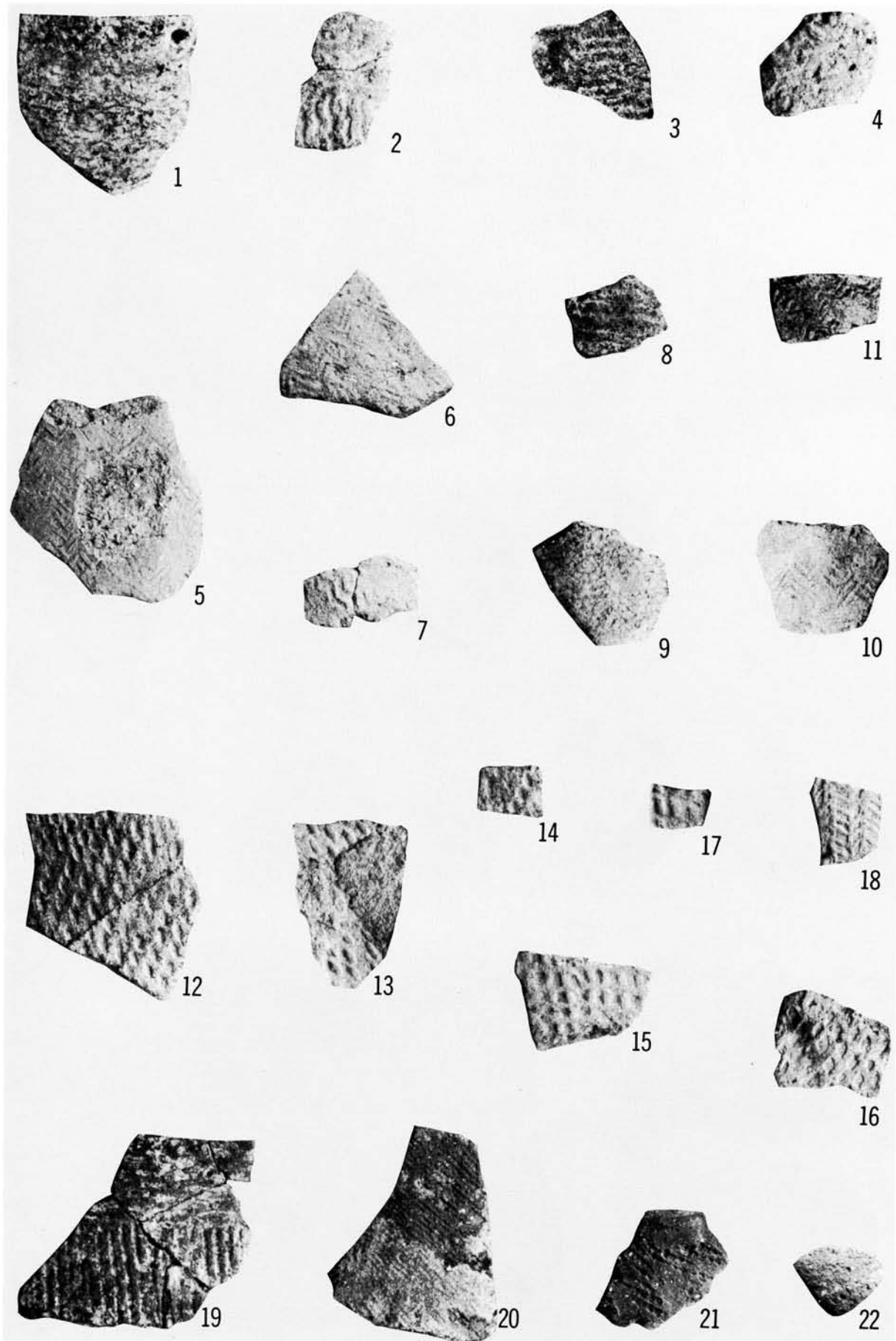
調査区近景（南から）



SB1 (西から)



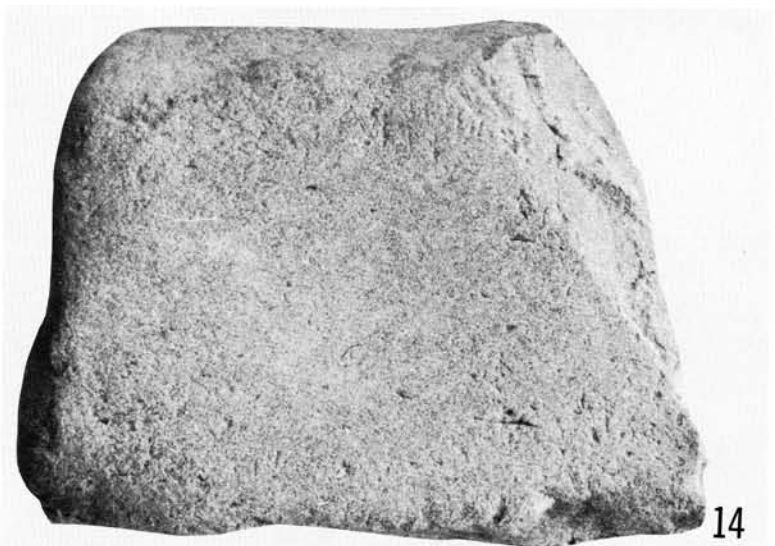
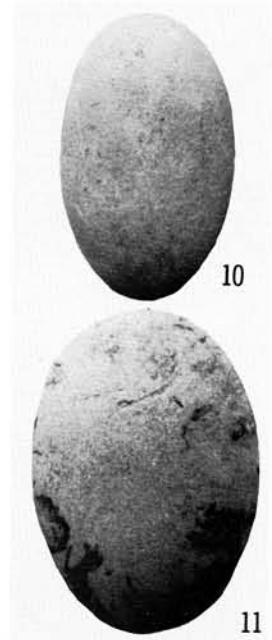
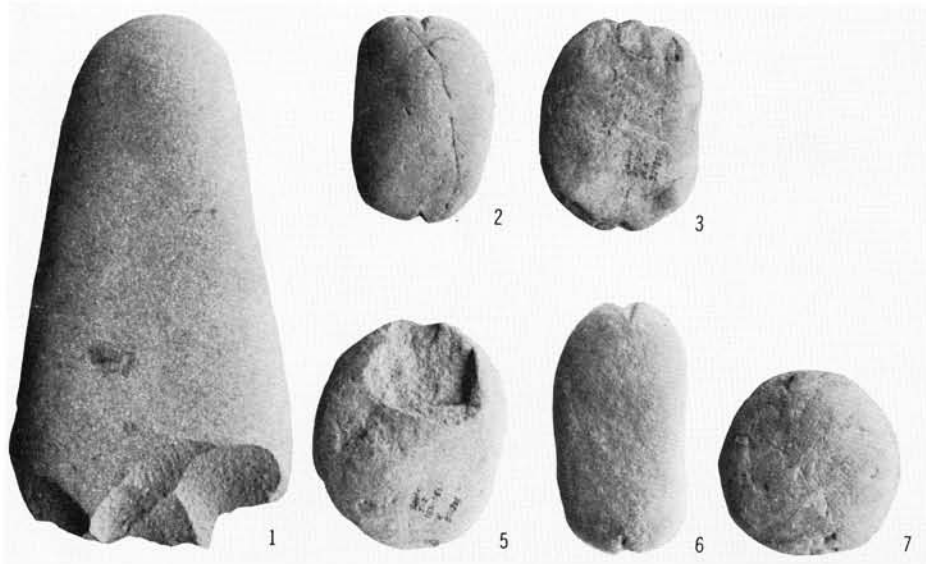
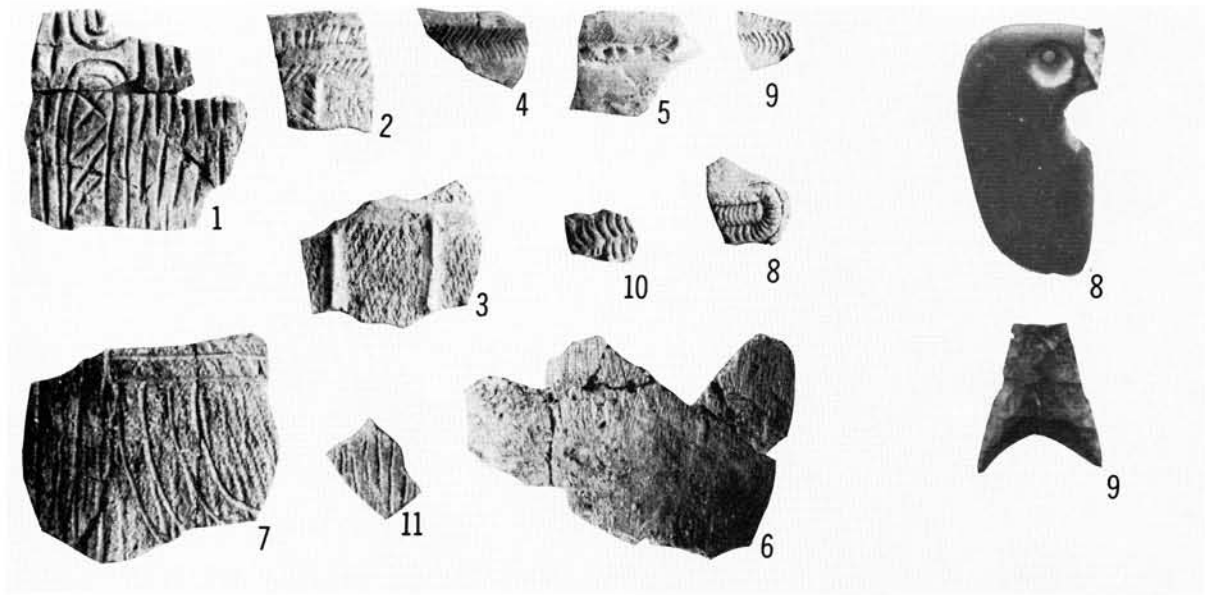
SK20 (西から)



縄文時代早期の土器 (1 : 2)

PL64

樋ノ谷遺跡



縄文時代前・中期以外の土器（1：3） 石器（1～7は1：2、8、9は1：1、10～14は1：3）



航空写真



遺跡遠景（北西から）



SX1 全景（北から）



SX1 南区画溝・SX2 北区溝（東から）



SX1 東区画溝（南から）



SX1・2 全景（北東から）



山頂区鞍部（西から）



SX1 台状土器 (1~2) 出土状況



SX1 西区画溝土器 (2~3) 出土状況



SD4 土器 (4) 出土状況



SD4 土器 (4) 出土状況



SD3 土器 (5、14) 出土状況



SX1 北土器 (6) 出土状況



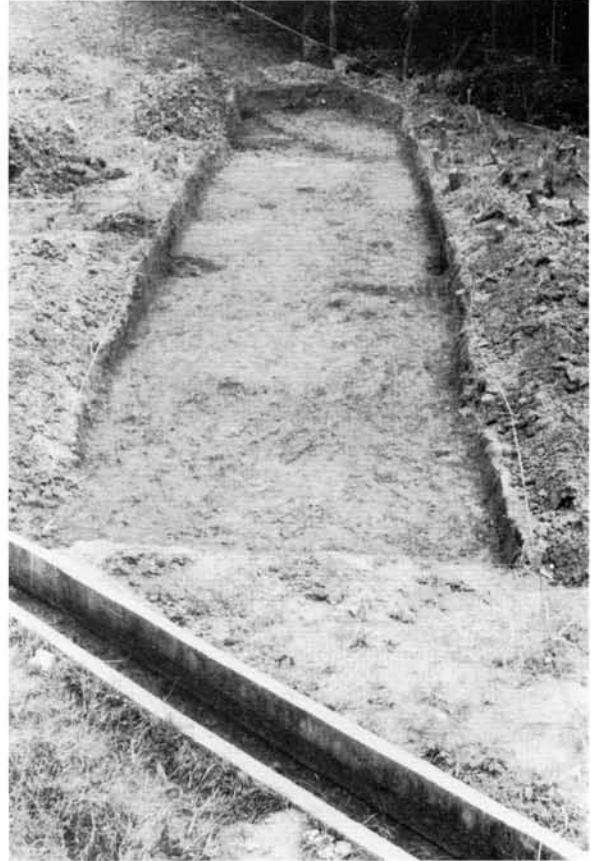
SX1 南区画溝土器 (9) 出土状況



SX2 南東土器出土状況



山頂区尾根部（北から）



山裾区（南から）



SX1 西区画溝調査風景（北から）



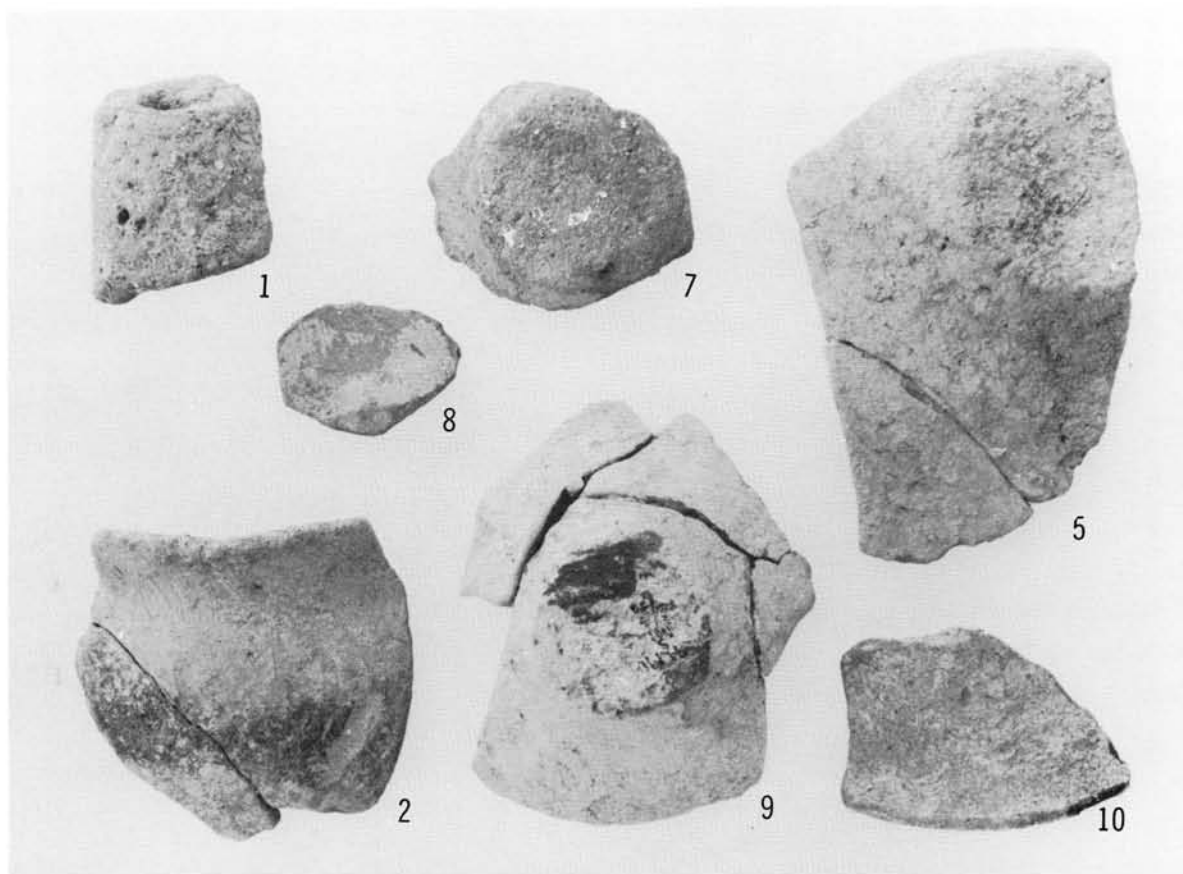
山裾区（西から）



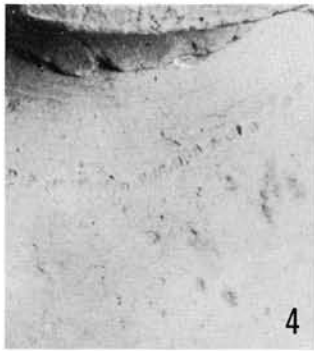
SX1 北部調査風景（南から）



前田1号墳（西から）



山頂区出土弥生土器（上段約1：3、下段約1：2）



4

山頂区出土土器細部



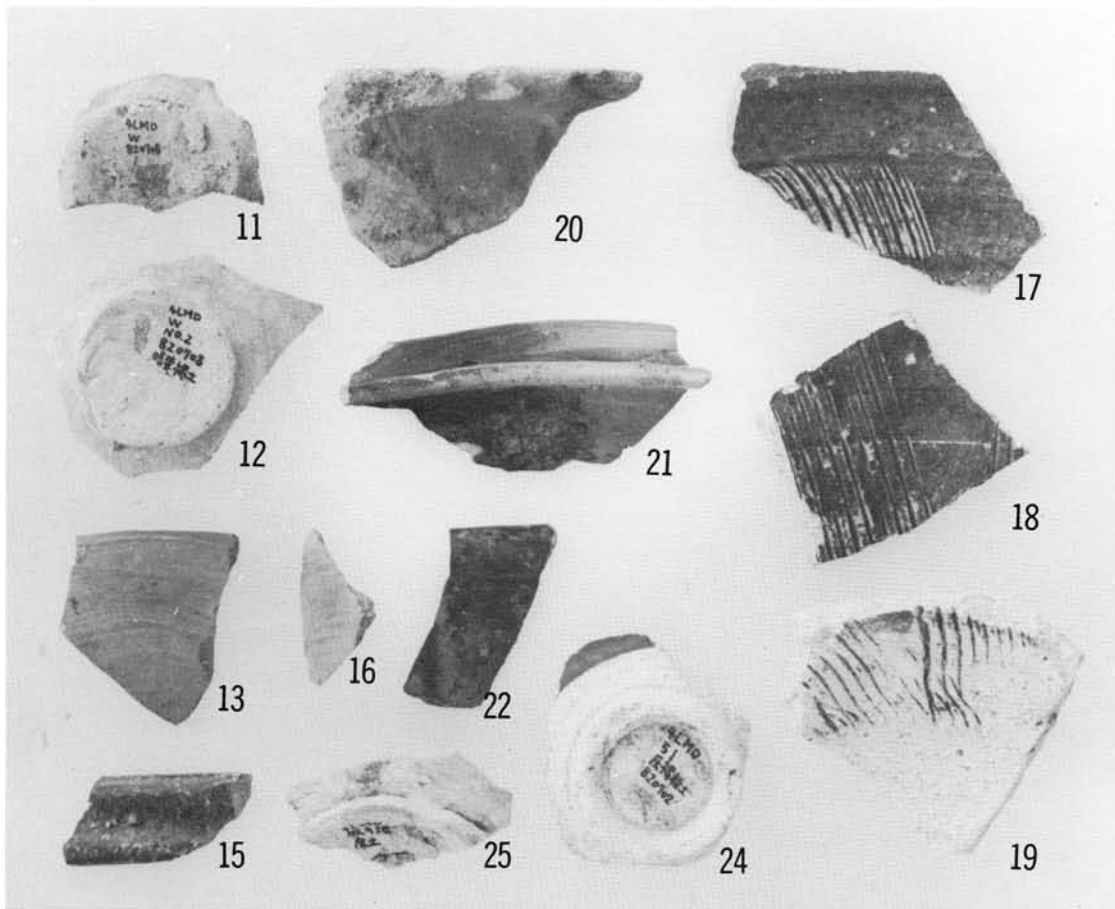
23

山裾区出土土器 (約1:2)



14

山頂区出土土器 (約1:2)



山頂区 (11~13、15~16)、山裾区 (17~22、24~25)、出土土器 (約1:2)



調査前近景（東南から）



遺跡全景（東から）



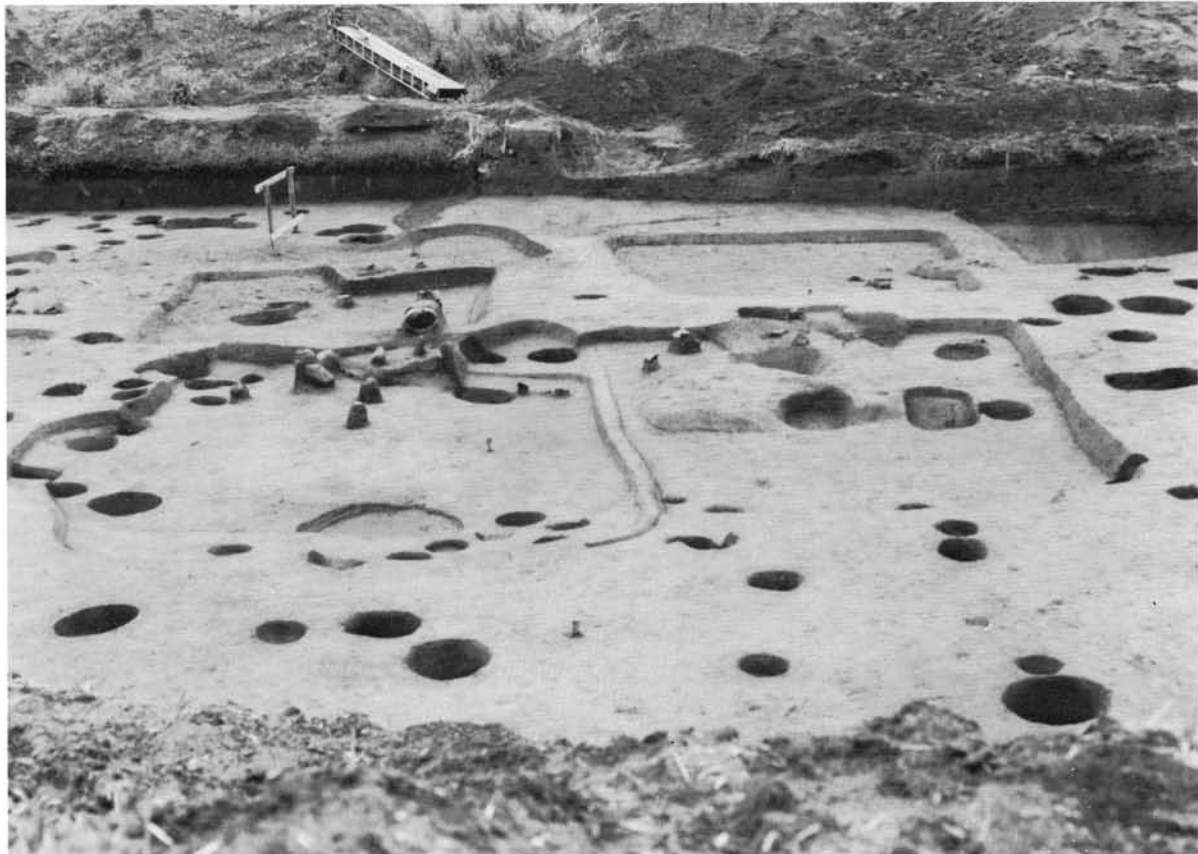
SB16 (西から)



SB16カマド (南から)



上：SB11 下：SB12 (西から)



SB19・20・21・22 (南から)



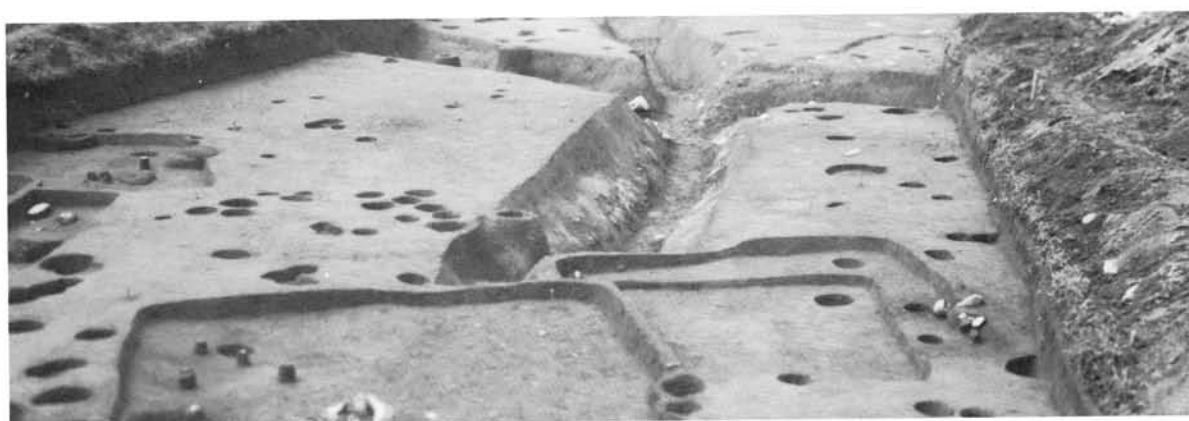
SB21カマドと煙道（南から）



SB21カマドと煙道（西から）



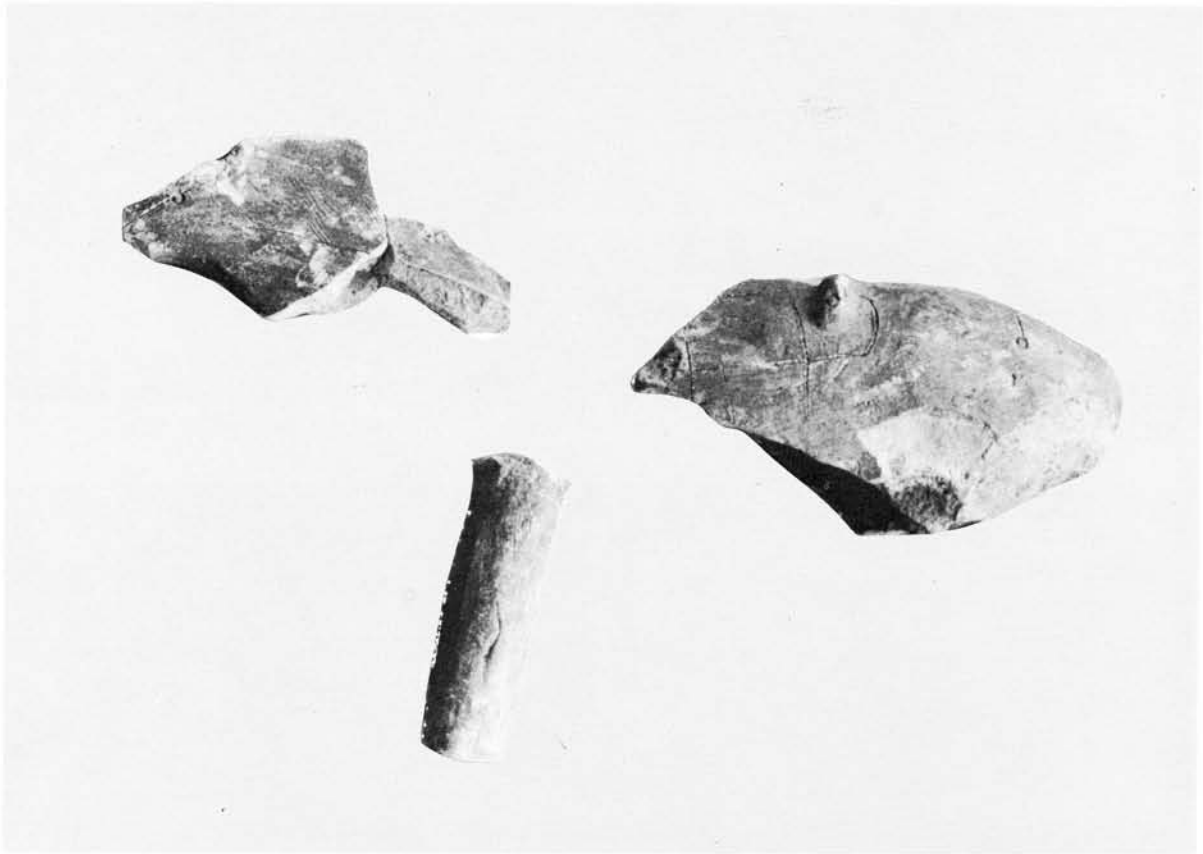
SB1・2・3・7・8 (南西から)



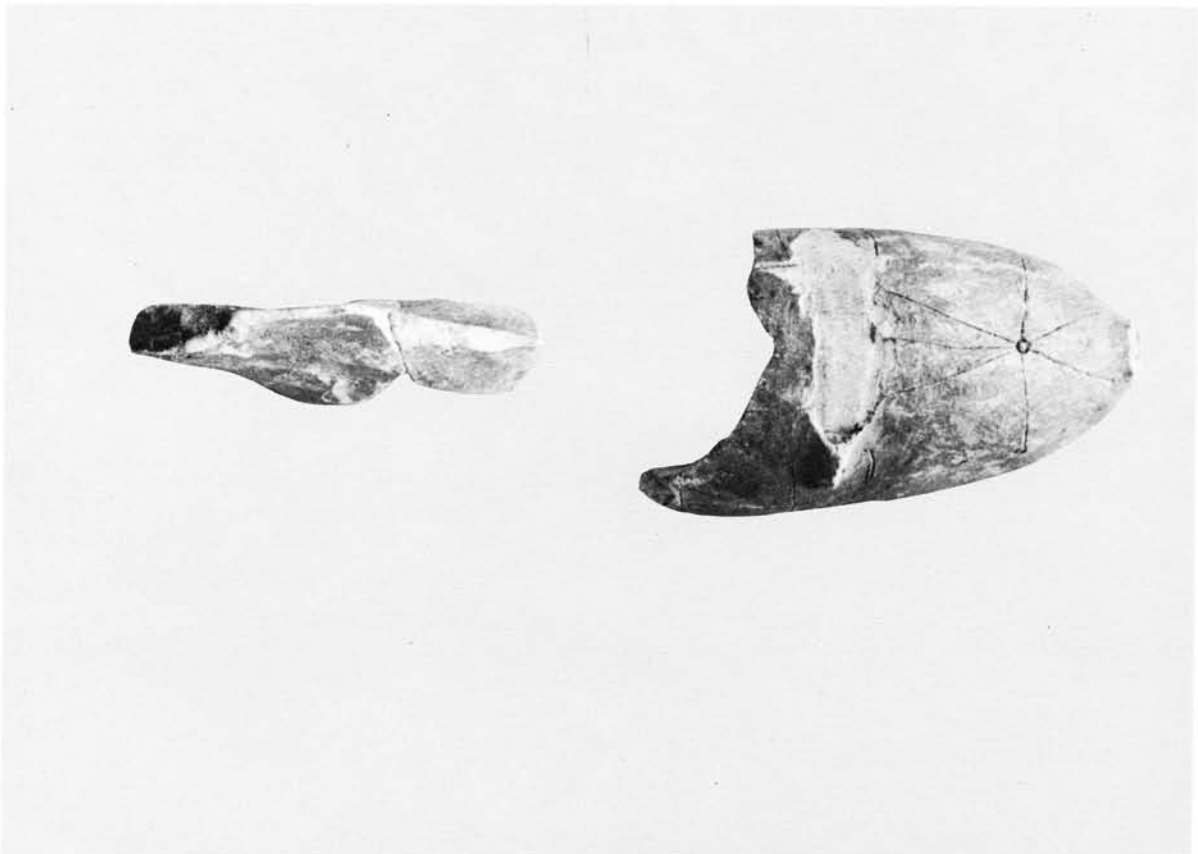
SD29, SB16・17・18 (西から)



土馬出土状況 (東から)



土馬(1:2)



土馬(1:2)



1



3



5



4



7



2



3

出土土器 (1:3)

PL78

歌野遺跡



出土土器 (1:3)

昭和58(1983)年3月に刊行されたものをもとに
平成16(2004)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告60

昭和57年度農業基盤整備事業地域
埋蔵文化財発掘調査報告

昭和58年3月31日

編集 三重県教育委員会
発行 三重県考古資料普及会
印刷 オリエンタル印刷株式会社

本書は三重県考古資料普及会が三重県教育委員会の
許可を得て増刷したものであります。